信越県境地域の地域資源情報

２０１９　資料編

２０２０（令和２）年３月

上越市創造行政研究所

はじめに

地域資源情報の編集にあたって

この地域資源情報は、新潟県上越市を起点としつつ、上越地方や魚沼地方、県境を越えた長野県の北信・長野地方などを含めた広域的なエリアに着目し、その自然環境や都市基盤、産業、文化の面からこの地域ならではの特徴を持つ「地域資源」を取り上げ、特徴の概要や形成要因、特徴がもたらした影響などを整理したものです。

本格的な人口減少時代の中、地域が本来持っている特徴に磨きをかけ、地域の魅力を高めていくことがますます重要となっています。突き詰めれば、我がまちに対する愛着・誇りや未来志向を持ち、全国的・世界的な視点からこの地域の存在意義を見つめなおし、広く発信できる力が問われているように感じます。このような思いと力を持つ数多くの人々が、その土地に住んでいるか否かに関わらず支えている地域には、未来への希望を感じることができるものと思います。

私たちの地域は一体どのような特徴を持っているのでしょうか。筆者が居住する上越市では、日本三大夜桜や上杉謙信といった具体的な名前のほか、自然が豊かで食べ物が美味しく人も良い、一通りものが揃っていて住みやすい、むしろ特徴がないのが特徴———などといったことを耳にします。

たしかにこれらは上越市の特徴の一端ではありますが、先に述べた視点から地域づくりに貢献できる情報とするためには、他の地域との比較を通じて特徴を客観的な捉えることや、特徴の要因や結果（因果関係）について深堀りをし、地域を総合的に捉える作業が大切と感じています。

そこでこの冊子では、「この地域の特徴は何？」、「それは他の地域とどう違うの？」、「その特徴が生まれたのはなぜ？」、「その結果生まれたものは何？」といった素朴な疑問を切り口に、今後の地域づくりの糧となる資料づくりを目指しました。

上越市にとどまらず近隣地域の地域資源に着目した 1 点目の理由は、当市の魅力をより深く認識できることにあります。例えば、お隣の地域に素晴らしい地域資源があるならば、それはこの地域に暮らす人々にとっても観光などで訪れる人々にとっても魅力といえます。また、その魅力が生まれた一因を探ってみると、自らの地域が大きく関わっていることに気づく場合もあります。

2 点目は、地域づくりのイノベーションへの期待です。近隣の地域のことは、何となく知っているようで意外に知らないこともたくさんあるのではないでしょうか。親しみがありながら新しい発見も得られる、共通点が多い中にも違いが感じられるなどの環境は、近隣の人と人がつながり、共に切磋琢磨できる関係性をつくることによって、新たな智恵や発想を生み出す源泉となりえます。この県境をはさむ地域は、そのための適度なサイズ感であると思います。

3点目は、広域連携による地域づくりへの期待です。特にこの地域は、国内有数の豪雪地帯であり、県の端にある条件不利地域であり、様々な共通課題を有する一方で、特徴的で魅力的な地域資源も数多く有しており、自然環境や歴史文化、交通ネットワークなどにおいて既に様々なつながりがあります。このような地勢的条件を踏まえ、運命共同体として力を合わせていくことは理に適うものと考えます。このとき、お互いの信頼関係の中で真の広域的な協力・連携を進めるためには、互いの地域資源やその関係性を共有し、その特徴を自分の事のように感じたり考えたりすることが必要不可欠であると思います。そのためにもお互いの地域を知ることは第一歩となります。

筆者らは、このエリアで地域づくりに関心のある人々が学びと交流を深める会として、3年前から「信越県境地域づくり交流会」を開催してきましたが、その思いも同じところにあります。したがって、この交流の場と学びのための地域資源情報は、今後の発展のために互いに必要な存在であると考えています。

地域資源情報の収集は、基本的に郷土資料や各テーマに関する文献調査、各分野の地域資源に詳しい地元有識者へのヒアリング調査等によって行っており、一つ一つは既知の情報をまとめたものにすぎません。それでも地域の特徴を見いだす作業は思いのほか難航しました。今回は手始めに20のテーマを取り上げましたが、それぞれに加筆の余地は十分にありますし、他にも取り上げるべき、取り上げたいテーマも数多くあります。また、特徴の中で取り上げた具体例は、あくまでも地域全体の特徴の一端をご紹介するためのものであり、すべての市町村の地域資源をバランスよく網羅するには至っていません。それらの点において、発展途上の内容であることは何卒ご容赦願いたく存じます。

一方、地域の特徴とその因果関係を総合的に捉える一助となるべく編集を進めたことから、地域づくりにおいては一定の役割を果たせるものと考えています。むしろ多くの方々からご活用いただくことと並行して、この情報をたたき台として精度を高めるためのご指導・ご協力を仰げれば幸いに存じます。

このため、特徴の概要をまとめた【本編】を初版として公開するとともに、特徴の根拠となるデータ等の情報や参考文献等を示した【資料編】を別途作成します。

最後になりましたが、収集・編集にあたりご協力いただいた数多くの皆さまへこの場を借りて厚く御礼申し上げるとともに、この情報が当該地域における地域学習の一助となることを願うものです。

2019（平成31）年3月

上越市創造行政研究所

地域資源情報　資料編の作成にあたって

この冊子は、「信越県境地域の地域資源情報２０１９」（以下、「本編」という。）の資料編です。ここには、本編に記した特徴やその因果関係に関する補足説明として、それらの根拠となるデータ等の情報や参考文献等を掲載しています。

この資料編を作成した理由は、まず筆者らが特徴の根拠を探すのに苦労したことにあります。たとえば「全国有数である」といわれる地域資源であっても、何をもって全国有数なのか、全国的にどのように分布する中でどのような位置付けなのか、その根拠が不明確であるものが少なくありませんでした。もちろん、そのような言い回し自体を否定するものではありませんが、自らの学びを深めたり他者へ伝える際には、その確からしさを認識した上で、断定（である）か、伝聞（といわれている）か、推察（と思われる）か、あるいは諸説ある中の一説（という説もある）なのかなど、その表現に気を配ることが重要であると思います。

日常生活の中で、このようなこだわりを持つべきケースはそれほど多くないものとは思いますが、少なくとも本編が地域づくりの学習材料として一定の信頼性を有するためには、可能な限りこの客観性にこだわる必要があると考えています。

一方、筆者がまだ把握できていない事実や参考文献などが多数存在することも明らかです。また、記載内容の誤りについては極力発生しないよう努めましたが、限られた時間と体制に比して作業量が膨大となり、誤りが全くないと言い切れるものでもありません。

そのような状態で敢えてこの資料編を公開することの背景には、このエリアの地域資源に関する知見をお持ちの方々、あるいは調査活動に関心をお持ちの方々から、本冊子のバージョンアップに対する賛同者を募り共に活動を進めていくことが、地域づくりの点からも意義深いとの思いがあります。この考え方の一部は、たとえばインターネット百科事典である Wikipedia にも通ずるものがあると思います。

そのためには、本編の記載内容そのものにとどまらず、その根拠とした情報を公開し、それらの情報についての意見交換や新たな情報交換を重ね、本編と資料編と合わせて加筆修正を続ける必要があるとも考えています。

この資料編が、本編に示した地域資源についての理解をより一層深める一助となり、地域づくりの発展に資する研究ネットワークの形成に貢献できることを切に願うものです。

2020（令和 2）年 3 月

上越市創造行政研究所

信越県境地域の地域資源情報　２０１９　資料編

目　次

はじめに ―――― 01

地域資源情報の編集にあたって、地域資源情報（資料編）の作成にあたって
対象とする地域の概況、対象とする地域資源、冊子の構成

自　然　環　境

01　地　形　（新旧・高低・長短の多様な地形が集積） ―――― 15

著名な山々、古い地形、新しい地形（高い山々、地すべり）
標高差のある短い水系、長い水系

02　気　候　（国内有数の豪雪地帯と少雨地帯が隣接） ―――― 25

雪（積雪量・降雪量）、降水量、日照時間、気温差

03　植　生　（多様な植生が集積／典型的なブナ林帯） ―――― 33

植生の境界（ツバキ）、象徴的・身近なブナ林、自然保護の取組

都　市　基　盤

04　エネルギー（国内有数のエネルギー供給地） ―――― 43

水力発電、石油・天然ガス、その他の自然エネルギー（菜種油、雪氷）

05　交　通　（国内の主要な交通網の通る地域） ―――― 51

道路、鉄道、港湾

産業（食関係）

06　米　（国内有数の米どころ） ―――― 59

生産規模、品質（評価）、優れた基盤整備の歴史（かんがい施設など）

07　そ　ば　（つなぎの多様なそばが集積） ―――― 69

小麦、オヤマボクチ、ふのり、自然薯・山芋、つなぎなし、その他

08　おやき　（多様なおやき類の生産地） ―――― 75

焼きおやき、蒸かしおやき、あんぼ・ちゃのこ

09　きのこ　（日本一を争うきのこ王国が隣接） ―――― 83

生産量（えのきたけ、ぶなしめじ、エリンギ、まいたけ、なめこなど）

10　果　物　（国内有数のりんご・もも・ぶどう生産地） ―――― 91

生産量（りんご、もも、ぶどう、すもも、ブルーベリー、西洋なし、栗）

11 日本酒　（国内有数の酒どころ）―――― 101
酒蔵数、消費量、杜氏、酒米生産

12 ワイン　（対照的なワイン産地の存在）―――― 111
豪雪地帯のワイナリー、ブドウ栽培の適地、加工品、ワイン用ぶどう生産

13 味　噌　（生産量と質を誇る味噌の生産地）―――― 117
品質（評価）、生産量

産業（その他）

14 繊　維　（国内有数の蚕糸や織物生産の歴史）―――― 127
織物生産、織物業、蚕糸業、細幅織物

15 温　泉　（国内有数の温泉集積地）―――― 133
規模、評価、温泉地ごとの特徴と成り立ち

16 スキー　（国内有数の歴史と規模を誇るスキー場群）―――― 141
スキー場ごとの特徴と成り立ち

17 ニューツーリズム（自然環境を活かしたツーリズムの草分け的地域）―――― 151
スポーツ合宿、森林セラピー、ロングトレイル、グリーンツーリズム

文化（信仰風習）

18 寺　社　（浄土真宗や山神信仰などの集積がみられる地域）―――― 157
諏訪信仰、白山信仰、山神信仰、本山修験宗、曹洞宗、浄土真宗、善光寺

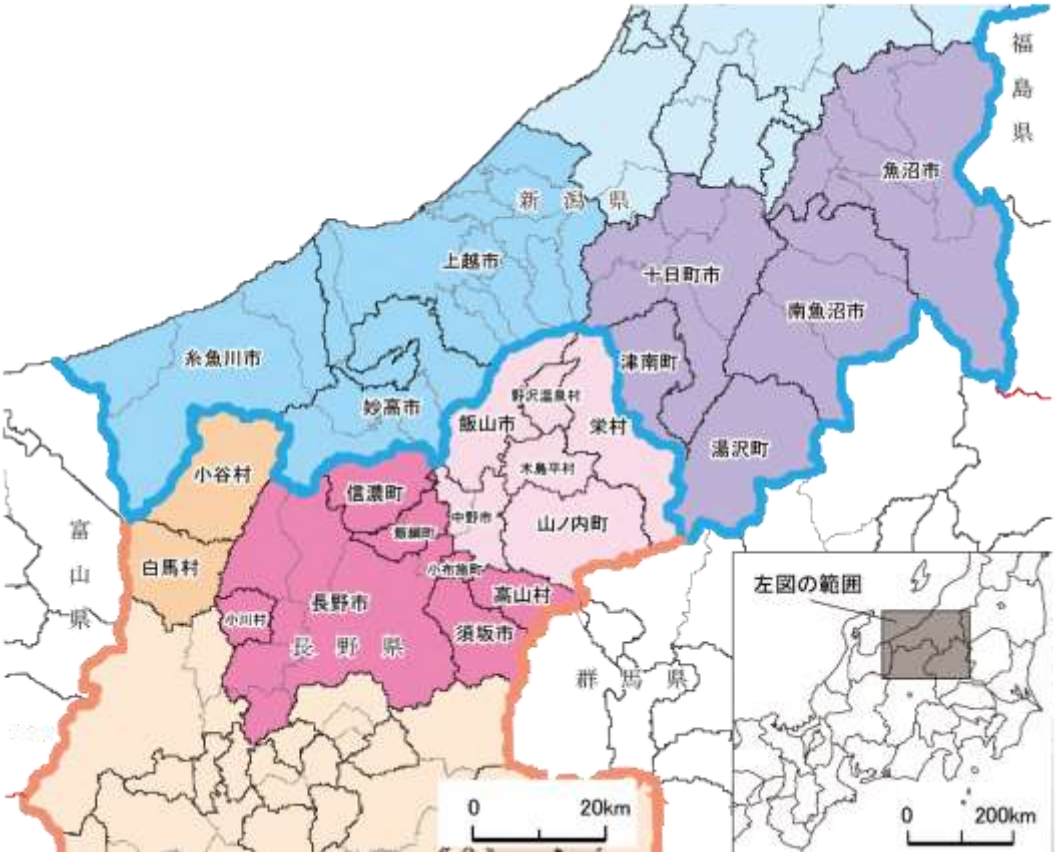
19 霊　山　（様々な信仰を取り入れた霊山の集積地）―――― 167
戸隠、熊野・金峯山信仰、白山信仰、羽黒・湯殿修験、木喰行者、木曽御嶽講

20 冬のまつり（多彩な小正月行事と現代の雪まつり）―――― 173
道祖神祭り（サイの神など）、その他小正月行事、雪まつり

■　対象とする地域の概況

・　この冊子の対象地域は、新潟県上越市を基点としつつ、長野県（信濃）と新潟県（越後）の県境付近に位置する市町村を含むエリアです。

・　具体的に取り上げる市町村は、テーマとする地域資源によって異なりますが、新潟県内は概ね上越地方と魚沼地方、長野県内は北信地方、長野地方の一部、大北地方の一部の範囲であり、かつての郡の範囲でいえば、新潟県の頸城郡と魚沼郡、長野県の水内郡、高井郡、更級郡、および北安曇郡小谷村・白馬村を含む範囲を基本としています。



※　細線は、平成の大合併前の市町村界を示す。

県	地方区分	市町村名	旧郡名
新潟	上越	糸魚川市(44)、上越市(197)、妙高市(33)	西頸城、中頸城 東頸城（一部）
	魚沼	十日町市(55)、津南町(10) 湯沢町(8)、南魚沼市(59)、魚沼市(37)	東頸城（一部）、中魚沼 南魚沼、北魚沼
長野	北信	飯山市(21)、栄村(2) 中野市(44)、山ノ内町(12)、木島平村(5)、野沢温泉村(3)	下水内 下高井
	長野 （一部）	須坂市(51)、小布施町(11)、高山村(7) 長野市(378)、信濃町(8)、飯綱町(11)、小川村(3)	上高井 上水内、更級
	大北 （一部）	小谷村(3)、白馬村(9)	北安曇（一部）

備考）（　　）内の数値は 2015 年国勢調査人口（単位：千人）
郡の範囲と市町村の範囲は完全一致しないため、目安として表記した。

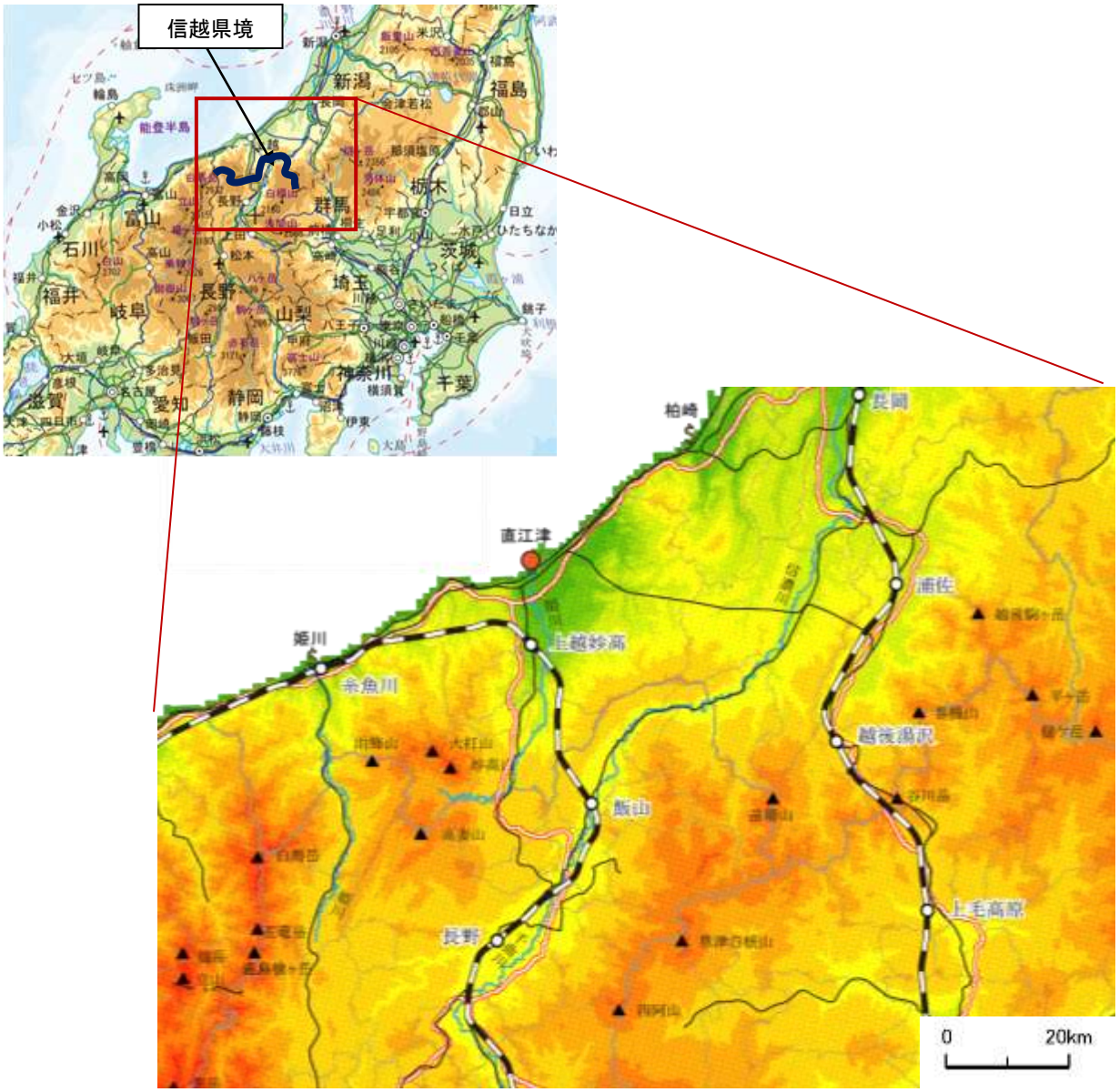
● 地　形

・ 県境付近は、白馬岳[1]などを含む中部山岳国立公園、妙高山などを含む妙高戸隠連山国立公園、標高1,000m 強の関田山脈、苗場山などを含む上信越高原国立公園などによる山間部が中心であり、国内トップクラスの豪雪地帯でもあります。また、一級河川の姫川、関川、信濃川（千曲川）が県境を越え、日本海側に注いでいます。

・ 県境の北側が新潟県、南側が長野県であり、日本海に面する平野部や、起伏に富む丘陵地帯、信濃川（千曲川）水系の盆地などで構成されています。

● 交　通

・ 古くから、東北、北陸、関西などを結ぶ日本海沿岸のルートに加え、その日本海側と首都圏や中京圏などの太平洋側とをつなぐ主要なルートが通る地域でもあります。



【新潟・長野県境付近の地形】

出所）国土交通省「国土数値情報」をもとに作成

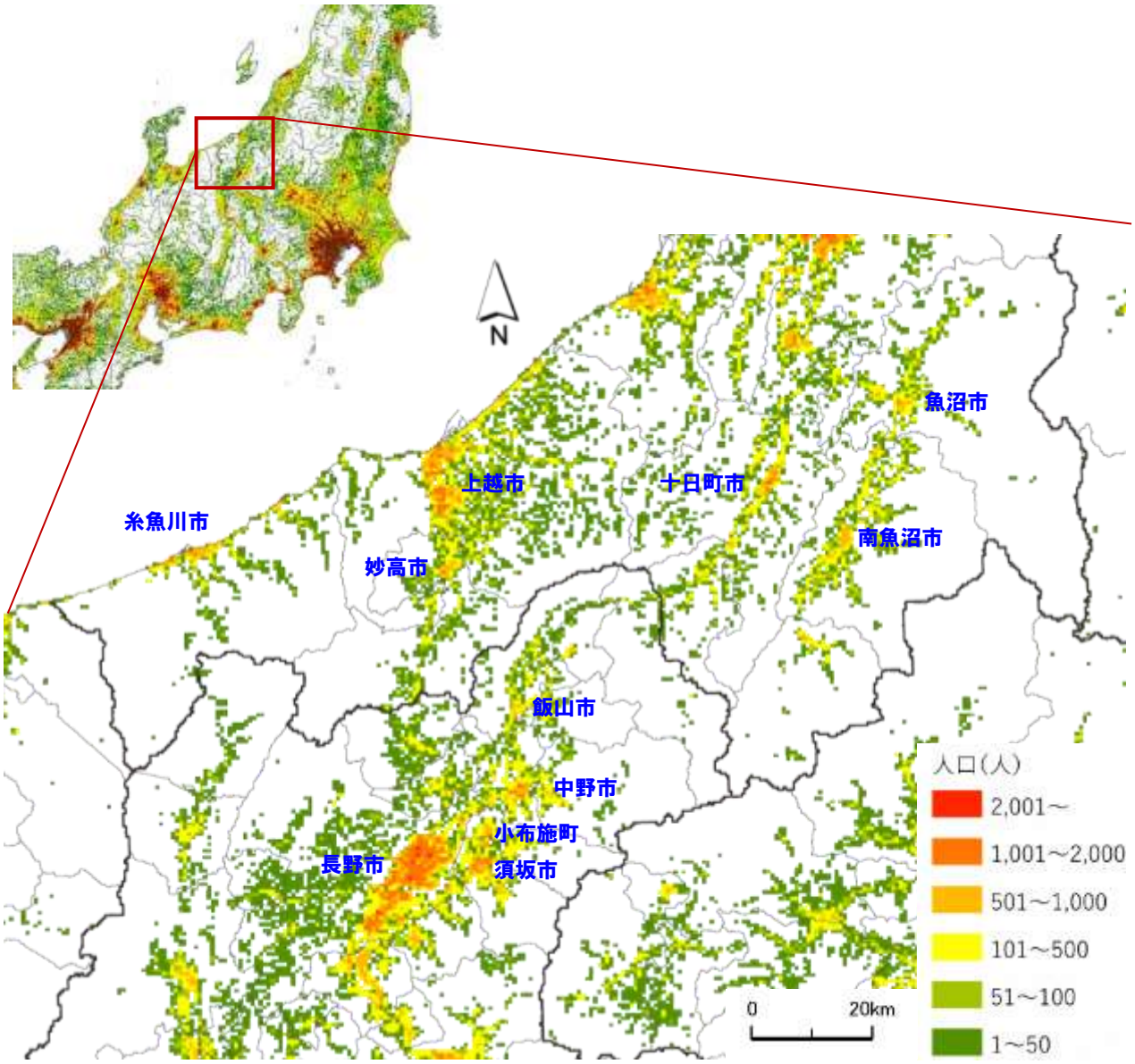
[1] 白馬岳の位置は、新潟・長野県境付近ではあるが、正確には長野・富山県境である。

・　現在、東側の魚沼地方には上越新幹線や関越自動車道が通っており、新潟方面と首都圏を結んでいます。また、上越・北信・長野地方には、2015 年に開業した北陸新幹線や上信越自動車道などが通っており、北陸方面と首都圏を結んでいます。さらに、日本海側には北陸自動車道や信越本線、かつての北陸本線などが通っています。

● 人口分布

・　人口規模が最も大きいのは長野市（2015 年国勢調査人口　38 万人）であり、次いで上越市（同 20 万人）です。糸魚川市、妙高市、十日町市、南魚沼市、須坂市、中野市、飯山市などの平坦部にも、一定の人口集積のある市街地がみられます。

・　地域の大半は、長期間にわたって人口減少が進行しており、一般的に規模の小さい都市、中山間地域ほどその状況は厳しい傾向にあります。



【新潟・長野県境付近の人口分布】

備考）一定の市街地形成がみられる市町村名のみを明記した
出所）国土交通省「国土数値情報」および総務省統計局「2015 年国勢調査」をもとに作成

■　対象とする地域資源

この冊子では、私たちの暮らしを支える自然環境、都市基盤（インフラ）、産業、文化（信仰風習）といった分野に着目し、この地域の特徴を表す地域資源として 20 のテーマを取り上げました。これらはあくまでも一例としての提示であり、このほかにも多種多様な地域資源が存在します。

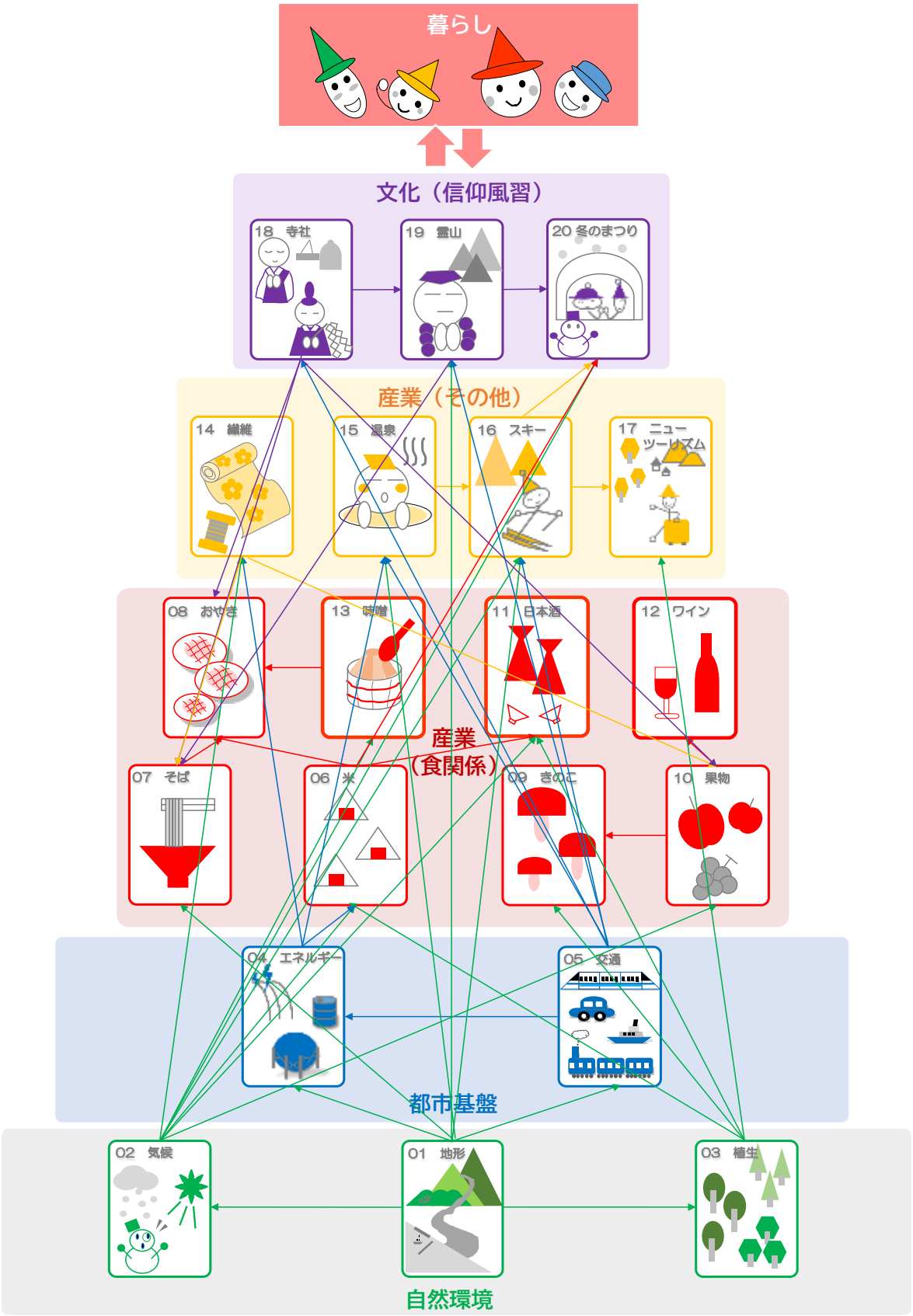
【特徴的な地域資源（テーマ）】

分　野	今回取り上げた地域資源 （20 のテーマ）	その他、地域資源として 想定されるもの（例）
自然環境	①地形、②気候、③植生	昆虫、鳥、動物、水
都市基盤	④エネルギー（自然エネルギー、水力発電、石油・天然ガスなど）、⑤交通（港湾、道路、鉄道など）	街並み、公園、建造物、土木技術
産　業 （食関係）	⑥米、⑦そば、⑧おやき、⑨きのこ、⑩果物、⑪日本酒、⑫ワイン、⑬味噌	魚介類、水産加工品、野菜、山菜、保存食品、和菓子
産　業 （その他）	⑭繊維（蚕糸、織物など）、⑮温泉、⑯スキー、⑰ニューツーリズム	土器、編組品、 工業、出稼ぎ・開拓
文　化 （信仰風習）	⑱寺社、⑲霊山、⑳冬のまつり	教育、スポーツ 伝承、文学、芸能、芸術

これらの地域資源は相互に影響を及ぼしながら盛衰を繰り広げてきました。例えば､地形や気候などの自然環境は、エネルギーや交通インフラなどの都市基盤、衣食住に関わる産業、文化の成り立ちに影響し、都市基盤の存在は産業の成り立ちに影響してきました。また、この地で培われた地域文化が、食や観光などに関する産業の発展をもたらしてきました。

このような地域資源が私たちの暮らしを守り、育んできた一方、私たちの暮らしの営みが地域資源を守り育て、あるいは変化や衰退の原因ともなってきました。

この冊子では、それぞれの地域資源が持つ特徴とともに、このような地域資源同士の関係性にも着目して整理を行いました。



※　矢印は因果関係の一例を示す。

【今回取り上げた地域資源とその関係性】

■　冊子の構成（レイアウト）

地域資源情報は、テーマごとに **はじめに**、**特徴**、**因果関係**、**解説**の４項目で構成しています。**本編**（平成 31 年３月発行）は各テーマ４頁でまとめており、この**資料編**では、基本的に本編の

本編

1　はじめに

- この地域の特徴を知るために前提となる基礎知識として、各テーマに関する歴史的な経過や最近の全国的な動向などを簡単に示しました。
- 全国的な動向の中で、新潟県や長野県の位置付けが把握できるテーマについては、その説明も加えました。

2　特 徴

- この地域の特徴的な事柄の例を示しました。全国的な視点からみた特異性について、客観的またはそれに準ずる評価基準によって説明できる地域資源を中心に記載しました。

  例：〇〇の数は日本一

  〇〇による評価は全国トップクラス

- 全国的な視点からみて特異性があるとは言い切れないものであっても、地域の形成において大きな影響力を持ったと考えられる地域資源は記載しました。

資料編

- 本編の内容をほぼそのまま掲載しています。ただし、一部の用語解説を行ったり、図表を「２　特徴」へ移動した場合があります。
- 本編の分布図を掲載した後、本編の文章（特徴）を囲み記事で示し、その補足説明や根拠とした参考文献等の紹介をしています。

※ その他、本編における表現･表記の誤りやわかりにくい箇所について、若干の加筆修正を行いました。

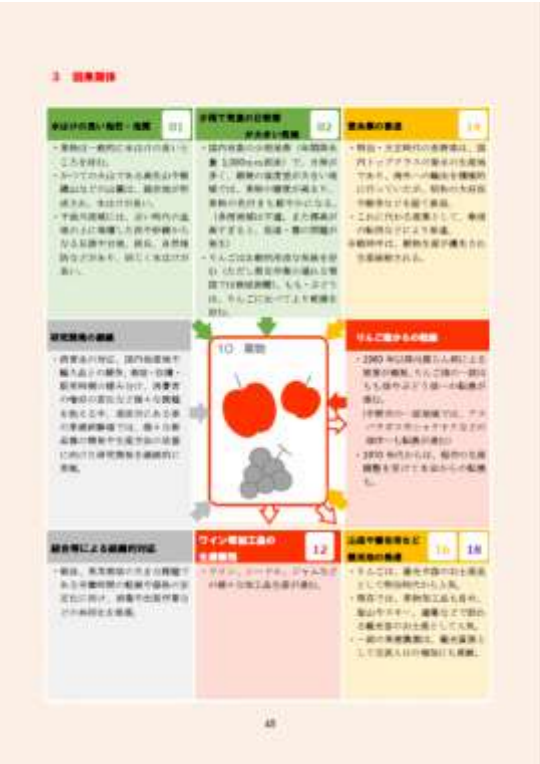
内容を再掲した上で補足説明を加えました。

3　因果関係

- ２で説明した特徴が生まれた要因や、その結果として生まれたものなど、特徴形成にまつわる因果関係を示しました。
- 中心のマスに特徴を示すイラストを記載しました。中心に矢印が向かうマスは「要因」、中心から矢印が向かうマスは「結果」を表します。
- 因果関係で示したマスのうち、他のページで説明しているテーマについては、そのテーマ番号（1～20）を右上に示しました。

4　解 説

- １～３で示したこの地域の特徴や因果関係などを要約しました。
- 今後の地域学習や地域づくりにおいて有用な「地域資源」としての捉え方を例示しました。



- 本編の内容をそのまま掲載しています。
- 次のページにて、一部記載内容の補足説明や根拠とした参考文献等の紹介をしています。

- 本編の内容をそのまま掲載しています。
- 最後に、テーマ全般に関わる参考文献等の紹介をしています。

01　地　形　（新旧・高低・長短の多様な地形が集積）

1　はじめに

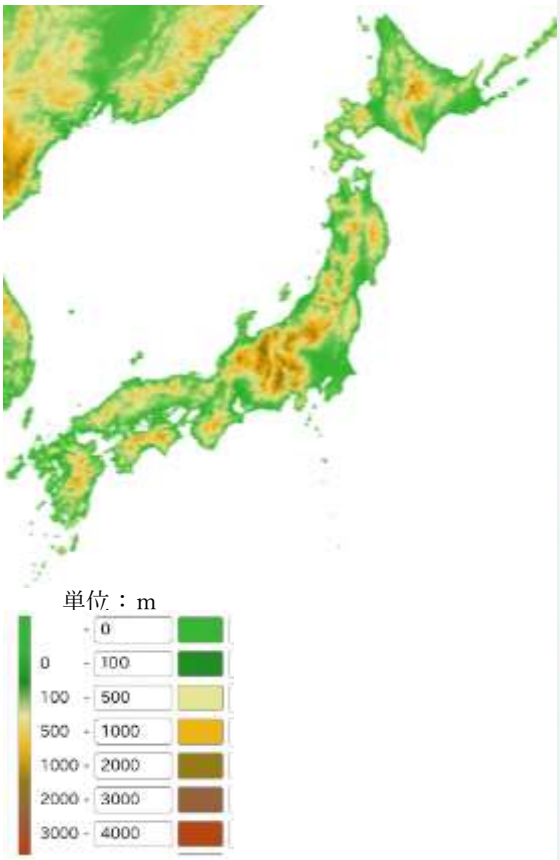
日本列島の面積は、山地と丘陵で全体の約７割を占めており、世界的に見ても山地が多く、急峻な地形です。これは、日本列島が新しい造山帯に属しているため山地の隆起が激しく、降水量の多さにより河川による浸食もはげしいことに由来しています。

約 2,000 万年前、日本列島はアジア大陸から離れていき、その真ん中で折れてフォッサマグナ [1] の海ができ、そこに土砂が流れ込むなどして砂や泥の厚い地層が形成されました。約 300 万年前には日本列島全体が隆起を始め、その後の地殻変動や火山活動、河川による土砂の堆積などで山や平野が形成されました。現在の地形はそのほとんどが約 200 万年前以内に形成されたものといわれています。

地球は約 46 億年の歴史をもち、主に生物の進化の過程をもとに時代の区分がなされています。最も新しい時代は約 260 万年前から現在までの「第四紀」とされており、現在見られる地形のほとんどが、この新しい時代に形成されています。

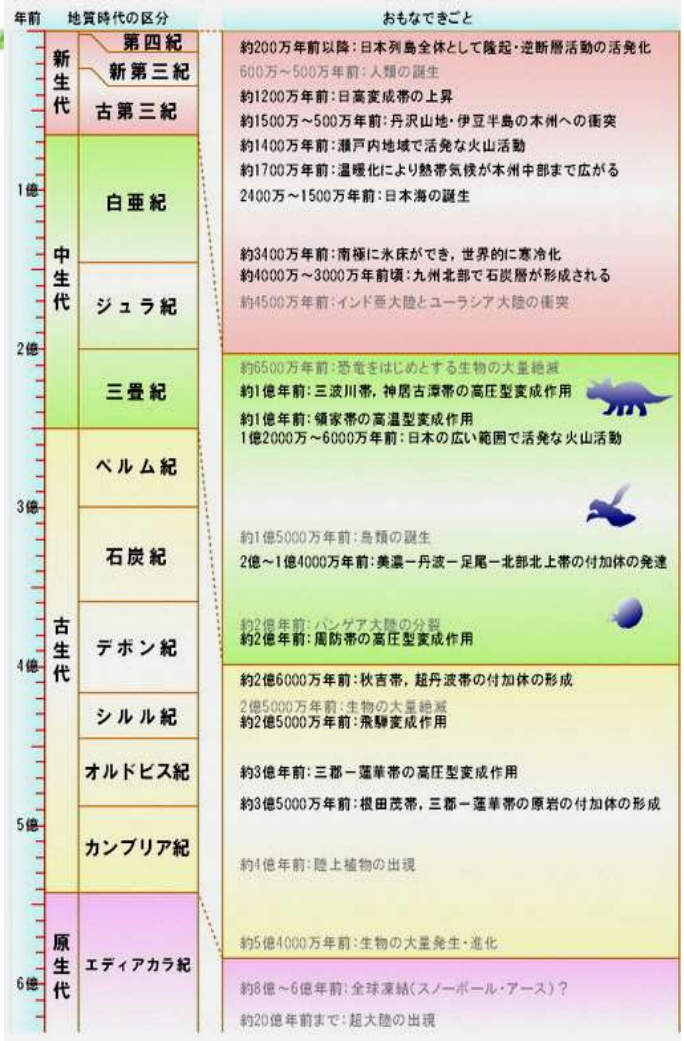
1）ラテン語で「大きな溝」の意味

■　標高



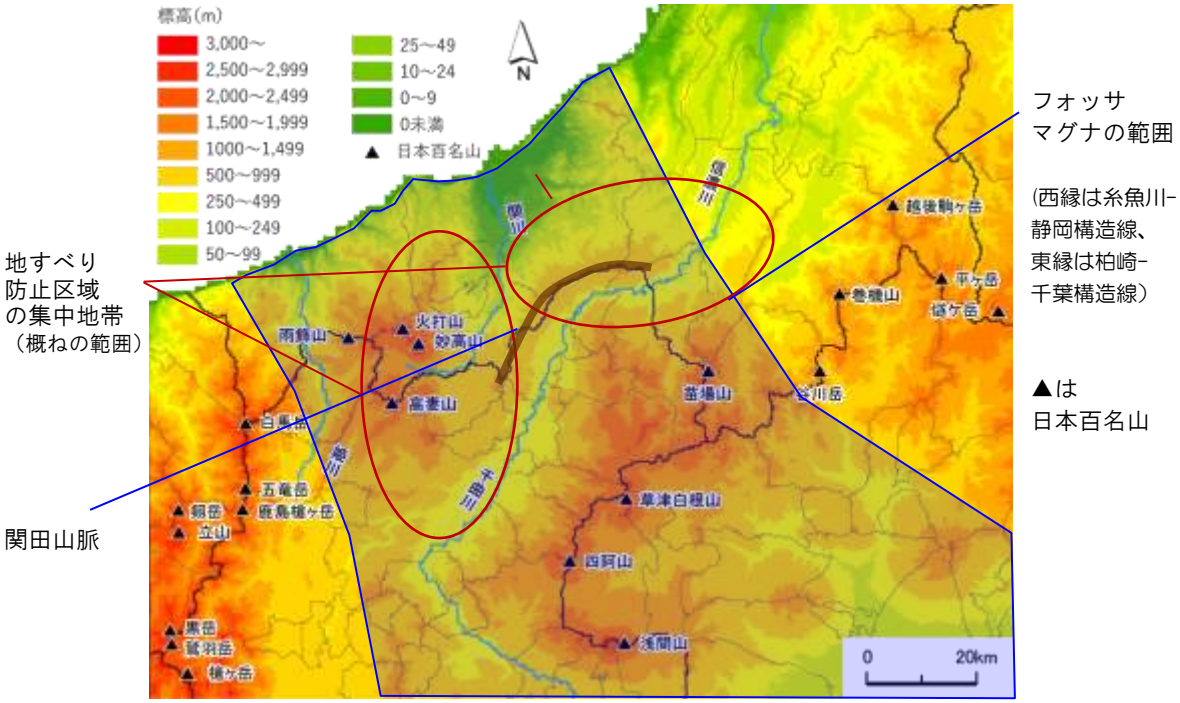
出所）国土地理院ホームページをもとに作成

■　地質時代と主なできごと



出所）産業技術総合研究所地質調査総合センターホームページ

2　特　徴



出所）国土地理院数値地図および日本百名山協会ホームページなどをもとに作成

■　著名な山々（日本百名山）

日本百名山協会ホームページには、故深田久弥氏の名著「日本百名山」が定めた百座の山々を掲載している。

都道府県別の数をみると、長野県が断トツの29座であり、新潟県も4番目に多いなど、本州の中央部に半数以上が集中している。【下表】

このうち信越県境付近に位置する百名山には、白馬岳（正確には富山・長野県境）、雨飾山、火打山、妙高山、高妻山、苗場山の6座がある。

また、この地域内にある3つの国立公園（妙高戸隠連山、上信越高原、中部山岳）全域に対象範囲を広げると、20座以上にもなる。

【日本百名山の数ランキング】

順位	都道府県名	数	最高峰（標高）
1	長野県	29	穂高岳（3,190m）
2	山梨県	12	富士山（3,776m）
3	群馬県	11	奥白根山（2,578m）
4	新潟県	各9	火打山（2,462m）
	富山県		立　山（3,015m）
	北海道		大雪山（2,291m）
7	岐阜県	各8	穂高岳（3,190m）
	静岡県		富士山（3,776m）

備考）複数都県に跨る山は、それぞれの都県の山として重複計上した。
出所）日本百名山協会ホームページをもとに作成

■　古い地形と新しい地形

● 糸魚川―静岡構造線の西側は1億年前より古い岩石、東側は2,000万年前より新しい岩石。糸魚川市内の断層ではその両方を見ることができる。

この地域では、世界最古のヒスイをはじめ多種の岩石をみることができる。これらの多様な地形や情報発信体制などが評価され、「糸魚川ジオパーク」が2009年に日本で初めてユネスコの世界ジオパークに認定された。

【参考文献など】

・フォッサマグナミュージアム（2006）：フォッサマグナってなんだろう、1頁
・糸魚川ユネスコ世界ジオパークホームページ
https://geo-itoigawa.com/index.html

■　新しい地形（高い山々）

● 新潟・長野県境の**関田山脈**は、約 100 万年前に海や平地であったところから隆起や褶曲によって 1,000m級の高さに成長した山脈。“若い”山脈としてはトップクラスの高さを持つ。

数億年にわたる地質の長い形成時間を考慮するならば、100 万年前に生まれた山は“若い”といえる。

成瀬（1977）が示した日本地図を目視した限りでは、100 万年前に海や平野であったと思われる地域は、現在も大部分が海や平野である。1,000m 以上の山地になっている箇所は、全くないとまでは言い切れないが、ほぼないものと推察される。【右図】

地質学的には、「第四紀[1]の海成層（海底に堆積してできた地層）で稜線部が構成される山脈としてはトップクラスの高さ」という表現もできる。ちなみに、当時の状態が海か山かに関わらず、第四紀の隆起量のみでいえば、北アルプスが日本一の規模といわれている。

● その他の高い山々

・　小谷村東部

100 万年前ではなく 200 万年前は海底であって、関田山脈より高いところには、長野県小谷村の東の山脈あたりがあるとの報告もある。

・　火打山（非火山）

火打山(2,462m)は、200 万年前はすでに陸地であったが、火山を除くと日本でもっとも高い山のグループといわれている。

・　妙高山・焼山（火山）

隆起や褶曲に限定せず、噴火によって形成された山々の中には、富士山をはじめ 1,000m を超えるものが数多く存在する。

この地域内でも、妙高山（2,454m）は約 30 万年前からの噴火によって形成されたとされる。焼山（2,400m）は約 3,000 年前の噴火で形成された、複成火山（休止期をはさんで複数の噴火活動を繰り返して生成した火山）では日本で一番若い火山といわれている。

このように比較的新しい地形に限ってみると、国内トップクラスの高さといえる地形がこの地域に存在するということができる。

【約 100 万年前の日本列島】

出所）成瀬洋（1977）：日本島の生いたち

【参考文献など】

・成瀬洋（1977）：日本島の生いたち、同文書院
・高野武男・関田山脈団体研究グループ（2008）：新潟・長野両県境の関田山脈と飯山盆地の形成に関する造地形成運動の研究、地学雑誌
・小松原琢（2010）：新潟県の地形形成と災害環境＝第四紀 258 万年前の歴史＝、地質ニュース 676 号、37-44 頁
・地質調査総合センター：20 万分の 1 日本シームレス地質図
・気象庁ホームページ（火山）
・早津賢二（2015）：新潟焼山火山－その素顔と生い立ち－、ケーナール、32 頁

参考 1）第四紀について

地質学上の時代は、主に生物の進化の過程をもとに区分されており、「第四紀」は最も新しい時代である。

具体的には約 260 万年前から現在までのことを指すが、この定義は 2009 年に修正されたものであり、古い文献では 181 万年前から現在までとするものもある。

■　新しい地形（地すべり）

● 新潟県における地すべり防止区域の指定箇所は、数・面積ともに全国１位。中でも西頸城、東頸城、魚沼の丘陵地帯に集中する。

● 長野県における地すべり防止区域の指定箇所は、数・面積ともに全国３位。中でも長野・北信地域の一部（千曲川やその支流の犀川、姫川で囲まれた地帯）に集中する。

（用語解説）

「地すべり防止区域」とは、地すべり現象がある箇所やそれに隣接する箇所で法律に基づき指定したもの。災害防止のための対策工事や避難のための立ち退きを指示することもあり、国土交通省、農林水産省、林野庁の３省庁による指定がある。

なお、類似する用語に「地すべり危険区域」があるが、これは空中写真の判読や過去の記録、現地調査から地すべり発生のおそれがあり、地すべりが生じると人家や公共施設などに被害の恐れがある箇所を示す。

（県別の比較）

３省庁で同時期に公表した値の合算値として確認できたものは、1998 年時点のものが最新だが、この時点で新潟県は第１位、長野県は第３位である。【右表①】

その後各省庁の公表値は更新されているが、最新値の時点が異なるため、それらを合算しても正確な値にはならないが、参考のため合算すると、国土交通省 25,680ha〔2013.3.31 現在〕、林野庁 32,096ha〔2018.3.31 現在〕、農林水産省 29,259ha〔2019.4.3 現在〕、合計 87,035ha となり、この時点でも新潟県が抜きに出て１位であることは変わらない。

（県内の分布状況）

さらに新潟県内では、県全体の面積に占める割合が 8%弱の上越市において約３割を占めており、隣接する糸魚川市、妙高市、十日町市を合わせると約 2/3 を占めることになる。【右表②】

【地すべり防止区域の面積ランキング】

① 都道府県別（1998.1 現在）

順位	都道府県	指定面積（ha）
1	新潟県	76,114
2	徳島県	44,894
3	長野県	19,886
4	島根県	18,747
5	石川県	13,816
6	山形県	13,355
7	愛媛県	12,885
8	富山県	12,315
9	長崎県	11,378
10	高知県	11,305
－	国内計	318,444

出所）新井場公徳ほか（2008）をもとに作成

② 新潟県内市町村（2017.3.31 現在）

順位	市町村	指定面積（ha）
1	上越市	26,028
2	糸魚川市	14,152
3	十日町市	12,469
4	長岡市	8,233
5	佐渡市	5,614
6	柏崎市	5,252
7	妙高市	4,127
8	魚沼市	2,999
9	阿賀町	1,531
10	村上市	1,418
－	県内計	87,105

備考）指定面積は、国土交通省、林野庁、農林水産省の各指定面積の合計値

出所）新潟県砂防課、治山課、農地建設課資料をもとに作成

【参考文献など】

・新井場公徳ほか（2008）：日本の地すべり指定地分布と地質的特徴について－全国地すべり指定地調査結果報告－、日本地すべり学会誌 44-5、318-323 頁

・全国治水砂防協会（2015）：砂防便覧　平成 26 年版

・林野庁（2019）：森林・林業統計要覧 2019

・農林水産省ホームページ（地すべり調査等）https://www.maff.go.jp/j/nousin/noukan/tyotei/t_zisuberi/

■　標高差のある短い水系（関川・姫川）

● 関川水系は、2,000m 以上の高山を水源とした一級水系の中で 4 番目に短いことから、その短さと傾斜の大きさは国内有数。【下表】

「一級水系」とは、河川法に基づく国土保全上又は国民経済上特に重要な水系であり、全国で 109 水系指定されている（2016.7 現在）。

ちなみに「一級河川」は、一級水系のうち河川法による管理を行う必要があり、国土交通大臣が指定した河川のことを指しており、より区間を限定したものである。

【参考文献など】

・国土交通省ホームページ（日本の川、河川統計データ）
・国土交通省高田河川国道事務所ホームページ

● 糸魚川市内での標高差 2,800m は国内有数。

全国市町村の標高差について定量的に調べたわけではないが、糸魚川市内の小蓮華山（標高 2,766m）よりも高い山は限られ、日本地図を確認する中でそれらの多くが内陸部に多いことから、国内有数と推察される。このうち海に面している市町村に限定すれば、その数はさらに限定されると思われる。

ちなみに、富士山を擁する富士宮市の標高差は 3,741m であり、日本一高低差のある市として情報発信している（ただし、同市は海に面してはいない）。

なお、市内を流れる姫川の水源は標高約 800m の地点にあることから、下表のランキングには含まれないが、流域圏の境界に白馬岳（標高 2,932m）があることを考慮すると、関川と同様、一定の規模を持ちながら国内有数の短さと大きな傾斜を持つ河川ということができる。

【参考文献など】

・糸魚川市ホームページ
・富士宮市移住＆定住ポータルサイト https://www.fujinomiya-life.com/
・国土交通省北陸地方整備局（2015）：姫川水系河川整備基本方針

・ このことから、上越地方には短い距離の間に海岸・砂丘・平野・丘陵・高山などの多様な地形が存在することがわかる。

【2,000m 以上の山を水源とする一級水系の幹川流路延長ランキング（短い順）】

順位	水系名	関係都道府県	幹川流路延長（km）	河川延長合計（km）	流域面積（k㎡）	水源 名称	水源 標高(m)
1	安倍川	静岡	51	199.8	567	大谷嶺	2,000
2	常願寺川	富山	56	145.2	368	北ノ俣岳	2,661
参考	姫川	新潟、長野	60	223.9	722	佐野坂丘陵	約 800
3	子吉川	秋田、山形	61	408.6	1,190	鳥海山	2,236
4	関川	新潟、長野	64	510.2	1,140	焼山	2,400
5	手取川	石川	72	215.6	809	白山	2,702
6	黒部川	富山	85	141.9	682	鷲羽岳	2,924
7	相模川	神奈川、山梨	109	592.7	1,680	富士山	3,776
8	富士川	山梨、長野、静岡	128	1,905.5	3,990	鋸岳	2,685
9	十勝川	北海道	156	2,372.3	9,010	十勝岳	2,077
10	大井川	静岡	168	318.7	1,280	間ノ岳	3,189
11	荒川	埼玉、東京	173	1,225.4	2,940	甲武信ヶ岳	2,475
12	天竜川	長野、静岡、愛知	213	2,072.5	5,090	赤岳	2,899
13	木曾川	長野、岐阜、愛知、三重、滋賀	229	3,004.3	9,100	鉢盛山	2,446
14	最上川	宮城、山形	229	2,484.8	7,040	西吾妻山	2,035
15	信濃川	群馬、新潟、長野	367	5,004.2	11,900	甲武信ヶ岳	2,475

出所）国土交通省ホームページ（日本の川、河川統計データ）をもとに作成

■　長い水系（信濃川（千曲川））

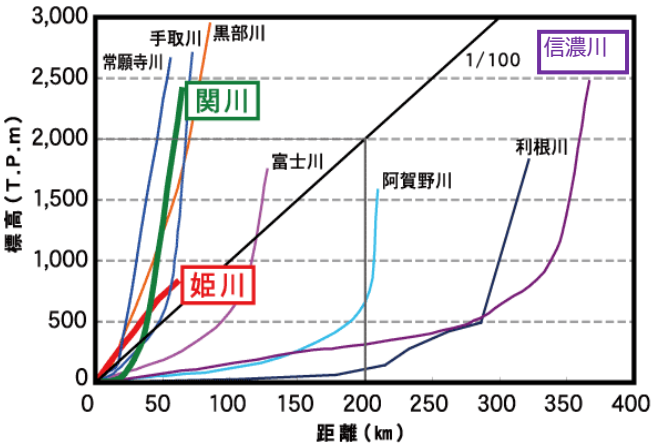
● 信濃川（千曲川）は日本最長の河川。
　源流は埼玉県、山梨県との県境にある甲武信ヶ岳にあり、長野・北信地方や魚沼地方を経由して新潟市に至る全長 367km の河川である。

【一級水系の流路延長ランキング（長い順）】

順位	水系名	流域都道府県	幹川流路延長（km）
1	信濃川	長野・新潟県	367
2	利根川	群馬・埼玉他	322
3	石狩川	北海道	268
4	天塩川	北海道	256
5	北上川	宮城・岩手県	249

出所）国土交通省信濃川河川事務所ホームページをもとに作成

【河川勾配の比較】



出所）国土交通省高田河川国道事務所ホームページをもとに一部加筆修正

● 信濃川の津南町付近は、日本最大級の河岸段丘と称されることもある。

　このことは多くのホームページで言及されており、文献等によっては日本最大とするものもある。しかし、公式に用いられたものではなく、定量的な説明が可能かどうかは不明である。

【参考文献など】

・日本ジオパークネットワークホームページ　など

● 清津峡（十日町市）は日本三大渓谷の一つと称される。

　十日町市では、黒部峡谷（富山県）、大杉谷（三重県）とともに日本三大渓谷であるとして情報発信しており、多くのホームページや文献等でも同様の記載がある。ただし、その由来や浸透度は不明である。

　なお、小豆島の寒霞渓などが含まれる「日本三大渓谷美」は別物である。

【参考文献など】

・十日町市ホームページ　など

3　因果関係

※　番号は他のテーマ(01～20)との関係性、アルファベットは次の頁に補足説明があることを示す。

フォッサマグナの上の地形（“最近”までは海と平地）

・日本誕生に深く関わるフォッサマグナの西端付近に位置するため、新旧両方の地層が存在する。
・約 2,000 万年前、日本列島はアジア大陸から離れながらその真ん中で折れ、深さ 3,000mのフォッサマグナの海ができた。そこに土砂が流れ込むなどして、砂や泥の厚い地層が形成され、約 300 万年前には列島全体が隆起を始めたが、約 100 万年前の上越市周辺はまだ海や平地で、当時は千曲川が流れ込んでいた。

フォッサマグナの上の地形（急速な隆起や褶曲活動）

・約 100 万年前から現在にかけて平地と山地の地形分化が進む。褶曲などの地殻変動が生み出した関田山脈、妙高山などの新たな火山、関川によって土砂が運ばれた高田平野など、新しくも多様な地形が形成された。
・この過程でできた丘陵地の地層は、新しいが故に十分に固まっておらず、隆起の過程で生じた無数の割れ目に水が浸み込み軟弱であるほか、地層がさらに隆起して不安定になり、地すべりを起こしやすい地形となった。

☞ a

豪雪地帯の形成　02

・日本海や高い山脈が形成された結果、日本海で発生した積雲が山脈にぶつかり、大量の雪が降るようになった。

多様な植生の分布　03

・多様な地形がコンパクトに集積することから、多様な植生も身近に見ることができる。

主要な交通網の形成　05

・周辺を高い山脈に囲まれた地形のため、主要な交通網を作れる場所は自ずと限定的となり、交通の要衝が生まれた。

国産エネルギーの生成

・フォッサマグナの地形・地質に特有の地殻変動により、石油・天然ガスが集積しやすく、採掘しやすい地形となった。
・豪雪による豊富な水量とともに、河川の傾斜の大きさを利用して、水力発電が行われた。

棚田の形成による米づくりの発達

・地すべりは、災害の側面だけでなく、地すべりにより撹拌された土地や地すべり面を流れ下る地下水などにより、米づくりの適地ともなり、棚田の景観も生み出された。

山岳信仰の発達

・険しい山々は、昔から人々の信仰の対象となり、修験道など山岳宗教の修行の場ともなった。

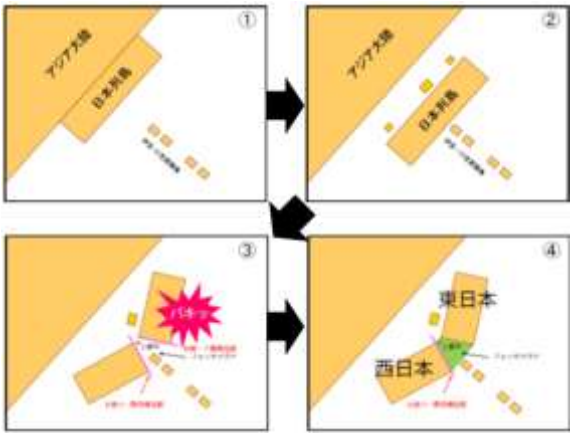
観光資源の誕生

・日本百名山に多くの山が選定されている。
・2,000m級の山々を中心に、大規模なスキー場ができた。
・火山が多いことなどから温泉も多数存在する。
・多様な地形を学べる場として、世界ジオパーク、日本ジオパークが作られた。

【補足説明】

a　日本列島・フォッサマグナの形成過程

【フォッサマグナの形成過程】



出所）糸魚川フォッサマグナミュージアム資料をもとに当研究所で加筆修正

注１）本文に記述した 2,000 万年前、200 万年前などの年代は、文献により若干の違いがある。

注２）フォッサマグナの範囲は、概ね糸魚川と静岡を結ぶラインと、柏崎・新発田と千葉を結ぶラインで挟まれたエリアであるが、かつては糸魚川－静岡構造線そのものをフォッサマグナであるとした資料も多かった模様である。

【フォッサマグナの範囲】

出所）フォッサマグナミュージアム（2006）

○　信濃川・関川の形成過程

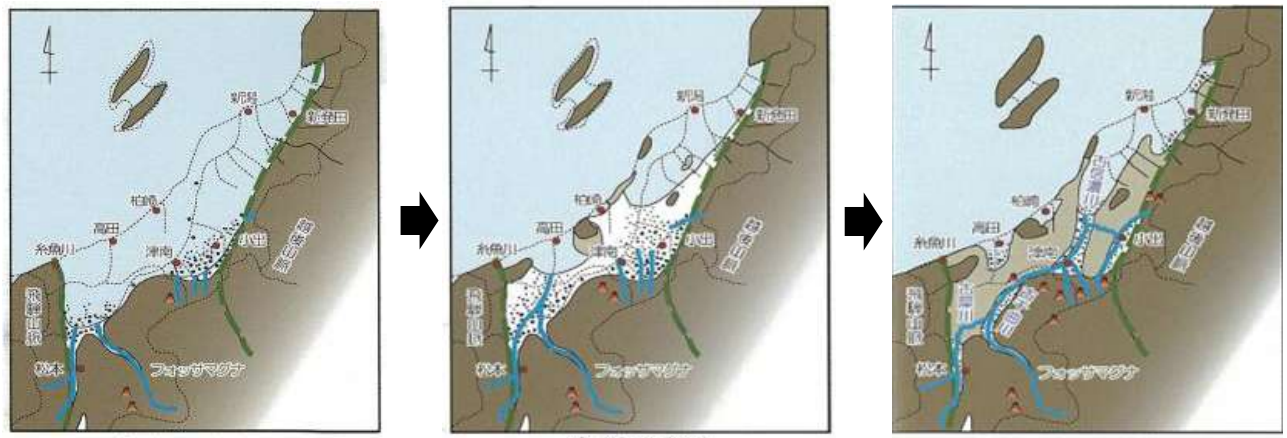
信濃川（千曲川）は、約 40 万年前まで上越地方に流れ込んでいた。しかし、急激な隆起運動により形成された関田山脈、東頸城丘陵、魚沼丘陵などとともに大きく曲がり、魚沼地方へ流れ込むこととなった。その結果、日本最長の河川・信濃川が生まれ、一方で急峻な関川が生まれた。

【参考文献など】

・フォッサマグナミュージアム（2006）：フォッサマグナってなんだろう、10、31-39 頁

・成瀬洋（1977）：日本島の生いたち、同文書院

【信濃川の形成過程（200 万年前～30 万年前）】



① 約200万年前　② 約100万年前　③ 約40～30万年前

出所）小林巌雄監修、国土交通省北陸地方整備局企画・編集（2007）：信濃川・越後平野の地形と地質　信濃川・越後平野の生い立ちを探る 11 頁、北陸建設弘済会

4　解　説

要　約

約 2,000 万年前、日本列島がアジア大陸から離れていく過程の中で、その真ん中で折れて造られたのが深いフォッサマグナ(地質学的な溝)です。この地域は、このフォッサマグナの海に土砂が流れ込むなどして形成された厚い地層の上にあります。

したがって、約 300 万年前に列島全体が隆起を始めましたが、上越市周辺は約 100 万年前でもまだ海や平地であり、例えば妙高山などの火山、短期間に 1,000m以上成長した関田山脈、大幅に経路変更をした信濃川(千曲川)、全国有数の地すべり地帯などの特徴的な地形は、これより後に作られました。一方、フォッサマグナの外縁部にあたる糸魚川市などには、数億年前の古い地形も残っています。

また、国内有数の傾斜と短さをもつ関川水系が象徴するように、短い距離の中に、砂丘、平野、丘陵、高山が存在している一方、国内最長の信濃川やそれらが作り出した盆地があり、両者が隣り合う地域にあります。わずか 100 万年前まではこの関川と信濃川が一緒のものであり、現在の対照的な地形は奇しくも関田山脈の隆起などがもたらした結果でもあります。

このように古い地形と新しい地形、急峻な地形と緩やかな地形がコンパクトにまとまった国内有数の地域ということもできます。

山脈や日本海が形成された結果、国内有数の豪雪地帯となり、豊富な雪解け水と急峻な地形を利用して、水力発電が行われました。フォッサマグナの地形・地質は、石油・天然ガスの基となる層や地殻変動により石油・天然ガスが集まりやすい特徴があり、石油・天然ガスが採れやすい地域となりました。

また、周辺を高い山脈に囲まれた地形のため、その地形的条件が影響して交通の要衝となり、高い山々は人々の信仰の対象となり、修験道など修行の場ともなりました。日本百名山に選定された山も多数存在します。火山が多いことなどから温泉も多く、2,000m級の山々を中心に大規模なスキー場もできました。地すべりは災害という側面だけではなく、米づくりの適地や美しい棚田の景観なども生み出しています。

地域資源としての捉え方

地形の歴史を考えるときは、1,000 年はもちろん 100 万年前も最近であり、時間的スケールの違いを感じさせられます。地域づくりの本質、あるいは自然災害や環境問題への対応を考えるための広い視野を与えてくれます。

日常生活においては大地の特徴を感じる機会は少ないかもしれませんが、まちは大地の上に造られたものであり、その土地の地形・地質の影響を多分に受けています。まちの特徴を探り、地域にある資源を磨き上げる上で、今一度こうした地形・地質の特徴にまで立ち返り、地域を見直すことは重要であるといえます。

その意味では、最近注目されているジオパーク(この地域内では、糸魚川と苗場山麓)、NHK の「ブラタモリ」などは、地形・地質にさかのぼってまちの成り立ちを考える好材料といえます。

【テーマに関する参考文献など】

※　特に参考とした文献には●を付しました。

（全国の状況）
・国土技術研究センターホームページ（国土を知る）
・地質総合研究センターホームページ（日本列島の地質と構造）
・藤岡謙二郎編著（1993）：日本地誌－第二改訂増補版－、大明堂

（信越の状況）
・田中邦雄監修（1989）：信州・大地のおいたち、信濃教育会出版部
・市川正夫（2013）：改訂版やさしい長野県の教科書　地理、しなのき書房
●小林巌雄・国土交通省北陸地方整備局（2007）：信濃川・越後平野の地形と地質、北陸建設弘済会

02　気　候　（国内有数の豪雪地帯と少雨地帯が隣接）

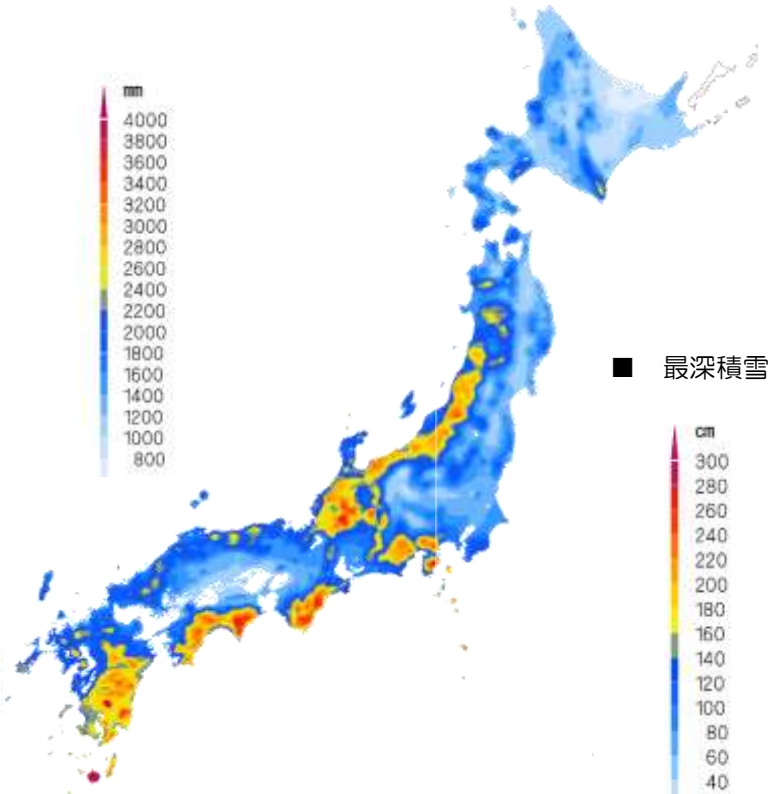
1　はじめに

日本列島は南北に長く、高い山々が連なる山脈もあるため、亜寒帯から亜熱帯まで様々な気候区分に属しています。

例えば年間の降水量をみると、屋久島や三重県尾鷲など西南日本の太平洋側が多くなっていますが、日本海側の北陸地方にも多い地域がみられます。冬期間では、太平洋側で晴れの日が多くなる一方、日本海側では曇りや雪または雨の日が多くなります。

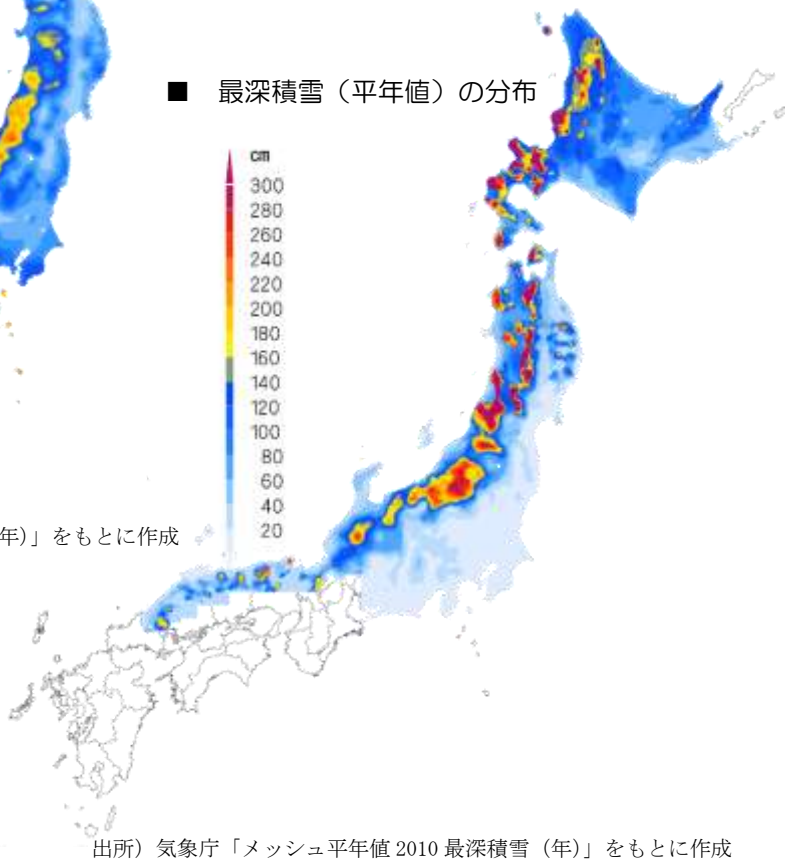
海外で雪がたくさん降る地域は、基本的に標高の高い山地や人があまり住んでいないところであり、日本ほど人口密度が高いところに大量に雪が降る国はないといわれています。その中でも、新潟県などは豪雪地帯として知られています。近年では、地球温暖化の影響からか昔ほどの大雪は降らなくなりましたが、それでも全国の中で雪が多いことに変わりはありません。

■　年降水量（平年値）の分布



出所）気象庁「メッシュ平年値 2010 降水量（年）」をもとに作成

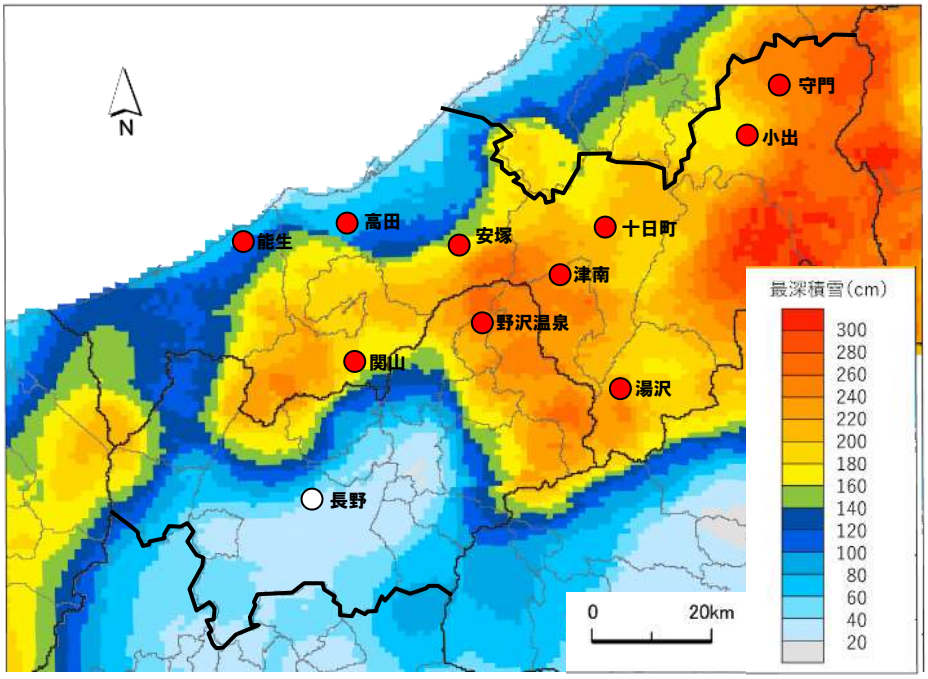
■　最深積雪（平年値）の分布



出所）気象庁「メッシュ平年値 2010 最深積雪（年）」をもとに作成

2　特　徴

■　雪　（年最深積雪）



備考）図は最深積雪の平年値を表す。
　　図中の地名は、気象台等のある都市および最深積雪トップ 20 に入るアメダス観測地
出所）国土地理院数値地図および国土交通省「国土数値情報」（平成 24 年度作成）をもとに作成

- アメダスの国内トップ 20 に、3 位の魚沼市守門（463cm）や 5 位の津南町（416 cm）をはじめ 10 か所が含まれる。
- 気象台等のある都市での日本記録は、上越市高田の 377cm（1945 年）。　【次頁の表】

「積雪の深さ」とは自然に降り積もって地面を覆う雪などの固形降水の深さであり、ここでの「最深積雪」とは、積雪深の値の中で最大の値をさす。

高田は、気象台等のある都市の中で日本記録をもつが、積雪の多い年と少ない年の差が大きいという特徴もある。過去 20 年間の年最深積雪を見ると、201 cm以上の年が 1 回ある一方、50 cm 以下の年も 3 回あり、この多様な傾向は最深積雪ベスト 10 の気象台等の中では最も顕著といえる。このことは、積雪の多い地域の中では温暖な地域に属することが一因といえる。【右図】

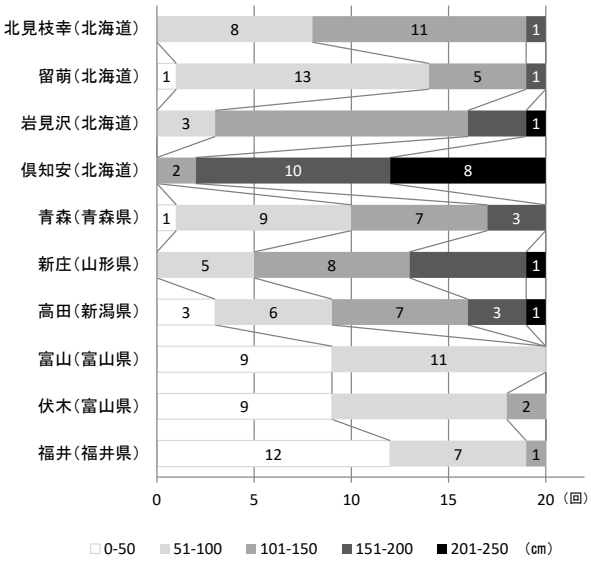
なお、積雪は時間とともに重みで沈んだり解けたりするため、積雪量と降雪量の値には差が生じる。

【参考文献など】

・気象庁ホームページ
http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/

・札幌管区気象台ホームページ
https://www.jma-net.go.jp/sapporo/tenki/kansoku/snow/yuki_kaisetu.html

【年最深積雪の分布（1997-2016）】
（最深積雪国内ベスト 10 の気象台等）



出所）気象庁ホームページをもとに作成

【国内の最深積雪ランキング】
（気象台等およびアメダス）

順位	観測地点	観測値		気象台等
		cm	起日	
1	伊吹山(滋賀県)	1182	1927年2月14日	○※
2	酸ケ湯(青森県)	566	2013年2月26日	
3	守　門(新潟県)	463]	1981年2月9日	
4	肘　折(山形県)	445	2018年2月13日	
5	津　南(新潟県)	416	2006年2月5日	
6	十日町(新潟県)	391]	1981年2月28日	
7	高　田(新潟県)	377	1945年2月26日	○
8	小　出(新潟県)	363]	1981年2月28日	
9	関　山(新潟県)	362	1984年3月1日	
10	湯　沢(新潟県)	358	2006年1月28日	
11	野沢温泉(長野県)	353	1984年3月22日	
12	安　塚(新潟県)	350	1984年3月8日	
13	大井沢(山形県)	348	2000年3月1日	
14	只　見(福島県)	341	2013年2月25日	
15	桧枝岐(福島県)	339	2015年2月15日	
16	富士山(静岡県)	338	1989年4月27日	○※
17	幌加内(北海道)	324	2018年2月25日	
18	倶知安(北海道)	312	1970年3月25日	○
19	朱鞠内(北海道)	311	1982年3月10日	
20	能　生(新潟県)	309	1985年1月30日	

備考）期間は気象庁の統計開始時点から2018年3月9日まで。　]印は、資料不足値のため、通常は上位の統計に用いないが、その値以上であることが確実とされるもの。
※は、現在観測を実施していない気象台等
出所）気象庁ホームページをもとに作成

● 人の住むところでの日本記録は、上越市板倉区柄山の818㎝（1927年）。

気象庁の公式記録ではないが、記録として資料に記載が残っているものの中では最深とされている。

【参考文献など】

・宮澤清治（2000）：雪争い、消防科学総合センター季刊誌「消防科学と情報」2000年冬号など

● 旧国鉄の日本記録は、飯山線森宮野原駅（栄村）の785㎝（1945年）。

現地にも標柱が立っている。

【参考文献など】

・苗場山麓ジオパークホームページ

■　雪　（1日降雪量）

● 1日の降雪量について、旧国鉄の日本記録は関山駅（妙高市）の210cm（1946年）。

妙高市は、一日降雪量世界一のまち「Blue Snow White Myoko」として紹介している。

このほか年間降雪量では、気象台等のある都市の中で最も多いのが青森市であることから、同市が日本一（世界一）の豪雪都市と表現される場合もある。

このように、雪の多さを表す統計データ（年降雪量、1日降雪量、最深積雪など）、期間の捉え方（平年値か最大・最小値か）、対象地域（気象台等、アメダス、旧国鉄観測地点など）は様々であり、その設定方法によって豪雪の意味合いが微妙に変わってくることに留意したい。

【参考文献など】

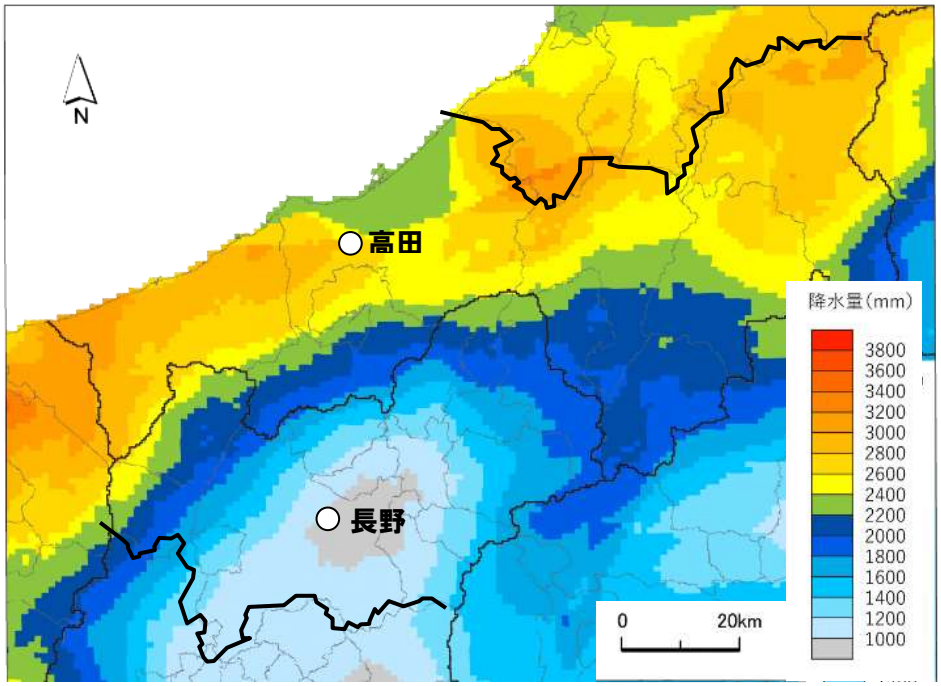
・上越市の気象編集委員会（1979）：上越市の気象、45頁
・妙高市ホームページ

参考　平年値について

「平年値」は、その時々の気象（気温、降水量、日照時間等）や天候（冷夏、暖冬、少雨、多雨等）を評価する基準及びその地点の気候を表す値として用いられている。 西暦年の1の位が1の年から続く 30 年間の平均値をもって平年値とし、10 年ごとに更新している。

現在は 1981～2010 年の観測値による値を使用しているが、2021年以降の平年値は、1991～2020年の値をもとに集計されるため、各種値は変更され、ランキングも変わる可能性がある。

■ 雨・雪 （年降水量・年間降水日数）



出所）国土地理院数値地図および国土交通省「国土数値情報」（平成 24 年度作成）をもとに作成

- 長野市は 933 mmであり、県庁所在地の中で最も雨が少ない。
- 上越市高田は 2,755 mmであり、1 位の屋久島（4,477mm）や 2 位の三重県尾鷲（3,849mm）ほどではないが、全国で 9 番目に降水量が多い。

年降水量の平年値は【右表】のとおり。

1 mm以上の降水日数の平年値でみると、上越市高田は全国 1 位の 190.5 日である。【下表】

【国内の降水日数ランキング】

（気象台等 157 か所の平年値）

順位	地点	平年値(日数)
1	高　田（新潟県）	190.5
2	新　庄（山形県）	189.1
3	酒　田（山形県）	186.5
4	倶知安（北海道）	177.1
5	金　沢（石川県）	176.8
・・・		
100	長　野（長野県）	108.4
・・・		

出所）気象庁ホームページをもとに作成

【国内の年降水量ランキング】

（気象台等 157 か所の平年値）

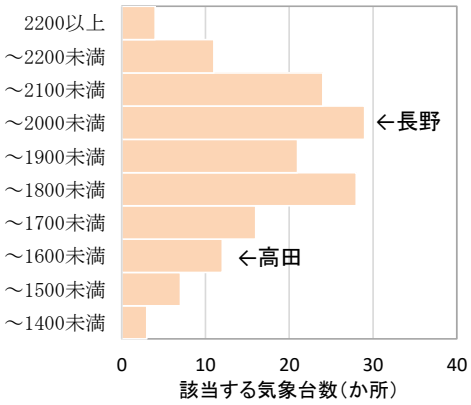
順位	地点	平年値(mm)
1	屋久島（鹿児島県）	4,477
2	尾　鷲　（三重県）	3,849
3	阿蘇山　（熊本県）	3,206
4	八丈島　（東京都）	3,202
5	雲仙岳　（長崎県）	2,899
6	三宅島　（東京都）	2,838
7	名　瀬（鹿児島県）	2,838
8	大　島　（東京都）	2,827
9	高　田　（新潟県）	2,755
10	油　津　（宮崎県）	2,599
・・・		
148	松　本　（長野県）	1031
149	八　戸　（青森県）	1025.1
150	根　室　（北海道）	1020.8
151	長　野　（長野県）	932.7
152	帯　広　（北海道）	887.8
153	雄　武　（北海道）	864.6
154	紋　別　（北海道）	810.1
155	網　走　（北海道）	787.6
156	富士山	0
157	昭和基地　（南極）	0

出所）気象庁ホームページをもとに作成

■　日照　（年間日照時間）

- 長野市は 1,940 時間で同 54 位。上位を占めるのは太平洋側や瀬戸内海付近の温暖な地域が大半であり、それらを除くと比較的日照時間の多い地域ということができる。
- 上越市高田は 1,591 時間であり、全国 134 位。北海道と沖縄を除くと、10 番目に日照時間が少ない地域である。

【年間日照時間の分布】
（国内気象台等 156 か所）



備考）2017 年に阿蘇山での気象観測が終了したため平年値に比べて観測地点が 1 か所少ない（気温も同様）。
出所）気象庁ホームページをもとに作成

■　気温差（夏季 1 日の気温差・年間の気温差）

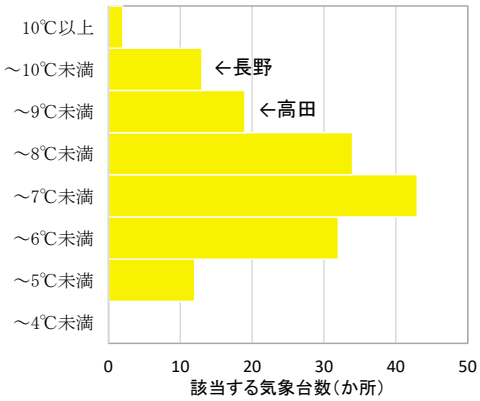
7 月の 1 日の気温差（最高気温と最低気温の差）

- 長野市は 9.1℃であり全国 7 位の大きさ。
- 高田は 8.1℃で全国 32 位だが、長野をはじめ内陸の盆地が上位を占める中で、それ以外の地域としてはかなり上位に位置する。

1 日の気温差については、気象庁で正式に公表している数字はないことから、日最高気温の平年値から日最低気温の平年値を引いたものを気温差として表現した。

一般的には「日較差」と表現する場合もあるが、気象庁では「気温の 1 日の変動幅。最高気温と最低気温の差」などと言い換えることが推奨されているため、ここでは使用しない。

【7 月における 1 日の気温差の分布】
（国内気象台等 156 か所）



出所）気象庁ホームページをもとに作成

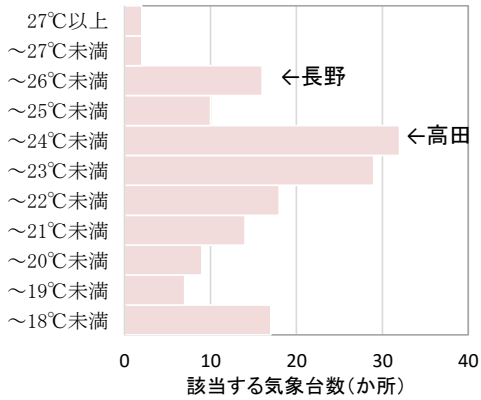
1 年間の気温差（1 年のうち最も高い月平均気温と最も低い月平均気温との差）

- 長野市は 25.8℃で全国 6 位の大きさ。北海道を除くと最も気温差が大きい。
- 高田も 23.9℃で全国 31 位と上位に位置する。

1 年間の気温差については、気象庁で正式に公表している数字はないことから、気温の平年値のうち最も高い月から最も低い月を引いたものを気温差として表現した。

一般的には「年較差」と表現する場合もあるが、気象庁では「気温の年の変動幅。最高気温と最低気温の差」などと言い換えることが推奨されているため、ここでは使用しない。

【年間の気温差の分布】
（国内気象台等 156 か所）】



備考）平年値における最高気温月から最低気温を差し引いたものを気温差としている。
出所）気象庁ホームページをもとに作成

3　因果関係

※　番号は他のテーマ(01～20)との関係性、アルファベットは次の頁に補足説明があることを示す。

暖流の流れる日本海と山脈の存在　01

・シベリアからの季節風が、暖流の流れる日本海上で多くの水蒸気を含むことで積雲が発達し、この積雲が山脈にぶつかり乗り越える過程で雪が降る。特にこの地域に到達する季節風は、日本海海上のかなり長い距離を通過してくるため、より多くの水蒸気を含むという説もある。
・長野市周辺は、周囲を山に囲まれいるため気温差が大きく、積雲が取り払われ雪が少ない。

☞ a

ブナ林を中心とする植生の発達　03

・豪雪に対して強い樹木であるブナの純林を比較的身近で見ることができる。

水力発電の発達　04

・大量の雪解け水による豊富な水資源により、水力発電が発達した。

雪国固有の建築様式や土木技術の発達

・市街地では、冬期間でも通行できる歩道としての「雁木」が形成され、農村部では「中門造」などの積雪に耐える頑丈な家屋が見られる。
・消雪パイプやスノーシェードなどの様々な雪対策が行われている。
・これらは、雪国独特の景観を生み出している。

米づくり・酒づくりの発達

・大量の雪解け水による豊富な水資源を利用した、米づくりや酒づくりが発達した。
・夏には高温・多照となり、稲が育つのに十分な日照がある。
・特に中山間地域では、昼夜の寒暖差が大きいことで、米のおいしさが増すといわれる。

りんごやぶどうの栽培（雪の少ない地域）

・山脈を挟んだ長野盆地周辺では、雪が少ないことや一定の日照時間と気温差があることから、りんご、ぶどう、ももなどの果物栽培が盛んとなった。

保存食の発達　06　11

・豪雪地帯において、雪に閉ざされた冬を生き抜く知恵として、保存食や発酵食品が発達した。

織物産業の発達

・雪国の気候は織物づくりにふさわしい環境を生み出した。
・例えば、高い湿度が安定的に続くことから、糸の紡ぎや織りなどの工程において、糸が切れるのを防いだ。
・雪に晒すことで漂白効果も得られた。

スキー場や雪まつりの発達　10

・国内トップクラスの豪雪地帯は多くのスキー場を生み出す。平野部は湿った雪が多いものの、高地にあるスキー場は、冷涼な北海道と同様にパウダースノーが多く、近年は海外からのスキーヤーも数多く訪れる。
・雪深い地域ならではの新旧のお祭りも多数みられる。

【補足説明】

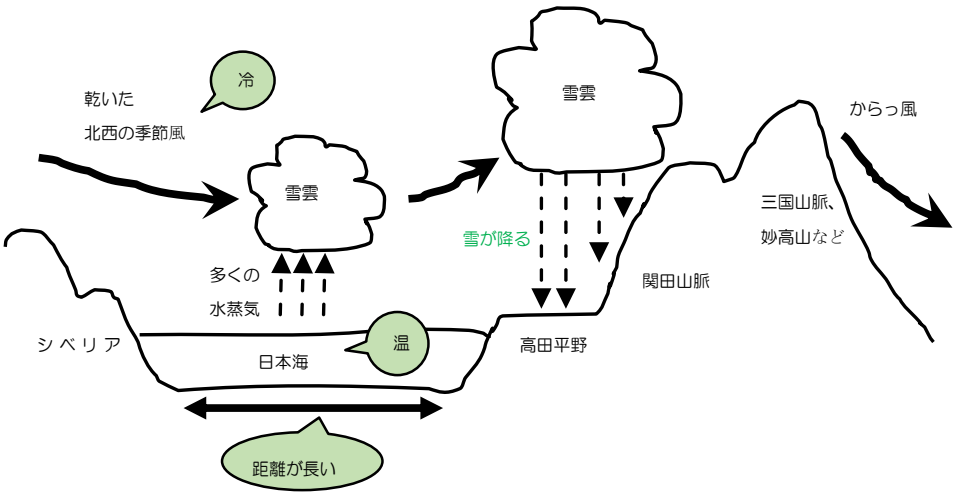
a 雪が降る仕組み（暖流の流れる日本海と山脈の存在）

降雪の要因として、シベリアの平原、日本海を流れる暖流（対馬海流）、山脈の存在などを挙げるのは通説となっている。

特に、雪国の中でも特にこの付近に雪が多い理由として、日本海海上の通過距離が長いことについて挙げる見方は一定数あるが、はっきりしていないとの見方もあるようである。

【参考文献など】

・新潟気象台ホームページ
・株式会社アルゴス（1995）：上越の気象イエローデータブック　べらぼーに降る雪のはなし、11 頁



4　解　説

要　約

この地域は、アメダスの最深積雪国内トップ 20 に 7 か所が入るほか、人の住むところでの積雪深の日本記録や、旧国鉄の積雪深の日本記録、旧国鉄の 1 日の降雪量の日本記録なども有し、国内有数の豪雪地帯といえます。そもそも日本は人の住む地域では世界有数の豪雪地帯であるため、この地域は世界有数の豪雪地帯ということもできます。

降水量では、上越市高田は全国 9 位であるのに対し、長野市は全国 151 位と対照的です。日照や 1 年間の気温の差についても違いがみられます。このように、峠を挟み対照的な気候が隣り合っている稀な地域でもあります。

豪雪となる理由には、日本海と山脈の位置が大きく関係しています。

冬には、シベリアからの季節風が、日本海で多くの水蒸気を含み積雲が発達します。この積雲が山脈にぶつかり乗り越える過程で信越県境付近に雪が降ります。特に信越県境地域に到達する季節風は、日本海海上のかなり長い距離を通過してくるため、より多くの水蒸気を含むという見方があります。

また、長野県側でも県境付近から少し離れると、高い山脈により積雲が取り払われ雪はあまり降りません。周囲を山に囲まれているため、むしろ降水量が少なく、気温差も大きくなります。

海から比較的近い場所に高い山脈があり、その山脈を挟んで隣り合っている（地形がコンパクトにまとまっている）ため、こうした違いが際立つこととなります。

雪を中心とした降水量の多さは豊富な水資源となり、水力発電や米づくり、酒づくりなどが発達しました。また、雪国で生活するための知恵として保存食品や発酵食品が発達しました。冬期間でも人が行き来できる雁木、一斉雪おろしや消雪パイプなどの雪対策、積雪に耐える頑丈な家屋も見られ、これらは、雪国独特の景観も生み出しました。

その他、多雪地帯を特徴づけるブナ林を比較的身近で見ることができる一方で、山を挟んで雪が少なく、日照や気温が果物栽培に適した地域では、りんごやぶどうなどの栽培が盛んとなりました。

地域資源としての捉え方

雪国に住み続ける人にとって「雪はない方が楽」という思いが正直なところかもしれませんが、雪はほぼすべての地域資源に関わっており、雪なしにこの地域を語ることはできません。湯沢町など7市町村で構成する雪国観光圏が提唱する「雪国文化」は、まさにこのことを言い当てています。

豪雪地帯が存在する故に、その隣接地に雨が少ない地域を生み出しています。この範囲で捉えることで、対照的な地域が隣り合っていることにより得られてきた恩恵に気づくこともできます。

地球温暖化により降雪量が大きく変わる可能性もある中、雪の減少を喜ぶ声も多い一方で、それによって失われる雪国文化は少なくありません。その価値を発信しつつ、世界的な環境問題に取り組む意義や力を持ち合わせた地域であると感じます。

あわせて、一定の気候変動は避けられない状況にあることから、蓄積された地域のDNAでもある雪国文化を大切にしつつ、気候変動に適応する文化をその礎の上に積み重ねる視点も重要と考えます。

【テーマに関する参考文献など】

※　特に参考とした文献には●を付しました。

●気象庁ホームページ
・上越市の気象編集委員会（1979）：上越市の気象、上越科学教育研究室
・斉木昭（2000）：上越地方の気象、アルゴス
・宮澤清治（2000）：上越地方の気象によせて、上越地方の気象
・市川健夫（1980）：雪国文化誌、日本放送出版協会、14頁
・市川正夫（2018）：信州学　長野と松本のなぜ？、信州教育出版社

03　植　生　（多様な植生が集積／典型的なブナ林帯）

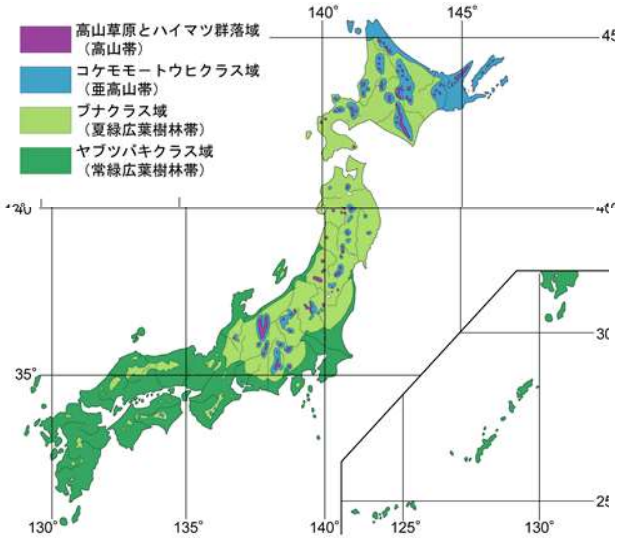
1　はじめに

日本列島は、北から南に約 3,000 kmと長く、海岸から高山まで様々な立地を有するため、それぞれの地域に応じた多様な生物相が形成され、植物も多様です。植物の分布は、基本的には気温と降水量に対応しますが、3,000m 級の山脈を有する日本列島では、緯度に伴う水平分布と標高による垂直分布の分布パターンが見られます。

植生とは、ある地域を覆っている植物体の総称をいい、それらの面的な配分状況を地図上に表現したものが植生図です。日本の植生は、高山帯、コケモモートウヒクラス域、ブナクラス域、ヤブツバキクラス域の大きく 4 つに分類されています [1)]。新潟・長野県境や富山県周辺は、多様な植生を楽しむことができる国内有数の地域ともいえます。

なお、豪雪地帯を特徴づける森林にブナ林があり、中心的な分布は北海道渡島半島から本州中部までの日本海側の山地部にみられますが、新潟県も国内有数の分布地です。

■　植生の分布



出所）環境省生物多様性センターホームページ

参考　1）植生区分の名称について

日本の植生区分（森林帯）は、自然植生の構成種の名をとり、各クラス域に大別されている。クラス域とは、広域に分布し景観を特徴づけている自然植生によって植物社会学的に定義されたものとされる。

ただしその名称については、時代や文献等により若干の違いがある。たとえば、左図の植生の区分は、宮脇昭(1985)に基づく。

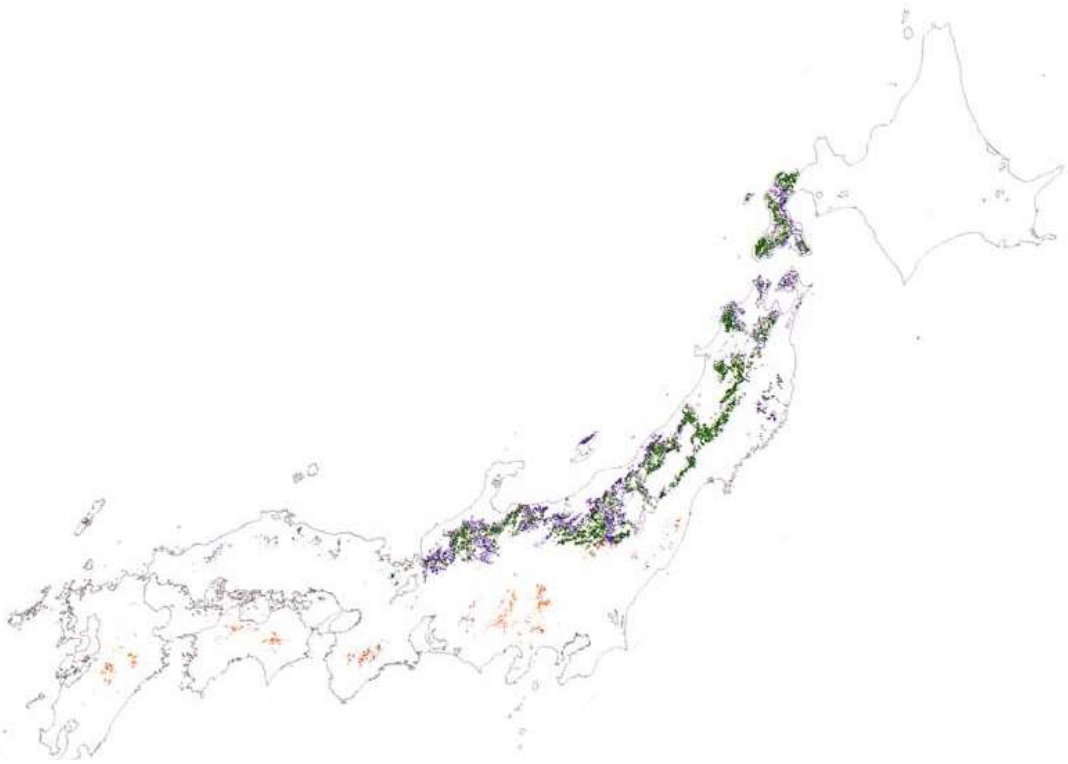
一方、本冊子の本文中に示した分類は、環境省生物多様性センターホームページの本文中の表現に基づいているが、たとえばコケモモートウヒクラス域の別名は「亜高山帯」ではなく「亜高山針葉樹林帯域」としている。

【参考文献など】

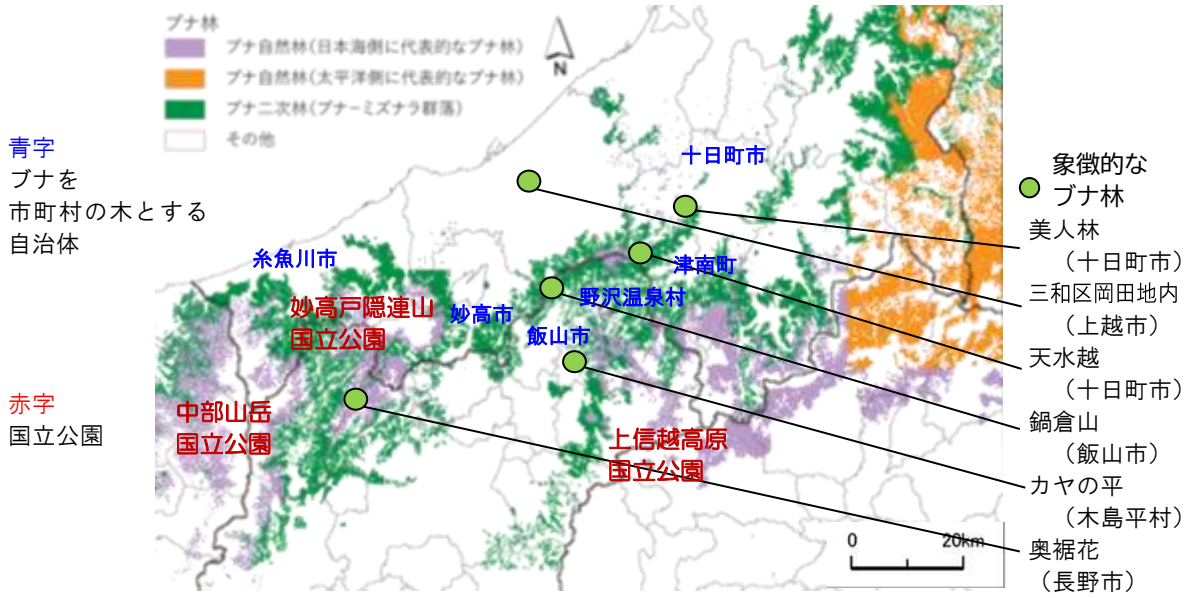
・生物多様性センターホームページ（植生調査とは）
・環境庁（1982）：日本の自然環境、29 頁
・宮脇昭（1985）：日本植生誌　中部、至文堂
・福嶋司（2005）：図説　日本の植生、朝倉書店、2-5 頁

2　特　徴

【ブナ林の分布（全国）】



【ブナ林の分布（信越県境付近）】



出所）環境省「5 万分の 1 現存植生図メッシュ」（1979～1998）および各市町村ホームページなどをもとに作成

■ 植生の境界（ツバキの分布）

● 上越市は、日本海側の雪の多い地域に自生するユキツバキ、温暖な地域に多いヤブツバキ、両者の中間種ユキバタツバキが分布する数少ない地域といわれている。

新潟県におけるユキツバキの分布は、平野を除いてほぼ全域にみられることから、「県の木」に指定されている。

石沢（1996）によれば、新潟県内での分布域の幅が広く、分布密度も高いことから、現在の分布の中心（北限は秋田県、南限は滋賀県や福井県などの説がある模様）ともいわれている。

【参考文献など】

・上越市史編さん委員会（1991）：上越市史普及版、上越市、42 頁
・石沢進（1996）：ユキツバキを指標とした植物分布、学会出版センター、1 頁

■ 象徴的なブナ林

● 日本の自然 100 選の天水越（十日町市）、森の巨人たち 100 選の森太郎（飯山市）をはじめ、象徴的なブナ林が集積している。

● 日本の自然 100 選（森林文化協会・朝日新聞社）

森林文化協会（朝日新聞社創刊 100 周年を記念して設立された公益法人）と朝日新聞社が 1982 年に全国から候補地を公募し選定したもの。

この中で選定理由にブナ林があげられているのは、十日町市「天水越のブナ林」を含む 6 か所（その他は青森県蔦温泉の自然林、秋田県白神山地、栃木県鷲子山、石川県鉢伏山、岡山県臥牛山）、うち日本海側のブナ林は 4 か所のみ。

【参考文献など】

・森林文化協会ホームページ（日本の自然百選）

● 森の巨人たち 100 選（林野庁）

国有林で次世代への財産として健全な形で残していくべき森林生態系に着目し、その代表的な巨樹・巨木を選定したもの。この中でブナが選定されているのは、樹齢約 400 年を誇る飯山市の「森太郎」を含む 4 本（その他は秋田県の「白神のシンボル」、「日本一のブナ」、「あがりこ大王」）のみ。

【参考文献など】

・林野庁ホームページ（森の巨人たち百選）

● 輝く新緑　散策したいブナ林ランキング（日本経済新聞　2018）

山歩きガイドや写真家ら 10 人に対し、2018 年時点でお勧めの散策ブナ林を聞いたもの。この中で、信越県境地域のブナ林は、6 か所も選定されている。

1	白神山地	（青森・秋田県）
2	玉原高原	（群馬県沼田市）
3	伯耆大山	（鳥取県）
4	三頭山	（東京都）
5	鍋倉山	（長野県飯山市）
6	美人林	（新潟県十日町市）
7	奥裾花自然園	（長野県長野市）
8	カヤの平高原	（長野県木島平村）
8	浅草岳	（新潟県魚沼市・福島県）
10	天水越	（新潟県十日町市）

出所）日本経済新聞 2018.5.12（日経プラス 1）輝く新緑　散策したいブナ林ランキング　をもとに作成

● モニタリングサイト 1000（環境省）

2005 年、日本の生態系の基礎的な環境情報を長期的に観測する地点として、環境省が約 1,000 か所を選定したもの。

このうち森林草原地域のコアサイトは 20 か所だが、この中に志賀高原「カヤの平」のブナ林と「おたの申す平」の亜高山帯針葉樹原生林が選定されている。

また、日本海側の落葉広葉樹林を対象とするコアサイトは、この「カヤの平」と岩手県の「カヌマ沢」の 2 つのみである。

【参考文献など】

・環境省（2018）：平成 29 年度重要生態系監視地域モニタリング推進事業（森林・草原調査）調査報告書、10-11 頁
・環境省生物多様性センターホームページ（モニタリングサイト 1000 とは）
・信州大学志賀自然教育園ホームページ（自然教育研究施設の概要）

● 水源の森 100 選（林野庁）

森林の役割の紹介などを目的とし、水を仲立ちとして森林と人との理想的な関係がつくられている等の代表的な森について、林野庁が平成 7 年に選定したもの。

この中で、奥裾花（長野市）は「全国有数のブナ原生林をはじめ手つかずの自然が残る森」との記載がある。

【参考文献など】

・林野庁ホームページ（「水源の森」百選地図）

● その他特徴的とされるブナ林

妙高山周辺	日本百名山の山麓に広大なブナの自然林が分布。
苗場山周辺	日本百名山の山麓に広大なブナ林が分布
美人林（十日町市）	年間 10 万人が訪れる知名度の高いブナ林
信越トレイル	日本のロングトレイルの草分け的存在。ルート上の随所でブナ林を楽しめる。
三和区岡田地内（上越市）	一般的に標高の低いところでの生育事例は少ないとされる中、標高 120　mの低い地域に約 40 本ものブナの純林が存在。

出所）各自治体ホームページなどをもとに作成

■ 身近なブナ林
（豪雪地帯におけるブナ林の特徴）

● それらはブナの純林が多く、比較的近くで見ることができる。

ブナは豪雪に対して強い樹木であり、日本海側の深雪地域ほどブナの純林が発達し（ブナ以外の木は育たないということもできる）、逆に積雪の少ない太平洋側のブナ林では、ミズナラなどの混合林になっている場合が多い。

また、九州から近畿地方までの西日本では、1,000m 以上の高い山地にしかブナ林は見られないのに対し、中部地方や関東地方では 800m 以上の山地帯にはブナの天然林の育成が見られる。

このため、この地域をはじめ豪雪地帯では、比較的低標高にもブナ林があり、人里に近いことから身近な林としてブナが利用されてきたといわれている。

参考　白神山地との比較

ブナ林は照葉樹林と並んで日本の代表的なものであるが、用材または薪炭材として利用された結果、現在では国立公園や森林生体系保護地域等の保護地域を除いてまとまった天然林が存在している地域はほとんどない。

その中で、白神山地は集落から離れていることや地形が急峻であることなどから、人為的な開発が入らず広大なブナの天然林が残っていることが評価され世界自然遺産に登録されている。

一方、この地域のブナ林は、それほど規模は大きいとはいえないが、他の樹木が混じることの少ない“the ブナ林”を比較的身近な場所で見ることができ、その多くは地域の住民が積極的に利用してきた里山のブナ林であることが特徴ともいえる。

【参考文献など】

・小林誠・永野昌博・伊藤千恵・村山暁　編著（2011）：雪里のブナ林のめぐみ、十日町市、12・17 頁
・市川健夫（1987）：ブナ帯と日本人、講談社、22 頁
・白神山地世界自然遺産推薦書（1992）、3 頁
・松井哲也ほか（2007）：地球温暖化により白神山地の気候はブナ林に適さなくなる、森林総合研究所平成 18 年度研究成果選集
・井田秀行（2015）：雪国の古民家にみる森と人の関わり、森林環境 2015、59-69 頁
・上越市創造行政研究所（2018）、上越市の特徴を探る 5　植生、創造行政 NO. 41

● ブナを市町村の木に選定する自治体が 6 つもある。（全国では 40 程度と思われる）

ブナを市町村の木に選定する自治体について、全国市町村を網羅的に確認できる公式資料は不明だが、石（2017）によれば 34、株式会社オカムラによれば 35、ウィキペディアによれば 36 であることなどから、40 程度と推定した。

このうち、信越県境付近においてブナを市町村の木に選定している自治体は、各市町村のホームページによれば、新潟県糸魚川市・妙高市・十日町市・津南町、長野県飯山市・野沢温泉村の 6 か所である。

【参考文献など】

・石弘之（2017）：日本の自然　破壊と再生の半世紀　森林保護の系譜、ニッポンドットコムホームページ
・株式会社オカムラホームページ
（家具に使われる木材＆樹木図鑑）
・（公財）新潟県都市緑化センターホームページ
http://www.greenery-niigata.or.jp/flower_green/kennohana.html

■　自然保護の取組

● 妙高戸隠連山国立公園をはじめ、保護・管理すべきすぐれた自然が存在する国立公園が3か所ある。

国立公園とは、次の世代も今と同じ感動を味わい楽しむことができるように、すぐれた自然を守り、後世に伝えていくところとして、国が指定し、保護・管理する役割を担っているものである。

信越県境地域には、上信越高原国立公園、妙高戸隠連山国立公園、中部山岳国立公園の3か所の国立公園がある。

【参考文献など】

・環境省ホームページ

● 志賀高原は、生態系の保全と持続可能な利活用の調和を目的としたユネスコエコパークに登録されている（国内の登録件数は9件）。

生物圏保存地域（ユネスコエコパーク）は、1976年にユネスコが設置したもの。世界自然遺産が、顕著な普遍的価値を有する自然地域を保護・保全するのが目的であるのに対し、ユネスコエコパークは、生態系の保全と持続可能な利活用の調和を目的としており、保護・保全だけでなく自然と人間社会の共存に重点が置かれている。

ユネスコエコパークの登録件数は、122か国686件（2018年7月現在）で、日本の登録件数は9件（志賀高原、白山、大台ケ原・大峯山・大杉谷、屋久島・口永良部島、綾、只見、南アルプス、祖母・傾・大崩、みなかみ）。

【参考文献など】

・文部科学省ホームページ

● 鍋倉山のブナ林帯（飯山市）では、かつて営林署による伐採計画が持ち上がるも中止となる。これは地元の自然保護運動が国の方針を変えた全国初の事例ともいわれる。

鍋倉山のブナ林については、1986年に国の方針に従って伐採計画が発表されたが、水資源の枯渇や雪崩を危惧する地元住民や自然保護を提唱する人々により伐採反対運動が起き、学識関係者の調査により巨木の存在が確認される。その後、伐採の中止も含めた計画の見直しが国に認められ、今日に至るとされる。

【参考文献など】

・鍋倉山パンフレット

3　因果関係

※　番号は他のテーマ(01～20)との関係性、アルファベットは次の頁に補足説明があることを示す。

多様な地形　01

・多様な地形がコンパクトにまとまった地域であり、高低差も大きいことから、比較的身近に多様な植生を見ることができる。

豪雪地帯　02

・豪雪地帯であることから、ブナなど豪雪に対して強い樹木やユキツバキなど豪雪に適応した植物が見られる。
・太平洋側の積雪の少ない地域のブナ林では、ミズナラなどの混合林が多く見られるが、日本海側の積雪の多い地域であるほどブナの純林が発達し、他地域では生育できない低標高地域でもブナが生育することが知られる。

☞ a

自然保護の取組

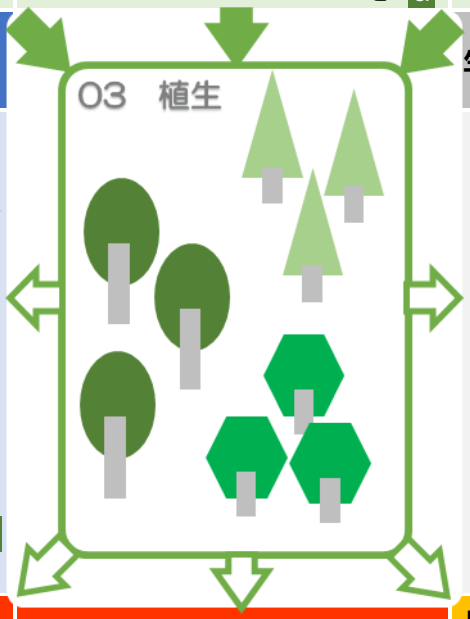
・豪雪地帯であるが故に開発が進みにくく、比較的身近に森林等が残った側面もある。
・その中でもブナ林の伐採計画が持ち上がった例はあり、その一部は自然保護運動によって中止となった。
雪国の生活の中で、自然が果たす役割の重要性を実感していた地域があったともいえる。

☞ b

保水能力の発揮（天然のダムの役割）

・ブナ林などの森林は“緑のダム”などともいわれ、河川へ流れ込む水の量を安定させる働きを持っている。

☞ c



生活道具などの生産

・ブナ以外の樹木が自然に育ちにくい豪雪地帯では、薪炭材としての利用だけでなく、家屋の梁や農具の柄、机・椅子などにも使われた。

☞ d

米づくり・酒づくりの発達

・ブナ林の土壌を通過した綺麗な水は、おいしいお米や酒づくりにつながる。

海の幸・山の幸の恵み

・ブナ林の土壌を通過した水は、地下水や河川を通じた海藻やプランクトンを育てる栄養素を運び、海の幸を育む。
・豪雪地帯のブナ林では、柔らかく良質な山菜が採れる。

☞ e

自然環境を活かした観光資源の発達

・典型的なブナ林帯や高山植物の存在などにより、各地域においてエコツーリズムや森林セラピーなど、自然環境を活かした体験観光メニューが開発されている。

【補足説明】

a 豪雪地帯

積雪は、積雪下で温度を一定に保つ効果がある一方、植物に雪圧を加えたり育成期間を制限したりもする。こうした積雪が、太平洋側と日本海側の植物の分布や組成の違いを引き起こす要因のひとつといわれている。

本州中央部では主に標高 800m前後から上部にブナ林が出現するのに対し、たとえば日本海側多雪地帯の十日町市では標高 200m前後からブナ林が出現しており、ブナの生育もきわめて旺盛であるとされている。

新潟県のブナクラス域の森林の林床には、ヒメアオキ、ヒメモチ、エゾユズリハ、ハイイヌツゲなどの常緑低木が多く生育している。これらは、多雪地帯に順応している植物と考えられており、そうした特徴を「日本海要素」とも呼ぶ。

【参考文献など】

・福嶋司(2005):図説　日本の植生、朝倉書店、6・8・72 頁
・宮脇昭（1985）：日本植生誌　中部、至文堂、230・440 頁
・小林誠・永野昌博・伊藤千恵・村山暁（2011）：雪里のブナ林のめぐみ、十日町市、17 頁

b 自然保護の取組

雪国ではブナが重要な資源であり、伐採を計画的に行うことによってブナを維持してきた。

ブナは生え変わりが遅い木であることから、無計画に伐採するとブナの純林ではなくなる。こうしたことも理解して、ブナ林を維持してきたことが、人の手が入りながらも純林が維持されてきた背景にあるとされる。

【参考文献など】

・信州いいやま観光局ホームページ
・井田秀行（2015）：雪国の古民家にみる森と人の関わり、森林環境 2015、65 頁

c 森の保水能力

森林は“緑のダム”として河川へ流れ込む水の量を安定させる働きをもっている。特にブナ林などの林床には腐葉土が厚く堆積しスポンジのようになっており、豪雪地帯で大量の雪解水を蓄えることのできる保水力はかなりのものとされる。

【参考文献など】

・森林総合研究所（2006）：地球温暖化によりブナ林の分布適域が大幅に減少する、研究の“森”から№144
・市川健夫（2010）：日本列島の風土と文化Ⅱブナ帯文化と風土、第一企画、21 頁
・環境省ホームページ（日本の世界自然遺産）
・小林誠・永野昌博・伊藤千恵・村山暁 編著（2011）：雪里のブナ林のめぐみ、十日町市、64 頁

d 生活道具などの生産

ブナは柔らかいために曲がったり腐りやすい性質があり、材としては使いづらいとされている。しかし、ブナ以外の樹木が自然に育ちにくい豪雪地帯では、ブナの性質を知りうまく利用してきた。例えば、雪の重みに強い性質や乾かすと固く丈夫になる性質を利用して、家屋の梁や農具の柄、机・椅子などに使われていた。

【参考文献など】

・小林誠・永野昌博・伊藤千恵・村山暁 編著（2011）：雪里のブナ林のめぐみ、十日町市、26-27 頁
・井田秀行（2015）：雪国の古民家にみる森と人の関わり、森林環境 2015、64 頁

e 海の幸・山の幸の恵み

森林土壌にある養分は、地下水や河川に流れ出る水とともに海まで運ばれ、海藻やプランクトンを育てる栄養素となり、海の幸も育むこととなる。

雪の下では地温が高いため、下のほうから雪が解け、雪解けとともに山菜が伸び柔らかで良質なものが取れるといわれている。また、林床は腐葉土で肥えているので山菜が大きく成長する。

【参考文献など】

・小林誠・永野昌博・伊藤千恵・村山暁 編著（2011）：雪里のブナ林のめぐみ、十日町市、65 頁
・市川健夫（1987）：ブナ帯と日本人、95 頁
・市川健夫（2010）：日本列島の風土と文化Ⅱブナ帯文化と風土、第一企画、26 頁

4　解　説

要　約

信越県境地域では、沿岸部は落葉広葉樹林帯と常緑広葉樹林帯の境界に位置し、標高の高い地域は亜高山帯や高山帯の植生がみられます。これら植生の境界に位置することから、多様な植生を身近で見られる地域でもあります。

また、日本の自然100選の天水越(十日町市)、森の巨人たち 100 選の森太郎（飯山市）など、象徴的なブナ林が集積しており、雪国に特徴的なブナの純林を比較的近くで見ることができます。

そのほか、3 か所の国立公園、志賀高原のユネスコエコパークなど、様々な保全と活用の取組が行われている地域でもあります。

信越県境地域は、多様な地形がコンパクトにまとまった地域であり、高低差が大きいことに加え、低標高でありながら大量の雪が降ります。このことが、比較的身近に多様な植生を見ることができる要因となっています。

また、ブナは豪雪に対して強い樹木であるため、太平洋側では、ミズナラなどの混合林が多くみられますが、日本海側の積雪の多い地域であるほどブナの純林が発達し、他地域では生育できない低標高地域でもブナが生育することが知られています。このほかに、日本海側のブナ林の周辺に生育する植物も、雪に適応したものが多くみられます。

鍋倉山の例に見られるように、人里近くに自然が残っている背景には、豪雪により開発が進まなかった面もありますが、雪国の生活の中で自然が果たす役割の重要性を実感していたことも理由の一つといえるかもしれません。

ブナ林など森林は、河川へ流れ込む水の量を安定させる働きを持っているほか、ブナ林の土壌を通過したきれいな水は、おいしいお米や酒づくりにつながり、海の幸も育みます。豪雪地帯のブナ林では、柔らかく良質な山菜が採れるともいわれています。

ブナ以外の樹木が自然に育ちにくい豪雪地帯では、かつて薪炭材としての利用だけでなく、家屋の梁や農具の柄、机・椅子などにも使われていました。

近年では、ブナをはじめとした多様な植生は、エコツーリズム、森林セラピーなど、観光や癒しの場所としても注目されています。

地域資源としての捉え方

この地域は、豊かで多様な自然を有しており、人々は厳しさも含めてその自然環境に適応した生活をしてきたともいえます。ブナは使いづらいものの、雪国ではブナしか育たないため仕方なく活用してきたなどの見方もありますが、今一度これらの恩恵と自然との共存の歴史（活用しながら保存してきた知恵）を再確認することで、今後ますます問われてくる自然との向き合い方を考えるきっかけになると思います。

【テーマに関する参考文献など】

※　特に参考とした文献には●を付しました。

（植生全般　－　全国）
●福嶋司（2005）：図説日本の植生、朝倉書店
・沼田眞（2002）：日本の植生、講談社
●環境省生物多様性センターホームページ
・環境省ホームページ（日本の世界自然遺産）
https://www.env.go.jp/seisaku/list/sekaiisan.html
・環境省（重要湿地）
https://www.env.go.jp/nature/important_wetland/index.html
・環境省（1993）：緑の国勢調査　自然環境保全基礎調査の概要
・環境省（1996）：日本の植生　第４回自然環境保全基礎調査　植生調査報告書（全国版）
・林野庁（2014）：保護林制度等の現状と課題、第１回保護林制度等に関する有識者会議資料
http://www.rinya.maff.go.jp/j/kokuyu_rinya/sizen_kankyo/pdf/siryou3_shuusei.pdf
（植生全般　－　特定地域）
・新潟県生活環境部自然保護課（1993）続・新潟県のすぐれた自然　植物編
・新潟県社会科教育研究会（1978）：新潟県上越地方の地誌
・五百川裕（2008）：縄文人が作った頸城の自然、直江の津 8(4) 4-10 頁
・環境省長野自然環境事務所（2014）：上信越高原国立公園妙高戸隠地域基礎調査業務　報告書
・十日町市（2017）：ふるさと教材　ふるさと十日町
・十日町市教育委員会（2016 一部改訂）：わたしたちの十日町市　小学校 3，4 年生用の副読本
・佐藤卓・太田道人（2010）：富山県に産する日本海要素とその近縁植物の分布の特徴
・日本海学推進機構ホームページ（日本海学講座　第１回　日本海側気候と植物）
http://www.nihonkaigaku.org/
（ブナ関係　－　全国）
・赤羽正春（1999）：ブナ林の民俗、高志書院
・赤羽正春（2001）：採集 ： ブナ林の恵み、法政大学出版局
・佐藤雅一（1988）：ブナ林の文化史－縄文時代、別冊とことん第５号、越書房
・長野県自然保護連盟（1989）：「母なるブナ　ブナと原生林・現代文明を考える全国集会」のまとめ
●市川健夫（1987）：ブナ帯と日本人、講談社
・市川健夫（2010）：日本列島の風土と文化Ⅱ ブナ帯文化と風土、第一企画、
・環境省（2016）：平成 27 年度世界自然遺産候補地詳細調査検討業務　報告書
・森林総合研究所（2006）：地球温暖化によりブナ林の分布適域が大幅に減少する、研究の“森”から№144
・松井哲也ほか（2006）：地球温暖化により白神山地の気候はブナ林に適さなくなる、森林総合研究所研究成果選集
・白神山地世界遺産センター　http://tohoku.env.go.jp/nature/shirakami/
・黒松町内ブナセンターホームページ　http://www.host.or.jp/user/bunacent/
（ブナ関係　－　特定地域）
・中部森林管理局ホームページ
http://www.rinya.maff.go.jp/chubu/policy/business/conservation/hogorin/index.html
●小林誠・永野昌博・伊藤千恵・村山暁（2011）：雪里のブナ林のめぐみ、十日町市
・キョロロホームページ（松之山におけるブナ二次林の秘密～ブナ二次林における構造の多様性と樹木組成の関係～）　http://www.matsunoyama.com/kyororo/the-study/
・信州いいやま観光局ホームページ（特集なべくら山）
https://www.iiyama-ouendan.net/special/nabekura/

04　エネルギー　（国内有数のエネルギー供給地）

1　はじめに

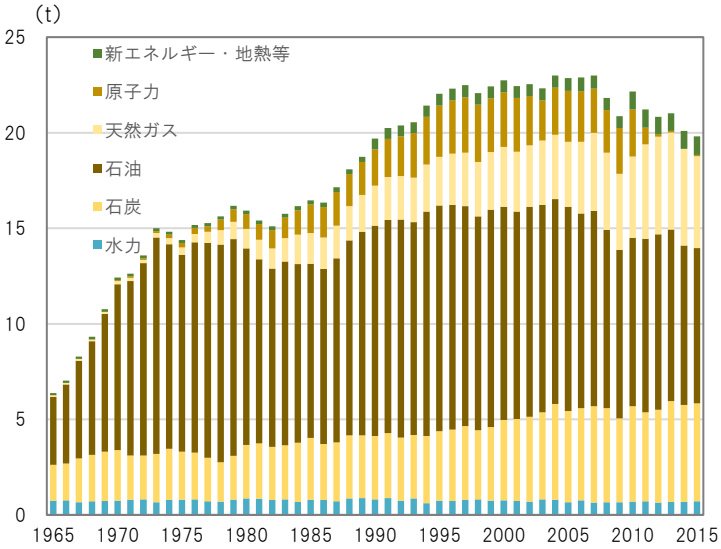
エネルギーは、人間生活において欠かすことのできないインフラです。エネルギーの種類には、石炭、石油、天然ガス、ウランなどの化石エネルギー、水力、太陽光、風力、雪氷などの自然エネルギー、木材などのバイオマスエネルギーや、それらを原料として生成・供給される電力や都市ガスなどがあります。

古くは植物由来の熱や灯、雪氷による冷熱を活用するなど、自然エネルギーの利用が基本でしたが、欧米では産業革命以降、日本国内では明治時代から各地域でガスや電力の供給が始まります。その後電力・ガス会社は統合が進み、供給施設は港湾部への集中化・大型化が進み、全国的な供給ネットワークが作られました。

中心的なエネルギー源は、時代とともに水力、石油、天然ガス、原子力などへと変遷しつつ、燃料の多様化と海外からの輸入によって消費量の増加に対応してきました。日本は化石燃料のほとんどを輸入に頼る中、新潟県は古くから石油や天然ガスを産出する数少ない地域です。

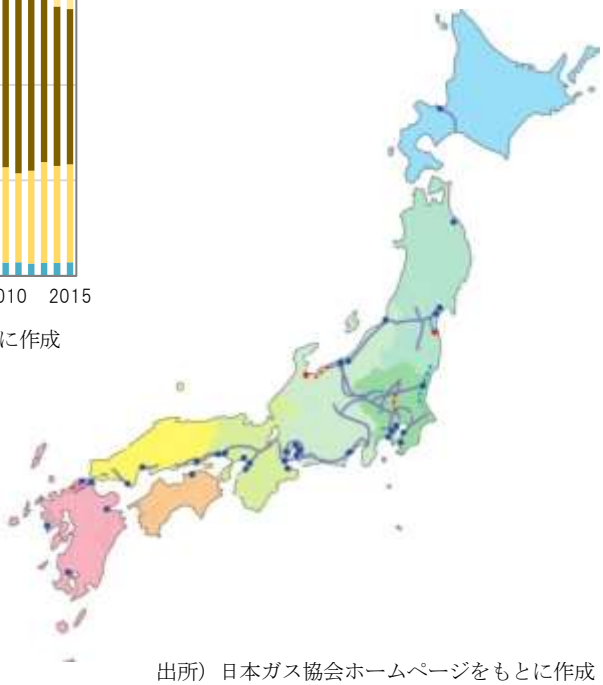
このほか、近年は温暖化対策や震災後の対応、技術開発の進展などにより、太陽光や風力等の自然エネルギーによる発電所や地域独自の電力会社をつくる動きもあります。

■　国内のエネルギー供給量の推移



出所）エネルギー庁「エネルギー白書」をもとに作成

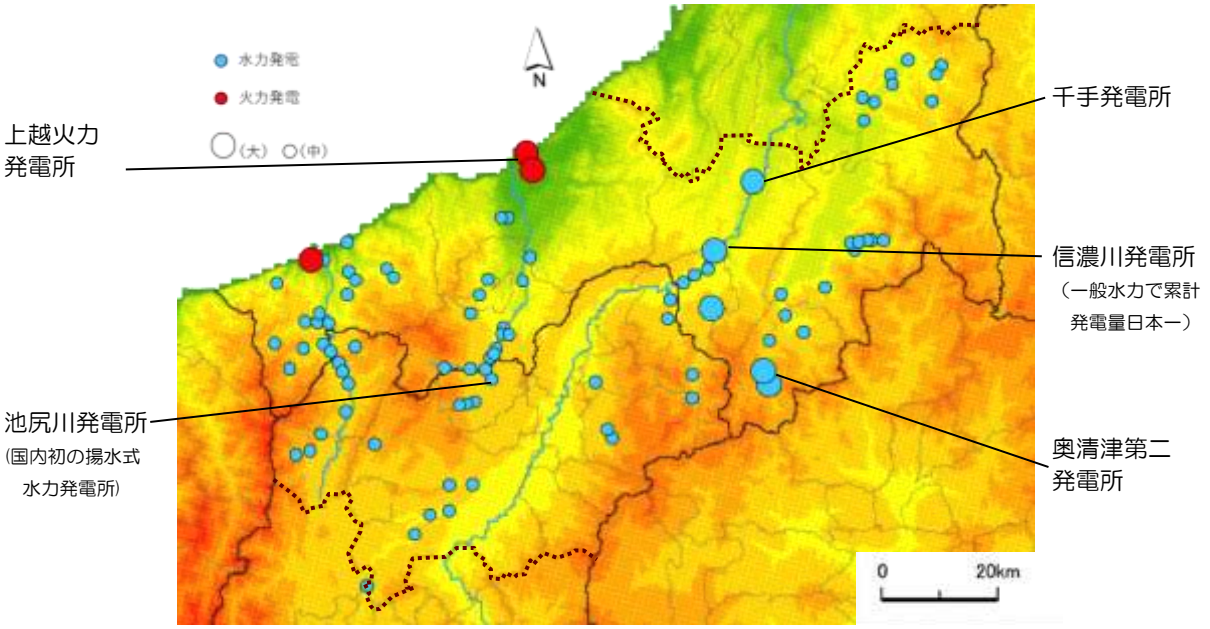
■　国内のガスパイプラインと供給基地



出所）日本ガス協会ホームページをもとに作成

2　特　徴

【水力・火力発電所の分布】



備考）1MW 未満の水力発電所および 100MW 未満の火力発電所を除く。大きな円は 100MW 以上の発電所
信越県境付近にある市町村（破線で挟まれた地域）の発電所のみ掲載
出所）国土地理院数値地図および電力土木技術協会ホームページ(水力発電所データベース)などをもとに作成

―― 水力発電所（1MW 以上） ――

● 姫川・青海川・早川・海川水系

市町村名	数	名称
長野県 白馬村	3	南股、二股、新楠川
小谷村	6	姫川第二、姫川第三、北小谷、 横川第一、横川第二、大網
新潟県 糸魚川市	16	大所川第一、大所川第二、大所川、 長栂、滝上、小滝川、新小滝川、 姫川第六、姫川第七、青海川、 海川第一、海川第二、海川第三、 笹倉第二、北山、早川

● 関川水系

市町村名	数	名称
長野県 信濃町	2	高沢、池尻川
新潟県 妙高市	11	西野、杉野沢、関川、田口、蔵々、 大谷第一、大谷第二、関山、鳥坂、 矢代川第一、矢代川第三
上越市	4	矢代川第二、板倉、高田、新高田

―― 火力発電所（100MW 以上） ――

市町村名	数	名称
上越市	2	上越火力★、上越グリーンパワー★
糸魚川市	1	糸魚川火力★

● 信濃川（千曲川）水系

市町村名	数	名称
長野県 信濃町	3	鳥居川第一、鳥居川第二、 鳥居川第三
長野市	7	平、水内、笹平、小田切、 奥裾花、裾花、里島
木島平村	1	樽川
山ノ内町	3	平穏第一、平穏第二、切明
栄村	3	志久見川第一、志久見川第二、 栃川
新潟県 津南町	5	中津川第一★、宮野原、 中津川第二、下船渡、信濃川★
十日町市	1	千手★

● 魚野川水系（信濃川支流）

市町村名	数	名称
新潟県 湯沢町	5	奥清津★、奥清津第二★、 清津川、土樽、湯沢
南魚沼市	8	石打、登川、五十沢第一、 五十沢第二、三国川ダム管理 用、五十沢、永松、五城
魚沼市	9	破間川、末沢、黒又川第二、 上条、須原、黒又川第一、 第二薮神、薮神、広神

備考）★は 100MW 以上の発電所であることを示す。
信濃町は、関川水系と信濃川水系にそれぞれ
発電所を有する。

■ 水力発電所

国内初の水力発電所は、1888（明治 21）年に運転開始した仙台電燈の三居沢発電所、電気事業用では 1891（明治 24）年に運転開始した京都市営の蹴上発電所とされる。

また、長野県初の水力発電所は 1898 年に運転開始した裾花川の茂管発電所（1936 年停止）、新潟県初の水力発電所は 1904（明治 37）年に運転開始した塩殿発電所（長岡市川口、1951 年停止）とされる。

新潟県内に現存する最古の水力発電所は、1907 年に運転開始した蔵々発電所（妙高市）であり、これを皮切りに関川水系などに水力発電所が整備された。

● 関川水系の県境付近にある池尻川発電所は、国内初の揚水式発電所として、農業用水との共存を図るなど珍しいタイプの発電所である。

池尻川発電所は、1934（昭和 9）年に長野県信濃町で運転を開始した。この発電所は、関川の水量が多い春・秋に水を野尻湖にくみ上げ、水量が少ない夏・冬に水を落として発電するもので、その下流では農業用水としても利用している。このように揚水と落水を年 2 回繰り返し、発電と農業の共存共栄を図る仕組みは、世界にも類を見ないと言われている。

【参考文献など】

・東北電力ホームページ（水力発電所一覧）
・西山耕一（2017）：電気が創った上越近代化物語、東北電力株式会社上越営業所、64-65 頁
・国土交通省（2007）：関川水系河川整備基本方針、5 頁
・経済産業省資源エネルギー庁ホームページ
・小野坂庄一監修（1998）図説　十日町小千谷魚沼の歴史、郷土出版社
・広報かわぐち No.358　2015.7.1　など

● 津南町の信濃川発電所は、一般水力において累計総発電電力量が日本一とされる。（津南町は日本一の水力発電地帯とも称される。）

津南町ホームページには、「日本一の水力発電地帯」という紹介コーナーがあり、東京電力信濃川水力発電所について 1939 年の運用開始時には東洋一と言われたなどの記載がある。

なお、新潟県魚沼市と福島県にまたがる奥只見ダムにある「奥只見発電所」は、2003 年に運転開始。最大出力 56 万 kW は、揚水式発電所を除く一般水力の中で国内最大であるが、電気事業便覧をもとに福島県の発電所としてみなし、ここでは取り上げていない。

【参考文献など】

・津南町ホームページ（日本一の水力発電地帯）
・津南町教育委員会（2012）、津南学 創刊号
・奥只見ホームページ
・電力事業便覧平成 28 年版　など

● 湯沢町の奥清津第二発電所の出力は 100 万 kW であり、国内の揚水式水力発電所のトップクラス。

電気事業便覧平成 28 年度版によれば、奥清津発電所 100 万 kW、奥清津第二発電所は 60 万 kW と記載されている。

一方資源エネルギー庁では、これを奥清津・第二、土木学会ホームページでは奥清津・奥清津第二と捉え、最大出力 160 万 kW の揚水式水力発電所と紹介している。すなわち捉え方にはよるが、160 万 kW とみるならば、奥多々良木発電所（兵庫県朝来市）の 193.2 万 kW に次いで国内 2 番目の規模となり、100 万 kW とみるならば国内 12 番目の規模となる。

【参考文献など】

・経済産業省資源エネルギー庁監修（2016）：電気事業便覧平成 28 年度版、電気事業連合会
・経済産業省資源エネルギー庁ホームページ（水力ランキング）
・土木学会関東支部新潟会ホームページ（にいがた土木構造物めぐり）
http://jsce-niigata.com/introduction/article/039/art039.html

● 十日町市の千手発電所は、小千谷、小千谷第二とともにＪＲ東日本の発電施設であり、東京都のＪＲの約半分の電力を賄っているとされる。

鉄道電化の推進のため、信濃川、天竜川、熊野川などの水力発電計画の中から、東京に近い地理的条件を考慮して信濃川が選定され、大正9 年に水利利用の許可を得た歴史ある施設とされる。

【参考文献など】

・JR 東日本ホームページ
・十日町市ホームページ
・土木学会関東支部（関東の土木遺産）ホームページ　https://www.jsce.or.jp
・西澤輝泰（2007）：信濃川の利水～くらしや産業を支える信濃川～信濃川自由大学平成 19 年度第 3 回講座記録

■　石油・天然ガス

● 上越市の玄籐寺油田では、1877 年、日本初の石油の機械掘りに成功し、その後日本初の石油パイプラインを設置した。

● 長野市では、日本初の石油会社である長野石炭油会社（後に長野石油会社に改称）が設立、浅川油田を開発した。

【参考文献など】

・上越市ホームページ（上越市の近代史に輝く先人たち）
・新潟県立歴史館（2018）：日常生活からひもとく信州、信濃毎日新聞、145 頁

● 1888 年、新潟県頸城郡域の油田は国内の約 3 分の 1 の石油産出量を誇っていた。

● 上越市には、1900 年、当時東洋一の製油所といわれたインターナショナル石油会社が設立された。

● 戦後産出した上越市の頸城油田・ガス田は、1959 年当時で日本一の石油・天然ガス産出量を誇った。
（いずれも現存はしていない）

【参考文献など】

・新潟県社会科教育研究会（1978）：新潟県上越地方の地誌、あかつき印刷、132-134 頁

● 上越市と長岡市を起点とする東京ラインは、国内最長のガスパイプラインである。

【参考文献など】

・国際石油開発帝石ホームページ（主要幹線パイプライン）
・帝国石油編纂委員会（1992）：帝国石油五十年史、帝国石油、344 頁
・経済産業省（2013）：第 1 回総合資源エネルギー調査会基本政策分科会ガスシステム改革小委員会資料 5、27 頁

● 直江津港は、国内 3 か所のＬＮＧ部門日本海拠点港の一つ。ＬＮＧ火力発電所、ＬＮＧ基地が稼働している。
・上越火力発電所は、中部電力管轄である長野県に電力需要量の 8 割を供給する。
・ＬＮＧ基地は、ガスパイプラインを通して太平洋側や北陸方面に輸入ＬＮＧを供給する。

【参考文献など】

・国土交通省（2014）：交通政策審議会第 57 回港湾分科会資料 1
・日本経済新聞 2011.10.8、中部電の上越火力 12 月試運転
・北陸地方整備局（2016）：第 5 回北陸地方整備局事業評価監視委員会資料 6

● 新潟県上越沖は、表層型メタンハイドレートの調査海域として、国内数か所の調査地で唯一、初年度から 3 年連続で選定されている。

メタンハイドレートは、「メタンガス」が水分子と結びついた氷状の物質で、次世代エネルギー資源として期待されている。南海トラフなどで見られる海底の下の地層中に存在する「砂層型」と、日本海側に多く見られる海底の表面付近に存在する「表層型」がある。

【参考文献など】

・経済産業省プレスリリース資料(2014.12.25、2016.1.22、2016.9.19)
・メタンハイドレート資源開発研究コンソーシアム（2014）：表層型メタンハイドレート調査の取り組み

■ 自然エネルギー

● 長野県は、古くは菜種油の産地であった。

山田（2018）によれば、小布施町を中心とする高井地方は古くから菜種の産地として知られ、隣接する須坂市は、街の急勾配にある用水を利用し、水車による菜種油絞りでも繁栄、油を江戸にも送った。その後の油粕は貴重な肥料として売買され、木綿栽培などの畑作に投入、綿も流通し、田中本家などの豪商が現れるなど、エネルギー生産を介した街の発達がうかがえる。

【参考文献など】

・山田直志（2018）、明かりが暮らしを変えてきた、日常生活からひもとく信州、長野県立歴史館

● 小布施町の「信濃及び周辺地域の灯火用具」は、照明器具やあかりに関する歴史を知る貴重な資料として国指定有形民俗文化財に指定。

「信濃及び周辺地域の灯火用具」は 1000 点近い個人のコレクションであり、1980 年に文化財指定、1982 年にはそれらを常設展示する「日本のあかり博物館」が開館した。同館は、わが国で初めての灯火具専門博物館とされる。

【参考文献など】

・公益財団法人日本のあかり博物館ホームページ
・竹風堂ホームページ
https://chikufudo.com/facilities/facilities01

● 上越・魚沼地方などではかつて多くの雪室が存在した。現在では雪冷房施設の数が国内有数といわれる。

池上(1999)によれば、明治～昭和 30 年の間、北陸 4 県で存在を確認できた雪室は 41 市町村、約 200 か所であり、このうち上越市の旧春日村で 78 もの雪室があったとの記録がある。このほかにも未確認の雪室があるかもしれないが、突出していることは確かである。

北海道経済産業局（2012）では、全国 144 の雪氷熱エネルギー活用施設を紹介しているが、都道府県別にみると北海道の 68 施設が最も多い。市町村別にみると最も多いのは上越市で 13 施設（うち 10 施設は旧安塚町）、次いで北海道沼田町が 9、同美唄市が 8 となっている。上越市のほか十日町市、津南町、魚沼市、南魚沼市の施設をあわせると 30 施設であり、国内でも一大集中地域であることがわかる。なお、この時点で長野県内の事例はない。

【参考文献など】

・池上佳芳里（1999）：北陸地方における雪室の分布とその盛衰、地理科学 vol.54 no.2pp 126-137
・経済産業省北海道経済産業局（2012）：雪氷熱エネルギー活用事例集 5

3　因果関係

※　番号は他のテーマ(01～20)との関係性、アルファベットは次の頁に補足説明があることを示す。

フォッサマグナ特有の地形・地質（石油・天然ガスの集積）　01

・フォッサマグナ（地質学的な溝）の真上に位置し、かつて海の底にあったため、石油・天然ガスのもととなる地層が堆積。その上に石油、天然ガスをためる砂岩層とその拡散を防ぐ泥岩層が交互に重なり、この地層が地殻変動で褶曲することによって山形の背斜部に石油や天然ガスが集積しやすい構造となった。

☞ a

フォッサマグナ特有の地形・地質（活発な火山・隆起・沈降）　01

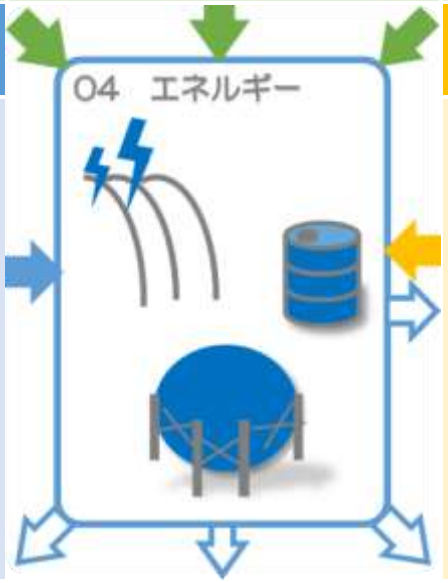
・活発な火山活動や隆起・沈降などにより、水力発電に適した急峻な地形が作られた。

豪雪地帯　02

・周辺の山岳地帯に大量の雪が積もり、豊富な雪解け水を蓄える天然のダムの役割を果たすため、水力発電にも有効活用できる。

首都圏への近さ　05

・エネルギーの大消費地である首都圏に近接する地域であり、首都圏までのガスパイプラインが形成された。
・その後、上越市内での採掘は廃止されるが、パイプラインの存在がＬＮＧ基地設置の一因ともなる。
・首都圏への送電を目的として設置された大規模な水力発電所もある。



蚕糸業による開発　14

・長野県須坂市などで発展した蚕糸業は、水力発電への投資の原動力となった。
・水力発電による動力は、器械による製糸に利用された。

☞ b

化学・金属などの工場立地

（上越地域の場合）
・明治から昭和初期には、電力会社が主導し、水力発電所の建設とともに化学・金属関係の工場の設置や誘致が進む。
・天然ガスの産出に伴い、化学・金属関係の工場が立地。関連工場として、金属・機械・電子、精密機械工場なども立地する。
・一部は撤退・休止あるいは業種転換した工場もあるが、現在もなお地域経済を支えている。

☞ c

商業・サービス業の発展

（上越地域の場合）
・水力発電所の存在は、旧日本陸軍の高田第 13 師団の誘致成功の一因となり、その後のスキー産業の発達や、朝市の開設、様々な商店の創業などにつながった。

採掘に伴う新たな発見（ナウマンゾウの骨、温泉など）　15

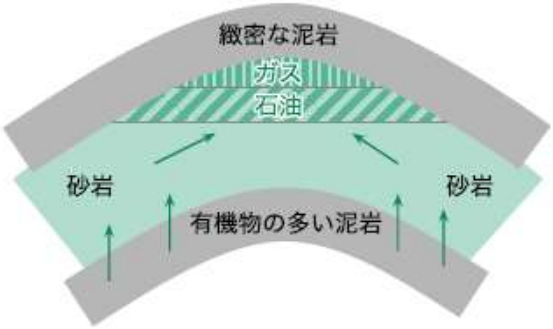
・野尻湖ナウマンゾウの骨は、水力発電によって湖の水位が低下する時期に発見されたもの。その後の博物館設置や大規模な発掘調査の発端となった。
・石油・天然ガスの採掘に伴い温泉が噴出し、鵜の浜温泉、六日町温泉などの温泉地が形成された。

☞ d

【補足説明】

a　フォッサマグナ特有の地形・地質

この地域は、かつて海の底にあったため、石油・天然ガスのもととなるプランクトンなどの有機物を含む地層が堆積した。その上に海底火山による溶岩や、陸地から運ばれた砂や泥が堆積し、石油・天然ガスをためる砂岩層とその拡散を防ぐ泥岩層が交互に重なったとされる。



b　蚕糸業による開発

【参考文献など】

・寺澤安正（2009）：中部のエネルギーを築いた人々　信州の水力発電事業を推進した小坂善之助・小坂順造、日本電気協会中部支部ホームページ
・寺澤安正（2017）：中部のエネルギーを築いた人々　製糸王・越寿三郎の電力と化学事業、日本電気協会中部支部ホームページ

c　化学・金属などの工場立地

【参考文献など】

・上越市史編さん委員会（2002）：上越市史通史編 6 現代、上越市、68-76、188-194、361-364 頁
・新潟県社会科教育研究会（1978）：新潟県上越地方の地誌、あかつき印刷、32-36 頁
・赤羽孝之・西山耕一（1990）：地方工業の研究-新潟県上越地方を中心として、山越企工、27-54 頁
・上越ものづくり企業データベース
・各企業ホームページ

d　採掘に伴う新たな発見

1948 年、野尻湖畔の旅館の主人である加藤松之助氏が、湯たんぽのような形をした石を発見。奇妙に感じ、地元の野尻湖小学校校長である日野武彦氏に見てもらったところ、「ゾウの歯ではないか」と言われ、その後ナウマンゾウの臼歯（きゅうし）であることが判明した。

【参考文献など】

・野尻湖ナウマンゾウ博物館ホームページ（野尻湖発掘のあゆみ）
http://nojiriko-museum.com/

4　解　説

要　約

上越地域は、かつて国内でもまれな石油・天然ガスの産地でありました。また、信越県境地域では、地形や水資源にも恵まれ、比較的早期に水力発電が整備され、現在でも国内有数規模の水力発電所が存在します。こうしたことから、越境してエネルギー供給が盛んに行われ、エネルギー面で首都圏の生活を下支えしてきた地域でもあります。このほか、古くから雪氷エネルギーの活用も盛んに行われています。エネルギー自給率の低い日本にあって、エネルギー資源のフロンティア的な地域といえるかもしれません。

上越市周辺は、フォッサマグナ（地質学的な溝）の真上に位置しており、かつて海の底にあったため、石油・天然ガスのもととなる地層の堆積や、その後の砂岩層、泥岩層の堆積と地殻変動によって、石油や天然ガスが集積しやすい構造となりました。

また、周辺の山岳地帯に積もる雪による豊富な雪解け水と急峻な地形は、水力発電の立地を促しました。水力発電事業に投資する原動力となった蚕糸業が、近隣の長野県で栄えていたことも一つの要因です。

このほか、大消費地である首都圏へも比較的近く、エネルギーを供給する上でも好立地であったことから、ガスパイプラインなどが形成されました。

上越地域では、明治から昭和初期には、電力会社が主導して化学・金属関係の工場の設置や誘致が進みました。天然ガスの産出に伴い、化学･金属関係の工場が立地し､関連工場として、金属・機械・電子、精密機械の工場なども立地しました。こうした工場の多くは、現在もなお地域経済を支えています。

また、水力発電所の存在は、旧日本陸軍の高田第 13 師団の誘致成功の一因となり、その後のスキー産業の発達や、朝市の開設、様々な商店の創業などにつながりましたし、天然ガスの産出とともに温泉が噴出し、温泉街も形成されました。

このように、直接的・間接的に地域経済への影響を与えたほか、積み重ねられた基盤をもとに、首都圏等へのエネルギーの一大供給地としての地位を確立しつつもあります。

地域資源としての捉え方

人々の暮らしに不可欠なエネルギー資源を供給してきた地域であったことを知ることで、見えないところで他地域の生活を支えてきたことがわかります。また、エネルギー拠点として維持してきた先人の努力、他分野とのつながりによる発展を知ることもできます。

一方で、国際情勢や国政に大きく左右されるエネルギー分野は、今後の暮らしや地域経済を考える上で避けられないテーマです。環境問題も含めエネルギー資源のあり方について考えるきっかけを作れる地域だと考えます。

【テーマに関する参考文献など】

※　特に参考とした文献には●を付しました。

・新潟県社会科教育研究会（1978）：新潟県上越地方の地誌、あかつき印刷
・赤羽孝之・西山耕一（1990）：地方工業の研究、山越企工
●西山耕一（2017）：電気が創った上越近代化物語、東北電力株式会社上越営業所、
・十日町市（2017）：ふるさと教材　ふるさと十日町
・小野坂庄一監修（1998）：図説　十日町小千谷魚沼の歴史、郷土出版社
・佐藤守正ほか（2009）：「コシヒカリの里」わが魚沼－その光と影、冬馬舎
・谷克行（2003）：雪氷エネルギー活用史および今後の課題　雪国環境研究第 9 号、青森大学雪国環境研究所

05　交　通　（国内の主要な交通網の通る地域）

1　はじめに

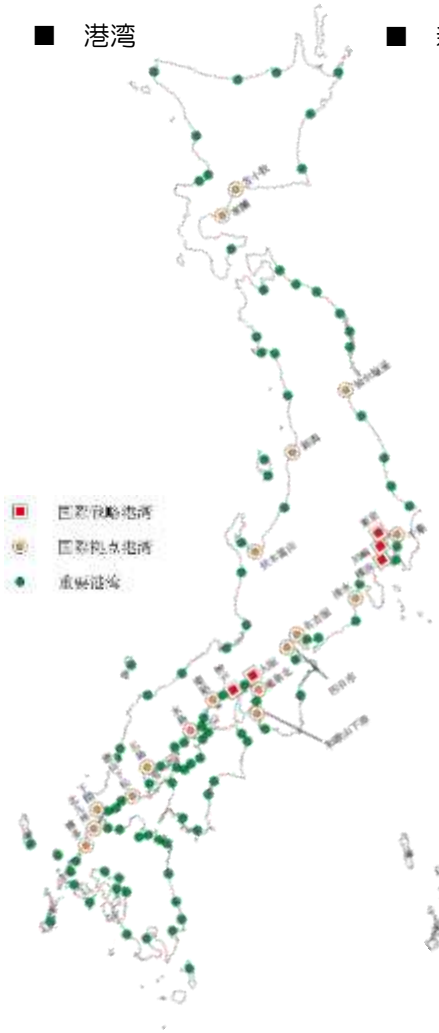
全国的な道路網としては、奈良時代の律令制下で東海道や北陸道などの「七道駅路」ができ、江戸時代には五街道やその脇街道、明治時代には国道が整備されました。1965 年には初めての高速道路が整備され、今もなお建設・計画中の区間があります。

港は、室町時代に日本の十大港を指す「三津七湊」があり、江戸時代には北前船などの寄港地が栄え、現在は国指定の重点港湾や重要港湾などがあります。各港をつなぐ旅客・貨物航路が発達していますが、旅客航路の中にはモータリゼーションの進展や過疎化などにより廃止となるものもあり、貨物航路は、近隣のアジア諸国との関係性から盛衰があります。

鉄道は、1872 年に新橋～横浜間が開業以来、全国各地に発達しましたが、近年はモータリゼーションの進展や過疎化などにより廃止となる路線もあります。一方、新幹線は 1964 年に東京～新大阪間が開業後、東京を中心とするネットワークが形成され、なおも建設・計画中の路線があります。

今も昔も交通が与える地域への影響は多大なものがありますが、時代とともに、徒歩や船運、鉄道、車へと中心的な移動手段が変わり、高速道路、新幹線、飛行機などによる高速化、グローバル化などが進む中で、地域の置かれた状況は大きく変容を続けています。

■　港湾

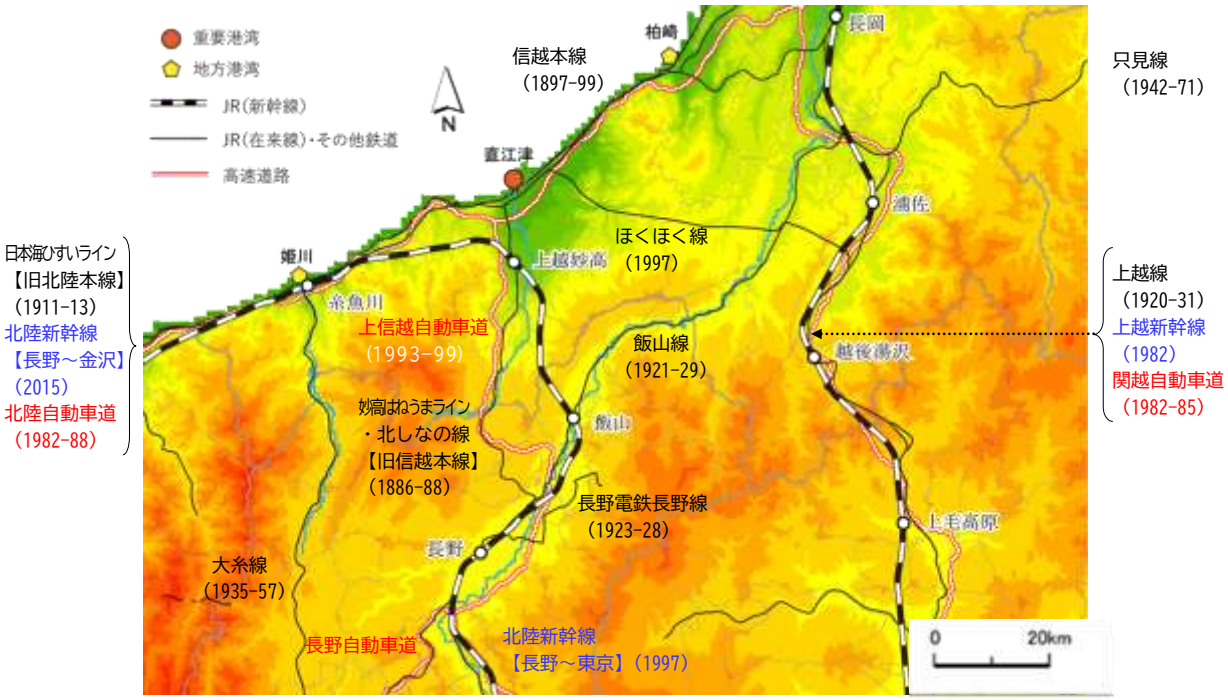


■　新幹線ネットワーク

■　高速道路ネットワーク

備考）高速道路の水色線は未開通部分を表す。
出所）国土交通省「国土数値情報」をもとに作成

2　特　徴



備考）（　　）内の数値は、当該地域内での一部開通から全線開通までの期間
出所）国土地理院数値地図および国土交通省「国土数値情報」などをもとに作成

■　道路

● 古代には、中央と地方諸国を結ぶ幹線道路（七道駅路）が整備される中で、日本海側を通る「北陸道」と長野県内を通る「東山道」のほか、両者をつなぐ「東山道支道」なども整備された。

● 江戸幕府は、江戸を起点とする五街道や脇街道を整備する中で、この地域には五街道に次ぐ重要な脇街道の一つである「北国街道」と「加賀街道」※が整備され、上越市がその結節点となった。

※　街道の呼称は複数存在する。

【七道駅路（7 世紀後半）】

出所）児玉幸多（1992）：日本交通史、24. 25 頁

【国内の主要街道（江戸時代）】

出所）国土交通省ホームページ

北陸道は、近世になると「北国街道」「加賀街道」とも称されるようになるなど、街道の名称は複数存在する。信濃と越後を結ぶこの街道は江戸にもつながる重要な道で、古くから塩や米など運搬する道であり、善光寺への参詣道でもあった。また、佐渡で産出された金銀の輸送経路にもあり、江戸幕府は五街道に次いで重要視していたとされる。

【参考文献など】

・上越市史編さん委員会（1991）：上越市史普及版、上越市、134 頁
・新潟県立文書館ホームページ（新潟県内の諸地域に関する相談　Q3）

● 1885 年に認定された全国 44 の国道の中に、東京～新潟を結ぶ 5 号線と 8 号線、東京～富山を結ぶ 21 号線の 3 路線が含まれた。
（現在の国道ではそれぞれ 18 号、17 号、8 号にほぼ相当）

「国道」とは、高速自動車国道と併せて全国的な幹線道路網であり、重要都市と主要港を連絡する等の要件に該当するものが指定されている。

明治 18 年（1885）に発出された「国道表」により、全国共通の 1 号から 44 号までの路線が指定された。しかし、近代は鉄道整備が優先され、本格的な道路整備が始まったのは戦後になってからである。

【参考文献など】

・国土交通省ホームページ（道の歴史）
・道路法（1952）

● 高速道路は、新潟と首都圏をつなぐ関越自動車道（全線開通は 1985 年）、日本海側を走る北陸自動車道（同 1986 年）、上信越自動車道（同 1999 年）の 3 路線があり、全国の幹線ネットワークの一翼を担っている。

■ 鉄道

● 1886 年、信越本線の直江津－関山間が開通し、その 7 年後には高崎まで全線開通。直江津駅の設置は、本州日本海側では敦賀に次ぐ 2 番目の早さ。

その後新潟方面や北陸方面の鉄路が開通し、直江津駅は日本海側と太平洋側をつなぐ重要な駅となる。　【下図・右表】

【主な鉄道の開業時期】

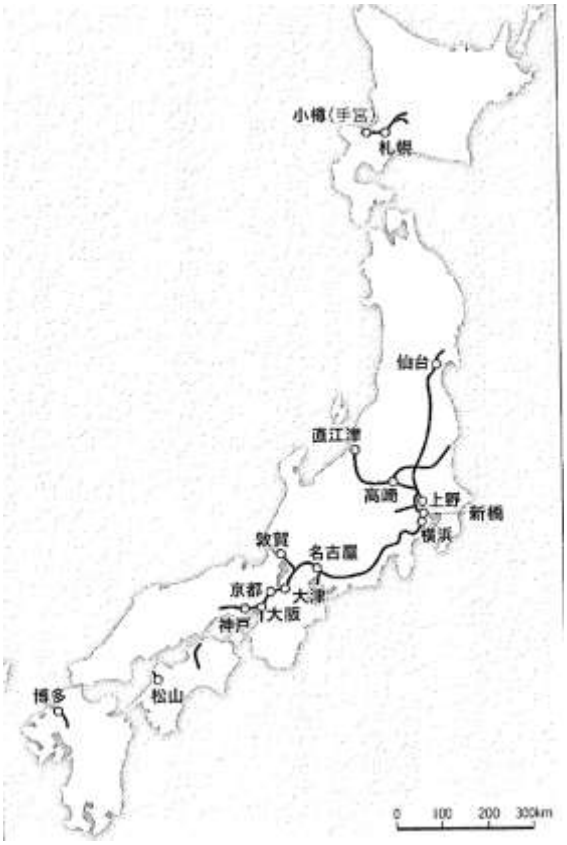
開業年	区間	備考
1872	東海道本線 （新橋～横浜）	日本初
1874	（大阪～神戸）	西日本初
1880	函館本線など （札幌～手宮）	北海道初 手宮は現在廃止
1882	北陸本線など （長浜～金ヶ崎） （敦賀港）	本州日本海側で最初 金ヶ崎は現在廃止
1884	高崎線 （上野～高崎）	高崎線全通
1886	信越本線 （直江津～関山）	軽井沢までは 1888 年開通
1889	東海道線 （新橋～神戸）	東海道線全通
1893	信越本線 （直江津～高崎）	信越本線全通 東京まで直結
1899	〃 （直江津～沼垂）	新潟までの全通は 1904 年
1911	北陸本線 （直江津～名立）	関西までの全通は 1913 年

出所）日本国有鉄道（1973）、老川慶喜（2014）をもとに作成

【参考文献など】

・日本国有鉄道（1973）：日本国有鉄道百年史別巻　国鉄歴史事典
・老川慶喜（2014）：日本鉄道史　幕末・明治編、中央公論新社

【1890 年当時の鉄道網】



出所）老川慶喜（2014）：日本鉄道史　幕末・明治編をもとに加筆修正

● 上越新幹線は新潟～大宮間が 1982 年開業、1991 年には東京まで全線開通する。

一方、北陸新幹線は 1997 年に東京～長野間、2015 年に長野～金沢間が開業した。

この結果、2 つの新幹線が近接し、使い分けることができる珍しい地域となった。

■ 港湾

● 直江津港は、室町時代に三津七湊（日本の十大港）の一つに数えられ、廻船の寄港地であった。

江戸時代には海産物や年貢米を運ぶ北前船が寄港し、直江津(今町)は港町として繁栄。

【三津七港（室町時代）】

出所）北陸地域づくり協議会：北陸の視座　vol.30

● 現在の直江津港は、全国 102 港ある重要港湾の一つ。佐渡航路のほか、かつては九州や北海道を結ぶフェリー航路もあった。韓国や中国への国際定期コンテナ航路が開設され、コンテナ取扱貨物量は全国 46 位（2015 年）。

国のＬＮＧ（液化天然ガス）部門の日本海側拠点港にも指定される。

「重要港湾」とは、昭和 26 年に港湾法に基づき指定されたもの。昭和 25 年に制定された港湾法により、日本全国の港湾は、重要港湾と地方港湾に分けられ、国益に重大な関係があるものが重要港湾として指定された。

「日本海側拠点港」とは、経済成長の著しい対岸諸国と地理的に近接する日本海岸港湾において、既存ストックを活用するなどして対岸諸国の経済発展を日本の成長に取り入れるとともに、災害に強い物流ネットワークの構築にも資することを目的として選定されたもの。

【参考文献など】

・上越市史編さん委員会（1991）：上越市史普及版、上越市、 282 頁
・国土交通省（2014）：日本海側拠点の取組状況について（報告）、第 57 回港湾分科会資料 1

【コンテナ取扱貨物量ランキング】
（国内主要港湾）

順位	種類 ※1	港湾名	所在地	コンテナ取扱量(個) ※2
1	◎	京浜【東京】	東京都	4,628,705
2	◎	京浜【横浜】	神奈川県	2,787,296
3	◎	阪神【神戸】	兵庫県	2,706,967
4	○	名古屋	愛知県	2,630,803
5	◎	阪神【大阪】	大阪府	2,221,827
6	○	博多	福岡県	940,946
7		那覇	沖縄県	523,004
8	○	清水	静岡県	506,965
9	○	北九州	福岡県	498,798
10	○	苫小牧	北海道	310,936
11	○	新潟	新潟県	230,195
		⋮		
45		今治	愛媛県	31,948
46		直江津	新潟県	30,056
47		茨城	茨城県	28,556
		⋮		

備考）
※1　国際戦略港湾（◎）、国際拠点港湾（○）、重要港湾、および地方港湾を選定。
※2　長さ 20 フィートのコンテナ 1 本を 1 個としてカウント（長さ 40 フィートのコンテナ 1 本を 2 個としてカウント）、TEU ともいう。
出所）国土交通省ホームページ統計情報をもとに作成

● 姫川港は、全国の地方港湾の中で唯一のリサイクルポートである。

「リサイクルポート」とは、リサイクル施設の立地等に対応した産業廃棄物の物流ネットワークの拠点となる港。

姫川港は、平成 15 年 4 月に地方港湾として唯一指定された。

【参考文献など】

・糸魚川市ホームページ

3　因果関係

※　番号は他のテーマ(01～20)との関係性、アルファベットは次の頁に補足説明があることを示す。

関東と北陸・関西を結ぶ位置関係

・信越本線は、もともと東京－大阪間を結ぶ線路が中山道（長野県）を経由する計画があり、その路線への物資輸送等を目的として早期に整備された。
・ほくほく線（北越急行）や北陸新幹線は、首都圏と北陸圏を短時間で結ぶ目的が整備の大きな推進力になったと考えられる。

急峻な地形に囲まれた存在　01

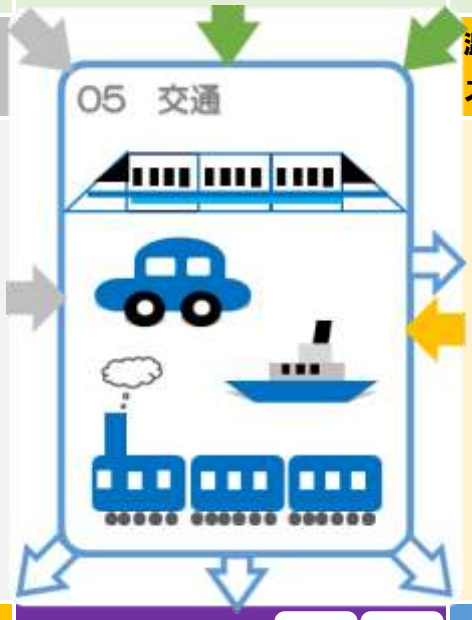
・上越市の位置は、関西・北陸や新潟・佐渡、東北を結ぶ日本海側の幹線上にある。
また、日本海側から内陸部や太平洋側へ向かうルートは地形や気候などの面から限定され、上越市から南下するルートは古くから重要な存在であった。
この結果、陸路の結節点が生まれた。

海や河川の存在　01

・大量の物資を運ぶ観点から、日本海に面し陸路の結節点を有する上越市（直江津港）では、港の開発や発展にもつながった。特に直江津港は北前船の寄港地の一つに。
・一定規模の河川に接する地域では、船による運送が発達。

政治家の存在

・越後国府、春日山城、高田城などの政治的拠点が古くから置かれ、まちと交通網の発達を相互に支えた。
・新幹線や高速道路の経路の一部は、田中角栄の政治力によるものとされる。



温泉地・スキー場の発達　15　16

・首都圏からの近接性や交通の利便性により、数多くの温泉地やスキー場の発展に貢献した。
・ウィンタースポーツの盛んな長野県は冬季オリンピックの開催地となり、1997 年に長野まで北陸新幹線が部分開業する契機となった。

様々な産業の発達

・明治時代には、この「地の利」と豊富なエネルギー資源との組み合わせにより、化学・金属関係の工場の進出や陸軍第 13 師団の誘致などが行われた。
・政治拠点や工場、師団の存在は、地域経済の基礎となり、それらに付随して生まれた様々な産業と共に人々の暮らしを支えた。
・それらの中には、老舗企業や城下町の雁木通りなどとして今日まで残り、まちの歴史・文化的価値を高めているものもある。

様々な信仰の伝播　18　19

・様々な信仰がこの地域に伝わる一因となった。具体的には、熊野信仰、白山信仰、浄土真宗、曹洞宗などが挙げられる。

ローカル鉄道の誕生　05

・長野電鉄は、地方都市の中で数少ない生活路線・観光路線として活躍する私鉄である。
・しなの鉄道やえちごトキめき鉄道は、新幹線開業後に誕生。長野新幹線以降の整備新幹線は、その沿線のＪＲを経営分離することが整備の前提条件であったため。
・ほくほく線は、北陸新幹線の開業に伴いローカル鉄道としての役割が強くなった。

4　解　説

要　約

この地域は、昔から道路、航路、鉄道などの主要幹線が通る場所であり、中でも上越地域はそれらの結節点となっています。近代以降は太平洋側の発展に伴い、かつてほど「地の利」による優位性は大きくなくなりましたが、それでも、現在も交通の結節点としての地位を保っているといえます。

また、上越新幹線と北陸新幹線が乗り入れ、その周囲に異なる会社による鉄道が多数存在する全国有数の地域でもあります。

上越市の位置は、関西・北陸や新潟・佐渡、東北を結ぶ日本海側の幹線上であり、地形や気候の関係で古くから日本海側から内陸部や太平洋側へ向かう重要なルートでもありました。このため、陸路の結節点が生まれました。さらに、大量の物資を運ぶ観点からは、日本海に面し陸路の結節点を有することで、港の開発や発展にもつながりました。

あわせて、上杉謙信をはじめ現在に至るまで、「地の利」を活かしてまちや交通網の発展に貢献した地元の先人たちの力により、交通の要衝として一定の地位を維持してきました。

このような「地の利」から生まれたヒト、モノ、カネ、情報の往来は、国府、春日山城、高田城などの政治的拠点、化学・金属関係の工場の進出や陸軍第 13 師団の誘致、それらに付随して生まれた老舗企業など様々な産業と合わせ、人々の暮らしを支え、まちの歴史・文化的価値を高めることにもつながりました。そして、これらは交通の要衝としての地位を支えることにもなりました。

地域資源としての捉え方

都市の発達要件には、ヒト、モノ、カネ、情報の接近性、結節性、創造性などが必要といわれます。この点で上越市は恵まれた地域でありましたが、その地位を維持してきた背景には、先人たちの努力の積み重ねがあったことがわかります。

一方、全国的に交通の利便性が向上し、移動時間の短縮が進んだ今日は、交通面の接近性だけでは結節性を持てない時代でもあります。また、交通の利便性と地域の求心力は“にわとりとたまご”のような関係でもあります。地の利から得られた交通の利便性を地域の求心力につなげ、その求心力をもって交通の利便性をさらに高める戦略、そのときに今ある価値を活かしながら、新しいまちの価値をどう作り出していくかという視点は、これからの地域づくりにおいて重要であると思います。

また、首都圏と北陸を結ぶ幹線交通、日本海沿線都市を結ぶ幹線交通という面に着目すると、この間度重なる経路変更がありましたが、この経路変更による影響はあまり波及しなかったようにも思います。裏を返せば、それらの鉄道を近距離輸送として活かしきれていないということであり、前向きにいえば発展の伸びしろがあると捉えることができるかもしれません。

【テーマに関する参考文献など】

・国土交通省ホームページ（道の歴史）
・児玉幸多（1992）：日本交通史、吉川弘文館
・老川慶喜（2014）：日本鉄道史　幕末・明治編、中央公論新社

06　米　（国内有数の米どころ）

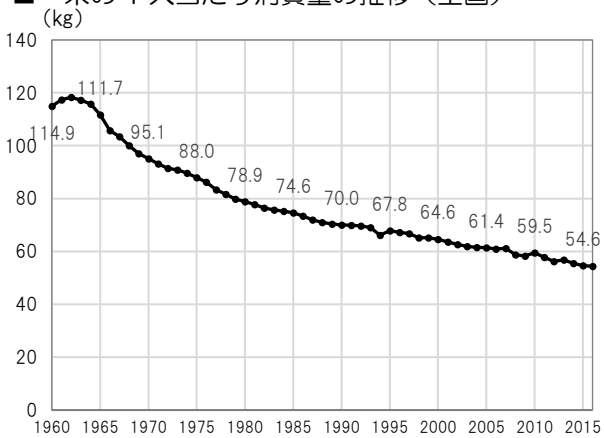
1　はじめに

稲作の起源は、最近の研究では中国の長江流域と考えられており、そこからインドやアジア各地へと広がりました。日本では、縄文時代後・晩期には水田稲作が始まっていた可能性が高く、弥生時代以降には、日本各地へと広がっていったといわれています。これに伴い、狩猟・採集中心の生活から農耕中心の生活に変化し、米は単に主食としてだけではなく、祭祀や経済活動とも深く結び付きながら、日本人にとって特別な存在であり続けてきました。また、各地でより多くの米を収穫するために、新田開発や品種改良などの努力が行われてきました。

新潟県で 1956 年に奨励品種に選定された「コシヒカリ」は、そのおいしさから多くの人に好まれ、日本各地で生産されるようになりました。また、新潟県は現在、米の作付面積・収量とも全国 1 位です。長野県は県全体では高冷地が多いため面積・収穫量は多くありませんが、10 アール当たりの収量及び一等米比率は全国トップレベルです。

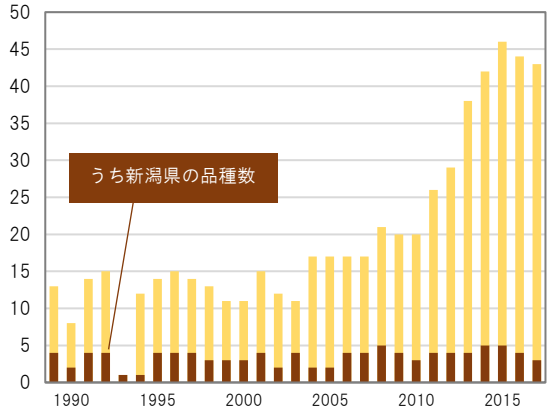
近年、食の多様化などに伴い、主食とされてきた米の消費量は年々減少し、減反政策をはじめ長らく国の規制や保護の下で進められてきた米の生産も、農業としての競争力強化に向けた取組がそれぞれの産地で求められています。こうした状況の中、気候にあった品種の開発により、おいしいお米が増えるなど、様々な取組が行われています。

■　米の 1 人当たり消費量の推移（全国）



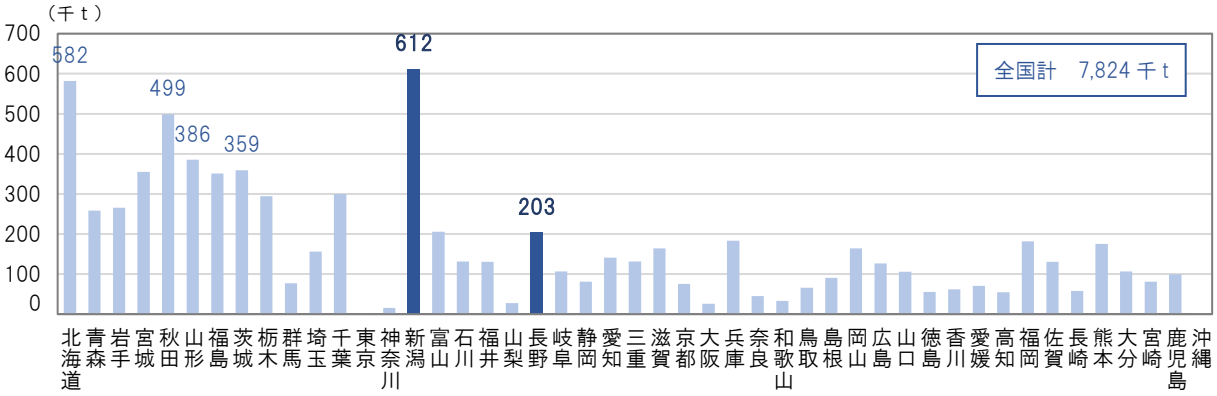
出所）農林水産省「食糧需給表」をもとに作成

■　食味ランキング特Ａの品種数の推移（全国）



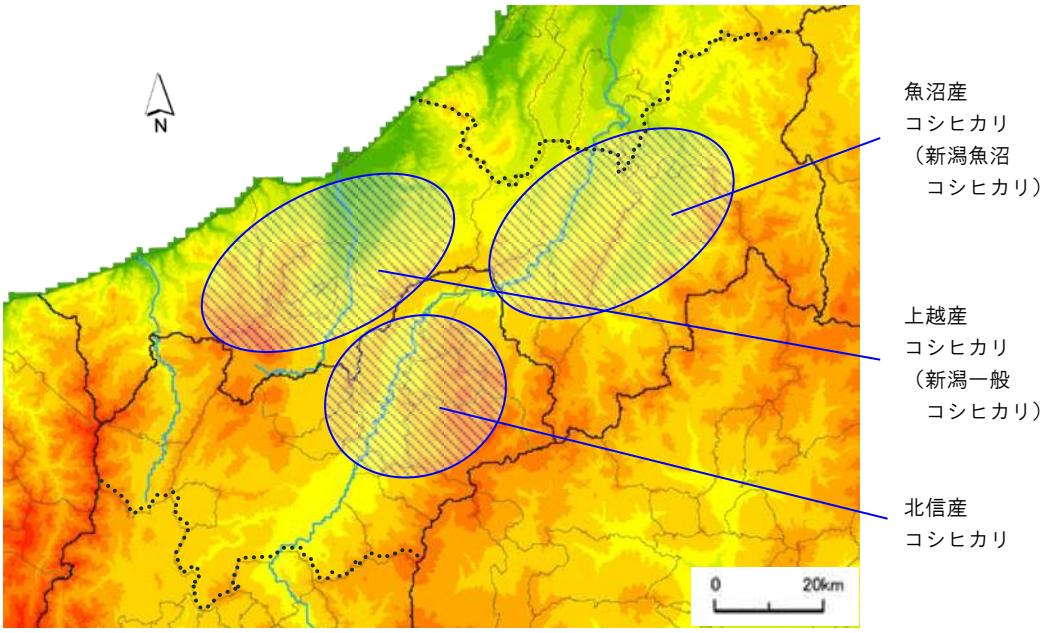
出所）日本穀物検定協会ホームページをもとに作成

■　米（水陸稲）の生産量（都道府県別・2017 年）



出所）農林水産省「作物統計」をもとに作成

2　特　徴



備考）信越県境付近にある市町村（破線で挟まれた地域）の範囲のみ表記
出所）国土地理院数値地図などをもとに作成

■　米の生産規模

- 水稲作付面積（2017 年）は新潟県が全国 1 位であり、全国市町村の中では上越市が 4 位に位置する。
- 水稲収穫量（2017 年）は新潟県が全国 1 位であり、全国市町村の中では上越市が 8 位に位置する。

【米の作付面積・収穫量ランキング】
（平成 29 年・都道府県別）

	作付面積		収穫量	
順	都道府県	単位：ha	都道府県	単位：t
1	新潟県	116,300	新潟県	611,700
2	北海道	103,900	北海道	581,800
3	秋田県	86,900	秋田県	498,800
4	茨城県	68,100	山形県	385,700
5	宮城県	66,300	茨城県	357,500
6	山形県	64,500	宮城県	354,700
7	福島県	64,000	福島県	351,400
8	栃木県	57,600	千葉県	299,700
9	千葉県	55,200	栃木県	293,800
10	岩手県	49,800	岩手県	265,400

出所）農林水産省「作物統計」をもとに作成

【米の作付面積ランキング】
（平成 29 年・全国市町村別）

順位	市町村	単位：ha
1	新潟市	24,300
2	大仙市	12,800
3	長岡市	12,600
4	上越市	11,100
5	鶴岡市	10,900
6	横手市	10,600
7	登米市	10,300
8	奥州市	10,200
9	大潟村	10,200
10	大崎市	10,000

【米の収穫量ランキング】
（平成 29 年・全国市町村別）

順位	市町村	単位：t
1	新潟市	133,700
2	大仙市	73,700
3	鶴岡市	64,300
4	長岡市	62,400
5	横手市	61,900
6	大潟村	60,900
7	登米市	58,800
8	上越市	57,500
9	奥州市	55,000
10	大崎市	54,900

出所）農林水産省「作物統計」をもとに作成

■ 米の品質

● 米の価格（2016 年産）をみると、新潟魚沼コシヒカリの価格は全国 1 位で最も高い。上越地方のお米が含まれる新潟一般コシヒカリの価格も全国 7 位である。

【米の価格ランキング】
（平成 28 年産・産地銘柄別）

順位	産地		品種銘柄	価格
1	新潟	魚沼	コシヒカリ	20,434
2	山形		つや姫	17,848
3	山梨		コシヒカリ	16,969
4	新潟	佐渡	コシヒカリ	16,968
5	新潟	岩船	コシヒカリ	16,834
6	北海道		ゆめぴりか	16,479
7	新潟	一般	コシヒカリ	16,175
8	熊本		コシヒカリ	15,767
9	福岡		夢つくし	15,761
10	福岡		元気つくし	15,612
・・・				
26	長野		コシヒカリ	14,538
	全銘柄	平均	－	14,307

備考）主食用 1 等米の玄米 60Kg 当たりの価格（円・税込）。全国の産地・銘柄数は 116。
出所）農林水産省「平成 28 年産米の相対取引価格」をもとに作成

● 一等米比率について

米の価格は、その銘柄のみならず、農林水産省が粒の形状などを検査して算出する「一等米比率」によっても影響を受ける。

一等米比率は、その年の天候の状況によっても左右されるが、一般的には東日本で高い傾向にある。

特に長野県産米の比率は高い傾向にあり、水稲うるち米の平成 29 年産で 96.5%（1 位）、平成 28 年産で 97.4%（2 位）となるなど、全国 1,2 を争っている。新潟県産米は、それぞれ 85.0%、84.8%であり、全国平均に比べて若干高い程度である。

【参考文献など】

・農林水産省（2019）：平成 29 年産米の農産物検査結果（確定値）
・農林水産省（2018）：平成 28 年産米の農産物検査結果（確定値）

● 米の食味ランキングをみると、新潟県魚沼産コシヒカリは 28 年連続、新潟県上越産コシヒカリは 5 年連続、長野県北信産コシヒカリは 4 年連続で特Ａを取得した記録を持つ。

近年特Ａの数は急増しているが、新潟県の魚沼産コシヒカリと上越産コシヒカリは、特Ａの数が 10 品前後の時代からの実績がある。

米の品質や美味しさを評価する指標はいくつかあるが、日本穀物検定協会が実施する「米の食味ランキング」は、実際に電気炊飯器で炊いて食べて決める食味試験であり、全国的に知られている。

近年では全国的に特Ａの米が増加し、平成 29 年産米では 151 産地品種のうち 43 品種が特Ａとなるなど、全国的に米の美味しさが向上し、産地間競争がより激しくなっている。

【参考文献など】

・日本穀物検定協会（2017）「特 A ランク一覧表」

● 米・食味分析鑑定コンクール・国際大会における過去 11 回から 20 回の総合部門金賞受賞者は 161 名。

このうち長野県の長野・北信地方と新潟県の魚沼地方から 37 名が受賞、全体の 2 割強を占める。

米・食味鑑定士協会が 2000（平成 12）年から行っているもの。現在、総出品数国内最大である 5,600 検体以上を誇り、お米では最大級の規模のコンクールへと成長。第 10 回から国際大会となり、受賞者は海外でも高い評価を得ている。

【米・食味分析鑑定コンクール国際大会
総合部門金賞受賞数の推移（最近 10 年間）】

回	全国	うち信越県境（内訳は市町村名）	
11	13	3	飯山 1、木島平 1、野沢温泉 1
12	13	2	野沢温泉 1、十日町 1
13	15	3	木島平 1、野沢温泉 1、長野 1
14	15	4	木島平 3、下高井郡 1
15	17	8	飯山 2、木島平 3、下高井郡 1、信濃 2
16	17	3	木島平 1、信濃 1、南魚沼 1
17	18	6	飯山 3、木島平 2、南魚沼 1
18	15	2	木島平 2
19	18	3	木島平 2、南魚沼 1
20	20	3	木島平 2、南魚沼 1
計	161	37	木島平 17、飯山 6、南魚沼 4 野沢温泉 3、信濃 3　など

備考）市町村名が不明の場合、郡名にて表記。
第 20 回は 2018 年に開催。
出所）米・食味鑑定士協会ホームページをもとに作成

■　優れた基盤整備の歴史

● 日本の棚田百選には、上越市の上船倉・蓮野、十日町市の狐塚、飯山市の福島新田などをはじめ、県境付近で 12 地区が選定されている。

日本棚田百選は、多面的機能を有している棚田について、その保全や保全のための整備活動を推進し、農業農村に対する理解を深めるため、農林水産省が優れた棚田 134 地区（117 市町村）の認定を行ったもの。

≪日本の棚田百選≫

順位	都道府県	選定数
1	長野県	16
2	熊本県、宮崎県	各 11
4	新潟県、島根県	各 7
6	佐賀県、長崎県、大分県	各 6
9	静岡県、岐阜県	各 5

都道府県	棚田名
長野県	福島新田（飯山市）、青鬼（白馬村）、栃倉、大西、田沢沖、慶師沖、根越沖、原田沖、塩本（以上長野市）、宇坪入（小諸市）、稲倉（上田市）、姫小沢、滝の沢（以上東御市）、よこね田んぼ（飯田市）、重太郎（大町市）、姥捨（更埴市）
新潟県	上船倉、蓮野（以上上越市）、狐塚（十日町市）、花坂、梨ノ木田、大開（以上柏崎市）、北五百川（三条市）

備考）下線は信越県境付近の市町村

【参考文献など】

・地域環境資源センターホームページ
http://www.acres.or.jp/

● 上越市の上江用水は、世界かんがい施設遺産に選定されている。

世界かんがい施設遺産は、かんがいの歴史・発展を明らかにし、理解醸成を図るとともに、かんがい施設の適切な保全に資するために、歴史的なかんがい施設を国際かんがい排水委員会（ＩＣＩＤ）が認定・登録する制度。平成 26 年に創設され、平成 30 年度現在、世界では 74 施設の登録があり、うち国内は 35 施設登録されている。

【国内の世界かんがい施設遺産】

※　登録年度順に記載

登録年度	登録数	名称（都道府県名）
H26	9	稲生川（青森県）、雄川堰（群馬県）、深良用水（静岡県）、七ヶ用水（石川県）、立梅用水（三重県）、狭山池（大阪府）、淡山疏水（兵庫県）、山田堰・堀川用水・水車群（福岡県）、通潤用水（熊本県）
27	4	上江用水路（新潟県上越市、妙高市）、曽代用水（岐阜県）、入鹿池（愛知県）、久米田池（大阪府）
28	14	照井堰用水（岩手県）、内川（宮城県）、安積疏水（福島県）、長野堰用水（群馬県）、村山六ヶ村堰疏水（山梨県）、滝之湯堰・大河原堰（長野県茅野市）、拾ヶ堰（長野県安曇野市、松本市）、源兵衛川（静岡県）、足羽川用水（福井県）、明治用水（愛知県）、南家城川口井水（三重県）、常盤湖（山口県）、満濃池（香川県）、幸野溝・百太郎溝水路群（熊本県）
29	4	土淵堰（青森県）、那須疏水（栃木県）、松原用水・牟呂用水（愛知県）、小田井用水路（和歌山県）
30	4	北楯大堰（山形県）、五郎兵衛用水（長野県佐久市）、大和川分水築留掛かり（大阪府）、白川流域かんがい用水群（熊本県）
計	35	

出所）全国水土里ネットホームページをもとに作成
http://www.inakajin.or.jp/jigyou/tabid/372/Default.aspx

【参考文献など】

・農林水産省ホームページ
http://www.maff.go.jp/j/press/nousin/kaigai/181218.html

● 上越市の青野池、坊ヶ池、朝日池は、農林水産省のため池百選に選定されている。

ため池百選は、農地を潤す水源として、また地域活性化の核として保全・活用される取り組みの機運を醸成するとともに、ため池の有する多様な役割と保全の必要性の理解を促す契機として、農林水産省により平成22年度に選定されたもの。農業の礎、歴史・文化・伝統、景観、生物多様性、地域とのかかわりにおいて、特に秀でた特徴を有しているものが選定された。

【参考文献など】

・農林水産省：ため池百選パンフレット

3　因果関係

※　番号は他のテーマ(01～20)との関係性、アルファベットは次の頁に補足説明があることを示す。

地すべりや河川が作り出した土壌　01

・農機具や土木技術などが発達していない時代には、地すべり地帯は米づくりに適した条件の土地でもあり、棚田が発達した。
・信濃川など河川の沖積によって形成された土地は、肥沃な土地でもある。

☞ a

雪国の気候　02

・山地に積もる雪は巨大なダムの役割を果たし、少しずつ融けて米づくりに必要な豊富な水を供給する。
・夏の高温・多照は、稲の生育に十分な温度と日照を提供。
・特に中山間地域では、昼夜の温度差が大きいことで、米のおいしさが増大する。

☞ b

用水・新田の開発

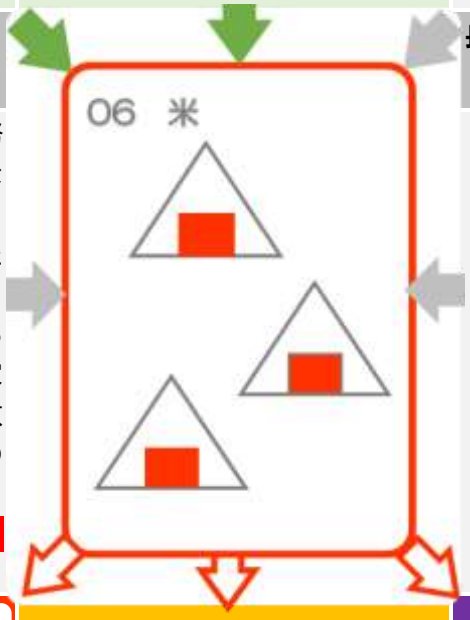
・江戸時代を中心とした用水・新田開発等により、平野での収穫量が増加した。

☞ c

新潟県における品種改良や栽培技術の向上

・品種改良や栽培技術の向上の努力により、根雪や長雨、冷害など気候上の不利な点を克服。
・新潟県の奨励品種に選定されたコシヒカリは、味が良い反面、病気に弱く倒れやすい品種であったが、栽培技術の向上や農家の努力、病気に強い品種への改良等により栽培され続け、米の食味が向上した。

☞ d



長野県における品種改良や栽培技術の向上

・冷涼な長野県での栽培は困難だったが、品種改良や県で開発した低温時にも育苗できる保温折衷苗代、箱育苗技術などの栽培技術の向上により、県下全域で安定した栽培が可能となった。

日本酒や味噌づくりの発達　11　13

・米を原料とする日本酒の酒蔵数は、全国有数の規模を誇る。
・味噌は全国有数の味と生産量を誇る。上越地域では、良質の米を使った「浮き麹味噌」の評価が高い。
・米生産が盛んであった上越市には、かつて県内米菓工場の始まりとなる工場が立地した。

☞ e

農機具工業の発達

・米生産が盛んであった上越市では、農機具の需要が高く、かつては農機具生産で全国有数の規模を誇った。

☞ f

地域の行事や信仰の伝播　18

・各地で水田耕作に関連する農耕儀礼を含む行事が行われるようになった。
・米づくりを中心とする生活様式は、山神信仰、諏訪信仰、曹洞宗、浄土真宗などといった信仰がこの地に広まったことの一因と考えられる。

【補足説明】

a　地すべりや河川が作り出した土壌

地すべりによって攪拌された土地や地すべり面に沿って流れくだる地下水などは、米づくりに適した自然環境を生み出したとされる。

【参考文献など】

・フォッサマグナミュージアム（2006）：フォッサマグナってなんだろう、46 頁
・諸橋準之助編（1996）：新潟の米ものがたり、新潟日報事業者出版部、26 頁

b　雪国の気候

冬の雪は山間部中心に厚い積雪層となって巨大なダムの役割を果たしており、この雪が少しずつ解け出して稲作期間に豊富な水を供給している。

近年の気候の変動はあるものの、新潟県は稲が熟すのに最適な平均気温であると長年されてきた。また、昼夜の温度差が大きいことで、昼間に蓄えられたでんぷんが夜間に消耗されず、充実した米粒になるといわれている。

【参考文献など】

・諸橋準之助編（1996）：新潟の米ものがたり、新潟日報事業者出版部、24、26、65 頁
・長野県農業改良協会（1986）：米づくりへの誘い、36 頁
・長野県ホームページ(知ってる？信州農産物)
・青野嘉郎（1972）：日本地誌第 11 巻長野県・山梨県・静岡県、二宮書店、85 頁

c　用水・新田開発

上越地域の新田開発は、高田藩　松平光長の時代（1624～81 年）に盛んに行われた。また中世から近世にかけても多くの用水路が開発された。

例えば、中江用水は、高田藩家老小栗美作の指揮のもと、当時の農業土木工事としては最大級の約 26 ㎞の越後第一の用水路を完成させ、およそ 107 か村の田んぼが水不足から解放された。また、上江用水は、多くの農民の努力と資金でおよそ 400 年前から 130 年かけ掘り継がれた用水で、これほど地形が悪い場所を通り、山をくり貫き、川の下を通す難工事の箇所が多い水路で、全長 26 ㎞もの大規模な用水は全国的にも珍しいと言われている。

北信地方では、昔は飯山盆地・延徳沖など湿田が多く、田植え、イネ刈りは腰までつかるほどであったが、灌排水工事が進み、区画整理によって、単収の向上とともに作柄が安定し、稲作転換によって、果樹・アスパラガスなどが栽培されるようにもなった。

【参考文献など】

・上越市史 160、184 頁
・水土里ネット関川水系発行：悠久の恩人「小栗美作」と中江用水の恵み
・水土里ネット関川水系管理、新潟県発行：世界かんがい施設遺産　上江用水路
・新潟県上越地方の地誌、88 頁
・長野県農業改良協会（1986）：米づくりへの誘い、39-40 頁

d　品種改良や栽培技術の向上

（新潟県）

昭和 19（1944）年に新潟県農業試験場で、「農林 22 号」と「農林 1 号」がかけあわされ、その子孫の中から有望な系統が育てられた。そのうちの一部が福井県の農業試験場へ移され、昭和 28 年に「越南 1 号」という品種ができた。これが再び新潟県へ戻り、昭和 31 年に「コシヒカリ」と名づけられ、全国に先駆けて新潟県で奨励品種となった。倒れやすくいもち病に弱い点が大変の試験地から指摘されていたが、当時の農業試験場長は「栽培法でカバーできる欠陥は致命的欠陥にあらず」と判断し、採用された。

【参考文献など】

・新潟県ホームページ（新潟のお米Ｑ＆Ａ）
・農林水産省（1994）：北陸農試　試験研究のあゆみ 50 年、36 頁
・新潟県（1974）：新潟の米百年史、５頁

（長野県）

長野県において、戦後における代表的な農法改革には保温折衷苗代と室内育苗があげられている。室内育苗は、積雪地である飯山試験場において仮植育苗技術として開発され、ほぼ 10 年後に普及に移した。保温折衷苗代は全国的に普及し、早植え栽培法として日本の戦後の収量増加、安定に貢献した。

特に長野は標高差が大きく、気象・土性・地勢など、自然的条件が複雑なため、それらに対応して、県の奨励品種が 20 種類もあり、全国一多いともいわれている。

長野県の良質米産地としては、飯山の木島米と佐久の五郎兵衛米が名をあげているが、単なる自然条件によるものではなく、かつて他の地域で味の悪い品種をつくっていた時期に、質の良い米を作り続け、その味を売り込んだ結果ともいわれている。

【参考文献など】

・長野県ホームページ(知ってる？信州農産物)
・長野県農業関係試験研究一世紀記念事業実行委員会（1998）：長野県農業試験研究一世紀記念誌、40 頁
・長野県農業試験場ホームページ（農業試験場の沿革）
・長野県農業改良協会（1986）：米づくりへの誘い、36・140・142 頁
・関東農政局（1987）：長野県の稲作（市町村別累年統計）、長野農林統計協会、5 頁

e 日本酒や味噌づくりの発達

県内米菓生産の始まりとなった関野米菓は、現在廃業となっているが、新潟県全体としては米菓生産日本一に成長している。

【参考文献など】

・上越市史編さん委員会（2004）：上越市史 5 近代、298 頁
・赤羽孝之・西山耕一（1990）：地方工業の研究－新潟県上越地方を中心として、山越企工、187 頁

f 農機具工業の発達

上越市の農機具メーカーによる製品は定評が高く、かつて全国で有数の生産量を誇った時期もあった。当時の主なメーカーには、佐藤製作所（明治 43 年創業、平成 18 年操業停止）、大島農機（大正 6 年創業）、篠宮農機（大正 12 年創業、昭和 63 年操業停止）がある。

【参考文献など】

・新潟県社会科教育研究会（1978）：新潟県上越地方の地誌、48 頁

4　解　説

要　約

信越県境地域は、平野部では用水・新田開発等により広大な水田地帯が広がり、国内有数の栽培面積や収穫量を誇っています。また、中山間地域を中心に、全国的に有名な魚沼産コシヒカリをはじめ、同じ豪雪地帯である信越県境地域にはそれに匹敵する米の産地が集積しており、質・量ともに米どころといえます。

信越県境地域の山地に積もる雪は、巨大なダムの役割を果たしており、この雪が少しずつ融けて米づくりに欠かせない豊富な水を供給します。

夏は高温・多照であり、稲が育つのに十分な温度と日照があります。特に中山間地域では昼夜の温度差が大きいことで、米のおいしさが増します。ただし、根雪や長雨、冷害など、米づくりに不利な点を克服するための品種改良や栽培技術の向上など努力の上に成り立ったものでもあります。

農機具や土木技術などが発達していない時代には、地すべり地帯は、米づくりに適した条件の土地でもありました。特に地すべり地帯が多い上越・長野・北信地域には棚田が集中しています。また、信濃川など河川の沖積によって形成された土地は、肥沃でもあります。

収穫量の多さは、かつての用水・新田開発などにより、一面に田んぼが広がったことが背景にあります。

また、米の食味については、1956 年に新潟県の奨励品種として選定されたコシヒカリの誕生も大きく影響しています。

米を原料とした日本酒の酒蔵数は、全国有数の数を誇り、味噌については質・量とも全国有数となっています。

また、明治時代、上越市での農機具生産は全国でも有数の規模を誇っていたほか、県内米菓工業の始まりとなる工場が立地していました。

そのほか、米づくりにまつわる祭り、風習が数多く見られます。

地域資源としての捉え方

米はこの地域のブランド産品の一つであり、経済商品としての意味合いにとどまらず、地域そのものへの愛着・誇りや発信につながる地域資源です。このブランドを守り育むことにこだわるプロセス自体が、地域づくりそのものと考えることもできます。

持続可能な地域づくりの観点からは、地域そのものの価値やそれを生み出すストーリー、暮らしぶりなどが問われる時代となっています。近年、米生産では、農業としての競争力強化に向けた取組がそれぞれの産地で求められていますが、その取組として生産の効率化や拡大だけにとどまらず、米どころを作り上げた風土、発展した技術や暮らしぶりなども含め、まちのストーリーとして意識的に磨き、未来につなげていくことも大切と考えます。

【テーマに関する参考文献など】

※　特に参考とした文献には●を付しました。

（総論）
●農林水産省ホームページ（特集１　米）
・農林水産省監修（1984）：日本の稲作、地球社、1-33 頁
・農林水産省（2018）：米をめぐる関係資料
・農林水産省：平成 28 年産米の農産物検査結果（確定値）

（新潟県）
●新潟県農林部（1974）：新潟の米百年史
●新潟県（1982）：「新潟米」50 年のあゆみ
●諸橋準之助（1996）：新潟の米ものがたり、新潟日報事業社出版部
・新潟県ホームページ（こしひかりの軌跡、にいがたのお米Ｑ＆Ａ）
http://www.pref.niigata.lg.jp/nosanengei/
・新潟文化物語ホームページ（file27　新潟のおいしいお米）
https://n-story.jp/topic/27/page1.php
・妙高市観光協会ホームページ
http://www.myoko.tv/fascination/arai

（長野県）
・岩戸貞彦（2009）：北信濃近世・近代の水と山、ほおずき書籍、
・木村和弘（2004）：信州発　棚田考、ほおずき書籍
・木村和弘（2009）：信州発　続棚田考、ほおずき書籍
・小松芳郎（1994）：長野県の農業日記　明治・大正・昭和の記録、郷土出版社
・長野市誌編さん委員会（2001）：長野市誌第 3 巻　歴史編近世 1、長野市
・長野市誌編さん委員会（1997）：長野市誌第 5 巻　歴史編近代 1、長野市
・長野市誌編さん委員会（2000）：長野市誌第 6 巻　歴史編近代 2、長野市
・長野市誌編さん委員会（1997）：長野市誌第 8 巻　旧市町村誌編、長野市
・関東農政局長野統計情報事務所 編（1987）：長野県の稲作（市町村別累年統計）、長野農林統計協会
●長野県農業改良協会（1994）：米づくりへの誘い
●長野県農業関係試験研究一世紀記念事業実行委員会（1998）：長野県農業試験研究一世紀記念誌、長野県
・長野県ホームページ（知ってる？信州農産物）
https://www.pref.nagano.lg.jp/nosei/sangyo/nogyo/shinshu/index.html
・長野県ホームページ（長野県のお米情報）
https://www.pref.nagano.lg.jp/nogi/sangyo/nogyo/okome/index.html
・ＪＡながのホームページ（JA ながのがおいしい理由）
https://www.ja-nagano.iijan.or.jp/products/oishii/
・長野県農業関係試験場ホームページ　https://www.agries-nagano.jp/
・ながの食農教育情報プラザホームページ（長野県農業の特徴）
https://www.iijan.or.jp/shokunounet/tokusan/tokusan01.html
・信州いいやま観光局ホームページ　http://www.iiyama-ouendan.net/food/f-products/rice/

07　そ　ば　（つなぎの多様なそばが集積）

1　はじめに

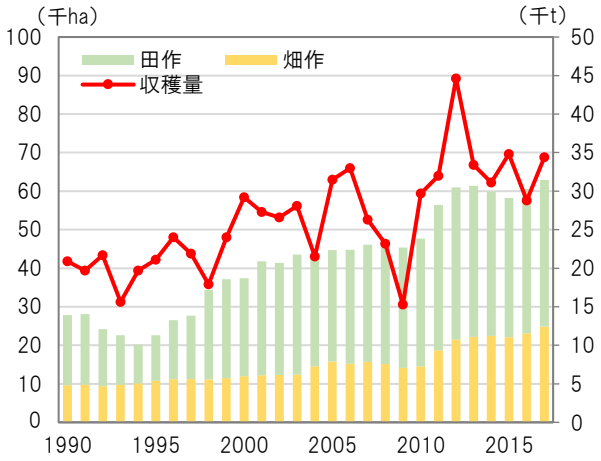
蕎麦は、縄文時代から栽培されていたと考えられており、収穫までの日数が短いことや、乾燥に強いなどの特性から、米などが収穫できない場合の救荒作物として、幅広い地域で栽培されてきました。

そば粉に熱湯を注いで作る蕎麦がきは、最も古くからあったものといわれ、朝食や携帯食としてのそば焼餅などは、山村でよく食べられていました。

ざるそばやかけそばのような麺の形状である「そば切り」が誕生したのは、戦国時代から江戸時代初期にかけてです。一説では、信州が誕生の地であったともされています [1)]。

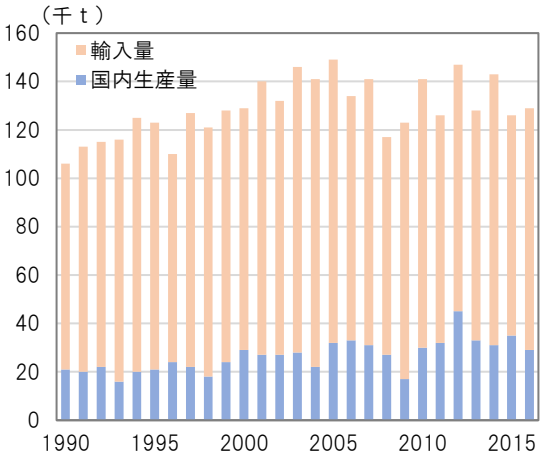
近年の蕎麦の需要は 12 万～14 万ｔ程度で推移しており、そのうちの約 3 万ｔが国内の蕎麦で賄われています。麺、菓子の原料としてのみならず、焼酎やお茶の原料などとしても利用されています。

■　そばの作付面積と収穫量の推移（全国）



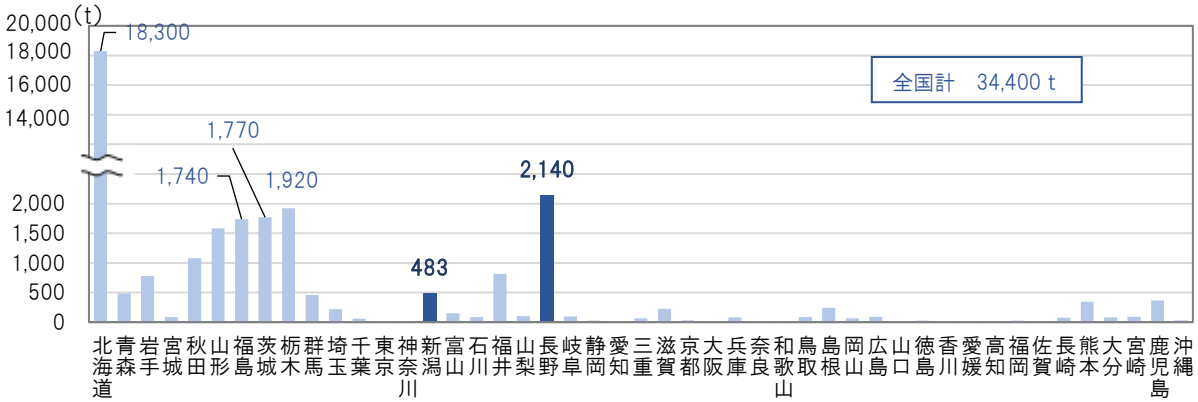
出所）北海道庁「麦類・豆類・雑穀便覧」をもとに作成

■　そばの供給量の推移（全国）



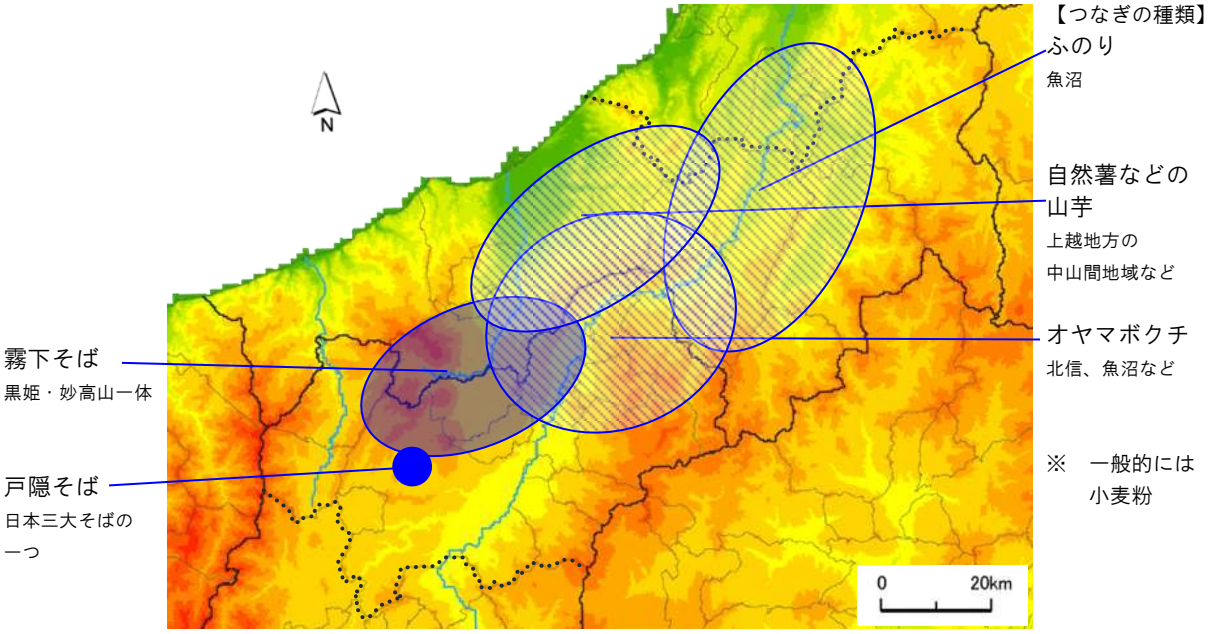
出所）北海道庁「麦類・豆類・雑穀便覧」をもとに作成

■　そばの収穫量（都道府県別・2017 年）



出所）農林水産省「作物統計」をもとに作成

2　特　徴



備考）信越県境付近にある市町村（破線で挟まれた地域）の範囲のみ表記
出所）国土地理院数値地図などをもとに作成

参考　1）蕎麦の歴史について

成瀬（2012）によれば、「そば切り」の起源はそれほどはっきりしていない。16 世紀後半の臨済宗の寺の文献によると、日本に「そば切り」が誕生したのは信州であったとされるが、甲州とする説もある。「そば切り」は江戸時代に創作されたという説もある。

【参考文献など】

・市川健夫先生著作集刊行会（2010）：日本列島の風土と文化第 4 巻　日本農業と食文化、第一企画、183・185・191 頁
・成瀬宇平（2012）：47 都道府県　こなもの食文化百科、丸善出版、48 頁
・長野県立歴史館（2001）：信濃の風土と歴史⑦食　－とる・つくる・たべる－

■　小麦粉をつなぎに使う著名なそば(戸隠)

● 戸隠そばは、岩手県のわんこそば、島根県の出雲そばとならび、日本三大そばの一つといわれる。

● 竹ザルに小さな玉状に持った「ボッチ盛り」と大根との組み合わせが特徴。

【参考文献など】

・一社全麺協ホームページ（全国の郷土そば・戸隠そば）
・岸朝子監修(2011)：日本各地の味を楽しむ　食の地図、帝国書院

■　オヤマボクチをつなぎに使う幻のそば

● オヤマボクチ（山ゴボウ）の葉の繊維をつなぎに使った蕎麦であり、北信地域に多く見られるほか、新潟県の一部にも見られる。

オヤマボクチのつなぎを使う蕎麦は、かつては各地にあったとされるが、現存するのはこのあたりだけではないかともいわれる。

● 富倉そば（飯山市）、須賀川そば（山ノ内町）、名水火口そば（木島平村）などがある中で、特に富倉そばは、そば好きの間で「幻のそば」といわれたこともある。

【参考文献など】

・金子万平（2004）：信州そば紀行、信濃毎日新聞社、27 頁
・木島平村ホームページ
http://www.vill.kijimadaira.lg.jp/articles/2013022000413/

■ ふのりをつなぎに使う「へぎそば」

● 海藻の一種である「ふのり」をつなぎに使う「へぎそば」は、十日町・魚沼地域に多く見られる。ふのりのつなぎを使う蕎麦は、全国的にも１，２程度の珍しさではないかとされる。

● うすく剥いだ木で作った特徴的な器であるへぎに、一口大に丸めて盛り付けるのが特徴的。

● 十日町周辺では薬味に「辛子」を使うが、これは山葵の入手が難しかったことに由来しているともいわれている。

【参考文献など】

・本間伸夫（2010）：食は新潟にあり、新潟日報事業社、22-23、263頁
・福原耕（2017）：蕎麦の旅人、文芸社、99 頁
・成瀬宇平（2013）：47 都道府県　伝統調味料百科、丸善出版、124-129 頁
・十日町市観光協会ホームページ
http://www.tokamachishikankou.jp/jimu-tsu/14286/
・クロステン十日町ホームページ
http://cross10-shop.net/?mode=f6
・小嶋屋ホームページ
http://www.kojimaya.co.jp/kodawari/

■ 自然薯や山芋をつなぎに使うそば

● 魚沼と上越地域（中山間地域）では、つなぎに自然薯のとろろなどを使用する蕎麦が多い。

【参考文献など】

・本間伸夫（2010）：食は新潟にあり、新潟日報事業社、21頁

■ つなぎを使わない十割蕎麦

● つなぎを使わない十割そばも各地で見られる。信濃町（柏原）では伝統食。

柏原地区では、古くから一般的に十割そばがあったとされ、雪が深く小麦がなかった地方の苦肉の手法であったのではとも考えられている。長野県では木曾地方の開田村でも同様の例がある。最近では都会の蕎麦屋でも十割そばが作られるが、これは製粉技術の進歩によるものともいわれる。

【参考文献など】

・金子万平（2004）：信州そば紀行、信濃毎日新聞社、27 頁

■ その他（霧下そば・早蕎麦）

● 黒姫・妙高山一体は、古くから霧下地帯の良質なそばの産地とされ、「霧下そば」などとも呼ばれてきた。

「霧下」は、高山の裾をめぐる地帯で、絶えず雲霧が低迷する蕎麦の産地を指すものであり、黒姫・妙高山一体が本場であるともいわれている。「霧下蕎麦粉」は、商標登録されている。

【参考文献など】

・金子万平（2004）：信州そば紀行、信濃毎日新聞社、27 頁

● 秋山郷や山ノ内町須賀川でつくられる「早蕎麦」は、全国的に見ても珍しいといわれる。

秋山郷の早蕎麦は、ダイコンを細長く刻んでゆで、それを醤油とだしで味付けをし、その中にそば粉を入れてかきまわすと出来上がるものであり、一種の救荒食であった。

【参考文献など】

・市川健夫先生著作集刊行会（2010）：日本列島の風土と文化第4巻　日本農業と食文化、第一企画、192頁
・栄村秋山郷観光協会ホームページ
http://sakae-akiyamago.com/
・山ノ内町ホームページ
http://www.town.yamanouchi.nagano.jp/michinoeki/gurume.html

3　因果関係

※　番号は他のテーマ(01～20)との関係性、アルファベットは次の頁に補足説明があることを示す。

中山間地域の地質　01

・蕎麦の栽培は火山灰土でやせた地が適している。
・米が多く採れない地域では、蕎麦が大切な食糧であり、何代にもわたる蕎麦打ちの伝統が受け継がれてきた。

☞ a

中山間地域の寒暖の差　02

・中山間地域を中心に、寒暖の差があり、霧が発生する冷涼な気候が蕎麦栽培に適した。

☞ a

中山間地域の植生　03

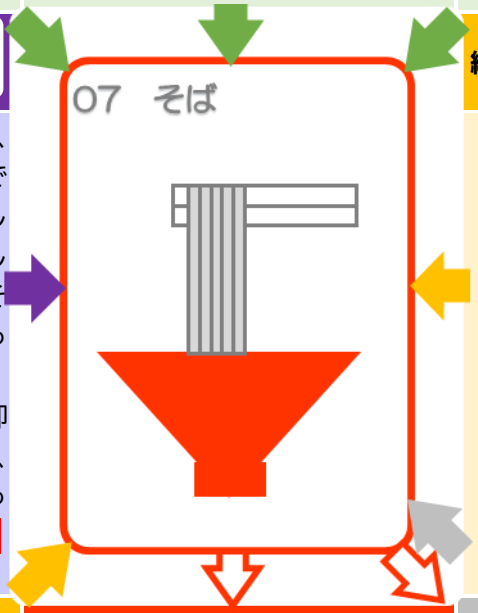
・全国的には小麦をつなぎに使う蕎麦が一般的だが、小麦も採れない地域では、自生する山芋・自然薯、オヤマボクチなどをソバのつなぎに使った。

☞ a

信仰を目的とした旅人の増加　18　19

・江戸時代、街道の宿場や城下町、善光寺の門前にできた食事所では、蕎麦切りが手軽な食事として提供され、旅人を通して「しなのそば・祢ざ免（ねざめ）そば」などと呼ばれ諸国へ広まった。
・戸隠では、蕎麦切りは戸隠信仰の信者に提供され、明治以降は、発達した戸隠講の人たちによって評判が広まった。

☞ b



織物産業の影響　14

・魚沼地方は越後縮の産地であったため、中山間地域にもかかわらず織物で使うフノリがつなぎに使われたといわれている。
・長野県全体では養蚕が盛んだったが、戸隠・飯縄山麓は高冷地のため麻栽培が盛んであり、麻（大麻）の収穫後に生育期間の短い秋蕎麦が作付され、結果として蕎麦生産が多くなった。

☞ c

観光地としての発達

・戸隠は、1964 年の戸隠バードライン開通などによって観光地として定着する中で、蕎麦屋も増加した。
・そばの全国的な知名度があがることで、そば自体が訪れる目的となり、観光客の更なる増加につながった側面もある。

☞ d

そばを用いた商品開発

・蕎麦饅頭、蕎麦落雁、蕎麦焼酎などの生産、企業による蕎麦茶の生産や蕎麦殻枕の生産、洋風料理への応用など、様々な商品開発が行われ、多彩なそば文化の発展につながっている。

☞ e

健康への貢献

・蕎麦の産地である長野県は長寿県として有名。
・近年の研究で、蕎麦にはルチンをはじめ様々な栄養素が含まれることがわかり、健康食品として再評価を受けるようになった。

☞ e

【補足説明】

a　中山間地域の地質、寒暖の差、植生

信州のソバの特産地には、秋山郷、飯山市富倉、信濃町柏原、戸隠村・鬼無里村（現長野市）、小川村、美麻村（現大町市）、安曇村番所原・奈川村（現松本市）、関田村（現木曽村）、遠山郷、川上村などの山村がある。これら地域は、夏でも霧が深く、日照時間の少ない、稲作に向かないところで、火山灰土で痩せ地が多いとされる。

秋山郷、飯山市富倉、鬼無里村日影、北小川地区などでは、小麦ができない深雪地帯であり、つなぎにヤマゴボウを使ったのは生活の知恵ともいわれている。

【参考文献など】

・市川健夫先生著作集刊行会：日本農業と食文化、第一企画、184頁
・農林水産省（2007）：農山漁村の郷土料理百選
・斎藤功 ・ 石井英也 ・ 岩田修二 編（2009）：日本の地誌 6、朝倉書店、83・368 頁
・今村龍夫（1986）：信濃の食文化　ナウマン象狩りから長寿県まで、共立プラニング、222頁

b　信仰との関係

【参考文献など】

・長野県立歴史館（2001）：信濃の風土と歴史⑦食　ーとる・つくる・たべるー
・金子万平（2004）：信州そば紀行、信濃毎日新聞社

c　織物産業との関係

魚沼地方のフノリのつなぎは、一般的に織物産地で使われていたものの応用とされているが、蕎麦の手作りとフノリを使う家事が結びついた可能性も指摘されている。

戸隠・飯縄山麓は、高冷地のため養蚕ではなく第2次世界大戦まで大麻の栽培が盛んであり、栃木県に次ぐ生産地であった。大麻の栽培地域では、収穫後に生育期間の短い秋そばが作付されることから、そばの生産が多くなったといわれている。

【参考文献など】

・本間伸夫（2010）：食は新潟にあり、新潟日報事業社、20頁
・青野 壽郎・尾留川 正平（1972）：日本地誌第11巻、二宮書店、91頁
・市川健夫先生著作集刊行会（2010）：日本列島の風土と文化第4巻 日本農業と食文化、第一企画、165-167頁

d　観光地との関係

【参考文献など】

・金子万平（2004）：信州そば紀行、信濃毎日新聞社

e　商品開発・健康への貢献

【参考文献など】

・市川健夫（2000）：信州　蕎麦学のすすめ、オフィスエム、142頁

4　解　説

要　約

信越県境地域は、古くから黒姫・妙高山一帯が良質なそばの産地とされ、全国的にも有名な戸隠そばもあります。また、全国的にみても珍しいフノリやオヤマボクチのほか、自然薯・山芋、小麦など、多様な“つなぎ”を用いたそばが、狭い範囲に集積している地域でもあります。

豪雪地帯で米が多く採れない地域では、蕎麦が大切な食糧で、何代にもわたる蕎麦打ちの伝統が受け継がれてきました。つなぎとなる小麦が採れないほど雪深い地域もあり、フノリ、山芋・自然薯、オヤマボクチを蕎麦に使うのは伝統の知恵ともいえます。

また蕎麦は、寒暖の差があり、霧が発生する冷涼な気候のものがおいしいとされており、信越県境地域の山間部では蕎麦に適した地域が多くありました。

戸隠・飯縄山麓は高冷地のため養蚕用の桑ではなく麻（大麻）栽培が盛んであり、麻の収穫後に蕎麦が作付され栽培面積が増えました。

また、善光寺や戸隠周辺では、信仰や観光地として人が訪れることに伴い、蕎麦の知名度が上がっていきました。

そばは麺に留まらず、蕎麦饅頭、蕎麦落雁、蕎麦焼酎などの生産、企業による蕎麦茶の生産や蕎麦殻枕の生産、洋風料理への応用など、多彩なそば文化の発展につながっています。近年では、蕎麦にはいろいろな栄養素が含まれることがわかり、健康食品として高い評価を受けるようになっています。そばの産地である長野県は長寿県として有名でもあります。

また､そばの全国的な知名度があがることで、そば自体が訪れる目的となり、観光客の更なる増加にもつながっています。

地域資源としての捉え方

かつて蕎麦は、中山間地域で生活するための重要な食であり、気候的な制約で食べざるを得なかったという側面も強くありました｡しかし、一方で、その土地ならではの産物として評判が広がることで、現在でも観光やまちづくりで重要な資源となり、健康志向の中で注目される食品ともなっています。

当たり前にある地域の資源を、別の視点で捉えなおすことは、地域に対する誇りや地域づくりにとって重要であると考えます。

【テーマに関する参考文献など】

※　特に参考とした文献には●を付しました。

（そば全般）
・農林水産省（2015）：そばおよびなたねをめぐる状況について
・髙橋貴與嗣（2011）：特集そば総論　そばをめぐる情勢、特産種苗第10号、日本特産農作物種苗協会
・鈴木啓之（2005）：そばの歴史を旅する、柴田書店
・市川健夫先生著作集刊行会（2010）：日本列島の風土と文化第４巻 日本農業と食文化、第一企画
・日穀製粉ホームページ（そば辞典）https://www.nikkoku.co.jp/entertainment/sobajiten/
・一社全麺協　　http://www.zenmenkyo.com/attraction.html#title01

（新潟県）
・須貝重一（1998）：決定版　新潟のそばどころ、新潟日報事業社
●本間伸夫（2010）：食は新潟にあり、新潟日報事業社

（長野県）
・中田敬三（1998）：物語・信州そば事典、郷土出版社
●市川健夫（2000）：信州　蕎麦学のすすめ、オフィスエム
●長野県立歴史館（2001）：信濃の風土と歴史⑦　食　－とる・つくる・たべる－
・金子万平（2002）：信州そば　ちょっとおいしい話、（株）中央プリント
●金子万平（2004）：信州そば紀行、信濃毎日新聞社
・松橋鉄次郎（2012）：信州そば凸凹発展物語、ほおずき書籍
・福原耕（2017）：蕎麦の旅人、文芸社
・長野県ホームページ（長野県のそばについて）
https://www.pref.nagano.lg.jp/nogi/sangyo/nogyo/okome/soba.html

08　おやき　（多様なおやき類の生産地）

1　はじめに

おやきをはじめとする「こなもの」は、かつては全国各地で作られており、地域により、やきもち、あんぼ、ちゃのこなど、様々な呼ばれ方もしています。

おやきの起源は、もともと室町時代のお菓子や戦国時代のせんべいなどにさかのぼるともいわれ、縄文時代にはおやきの原型ともいえる加工食品がすでにつくられていたともいわれています。

こねる材料は、雑穀、そば、小麦、くず米などがあり、その中に野菜、山菜、餡などを包み、焼く、蒸かす、焼いて蒸かす、揚げるなど、各土地ならではの材料や方法でつくられています。

稲作以外の農業を中心とする地域において、合理的に栄養を摂取できる食べ物としてつくられてきましたが、戦後の経済成長や食生活、生活様式の変化に伴い、そのほとんどが作られなくなりました。その中で「おやきといえば信州の郷土食」というまでのイメージが確立されています [1)]。

1）例えば、文化庁（2017）は、都道府県教育委員会と市町村教育委員会を通じて収集した郷土食の情報を整理してリスト化し、これをもとに 50 件の郷土食を選定しているが、「焼き餅（おやき）」またはそれに類する郷土食が挙げられているのは長野県だけである。

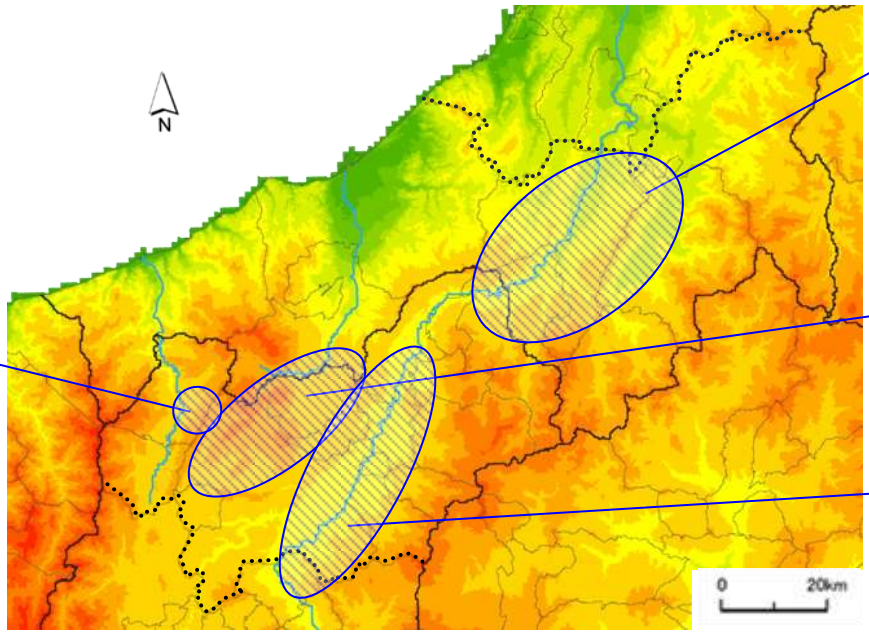
【参考文献】文化庁（2017）：平成 28 年度伝統的生活文化実態調査事業報告書（郷土食）

■　全国にあったおやき　（大正 10 年頃及び昭和 19 年の資料による）

出所）金子萬平「おやき・焼餅の話」

2　特　徴

【生産地の分布】



あんぼが中心
秋山郷（津南町・栄村）、十日町・魚沼地域、上越地域（中山間）など

ちゃのこ（馬鈴薯入り）
小谷村など

焼くおやきが中心
長野県西山地方（西部・北部、小川村など）

蒸かすおやきが中心
長野県善光寺平周辺

備考）信越県境付近にある市町村（破線で挟まれた地域）の範囲のみ表記
出所）国土地理院数値地図などをもとに作成

【おやきの種類の紹介例】

出所）ながの「四季の彩」実行委員会パンフレット

■　雑穀をこねて焼くおやき

- 山間部の長野県西山地方（長野市西部・北部、小川村など）では、雑穀をこねて野菜を包み、いろりの火と灰で焼くおやきが主流であり、本場との認識が強い。冬の保存食でもある。
- 小川村や旧鬼無里村などでのおやきづくりは、村おこしの原動力ともなっている。
- 新潟県側の中山間地域でもみられるが、長野県側から持ち込まれたものと思われる。

長野県ではかなりの地域で蕎麦粉のおやきがある。主な地域は、信濃町、小川村、中条村、栄村、飯山市、南牧村、川上村、南相木村、美麻村、小谷村などだが、南信地方にも及んでいる。小川村では、今は小麦粉のおやきだがかつてはソバおやきが作られていたといわれている。

【参考文献など】

・柏企画（2006）：おやき 56 の質問、100、116-117 頁
・柏企画（2000）：語るおやき　生きるおやき

■　小麦をこねて蒸かすおやき

- 平野部の善光寺平などでは、稲作の裏作で栽培する小麦をこねて、かまどで蒸かすおやきが主流だった。まんじゅうともいう。
- 冠婚葬祭で登場する場合もある。

善光寺平のおやきは、丸ナスなどの野菜と小豆あんで作った、ふかすタイプのものが多い。盆をはじめ、祭りや命日など主に人が集まる日に作られる。

【参考文献など】

・柏企画（2006）：おやき 56 の質問、102 頁
・柏企画（2000）：語るおやき　生きるおやき

■　雑穀や米粉を使う「あんぼ」と「ちゃのこ」

- 県境付近の豪雪地帯である秋山郷（津南町・栄村）や魚沼地方では、ヒエ、ソバ、くず米などをこねて、餡を入れたものを「あんぼ」、入れないものを「ちゃのこ」という。
- 小谷村の「ちゃのこ」は、そば粉と馬鈴薯をこねた生地に野菜などの具を包んだものをいう。
- 近年は、特産品化される中でおいしい米を使用するものが多い。

【参考文献など】

・小出陽子（2013）：信州おやき巡り、川辺書林（おやきいろいろ）
・柏企画（2006）：おやき 56 の質問、118 頁
・渡辺行一（1971）：越後南魚沼民俗誌、慶友社、44 頁
・つなＧＯプロジェクト（2016）：雪国つなんだより　おいしいお米と津南のくらし、23 頁
・本間伸夫（2010）：増補改訂版　食は新潟にあり－新潟の風土・食・食文化、新潟日報事業社、80 頁
・日本食生活全集　長野編集委員会（1986）：聞き書　長野の食事、農山漁村文化協会

なお、魚沼地方の「あんぼ」は、「おやき」と比較して紹介されることが多い。この場合の端的な説明方法としては、「あんぼ」の皮は米粉で作られるのに対し、「おやき」の皮は小麦粉で作られるというものが多い。この結果として、「おやきとは異なる」という説明もあれば、「魚沼地方のおやき」という説明もある。

すなわち、正式な分類上は「おやき」ではないが、共通点が多いことから類似の食品として記載した。

【参考文献など】

・とおかまち日和（十日町市観光サイト）
http://www.city.tokamachi.lg.jp/kanko/K016/K031/1454068602321.html
・おかしとおやき　ことう　ホームページ
https://www.okashinokoto.co.jp/sweets/oyaki.html

参考　他の地域のおやき

※　長野県の中南部でも「おやき」というが、作り方が異なるものもある。

例えば、南信では、小麦粉に刻んだサツマイモなどを混ぜて薄焼きにするものが多い。塩さんまをそば粉で包んで焼いたものもつくられていた。

【参考文献など】

・今村龍夫（1986）：信濃の食文化　ナウマン象狩りから長寿県まで、共立プラニング、218 頁
・成瀬宇平（2012）：47 都道府県　こなもの食文化百科、145 頁

3　因果関係

※　番号は他のテーマ(01～20)との関係性、アルファベットは次の頁に補足説明があることを示す。

中山間地域特有の地質や気候　01　02

・稲作の裏作として小麦を栽培する平野部では、小麦でつくられた。
・稲作に適さない中山間地域ではそばなどの雑穀でつくられた。
・雪深い中山間地域において、棚田などで稲作をしていた地域では、くず米でつくられた。

☞ a

農作業を中心とする生活様式　06　07

・貴重な現金収入となる米を節約するため、農作業時の携帯食、保存食などとして必要に迫られてつくった。
・稲作中心の盆地では竈調理のふかしおやきが主流、畑作・林業中心の山間部は囲炉裏調理の焼きおやきが主流となった。
・かつては盆をはじめ、祭りや命日など人が集まる日につくられる場合もあった。　☞ b

企業によるおやき生産の始まり

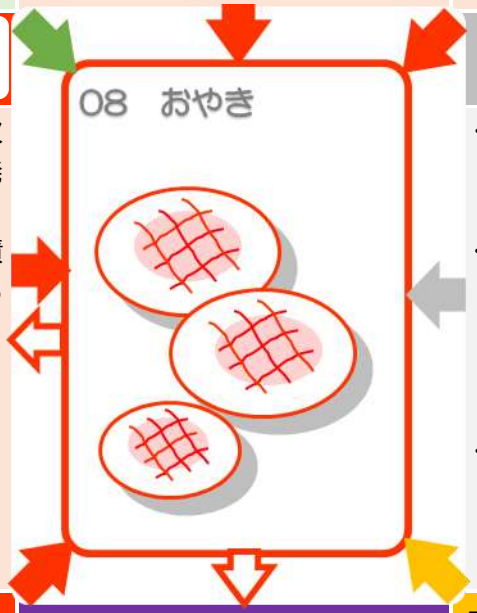
・かつては全国各地でみられたが、戦後、囲炉裏の衰退とともに家庭食として衰退する。
・その後昭和 30, 40 年代に北信地方の和菓子屋がおやきを作り始め、昭和 50 年代におやき専門店も出現する。

☞ c

味噌・漬物工業の発展　13

・長野県では、おやきの中身に欠かせない、味噌や漬物工業の発展がおやきづくりを支えた。
・おやきの知名度向上と味噌や漬物の知名度向上は相互関係にあるともいえる。

☞ d



官民による活性化の取組

・長野県は、手打ちそばや野沢菜漬けなどとともに、おやきを「味の文化財」に認定する。　☞ e
・ふるさと再発見の一環としての郷土食見直しの中で、商品化される。中山間地域の地域活性化事業の一環として取り組む地域もある。
・地元消費者の高齢化などで消費量が落ち込む中でも、活性化に向けた各種委員会や協議会、憲章などがつくられ、現在に至る。

健康食品としての着目

・おやきの具によって異なるものの、ヘルシーさや野菜の多さ、食物繊維の多さなどが健康に良い食品として注目を集める。

生活文化の継承

・おやきは郷土食の中でも、話題の豊かさ、料理方法の多さ、日常生活とのつながりの深さで群を抜いており、生活文化を伝える上での役割も大きいとされる。

☞ g

オリンピックや善光寺などの影響　16　18

・平成に入り、善光寺御開帳や冬季長野オリンピックを契機に新規参入するおやき店が増加する。
・長野といえば「おやき」というほどお土産品として定着する。

・魚沼地方では、「あんぼ」を地元のお土産品として販売する。

☞ f

【補足説明】

a　中山間地域特有の地質や気候

積雪量が少ない善光寺平（長野盆地）では、昔から米と麦の二毛作が行われていた。米は古くは年貢として納め、近代では現金収入の源であったため、小麦を使った主食を日常的に食べる独特の食文化が発達したとされる。

一方､豪雪地帯では小麦が作れなかったため、例えば、信濃町辺りではそば粉によるおやき、栄村では米の粉を使った「あんぼ」､小谷村も以前はそば粉や未熟米を使っていたといわれている。

【参考文献など】

・第一企画編（2015）日本の健康を支える信州の食企業、ダイヤモンド社、46 頁
・柏企画（2006）おやき 56 の質問、100・118 頁
・柏企画（2000）語るおやき　生きるおやき

b　農作業を中心とする生活様式

（米の節約）

長野県では、昭和初期の農家の主な現金収入は､年 1 回の米代金と年数回の繭代金であった。このため、ほとんどの農家は少なくとも 1 日に 1 回は粉食としており、中でもおやきは、家の周辺にある材料で手軽にでき、栄養価も高く好まれたといわれている。

【参考文献など】

・今村龍夫（1992）：イロリ端の食文化　信州の伝統の味・その源流を訪ねて、郷土出版社、18 頁
・田中磐（1980）：しなの食物誌，信濃毎日新聞社、111 頁
・柏企画（2003）：粉もののすすめ、64 頁

（ふかしと焼き）

かつて養蚕、麻栽培が盛んだった上水内郡西山地方などの山手では、囲炉裏で焼く“へえくべおやき”､稲作地帯の善光寺平では､竈で蒸かす“蒸しおやき”が主流であり、その違いは日ごろ用いた家庭燃料の違いからきているといわれている。水稲作が中心の盆地ではかまどで調理が行われ、蒸篭で蒸かしていた。

【参考文献など】

・今村龍夫（1992）：イロリ端の食文化　信州の伝統の味・その源流を訪ねて、郷土出版社、14 頁
・小出陽子（2013）：信州おやき巡り、川辺書林（囲炉裏とかまど）

（冠婚葬祭）

北信地方では、今でも冠婚葬祭のたびにおやきが登場する家庭が多く、人生の節目に欠かせない役割を担っている。また、田植えや稲刈りの農作業を人に頼んだり、職人さんが家や庭の手入れをする際におやきを用意する習慣があり、お茶うけの振る舞い食としても健在であるとされる。

【参考文献など】

・長野県農村文化協会（2013）：信州ながの　食の風土記　－未来に伝えた昭和の食―、農山漁村文化協会
・柏企画（2000）「語るおやき　生きるおやき
・小出陽子（2013）「信州おやき巡り」川辺書林
・柏企画（2006）：おやき 56 の質問、92－94 頁
・今村龍夫（1992）：イロリ端の食文化　信州の伝統の味・その源流を訪ねて、郷土出版社、17 頁

c　企業によるおやき生産の始まり

家庭食であったおやきが商品として公に作られ始めたのは、おやきが日常の食卓から遠のいていく昭和 30,40 年代の高度経済成長期であり、北信の商業圏にある一部の和菓子屋がおやきを作り始める。

昭和 50 年代にはおやきの専門店も出現｡昭和 58 年には長野県味の文化財として認定｡昭和 61 年には一般を対象にした「おやき作りコンテスト」が開催される。

昭和 60 年代からは､農家の女性たちによる生活改善グループが、地域活性化事業としてのおやきをはじめとする特産品開発に乗り出していく。

平成 3 年の善光寺御開帳と冬季オリンピック招致決定以降、全県的に新規参入するおやき店が増加する。

しかし、平成 10 年以降、地元消費者の高齢化などから、おやきの消費は落ち込み。販売店の

大規模化と小規模化の二極化も進む。

平成 20 年、長野商工会議所による信州おやきブランド化委員会、平成 21 年には信州おやき協議会を設立、信州おやき憲章の作成のほか、おやき事業者同士での勉強会やネットワークづくりが行われている。

【参考文献など】

・小出陽子（2013）：信州おやき巡り、川辺書林

d 味噌漬物工業の発達

【参考文献など】

・柏企画（2000）：語るおやき　生きるおやき
・柏企画（2006）：おやき 56 の質問、61 頁

e 官民による活性化の取組

長野県「味の文化財」は、信州文化のひとつである食文化の滅亡を危惧した市川健夫氏の提唱により検討され、県教育委員会が 1983（昭和 58）年 7 月に正式の指定を行ったもの。

【参考文献など】

・市川健夫先生著作集刊行会（2010）：日本列島の風土と文化第 4 巻 日本農業と食文化、第一企画、150-151 頁

f お土産品としての定着

（あんぼ）

昔のあんぼは、くず米を使用していたが、土産品として加工する場合は、コシヒカリを使用するようになった。

例えば、十日町市（旧松代町）の芝峠特産加工組合では、1994 年から大根菜漬け、小豆あん、ピーナッツ味噌を具にした「コシヒカリあんぼ」を製造販売している。

【参考文献など】

・本間伸夫（2010）：増補改訂版　食は新潟にあり一新潟の風土・食・食文化、新潟日報事業者、262 頁
・とおかまち日和（十日町市観光サイト）
http://www.city.tokamachi.lg.jp/kanko/K016/K031/1454068602321.html

g 生活文化の継承

【参考文献など】

・柏企画（2000）：語るおやき　生きるおやき、1 頁

4　解　説

要　約

「おやきといえば信州の郷土食」というまでのイメージが確立されている中、その周辺の信越県境地域でも、皮の原料や作り方、餡の中身が多種多様な「おやき」が作られており、あんぼ、ちゃのこなどの呼び方もあります。

こうした多様さは地形や気候の多様さにも通じるものがあり、郷土の特色を表わした、全国的にも貴重な郷土食といえます。

様々な材料でおやきがつくられた背景には、土地や気候の違いによる主食の違いがあります。かつて米は売るものであり、稲作と小麦の二毛作を行う地域では小麦、稲作に適さない中山間地域では蕎麦などの雑穀、雪深く米の単作地域ではくず米が、それぞれおやきの皮に使われています。

全国的には減少したおやきがつくられ続けている背景には、長野県北信地域のおやき専門店による商品化、県による味の文化財としての認定、善光寺参詣や冬季オリンピックを契機としたおやき店の増加などがあります。地元消費者の高齢化などで消費量が落ち込む中でも、活性化に向けた各種委員会や協議会、憲章などがつくられ、現在に至っています。

おやきは郷土食の中でも、話題の豊かさ、料理方法の多さ、日常生活とのつながりの深さで群を抜いているといわれています。こうしたおやきが続くこと自体が、生活文化を伝える上で大きな役割を果たしているともいえます。

また、長野県では、おやきの中身に欠かせない、味噌や漬物工業の発展が、おやきづくりを支えていますが、おやきの知名度向上と味噌や漬物の知名度向上は、相互関係にあるともいえます。

地域資源としての捉え方

米が貴重であった時代、おやきは米が食べられない地域のものであり、自慢できるものではなかったといわれています。しかし、現在おやきは、長野県を代表するお土産品へと発展しました。

おやきの珍しさについては客観的で明確な説明は難しいものの、長野県ほどおやきをＰＲし、かつバラエティに富む地域はないと考えられることから、ここに取り上げました。

蕎麦などと同様に、地域に根差した資源を活かして、地元の人も気づいていない価値を磨き上げることは、地域に対する誇りや地域づくりにとって重要な視点と考えます。

【テーマに関する参考文献など】

※　特に参考とした文献には●を付しました。

（こなもの　ー　全国）
・成瀬宇平（2012）：47 都道府県　こなもの食文化百科、145 頁
・奥村彪生（2009）：日本めん食文化の 1300 年、農山漁村文化協会
・市川健夫先生著作集刊行会（2010）：日本列島の風土と文化第 4 巻 日本農業と食文化、第一企画

（こなもの　ー　長野県）
・柏企画（2003）：粉物のすすめ　信濃は小麦粉消費大国
・横山タカ子（2004）：作って楽しい信州の粉食、信濃毎日新聞社
・信州スローフード協会（2008）：信州旬食　食のツボ、信越放送、100-101 頁
・武田徹監修　長野県商工会女性部連合会編集（2005）：信州ふるさとの食材、ほおずき書籍

（おやき）
●金子萬平（1984）：おやき・焼餅の話、銀河書房
●柏企画（2000）：語るおやき　生きるおやき
●柏企画（2006）：おやき 56 の質問
●小出陽子（2013）：信州おやき巡り、川辺書林
・信州おやき調査隊　信州おやきブランド化委員会／信州おやき協議会（事務局　長野商工会議所内）
https://www.okashinokoto.co.jp/sweets/oyaki.html
・ながの旅（ながの「四季の彩り」実行委員会事務局[（公財）ながの観光コンベンションビューロー内]）
http://nagano-irodori.com/oyaki/

09　きのこ　（日本一を争うきのこ王国が隣接）

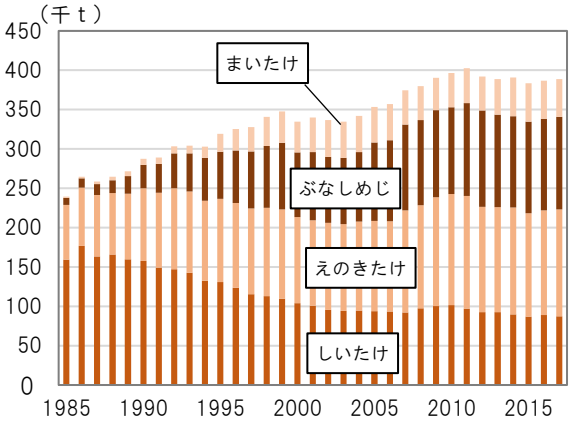
1　はじめに

きのこは、日本全国でその気候・風土にあったものが自生し、古くから森の恵み、秋の味覚として親しまれてきましたが、今では栽培技術の進展・普及にともない、約 20 種類のきのこが人工栽培されており、食材としていつでも手に入れることができるようになりました。

生産量（重量）が最も多いのは「えのきたけ」であり、以下多い順に「ぶなしめじ」、「しいたけ」、「まいたけ」、「エリンギ」などがあります。一部のしいたけなど原木栽培が行われているものもありますが、えのきたけやぶなしめじ、なめこなどは、ほとんどが工場での菌床栽培でつくられています。

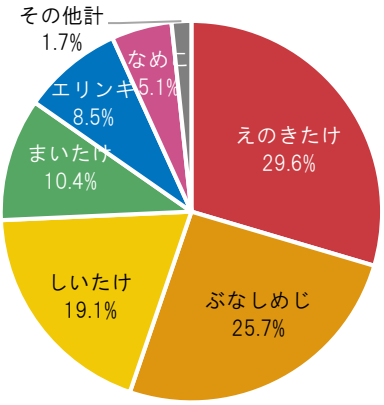
健康志向の高まりなどの中で需要は比較的安定していますが、産地間競争や価格の上下動への対応が求められる産業でもあります。きのこ全体の生産量を都道府県別にみると、長野県が第 1 位、新潟県が第 2 位であり、この 2 県で半数以上のシェアを占めています。

■　主なきのこの生産量の推移（全国）



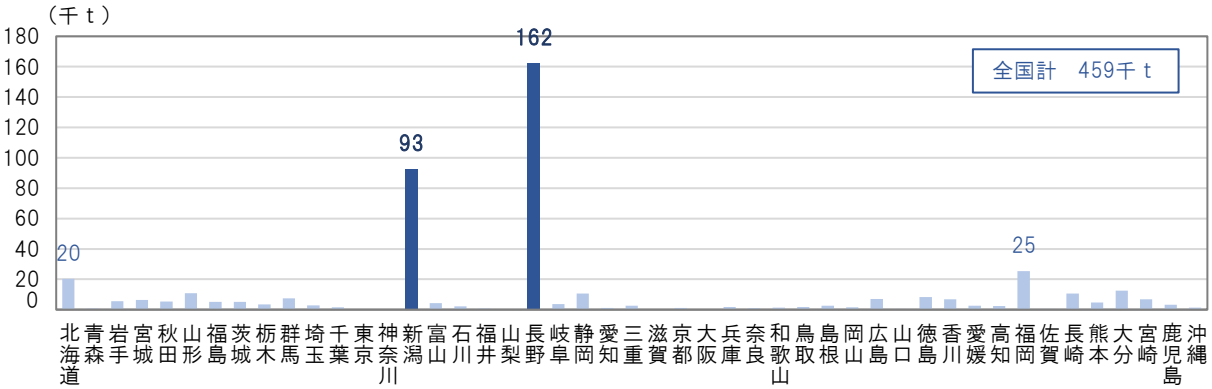
出所）農林水産省「特用林産物生産統計調査」をもとに作成

■　きのこの品種別生産量（全国・2017 年）



出所）農林水産省「特用林産物生産統計調査」をもとに作成

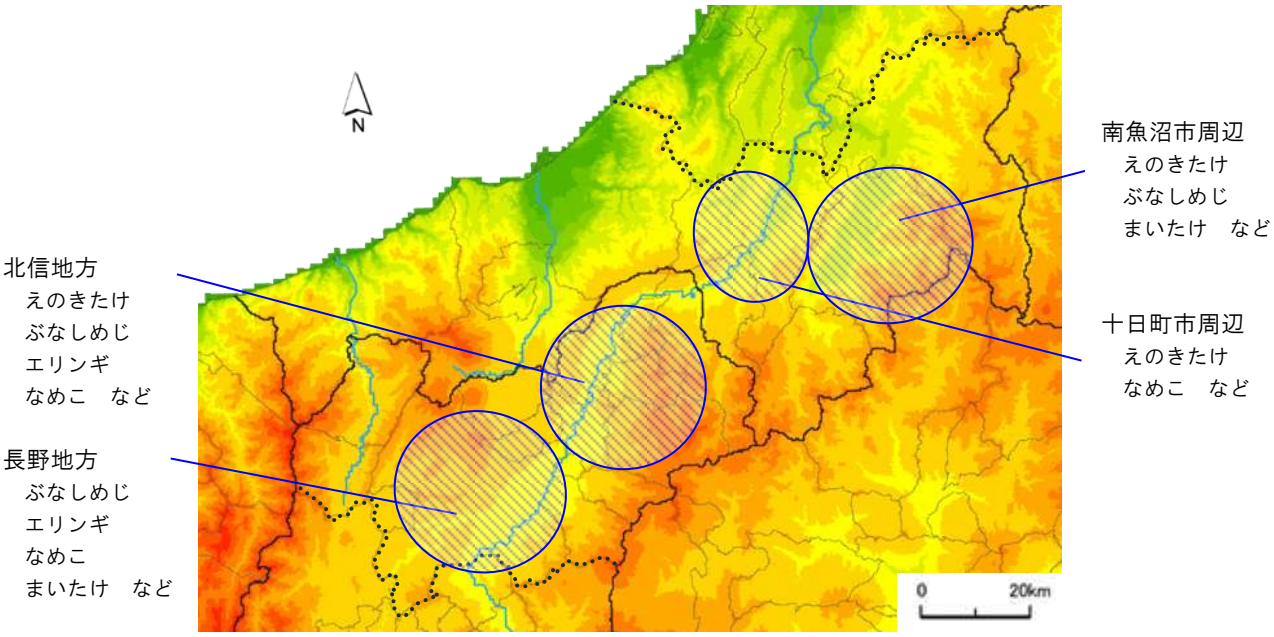
■　きのこの生産量（都道府県別・2017 年）



出所）農林水産省「特用林産物生産統計調査」をもとに作成

2　特　徴

【生産地の分布】



備考）信越県境付近にある市町村（破線で挟まれた地域）の範囲のみ表記
出所）国土地理院数値地図などをもとに作成

■　長野県が生産量第１位のきのこ

● えのきたけ

・　都道府県別では長野県が第 1 位、新潟県が第 2 位、2 県で国内シェアの 8 割を占める。
・　特に長野県北信地域での生産が多く、市町村別では中野市が全国 1 位とされる。新潟県内では十日町市、上越市、南魚沼市などで生産される。

● ぶなしめじ

・　都道府県別では長野県が第 1 位、新潟県が第 2 位、2 県で国内シェアの 6 割を占める。
・　長野県内では北信・長野地域のシェアが約 6 割を占め、市町村別では飯山市が全国 1 位とされる。新潟県内では南魚沼市などで生産される。

● エリンギ

・　長野県が第 1 位、新潟県が第 2 位、2 県で国内シェアの 4 分の 3 を占める。
・　長野県内では北安曇地域が半数近く、長野・北信地域で 4 割強のシェア。新潟県内では南魚沼市などで生産される。

■　新潟県が生産量第１位のきのこ

● まいたけ

・　都道府県別では新潟県が第 1 位、長野県は静岡県・福岡県に次いで第 4 位、2 県で国内シェアの 7 割弱を占める。
・　長野県内では長野・北信地域のシェアが約 7 割、新潟県内では魚沼地域のシェアが約 6 割、市町村別では南魚沼市が全国 1 位とされる。

● なめこ

・　都道府県別では新潟県が第 1 位、長野県は山形県に次いで第 3 位、2 県で国内シェアの 4 割を占める。
・　長野県内では北信・長野地域のシェアが約 7 割、新潟県内では十日町市、津南町等で生産される。

○　きのこの生産量（都道府県別）

きのこの品種別・都道府県別生産量は、農林水産省が毎年行っている特用林産物生産統計調査によって把握することができる。以下、長野県・新潟県での生産量が多いきのこについて、都道府県別生産量のランキングを紹介する。

【主なきのこの生産量ランキング（都道府県別・平成 29 年）】

①　えのきたけ

順位	都道府県名	生産量(t)	国内シェア
1	長野県	86,712	64%
2	新潟県	20,025	15%
3	福岡県	4,716	3%
4	北海道	3,892	3%
5	長崎県	3,801	3%
	全　国	135,745	100%

②　ぶなしめじ

順位	都道府県名	生産量(t)	国内シェア
1	長野県	49,733	42%
2	新潟県	21,366	18%
3	福岡県	13,596	12%
4	香川県	4,978	4%
5	茨城県	3,040	3%
	全　国	117,712	100%

⑤　エリンギ

順位	都道府県名	生産量(t)	国内シェア
1	長野県	16,418	42%
2	新潟県	12,155	31%
3	広島県	2,723	7%
4	福岡県	1,868	5%
5	香川県	1,401	4%
	全　国	39,088	100%

④　まいたけ

順位	都道府県名	生産量(t)	国内シェア
1	新潟県	29,853	63%
2	静岡県	5,337	11%
3	福岡県	3,776	8%
4	長野県	2,766	6%
5	北海道	2,474	5%
	全　国	47,739	100%

⑥　なめこ

順位	都道府県名	生産量(t)	国内シェア
1	新潟県	4,845	21%
2	山形県	4,843	21%
3	長野県	4,341	18%
4	福島県	1,924	8%
5	北海道	1,400	6%
	全　国	23,504	100%

備考）○数字は、国内における品種別生産量の順位
出所）農林水産省：平成 29 年特用林産物生産統計調査結果

○　きのこの生産量（長野県内）

長野県の地域振興局の管轄単位では、県内生産量に占める割合を概ね把握することができる。これによれば、えのきたけの生産量（2016 年）は、長野地域振興局管内が 14,456 トン、北信地域振興局管内が 57,161 トンであるのに対し、作物統計調査によると長野県全体では 82,325 トンである。

両者の数値には統計処理上の若干のずれも想定されるが、長野・北信地方の生産量は県内シェアの 9 割近くを占めているといえる。

ぶなしめじの生産量（2016 年）は、長野地域振興局管内は 9,189 トン、北信地域振興局管内は 23,580 トンである。長野県全体では同じく 49,807 トンであることから、長野・北信地方の生産量は県内シェアの 3 分の 2 を占めているとみることができる。

また、長野県林業後継者対策協議会（2006）の巻末に、平成 16 年の特用林産物生産状況として、えのきたけやぶなしめじに加え、エリンギ、なめこ、マイタケについても県内 10 地域ごとの生産量が掲載されている。これによれば、長野・北信地方の県内シェアは、えのきたけが約 8 割、ぶなしめじが約 6 割、なめこが約 7 割を占めている。

【主なきのこの長野県内 10 地域別の生産量】

（単位：t）

	県合計	長野	北信	北安曇
えのきたけ	63,500	11,009	40,241	2
ぶなしめじ	41,200	12,248	12,896	3,386
エリンギ	6,500	1,826	983	2,901
なめこ	5,653	1,819	2,196	1
マイタケ	140	79	32	1

なお、農林水産省から公開される市町村別データについて、平成 17 年以降のものは確認できなかった。

エリンギやまいたけの生産量は、この 10 数年間で大幅に増加しているため単純比較はできないが、少なくとも 10 数年前は長野・北信地方で過半数を占めていることがわかる。

【参考文献など】

・長野県長野地域振興局（2018）：平成 30 年度長野地方農業の概要
・長野県北信地域振興局（2018）：管内概況書
・農林水産省：平成 28 年特用林産物生産統計調査
・長野県林業後継者対策協議会（2006）：山菜の栽培と村おこし　信州山菜の風土と技術、川辺書林
・農林水産省：平成 16 年特用林産物生産統計調査

○　きのこの生産量（新潟県内）

下記の参考文献には、主なきのこの特徴や県内の主な生産地について説明がある。

【参考文献など】

・新潟県林政課ホームページ（にいがたのきのこ）
http://www.pref.niigata.lg.jp/rinsei/1287435674877.html
・ゆきぐに森林組合
http://www.yukiguni.or.jp/nameko.html

■　その他の主なきのこ

●しいたけ
・乾しいたけは、生産量第 1 位の大分県をはじめ西日本に多い。
・生しいたけは、同 1 位の徳島県をはじめとする西日本や北海道・東北に多い。
・長野・新潟の 2 県を合わせても、全国シェアは生しいたけで 5%程度、乾しいたけで 1%弱。

【しいたけの生産量ランキング】
（都道府県別・平成 29 年）

① 乾しいたけ

順位	都道府県名	生産量(t)	国内シェア
1	大分県	1,044	41%
2	宮崎県	417	16%
3	熊本県	203	8%
4	愛媛県	153	6%
5	静岡県	102	4%
・・・			
16	新潟県	19	0.8%
32	長野県	5	0.2%
	全　国	2,544	100%

② 生しいたけ

順位	都道府県名	生産量(t)	国内シェア
1	徳島県	8,150	12%
2	北海道	7,640	11%
3	岩手県	4,452	6%
4	秋田県	4,109	6%
5	群馬県	4,025	6%
・・・			
10	新潟県	2,662	4%
16	長野県	1,284	2%
	全　国	69,639	100%

出所）農林水産省：平成 29 年特用林産物生産統計調査結果をもとに作成

●まつたけ
・輸入が大半を占め、国産品は 2%程度。その中で長野県は岩手県に次ぐ第 2 位だが、県北部での生産量は少ない。新潟県はほとんどなし。

【まつたけの生産量ランキング】
（都道府県別・平成 29 年）

順位	都道府県名	生産量(t)	国内シェア
1	岩手県	8.7	48%
2	長野県	5.1	28%
3	岡山県	1.1	6%
4	京都府	0.7	4%
5	和歌山県	0.7	4%
・・・			
－	新潟県	データなし	－
	全　国	18.2	100%

出所）農林水産省：平成 29 年特用林産物生産統計調査結果をもとに作成

3　因果関係

※　番号は他のテーマ(01～20)との関係性、アルファベットは次の頁に補足説明があることを示す。

山がちな地形　01

・もともと山地が多いことから、歴史的にもみても、きのこと暮らしの関わりは深かったと思われる

ブナ林を中心とする植生　03

・きのこは樹木の種類などによって種類に特徴がある。
例えば、「天然ナメコ」はブナ林帯、「ブナシメジ」はブナやカエデなどの広葉樹に多く発生。
当地はブナ林帯が多いことから、それらの採集の歴史があると思われる。
・「まいたけ」は東日本で珍重されてきた代表的な食用きのこ。

☞ a

稲作の農閑期対策（出稼ぎ）　06

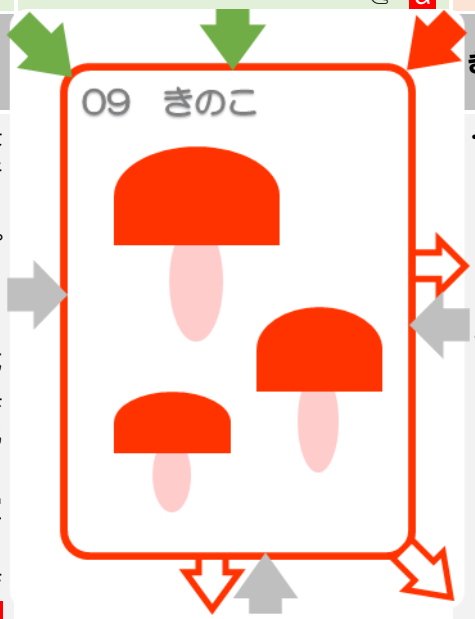
・かつての生産は、きのこの優良な菌種づくりが大切であり、高度な技術と忍耐力が要求された。
・昔から中山間地域での暮らしでは、稲作の農閑期に出稼ぎを避け、現金収入を得る方法として有望なきのこ生産に注目。
昭和 30 年代から発展した中野市の「えのきたけ」、魚沼地方の「なめこ」などがこれに該当。

☞ b

研究開発・技術導入の推進力

・「えのきたけ」は、1960 年代に長野県でガラス瓶による人工栽培を全国に先駆けて開始。
・その後新潟地震を契機としたプラスチック瓶への転換や、白いえのきたけの開発も国内初。
・「エリンギ」は、えのきたけに代わる品目として 2000 年頃長野県の企業により栽培技術の安定化に成功。
・「ぶなしめじ」は、1970 年代に宝酒造(株)が人工栽培に成功し、長野県経済連との独占契約を結んだことが起点。

☞ c



きのこ消費量の多さ

・全国の都道府県庁所在地の中で、きのこの消費量第 1 位は長野市、新潟市は山形市に次いで第 3 位。様々なきのこ料理が各家庭や食品業界などでつくられている。
・きのこ中毒の発生件数は、北海道に次いで第 2 位。この点からもきのこ消費の多さを表している。

（上記の続き）

・「まいたけ」は 1980 年頃新潟県の企業により栽培技術が確立。
・「なめこ」は、近年栽培の省力化や施設の大型化が進む
・いずれも、大規模工場での生産を可能とする技術開発と投資の実践により実現。
・あわせて、環境を緻密に調整できるベテラン職人と蓄積されたノウハウも必要とされる。

健康面への影響

・きのこは、低カロリーでビタミンや食物繊維が豊富、免疫力やがん予防などの観点からも注目。長野県が長寿日本一であることの要因の一つとして紹介される。

地域文化への貢献

・きのこ生産で大きく発展した企業による文化活動も発生。
例えば、きのこ総合メーカー創業者のコレクションを母体とした「水野美術館」（長野市）は、優れた日本画を収集・展示し大きな注目を集める。

【補足説明】

a　ブナ林を中心とする植生

ブナ林を中心とする植生には、主に次のようなきのこが繁殖するとされる。

マイタケ	ブナやミズナラの古木の根元に発生。
ナメコ	天然ナメコは標高 4,500m以上のブナ林帯で発生。一部カエデやミズナラも使うが、基本はブナ。
ヒラタケ	ナラ、クヌギ、ハンノキ、クルミなどの広葉樹に発生
ブナシメジ	ブナ、カエデなどの広葉樹に発生
エノキタケ	クワ、カキ、コウゾなどに発生

【参考文献など】

・長野県特用林産協会(1996):信州　山里の幸、川辺書林

・特産情報きのこ年鑑編集部（2018）：きのこ年鑑 2018 年度版、プランツワールド、75 頁

b　稲作の農閑期対策（出稼ぎ）

【参考文献など】

・特産情報きのこ年鑑編集部（2018）：きのこ年鑑 2018 年度版、プランツワールド、67、73 頁

c　研究開発・技術導入の推進力

きのこの研究開発や生産量拡大の展開については、下記の文献に詳細な記載がある。

生産規模では、ホクト(株)（長野県）と(株)雪国まいたけ（新潟県）の国内二大企業よるところが大きく、“信越キノコ戦争”と評されることもあった。

【参考文献など】

・特産情報きのこ年鑑編集部（2018）：きのこ年鑑 2018 年度版、プランツワールド、67-68 頁

・ホクトきのこ総合研究所監修（2016）：改訂版きのこ検定公式テキスト、実業之日本社

・第一企画株式会社（2015）：日本の健康を支える長寿日本一　信州の食企業 13 社、ダイヤモンド社

4　解　説

要　約

きのこの生産量は、長野県が全国第 1 位、新潟県が同 2 位であり、両県合わせて国内シェアの半数以上を占めています。中でも市町村別のデータをみると、南魚沼市のまいたけ生産量、中野市のえのきだけ生産量、飯山市のぶなしめじ生産量がそれぞれ日本一などのデータが示すように、県境をはさんだ両側の地域は中心的生産地の一つです。

表面的には、きのこの国内 2 大メーカーが隣県で大きく発展した結果とみることもできますが、昔から全国に様々なきのこが自生する中で、この地域では山国で現金収入を得る方法としていち早くきのこ栽培について研究と投資を重ね、その土壌の中からこれらの企業が登場したとみることができます。

また、両県はある意味でライバル関係との見方もありますが、両者の間に目に見える大きな関係性は確認できないものの、人的な面や意識の面など有形無形の交流はあり、切磋琢磨につながったとみることができるかもしれません。

地域資源としての捉え方

企業が大型化し、グローバル経済の中での活動が中心になるほど、地域との接点は薄くなることも考えられますが、この事例では、地域に対する文化振興や地域のブランド形成などにおいて大きな貢献があるといえます。

また、きのこと健康長寿の関係性に着目し、過去の経験則的な知見を科学的知見に置き換える研究活動と情報発信活動は、地域に根差した食文化を再評価する取組でもあります。きのこ産業の発展と健康増進の好循環を生み出すプロセスは、持続可能な地域社会づくりの一つのモデルとみることもできるでしょう。

【テーマに関する参考文献など】

※　特に参考とした文献には●を付しました。

（総論）
・林野庁ホームページ（きのこのはなし）
・林野庁ホームページ（山菜関係資料）
http://www.rinya.maff.go.jp/j/tokuyou/tokusan/megurujoukyou/
・日本特用林産振興会ホームページ
http://nittokusin.heteml.jp/sansai/contents/05_production/production.html）
●特産情報きのこ年鑑編集部（2018）：きのこ年鑑 2018 年度版､プランツワールド
●斎藤暖生（2013）：北日本におけるキノコ採りの論理とその展開、ネイチャー・アンド・ソサエティ研究第 2 巻「生き物文化の地理学」、海青社
・高橋喜平ほか（1985）：雪国のきのこ、熊谷印刷出版部

（長野県）
・長沢武・河原勲・田中豊雄（1979）：長野県山菜・きのこ図鑑、信濃毎日新聞社
・信州きのこ研究会・田中豊雄（1982）：信州きのこ百科、信濃毎日新聞社
・本郷次雄監修（1994）：信州のキノコ、信濃毎日新聞社
●長野県特用林産協会（1996）：信州　山里の幸、川辺書林
●長野県林業後継者対策協議会（2006）：山菜の栽培と村おこし　信州山菜の風土と技術、川辺書林
・信州大学放送公開講座研究グループ企画（2005）：信州大学放送公開講座「食と健康」　信州の風土が生んだ豊かな食材、SBC 信越放送
●ホクトきのこ総合研究所監修（2016）：改訂版きのこ検定公式テキスト、実業之日本社
●第一企画株式会社（2015）：日本の健康を支える長寿日本一　信州の食企業 13 社、ダイヤモンド社

（新潟県）
・松田一郎（1981）：新潟県のキノコ、新潟日報事業社
●新潟県林政課ホームページ（にいがたのきのこ）

10　果　物　（国内有数のりんご・もも・ぶどう生産地）

1　はじめに

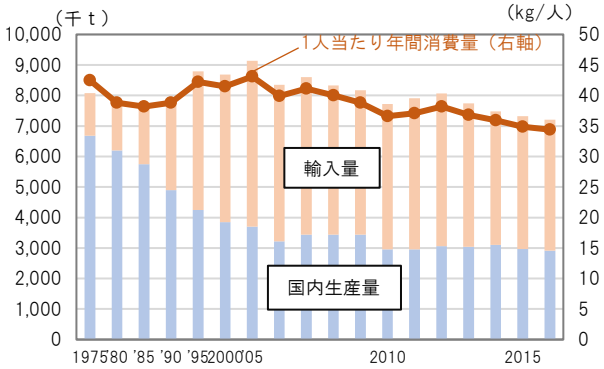
果物の原産地は、海外由来のものが多いですが、日本では縄文時代の遺跡から種が出土するなど、古い歴史を有する果物もあります。

果物の種類によって気候や土壌の条件による適地が異なります。例えば、りんごは比較的冷涼な地域、ももやぶどうは比較的少雨で水はけの良い地域、みかんは日照が多く温暖な地域で主に生産されています。長野県全体ではりんご、もも、ぶどうなど、新潟県全体では西洋なしなどが国内有数の生産地となっています。

最近 30 年間でみると、国内の果物全体の消費量は大きく変わっていませんが、果物の種類によっては消費そのものが減少したり、輸入品に押されているものも少なくありません。

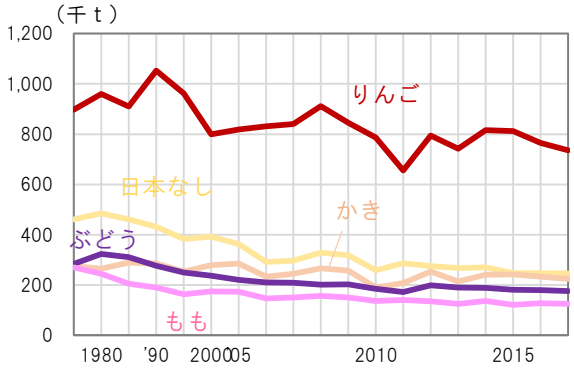
選定作業や害虫駆除の作業など、栽培には大きな手間を要しますが、様々な品種改良が行われ数多くの品種を生み出すとともに、品質によっては付加価値が大きく海外への輸出などが期待される産業の一つでもあります。

■　果物供給量の推移（全国）



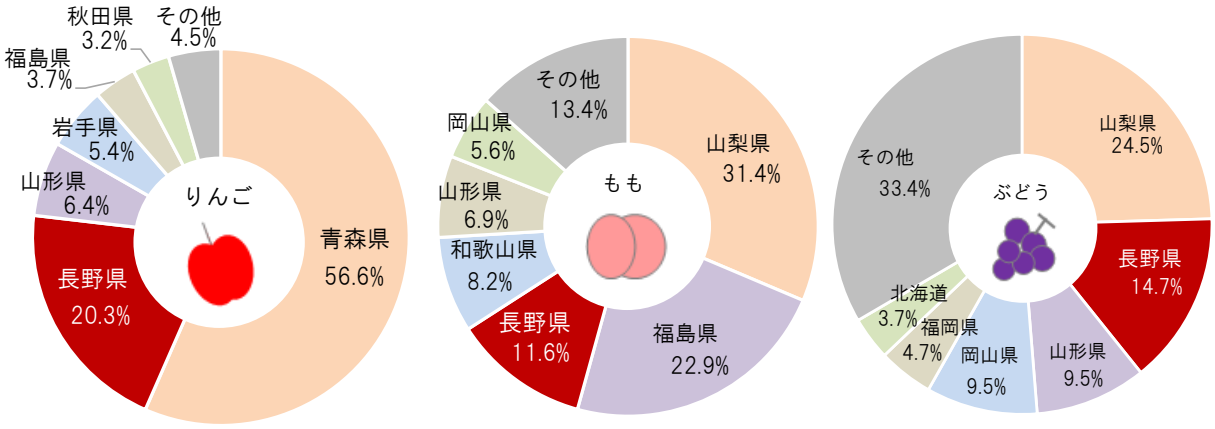
出所）農林水産省「食糧需給表」をもとに作成

■　主な果物収穫量の推移（全国）



出所）農林水産省「作物統計」をもとに作成

■　りんご・もも・ぶどうの出荷量（都道府県別・2017 年）



出所）農林水産省「作物統計」をもとに作成

2　特　徴

■　りんごの生産量（収穫量）

● 都道府県別の収穫量は、青森県に次いで長野県が第 2 位。長野県内では長野市をはじめ、須坂市・中野市で 4 割弱を占める。青森県弘前市周辺とならんで国内トップクラスの生産地といってよい。

●「ふじ」をはじめ、「つがる」や長野県生まれのりんご三兄弟といわれる「秋映（あきばえ）、シナノゴールド、シナノスイート」を栽培。

○　長野県内地域振興局別データ

長野県の地域振興局の管轄単位では、県内収穫量に占める割合を概ね把握することができる。これによれば、長野地域振興局管内での収穫量は 60,519 トン、北信地域振興局管内は同 21,000 トンであるのに対し、作物統計調査によると長野県全体では 142,100 トンである。

両者の数値には統計処理上の若干のずれも想定されるが、長野・北信地方の収穫量は県内シェアの概ね 6 割程度を占めているといえる。

○　市町村別データ

市町村別収穫量のデータは、平成 18 年作物統計調査を最後に公表されておらず、平成 16 年以前はいわゆる平成の大合併前のデータであるため現在の市町村の範囲とは異なるため、データが古い。

しかしながら、長野県や各市町村、ＪＡのホームページなどでは国内有数の収穫量を誇る特産品として紹介されるなど、10～20 年前から多少の順位変動はあっても傾向の大きな変化はないと考えられることや、詳細な地域性を把握できる観点から平成 16 年のデータを参考とした。（他の果物についても同様の対応とした。）

○　全国圏域別データ

内山（1996）は、全国を 305 地区に区分して 1960 年から 1985 年までの農業センサスから全作物収穫面積に占めるりんご園・ぶどう園の割合を算出し、標準偏差（偏差値）に基づいていくつかの類型に区分している。すなわち、データは古いが、市町村の規模や合併の状況などにとらわれない集積状況を把握することができる。

1985 年時点のりんご園の密度をみると、弘前（XⅢ型）が突出して高く、次いで善光寺平（Ⅶ型）、奥信濃（Ⅵ型）、津軽（Ⅳ型）、八戸・鹿角・西村山・下伊那（Ⅲ型）を挙げていることから、長野県北部は弘前に次ぐりんご園の集積地ということができる。

【りんごの収穫量ランキング】

①　都道府県別（平成 29 年）

順位	都道府県名	収穫量(t)	国内シェア
1	青森県	415,900	57%
2	長野県	149,100	20%
3	山形県	47,100	6%
4	岩手県	39,600	5%
5	福島県	27,000	4%
・・・			
－	新潟県	－	
	全　国	735,200	100 %

出所）平成 29 年作物統計調査をもとに作成

②　市町村別（平成 16 年）

順位	市町村名	収穫量(t)	備考
1	青森県弘前市	117,100	
2	〃　浪岡町	33,700	
3	長野県長野市	33,400	
4	青森県黒石市	27,800	
5	〃　岩木町	27,200	
6	〃　板柳町	23,600	
7	〃　平賀町	22,800	
8	〃　大鰐町	18,800	
9	〃　五所川原市	18,700	
10	〃　相馬村	18,000	
・・・			
17	長野県須坂市	9,600	
23	〃　山ノ内町	6,710	
24	〃　中野市	5,550	
29	〃　三水村	5,370	現飯綱町
45	〃　小布施町	3,360	
52	〃　豊田村	3,030	現飯綱町
	全　国	754,400	

出所）平成 16 年作物統計調査をもとに作成

【参考文献など】

・長野県長野地域振興局（2018）：平成 30 年度長野地方農業の概要
・長野県北信地域振興局（2018）：管内概況書
・農林水産省：平成 28 年作物統計調査
・農林水産省：平成 16 年作物統計調査
・内山幸久（1996）：果樹生産地域の構成、大明堂

■　ももの生産量（収穫量）

- 都道府県別の収穫量は、山梨県に次いで長野県が第 3 位。長野県内では長野市・中野市・須坂市の収穫量が大半を占める。
- 「川中島白桃」、「あかつき」をはじめ、長野県が生産量日本一の「ネクタリン」などを栽培。

○　長野県内地域振興局別のデータ

長野県の地域振興局の管轄単位では、県内収穫量に占める割合を概ね把握することができる。これによれば、長野地域振興局管内での収穫量は 7,937 トン、北信地域振興局管内は同 3,967 トンであるのに対し、作物統計調査によると長野県全体では 16,100 トンである。

両者の数値には統計処理上の若干のずれも想定されるが、長野・北信地方の収穫量は県内シェアの 4 分の 3 を占めているといえる。

○　市町村別のデータ

市町村別収穫量のデータは、平成 18 年作物統計調査を最後に公表されておらず、平成 16 年以前はいわゆる平成の大合併前のデータであるため現在の市町村の範囲とは異なるため、データが古い。

しかしながら、長野県や各市町村、ＪＡのホームページなどでは国内有数の生産量を誇る特産品として紹介されるなど、10～20 年前から多少の順位変動はあっても傾向の大きな変化はないと考えられることや、詳細な地域性を把握できる観点から平成 16 年のデータを参考とした。

○　全国圏域別データ

内山（1996）は、全国を 305 地区に区分して 1960 年から 1985 年までの農業センサスから全作物収穫面積に占めるりんご園・ぶどう園の割合を算出し、標準偏差（偏差値）に基づいていくつかの類型に区分している。すなわち、データは少し古いものの、市町村の規模や合併の状況などにとらわれない集積状況を把握することができる。

1985 年時点のもも園の密度をみると、甲府（XVI型）が突出して高く、次いでX型の中通北部（福島市など）、Ⅲ型の西村山・山形・善光寺平、Ⅱ型に奥信濃を含む 7 地区を挙げていることから、長野県北部は山梨・福島に次いで山形とならぶ、もも園の集積地ということができる。

【ももの収穫量ランキング】

①　都道府県別（平成 29 年）

順位	都道府県名	収穫量(t)	国内シェア
1	山梨県	39,200	31%
2	福島県	28,600	23%
3	長野県	14,500	12%
4	和歌山県	10,200	8%
5	山形県	8,680	7%
6	岡山県	6,940	6%
7	新潟県	2,120	2%
	全　国	124,900	100 %

出所）平成 29 年作物統計調査をもとに作成

②　市町村別（平成 16 年）

順位	市町村名	収穫量(t)	備考
1	山梨県笛吹市	21,000	
2	福島県福島市	11,700	
3	山梨県山梨市	10,800	
4	〃　塩山市	7,000	
5	長野県長野市	6,050	
6	山梨県南アルプス市	6,000	
7	福島県桑折町	3,610	
8	〃　国見町	3,090	
9	〃　保原町	3,060	
10	長野県中野市	2,940	
・・・			
19	長野県須坂市	1,860	
27	〃　小布施町	987	
28	〃　山ノ内町	941	
	全　国	151,900	

出所）平成 16 年作物統計調査をもとに作成

- 「川中島白桃」、「あかつき」をはじめ、長野県が生産量日本一の「ネクタリン」などを栽培。（再掲）
- ももとネクタリンの自然交配により、須坂市で生まれた「ワッサー」などもある。

「ネクタリン」は、作物統計調査では「もも」の一種として集計されているが、特産果樹生産動態等調査では単独で集計されている。これによれば、長野県の国内シェアは 3 分の 2 を占めている。

【ネクタリンの収穫量ランキング】
（都道府県別・平成 28 年）

順位	都道府県名	収穫量(t)	国内シェア
1	長野県	1,184	68%
2	福島県	275	16%
3	山梨県	212	12%
4	青森県	69	4%
5	秋田県	4	0.2%
6	新潟県	3	0.2%
	全　国	1,748	100 %

出所）平成 28 年産特産果樹生産動態等調査をもとに作成

【参考文献など】

・農林水産省：平成 29 年作物統計調査
・長野県長野地域振興局（2018）：平成 30 年度長野地方農業の概要
・長野県北信地域振興局（2018）：管内概況書
・農林水産省：平成 28 年作物統計調査
・農林水産省：平成 16 年作物統計調査
・内山幸久（1996）：果樹生産地域の構成、大明堂

■　ぶどうの生産量（収穫量）

- 都道府県別の収穫量は、山梨県に次いで長野県が第 2 位。長野県内では、須坂市や中野市などの北信地域の収穫量が大半を占める。
- ぶどうは、長野県が生産量日本一の「巨峰」をはじめ、須坂市が同日本一の「ナガノパープル」や「シャインマスカット」、ワイン用ブドウの「シャルドネ」や「メルロー」などを栽培。

内山（1996）によれば、「巨峰」はもともと栽培困難な品種であったが、1964 年に長野県農業試験場桔梗が原分場で花振い防止技術が開発され長野県を中心に栽培面積を増加させた。

○　長野県内地域振興局別データ

長野県の地域振興局の管轄単位では、県内収穫量に占める割合を概ね把握することができる。これによれば、長野地域振興局管内での収穫量は 11,521 トン、北信地域振興局管内は同 6,410 トンであるのに対し、作物統計調査によると長野県全体では同 28,800 トンである。

両者の数値には統計処理上の若干のずれも想定されるが、長野・北信地方の収穫量は県内シェアの 6 割強を占めているといえる。

○　市町村別のデータ

市町村別収穫量のデータは、平成 18 年作物統計調査を最後に公表されておらず、平成 16 年以前はいわゆる平成の大合併前のデータであるため現在の市町村の範囲とは異なるため、データが古い。

しかしながら、長野県や各市町村、ＪＡのホームページなどでは国内有数の生産量を誇る特産品として紹介されるなど、10～20 年前から多少の順位変動はあっても傾向の大きな変化はないと考えられることや、詳細な地域性を把握できる観点から平成 16 年のデータを参考とした。

○　全国圏域別データ

内山（1996）は、全国を 305 地区に区分して 1960 年から 1985 年までの農業センサスから全作物収穫面積に占めるりんご園・ぶどう園の割合を算出し、標準偏差（偏差値）に基づいていくつかの類型に区分している。すなわち、デー

タは少し古いものの、市町村の規模や合併の状況などにとらわれない集積状況を把握することができる。

1985 年時点のぶどう園の密度をみると、甲府（XIV 型）が突出して高く、次いで米沢（IV 型）、山形・上田（Ⅲ型）、Ⅱ型に善光寺平、奥信濃、松本を含む 10 地区を挙げているなど、長野県北部は、山梨・山形・長野県中部に次ぎ、北海道小樽周辺と並ぶぶどう園の集積地ということができる。

【ぶどうの収穫量ランキング】

① 都道府県別（平成 29 年）

順位	都道府県名	収穫量(t)	国内シェア
1	山梨県	43,200	25%
2	長野県	25,900	15%
3	山形県	16,700	10%
3	岡山県	16,700	10%
5	福岡県	8,260	5%
・・・			
16	新潟県	2,130	1%
	全　国	176,100	100 %

出所）平成 29 年作物統計調査をもとに作成

② 市町村別（平成 16 年）

順位	市町村名	収穫量(t)	備考
1	山梨県笛吹市	14,600	
2	〃　山梨市	11,200	
3	〃　勝沼町	8,620	
4	長野県中野市	5,570	
5	山梨県塩山市	5,280	
6	〃　南アルプス市	5,120	
7	山形県高畠町	4,930	
8	長野県須坂市	4,380	
9	山梨県甲府市	4,030	
10	北海道余市町	3,820	
・・・			
16	長野県長野市	2,800	
29	〃　小布施町	1,420	
31	〃　山ノ内町	1,290	
	全　国	205,600	

出所）平成 16 年作物統計調査をもとに作成

【参考文献など】

・農林水産省：平成 29 年作物統計調査
・長野県長野地域振興局（2018）：平成 30 年度長野地方農業の概要
・長野県北信地域振興局（2018）：管内概況書
・農林水産省：平成 28 年作物統計調査
・農林水産省：平成 16 年作物統計調査
・内山幸久（1996）：果樹生産地域の構成、大明堂
・須坂市ホームページ（農産物の紹介）

参考　みかんの出荷量

国内で最も出荷量が多い果物は「みかん」である。1975 年には 375 万トンと突出していたが、2017 年には 66 万トンと約 5 分の 1 に減少し、りんごの出荷量とほぼ同量になっている。

参考　作物統計調査について

作物統計調査では、果物部門について 14 品目（みかん、りんご、日本なし、西洋なし、かき、びわ、もも、すもも、おうとう、うめ、ぶどう、くり、パインアップル及びキウイフルーツ）を対象とし、果樹面積・収穫量・出荷量などのデータを都道府県別に集計（一部推計）している。

【参考文献など】

・農林水産省：平成 29 年作物統計調査

■　すももの生産量（収穫量）

● すももの収穫量は、長野県が第 2 位。長野市の収穫量は全国トップ 10 に入る。

基本的に「プラム」は「すもも」と同義。さらに、すももは「日本すもも」と「プルーン」に分けられる。

「プルーン」は、作物統計調査では「すもも」の一種として集計されているが、特産果樹生産動態等調査では単独で集計されている。これによれば、長野県の国内シェアは 6 割強を占めている。

【すももの収穫量ランキング】

① 都道府県別（平成 29 年）

順位	都道府県名	収穫量（t）	国内シェア
1	山梨県	6,690	34%
2	長野県	3,110	16%
3	和歌山県	1,970	10%
4	山形県	1,780	9%
5	青森県	1,010	5%
・・・			
－	新潟県	データなし	
	全　国	19,600	100 %

出所）平成 29 年作物統計調査をもとに作成

② 市町村別（平成 16 年）

順位	市町村名	収穫量(t)	備考
1	山梨県南アルプス市	4,140	
2	〃　塩山市	1,720	
3	和歌山県かつらぎ町	1,670	
4	山梨県笛吹市	1,030	
5	長野県長野市	725	
6	山梨県山梨市	608	
7	和歌山県田辺市	588	
8	山形県中山町	539	
9	山梨県中道町	468	
10	福島県国見町	340	
・・・			
12	長野県須坂市	330	
13	〃　中野市	330	
47	〃　豊田村	108	現飯山市
	全　国	27,100	

出所）平成 16 年作物統計調査をもとに作成

【プルーンの収穫量ランキング】

都道府県別（平成 28 年）

順位	都道府県名	収穫量	国内シェア
1	長野県	1,864	62%
2	北海道	919	31%
3	青森県	123	4%
	全　国	2,997	100 %

出所）平成 28 年産特産果樹生産動態等調査をもとに作成

■　ブルーベリーの生産量（収穫量）

● ブルーベリーの生産量は、長野県が長らく第 1 位であったが、2016 年は第 2 位。信濃町や大町市などが栽培の中心である。

ブルーベリーの収穫量は、全国的には統計のある昭和 51 年からほぼ右肩上がりで増加を続けている。

長野県は平成 26 年まで長らく日本一であったが、平成 27 年は第 3 位、平成 28 年は東京に次いで第 2 位となった。

市町村別の収穫量データは確認できないが、特産果樹生産動態等調査では「下伊那・松本・上伊那地域」、長野県ホームページ（長野県の農業）では「信濃町、大町市」が主要産地との記載がある。

【ブルーベリーの都道府県別収穫量（平成 28 年）】

順位	都道府県名	収穫量(t)	国内シェア
1	東京都	330	13%
2	長野県	284	12%
3	群馬県	269	11%
4	茨城県	244	10%
5	千葉県	133	5%
・・・			
37	新潟県	9	0.4%
	全　国	2,476	100 %

出所）平成 28 年産特産果樹生産動態等調査をもとに作成

【参考文献など】

・日本ブルーベリー協会ホームページ
http://japanblueberry.com/info/area.html

■ 西洋ナシの生産量（収穫量）

● 西洋ナシは、長野市の収穫量が全国トップ10 に入る。

都道府県別にみると、新潟県が第 2 位となっているが、主な生産地は新潟市・加茂市・三条市などであり、上越・魚沼地方ではほとんど生産されていない。

長野県内ではほぼ全域で生産されており、市町村別のデータが把握できる平成 16 年時点では、県内収穫量 2,460 トンのうち長野・北信地方で約 4 割を占めている。

【西洋ナシの収穫量ランキング】

① 都道府県別（平成 29 年）

順位	都道府県名	収穫量(t)	国内シェア
1	山形県	18,800	65%
2	新潟県	2,240	8%
3	青森県	1,850	6%
4	長野県	1,710	6%
5	福島県	711	2%
	全　国	29,100	100 %

出所）平成 29 年作物統計調査をもとに作成

② 市町村別（平成 16 年）

順位	市町村名	収穫量(t)	備考
1	山形県東根市	3,050	
2	〃　天童市	2,850	
3	〃　上山市	1,420	
4	〃　高畠町	1,330	
5	〃　大江町	1,010	
6	〃　南陽市	938	
7	〃　寒河江市	802	
8	〃　中山町	569	
9	長野県長野市	517	
10	〃　松川町	509	
・・・			
23	長野県中野市	267	
48	〃　三水村	64	現飯綱町
	全　国	23,900	

出所）平成 16 年作物統計調査をもとに作成

■ 栗の生産量（収穫量）

● 栗の収穫量は、全国的にみて多くないものの、小布施町の栗は、江戸時代には藩の献上品であり、天領の栗林も存在（これは丹波と小布施のみ）。明治時代は栗鹿子を開発、今に続く。

都道府県別の収穫量をみると、第 1 位は茨城県であり、長野県は第 8 位で全国シェアは 3%程度である。

このうち、長野県内の中では小布施町が突出しており、長野・北信地方の収穫量をあわせると県内の過半数を占める。

【くりの収穫量ランキング】

① 都道府県別（平成 29 年）

順位	都道府県名	収穫量(t)	国内シェア
1	茨城県	4,150	22%
2	熊本県	2,880	15%
3	愛媛県	1,840	10%
4	岐阜県	810	4%
5	埼玉県	657	4%
・・・			
8	長野県	530	3%
－	新潟県	データなし	
－	全　国	18,700	100 %

出所）平成 29 年作物統計調査をもとに作成

② 市町村別（平成 16 年）

順位	市町村名	収穫量(t)	備考
1	茨城県かすみがうら市	1,360	
2	〃　美野里町	666	
3	〃　八郷町	649	
4	〃　茨城町	615	
5	〃　岩間町	560	
6	熊本県山鹿市	531	
7	茨城県友部町	494	
8	〃　石岡市	403	
9	愛媛県大洲市	402	
10	熊本県山都町	348	
・・・			
17	長野県小布施町	230	
	全　国	24,000	

出所）平成 16 年作物統計調査をもとに作成

3　因果関係

※　番号は他のテーマ(01～20)との関係性、アルファベットは次の頁に補足説明があることを示す。

水はけの良い地形・地質　01

・果物は一般的に水はけの良いところを好む。
・かつての火山である高社山や飯縄山などの山麓は、扇状地が形成され、水はけが良い。
・千曲川流域には、古い時代の盆地の上に堆積した泥や砂礫からなる丘陵や台地、段丘、自然堤防などがあり、同じく水はけが良い。

少雨で気温の日較差が大きい気候　02

・国内有数の少雨地帯（年間降水量 1,000mm前後）で、日照が多く、朝晩の温度差が大きい地域では、果物の糖度が高まり、果物の色付きも鮮やかになる。（多雨地域は不適。標高が高すぎると、低温・霜の問題が発生）
・りんごは比較的冷涼な気候を好む（ただし剪定作業の遅れる雪国では栽培困難）。もも・ぶどうは、りんごに比べてより乾燥を好む。

蚕糸業の衰退　14

・明治・大正時代の長野県は、国内トップクラスの蚕糸の生産地であり、海外への輸出を積極的に行っていたが、昭和の大好況や戦争などを経て衰退。
・これに代わる産業として、桑畑の転用などにより発達。
※戦時中は、穀物生産が優先され生産統制される。

研究開発の継続

・病害虫の対応、国内他産地や輸入品との競争、栽培・収穫・販売時期の棲み分け、消費者の嗜好の変化など様々な課題を抱える中、須坂市にある県の果樹試験場では、様々な新品種の開発や生産方法の改善に向けた研究開発を継続的に実施。

りんご畑からの転換

・1960 年以降は腐らん病による被害が頻発。りんご畑の一部はもも畑やぶどう畑への転換が進む。
（中野市の一部地域では、アスパラガスやシャクヤクなどの畑作へも転換が進む）
・1970 年代からは、稲作の生産調整を受けて水田からの転換も。

組合等による組織的対応

・戦後、果実栽培の大きな課題である労働時間の軽減や価格の安定化に向け、消毒や出荷作業などの共同化を推進。

ワイン等加工品の生産販売　12

・ワイン、シードル、ジャムなどの様々な加工品生産が進む。

山岳や善光寺など観光地の発達　16　18

・りんごは、善光寺詣のお土産品として明治時代から人気。
・現在では、果物加工品も含め、登山やスキー、避暑などで訪れる観光客のお土産として人気。
・一部の果樹農園は、観光資源として交流人口の増加にも貢献。

4　解　説

要　約

長野県北部の長野地域や北信地域は、果物の中でもりんご、もも、ぶどうについては国内有数の生産地です。

この地域は、国内有数の少雨地帯であることや、朝晩の温度差が大きいといった気候条件に加え、水はけの良い地形・地質など、これらの果物栽培に適した自然環境を有しています。

また、善光寺参りや、山国ならではの登山、スキー、避暑などの観光客が数多く訪れる地域であるため、土産物としても重宝され、さらには農園の一部が観光地としても認知されるなど、住民以外の需要があることも追い風になっています。

しかし歴史を紐解けば、明治時代に国を挙げてけん引した蚕糸業があり、長野県がその中心的役割を果たしていたこと、その背景には稲作などに適さない土地を数多く有し、手間のかかる産業ではあるものの“養蚕で勝負するしかない”状況下で力を注いだ結果として、大きな発展を遂げたといえます。しかし、蚕糸業は世界的な経済情勢の変化などから、大正から昭和にかけてほとんど倒産します。

それに代わる産業の一つとして見いだされたのがりんご栽培です。同様に“りんごで勝負するしかない”状況下で力を注いだ結果、戦後まもなく大きく発展した時期がありましたが、その後の病害虫の被害などで壊滅的被害を受けた地域もありました。その状況下から、ももやぶどう、野菜や花卉への生産転換も行われました。

その後、国民の食生活や嗜好の変化、国内外の産地間や嗜好品の中での競争下で、労働負担の軽減や病害虫対策、新たな品種開発などの研究開発を続け、様々な商品を世に送り出しながら今日に至っています。

このように度重なる危機に対し、あるときは地道な研究開発の力で、あるときは思い切った転換で乗り越えて今日に至っています。

地域資源としての捉え方

隣接する新潟県の上越地方や魚沼地方では、これらの果物栽培はほとんど行われていません。気候条件をはじめ、地形・地質、それらに伴う中心的産業（稲作か養蚕か）の違い、観光地としての発達度の違いなど、自然の力の大きさを物語っており、近距離で生産物が全く異なるおもしろさをみることもできます。

新潟県は、豪雪地帯として経済的に苦労してきた地域ではありませんが、古くから稲作を中心に生計を立て続けてきた点では、歩んできた道に大きな違いがあるともいえます。

ただし、これらを全く別々の環境と捉えるよりも、「県境に横たわるあの関田山脈があって、新潟県側でたっぷり水分をいただくから、長野盆地でりんごやももの実が成り、お互いに食することができる」などの見方をすることによって、実は両者に深い関係があるとみることができます。

（全国トップクラスの果物生産量を誇る陰には、国内トップクラスの降水量の少なさがあり、その陰には国内トップクラスの降水量を誇る新潟県があるということになります。）

隣接しながらも対極的な側面をもつ両県域ですが、このようにこの県境をはさむ地域を一体として地域経営を考えると、安定的な地域とみることができるかもしれません。

【テーマに関する参考文献など】

※　特に参考とした文献には●を付しました。

（果物全般　－　長野県）
●内山幸久（1996）：果樹生産地域の構成、大明堂
●長野県農政部（2018）：長野県の園芸畜産 2018
・長野県の農業
https://www.pref.nagano.lg.jp/koho/kids/menu02/nougyo.html
・長野県農政部（2018）：第 3 期信州農産物マーケティング推進計画
https://www.pref.nagano.lg.jp/marketing/kensei/soshiki/soshiki/kencho/marketing/documents/suisinplan.pdf
・SALMON1000 ホームページ
https://www.shinshu1000.jp/

（りんご）
●柏企画編（2007）：信州のりんご　戦後を支えた赤い果実、柏企画
りんご生産の発達要因として自然環境や栽培技術を中心に説明している。
・市川健夫・米澤稔秋（2005）：信州りんご文化誌、有限会社ゆにーく

（もも）
・小学校社会科副読本　わたしたちの県（福島県）地域教材テキスト(2007 改訂版)
http://is2.sss.fukushima-u.ac.jp/fks-db/reference/textbook19-28.pdf
・ＪＡおのみちホームページ
http://www.ja-onomichi.or.jp/einou/pdf/momo.pdf
・山梨春日居桃工房ホームページ
http://kohan-farm.com/?mode=f2

（ぶどう）
・市川健夫ほか（2007）：信州学ダイジェスト　－日本の屋根の風土学―、ブックデザインゆにーく

（くり）
・市川健夫ほか（1986）：小布施栗の文化誌、銀河書房

11　日本酒　（国内有数の酒どころ）

1　はじめに

日本では、昔から米をつかった酒が飲まれていましたが、それが現在の日本酒となるまでには、長い時間をかけて行われた技術の進歩がありました。

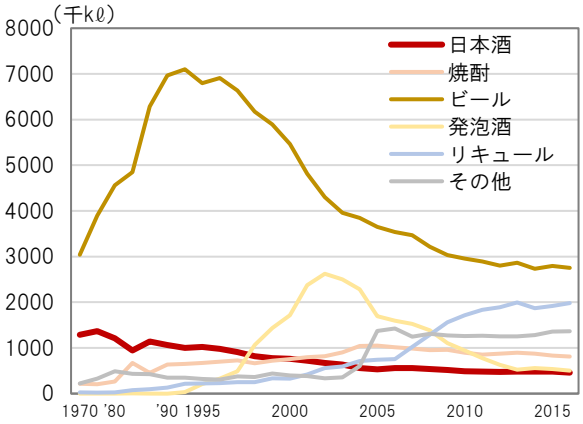
平安時代には、宮廷の中で行事用の酒がつくられるようになり、室町時代には京都市内に小規模な酒屋も現れます。そして、江戸時代中期ごろまでに、現代とほぼ同じ技術が確立します。酒づくりに適した冬季に醸造する方式が定着したのもこの頃で、杜氏・蔵人も誕生しました。

室町時代から江戸時代にかけては、奈良、伏見、伊丹、灘など近畿地方が一大産地となりました。明治時代以降は、全国清酒品評会の発足などにより全国的に技術が向上し、各地に名酒が生まれました。かつての日本酒は地域ごとに味が異なりましたが、最近は酒蔵ごとに異なる傾向にあります。

近年は酒類全体の出荷量が横ばい傾向にある中で、焼酎やリキュール類などに押されてここ 30 年間で半減していますが、中にはヒット商品を生み出したり、海外への輸出に活路を見いだす地域や酒蔵もあります。

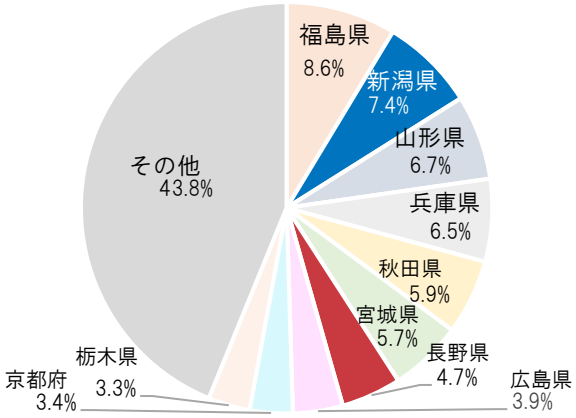
日本酒の生産量は、1 位兵庫県、2 位京都府で、3 位に新潟県が入っています。酒米の生産量では、1 位は兵庫県ですが、2 位に新潟県、3 位に長野県が入っています。

■　酒類別出荷量の推移（全国）



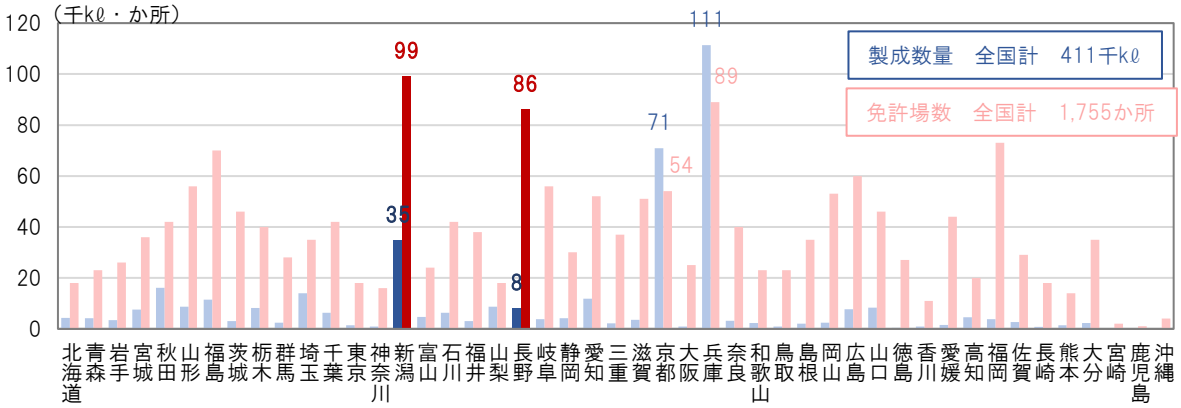
出所）国税庁「酒のしおり」をもとに作成

■　全国新酒鑑評会金賞獲得数（2008-2017）



出所）フルネット「全国新酒鑑評会　金賞受賞蔵ガイド 2018」をもとに作成

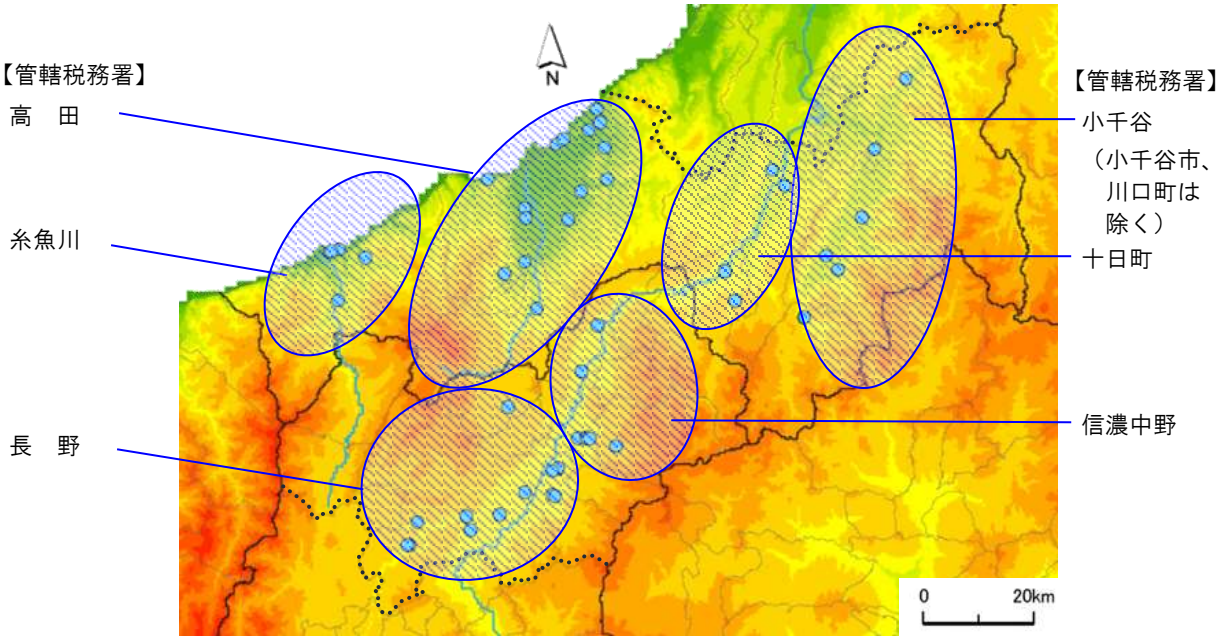
■　清酒の製成数量・免許場数（都道府県別・2017 年）



出所）国税庁「酒税課税関係等状況表」をもとに作成

2　特　徴

【酒蔵の分布】



備考）信越県境付近にある市町村（破線で挟まれた地域）の酒蔵のみ掲載。
出所）国土地理院数値地図および関東信越国税局「酒蔵ＭＡＰ（平成 29 年 12 月現在）」をもとに作成

●　魚沼地方

市町村名	数	名称
湯沢町	1	白瀧酒造
南魚沼市	3	青木酒造、髙千代酒造、八海醸造
魚沼市	2	玉川酒造、緑川酒造
十日町市	2	松乃井酒造場、魚沼酒造
津南町	2	苗場酒造、津南醸造

●　上越地方

市町村名	数	名称
上越市	12	新潟第一酒造、頸城酒造、代々菊醸造、加藤酒造、よしかわ杜氏の郷、丸山酒造場、武蔵野酒造、竹田酒造店、小山酒造店、田中酒造、上越酒造、妙高酒造
妙高市	3	君の井酒造、鮎正宗酒造、千代の光酒造
糸魚川市	5	田原酒造、池田屋酒造、渡辺酒造店、猪又酒造、加賀の井酒造

●　北信地方

市町村名	数	名称
中野市	4	天領誉酒造、井賀屋酒造店、丸世酒造店、志賀泉酒造
飯山市	2	角口酒造店、田中屋酒造店
山ノ内町	1	玉村本店

●　長野地方

市町村名	数	名称
長野市	8	よしのや、東飯田酒造店、西飯田酒造店、塩入酒造場、尾澤酒造場、酒千蔵野、今井酒造店、宮尾酒造
須坂市	2	松葉屋、遠藤酒造場
小布施町	3	桝一市村酒造、松葉屋本店、髙沢酒造
信濃町	1	高橋助作酒造店

■ 酒蔵数の多さ

● 全国に 524 か所ある税務署管内の中で、最も酒蔵（清酒の製造免許場：2017 年度）の数が多いのは、京都府の伏見税務署管内の 28 場。長野税務署管内は 18 場で第 5 位、上越市の高田税務署管内は 16 場で全国 7 位。

・ 新潟県、長野県とも酒蔵数に比して生産量は多くなく、比較的規模の小さい酒蔵が多いともいえる。

【清酒の製造免許場数ランキング】
（平成 29 年度末）

① 都道府県別

順位	都道府県	清酒免許場数
1	新潟県	99
2	兵庫県	89
3	長野県	86
4	福岡県	73
5	福島県	70
－	全　国	1,755

② 税務署管内別

順位	税務署名	清酒免許場数
1	伏　見（京都府）	28
2	久留米（福岡県）	23
3	会津若松（福島県）	20
4	長　岡（新潟県）	19
5	長　野（長野県）	18
6	高　田（新潟県）	各 16
	芦　屋（兵庫県）	
8	葛　城（奈良県） 西　条（広島県） 福　井（福井県）	各 15

出所）平成 29 年度国税庁統計データをもとに作成

■ 消費量の多さ

● 成人一人当たりの清酒消費量（2017 年度）は、都道府県別で最も多いのが新潟県であり、2 位の秋田県に大差をつけている。

新潟県内では、魚沼地方を含む小千谷税務署管内で特に高い消費量を示している。

・ 長野県は全国 7 位の消費量である（7.22 ㍑）。

飲酒量の多さもさることながら、お土産や贈答品としての需要の大きさも影響していると考えられる。

【成人一人当たりの清酒消費量ランキング】
（平成 29 年度）

① 都道府県別

順位	都道府県名	成人一人当たり清酒消費量（ℓ）
1	新潟県	11.25
2	秋田県	9.80
3	山形県	7.86
4	福島県	7.59
5	石川県	7.41
6	富山県	7.40
7	長野県	7.22
－	全国平均	5.00

② 新潟県内

順位	地域名（税務署名）	1 人当たり消費量（ℓ）
1	小千谷（長岡市川口、小千谷市、魚沼市、南魚沼市、湯沢町）	16.95
2	村　上	15.73
3	十日町（十日町市、津南町）	13.42
4	高　田（上越市、妙高市）	11.83
5	新　潟	11.35
6	巻	11.30
7	長　岡	11.02
8	佐　渡	10.69
9	糸魚川	9.93
10	新発田	9.63
11	柏　崎	9.62
12	新　津	9.09
13	三　条	8.90

出所）平成 29 年度国税庁統計データおよび総務省「推計人口（H29.10）」をもとに作成

【参考文献など】

・洋泉社ＭＯＯＫ（2017）：本気で旨い日本酒、13 頁

■　杜氏の存在

●　越後杜氏は、岩手県の南部杜氏、兵庫県の丹波杜氏と並んで、日本三大杜氏の一つとされる。

　その中の主要な位置を占める頸城杜氏は、上越地方（上越・妙高・柿崎・吉川）で活躍した。

日本三大杜氏については、公式見解としては確認していないが、下記以外の文献でも記載がみられる。

越後杜氏は、刈羽杜氏、越路杜氏、野積杜氏、頸城杜氏で構成されており、このうち頸城杜氏の中心地は現在の上越市である。

【参考文献など】

・新潟市歴史博物館（2008）：平成 20 年度企画展　酒蔵～近代新潟の酒造り～、36 頁
・丹波杜氏酒造記念館ホームページ
https://www.toji.sasayama.jp/tanbatoji/
・中村豊次郎（1999）：越後杜氏と酒蔵生活、23 頁
・新潟県酒造組合（1961）：新潟県酒造史、582-584 頁

●　長野県では、杜氏は外から雇うことが多かったが、その中においても、諏訪、小谷、飯山は、もともと杜氏の出身地であった。県が本格的に酒造工業に取り組んだ大正時代には、その 3 か所に広島から杜氏を招き、技術指導が行われた。

【参考文献など】

・田中武夫編（1970）：信州の酒の歴史、長野県酒造組合、255 頁

■　独自開発による酒米生産

【酒米生産量ランキング（平成 29 年産）】

①　都道府県別

順位	産地	生産量（t）	備考
1	兵庫県	25,829	
2	新潟県	12,208	
3	岡山県	6,266	
4	長野県	6,159	
5	秋田県	4,815	
	全　国	102,400	

②　品種別

順位	品種	生産量（t）	主産地
1	山田錦	38,431	兵庫
2	五百万石	20,564	新潟
3	美山錦	7,018	長野
4	雄　町	2,873	岡山
5	秋田酒こまち	2,417	秋田
	国内計	102,400	

http://www.maff.go.jp/j/seisan/syoryu/kensa/kome/

○　五百万石などの開発（新潟県）

●　酒米の中では山田錦に次いで 2 番目に生産量の多い五百万石は、新潟県での生産量が最も多く、上越地域はその一翼を担っている。

【五百万石の生産地トップ５（平成 29 年産）】

順位	産地	生産量（t）	備考
1	新潟県	9,209	
2	福井県	3,443	
3	富山県	3,267	
4	石川県	1,165	
5	福島県	913	
	全　国	20,564	

備考）産地品種銘柄以外の数量も含む。
出所）農林水産省（米穀の農産物検査結果）

新潟県醸造試験場の設立にあたっての使命のひとつに酒米の県産についての調査研究があった。その後新潟県農業試験場で研究が重ねられ、昭和 32 年に「五百万石」が誕生した。34 年には需要と供給の調整から、栽培適地の指定がされているが、特別指定地域には津南町の一部、普通指定地域には上越市、妙高市の一部が指定

されている。

五百万石は、麹がつくりやすく、淡麗できれいな酒質となるといわれる。

また、主に吟醸酒用の酒米開発を目指し、2004年にはこの五百万石と山田錦とを掛け合わせた「越淡麗」が誕生した。

【参考文献など】

・新潟県酒造組合(1961):新潟県酒造史、572-579頁

・新潟日報事業者(2007):新潟清酒達人検定　公式テキストブック、40-41頁

・福島顕子（2017）：酒米ハンドブック改訂版

○　美山錦などの開発（長野県）

●　酒米の中で3番目に生産量の多い美山錦は、長野県での生産量が最も多く、北信・長野地域はその一翼を担っている。

【美山錦の生産地トップ５（平成29年産）】

順位	産地	生産量（ｔ）	備考
1	長野県	4,150	
2	秋田県	1,850	
3	山形県	604	
4	福島県	186	
5	宮城県	143	
	全　国	7,018	

備考）産地品種銘柄以外の数量も含む。
出所）農林水産省（米穀の農産物検査結果）

長野県では、戦中から戦後にかけての酒米不足を受け、それまで他の酒米を他県から移入していた状況を打開する必要に迫られた。そこで、長野出身で秋田酒を銘酒にした秋田県醸造試験場長の花岡氏に相談したところ、長野県農事試験場で作り上げた信交190号の存在に気づかされたことから、昭和27年に「たかね錦」が誕生した。昭和39年には、たかね錦と山田錦をかけあわせた「金紋錦」も登場した。これらにより、酒米を自給するようになった。

また、昭和53年には、たかね錦に代わる「美山錦」が育成され、酒造適性と耐冷性の強さにより広範囲に普及した。なめらかできれのよい、さっぱりとした酒質になるといわれる。

なお、かつて地元産の良質米「たかね錦」や「美山錦」までも新潟県などへ売り込み、地元では安い米を使って酒を量産した時期があり、かつて新潟を上回る高い品質であった長野の酒の評判を落としてしまったという指摘もある。

【参考文献など】

・田中武夫編（1970）：信州の酒の歴史、長野県酒造組合、388-389頁

・福島顕子（2017）：酒米ハンドブック改訂版

・嶋悌司（2007）：酒を語る、朝日酒造、299頁

3　因果関係

※　番号は他のテーマ(01～20)との関係性、アルファベットは次の頁に補足説明があることを示す。

豪雪地帯が生み出す水や気温など　01　02

・酒づくりには大量の水が必要とされ、雪解け水は、豊富できれいな水を供給する。**新潟県**の水質は軟水で、発酵がゆっくり進み、まろやかでさっぱりとした酒になるといわれる。
・冬期間の気温が極端に低くならないことや酒蔵が雪で覆われることで、温度が一定に保たれ空気中の雑菌も抑制されるなど、酒づくりに欠かせない微生物の働きに最適な環境を生み出すとされている。　a

農閑期の産業　06

・日本有数の豪雪地帯である**新潟県**では、冬期間の出稼ぎが盛んに行われた。特に、日本酒における「寒造り」の普及拡大により、冬季が農閑期に当たる農民などにとって、杜氏としての出稼ぎは都合の良いものとなった。
・酒づくりは根気のいる仕事であるが、雪国の人の粘り強さが向いていたといわれることもある。　b

米どころ　06

・古くから米どころであり、酒づくりの原料が豊富に存在した。**新潟県**では農村部では地主層が小作米の余剰分を使って酒づくりに着手したといわれている。
・米どころとして知られる**木島平村**は、金紋錦の主産地。近年の味多様化、地産志向の高まりを受け、栽培面積を増やす。
・米どころの**飯山市**は、かつて杜氏の出身地だった。　c

技術継承への努力

・**新潟県**では、全国で唯一の日本酒専門の県立機関「新潟県醸造試験場」で技術指導や酒造好適米の開発を実施。新潟清酒学校や県立吉川高校（現在廃校）で技術を継承。
・**長野県**では、大正時代に広島等の杜氏を招いて技術指導を受け、昭和初期には品評会で高い評価を受ける。近年では若い経営者が自ら杜氏となり独自の酒づくりを探求、鑑評会などで高い評価。　d

街道沿いの宿場町の存在　05

・峠を越える街道がいくつも通り、街道沿いや宿場町に多くの酒蔵ができた。
・**長野県**は峠で分断された宿場町ごとに酒蔵があり、そのことが酒蔵の多さの一因にもなっているといわれる。　e

研究開発の努力

・**新潟県**では、就労形態や食生活が変化した高度成長期時代に、県酒造業界が一体となって時代の変化にあった新潟らしい淡麗辛口を目指した。
・**長野県**では、全国的な開発競争が激化する中、世界に通用する地酒を目標に据え、産学官で新しい県産の酒米づくりに取り組んでいる。　f

日本文化を形成する要素

・四季の変化がはっきりしている日本では、「花見酒」や「月見酒」など自然を愛でながらお酒を楽しむ文化が育まれた。
・伝統的な行事には、日本酒が用いられる。
・日本酒にあう酒の肴や珍味が生まれた。

地域づくりへの貢献

・各酒造場により、地域の水質を守る運動や、農業活性化、食文化や歴史文化のＰＲなどの取組もみられる。
・古くから続く酒蔵のたたずまいは、まちの文化的景観となり地域の観光資源ともなっている。
・酒まつりなどのイベントは、観光客や地域のファンが増加するきっかけともなっている。

【補足説明】

a 豪雪地帯が生み出す水や気温など

鉄や銅などのミネラルは酒造りに悪影響を及ぼすことから、酒造り用の水は、水道水より厳しい品質が求められる。

また、古くから、酒造りに適した水はミネラルを含む硬水で、灘などの水が高く評価されてきたが、製造技術が発達した現在では、軟水による酒造りも進んでいる。軟水による酒造りを確立したのは広島の醸造家といわれている。軟水は、発酵がゆっくり進むため、まろやかで飲み心地やわらかい酒になる。新潟県の水はほとんどが軟水であるといわれている。

【参考文献など】

・酒類総合研究所（2011.1）：お酒のはなし、酒類総合研究所情報誌
・洋泉社 MOOK（2017）：本気でうまい日本酒
・新潟日報事業社（2007）：新潟清酒達人検定公式テキストブック、24-25 頁
・小林元（1998）：雪・酒・文化、日本酒と地域文化　講演記録、上越市
・新潟県酒造組合ホームページ

b 農閑期の産業

【参考文献など】

・坂口謹一郎監修/加藤辣三郎編（1977）：共和発酵工業（株）創立 25 周年記念　日本の酒の歴史―酒造りの歩みと研究―、214 頁
・新潟県酒造組合(1961)：新潟県酒造史, 582-584 頁

c 米どころ

（新潟県）

【参考文献など】

・新潟市歴史博物館（2008）：平成 20 年度企画展　酒蔵～近代新潟の酒造り～、4 頁
・田中武夫編（1970）：信州の酒の歴史、長野県酒造組合、90 頁

（長野県木島平村の金紋錦）

金紋錦の主産地は、米どころとして知られる木島平村。1970 年ごろの最盛期には村内の金紋錦を含む酒米生産は約 7000 俵あったが、85 年には 2000 俵あまりに落ち込んだ。県内の酒蔵が手を引く中、88 年に石川県の老舗酒造「福光屋」が契約栽培による全量買い取りを始めた。やがて酒の好みが多様化、地産志向も高まり、金紋錦を求める酒蔵が県内にも出てきた。現在、金紋錦の栽培者は 20 数人で若い農家もおり、栽培面積は増えている。

【参考文献など】

・朝日新聞長野総局編（2018）：信州の日本酒と人、川辺書林、58-60 頁

d 技術継承への努力

新潟県醸造試験場の設立は、明治時代以降、酒造技術が全国に普及して生産量が増加する中で、産地間競争が激しくなったことに加え、羽越線の開通などで他の産地から酒が移入する危機感が高まったことなどがきっかけとされる。

また、新潟県清酒学校は、産業構造などの変化に伴い、技能集団である杜氏制度による酒造技能の継承が難しくなる中、1984（昭和 59）年に、全国に先駆けて設立された。新潟県立吉川高校には、1957～2003 年まで国内でも唯一となっていた醸造科があった。

【参考文献など】

・新潟市歴史博物館（2008）：平成 20 年度企画展　酒蔵～近代新潟の酒造り～、30・42 頁
・新潟酒造組合ホームページ(新潟淡麗クラブ)

1907（明治 40）年から開催された「全国清酒品評会」では、初期はほとんどが灘と伏見で占められていたが、大正 14 年までには京都、広島、秋田が、昭和 3 年にはさらに島根、長野、熊本、福島が登場した。この時から、信州清酒が自他ともに任ずる銘醸地となったとされる。

【参考文献など】

・田中武夫編（1970）：信州の酒の歴史、長野県酒造組合、251 頁

e 街道沿いの宿場町の存在

新潟県内では、江戸時代の航路網発達に伴い、直江津（今町）・柏崎・出雲崎・寺泊・新潟・岩船の港を中心として海岸筋や河川による水運の便利な地域、あるいは北陸や信越を結ぶ街道や三国街道沿いなどに酒造業が発展したといわれている。

【参考文献など】

・新潟県酒造組合（1961）新潟県酒造史、9 頁

江戸時代の長野県は、細かく分割支配され、街道、坂道も数多く存在した。よって、多くの城下町と陣屋があり、宿場も多いことから、それに付随して酒造業も発展したといわれている。

【参考文献など】

・田中武夫編（1970）：信州の酒の歴史、長野県酒造組合、78-79 頁

f 研究開発の努力

新潟県は、軟水が多く、本来はまろやかでさっぱりしたお酒が特徴であったが、戦前戦後にかけては甘口の酒が売れていたことから、売れる酒づくりのため、全国的にも新潟でも、濃醇甘口の酒造りが行われていた。

しかし、昭和 55 年を過ぎることから、ふるさと志向の風潮とともに「地酒」への関心が高まり、銘酒といわれるお酒も誕生する。昭和 60 年ごろからは、新潟県の生産量が伸びるが、これは世間の嗜好を早くとらえ、飲みやすい酒を目指した結果といわれている。

【参考文献など】

・新潟市歴史博物館（2008）：平成 20 年度企画展　酒蔵～近代新潟の酒造り～、41 頁
・秋山裕一（1994）：日本酒、岩波新書、24 頁

長野県には、県独自の酒米に「美山錦」、「ひとごこち」などがあるが、全国的な開発競争が激化する中、世界に通用する地酒を生み出すため、県農業試験場、県工業技術総合センター、信州大学工学部、県酒造組合の産学官で新しい県産酒米づくりに取り組んでいる。2017 年 3 月農林水産省に登録出願しており、数年後に登録の見通しとなっている。

【参考文献など】

・朝日新聞長野総局編集（2018）：信州の日本酒と人、川辺書林、58-60 頁

4　解　説

要　約

信越県境地域は、規模は大きくはないものの全国有数の酒蔵数を誇り、それだけ多様な日本酒が存在する地域でもあります。魚沼地域や上越地域は、日本酒の消費量も全国有数です。また、三大杜氏の越後杜氏のうちの一つ、頸城杜氏の出身地や、日本酒の原料となる主要な酒米の生産地も有するなど、生産基盤も充実しています。

このように、多様なお酒が継続し、技術・生産面でも全国の日本酒を下支えしてきたという点で、この地域は日本有数の酒どころともいえます。

豊富な雪解け水と、冬期間の気温が極端に低くならないなどの雪国の気候は、酒づくりに好影響を与えています。新潟県では、冬期間の出稼ぎとして杜氏となる人も多く、高い技術の杜氏集団が生まれました。また、古くから米どころであり、原料が近くで採れることも、酒づくりが盛んになった一つの要因といえます。このほか、多くの酒蔵が存在する背景として、この地域には、かつて峠を越える街道が多数通っており、街道沿いや宿場町ごとに酒蔵ができたこともあげられます。

新潟県では、新潟県醸造試験場での技術指導や酒造好適米の開発をはじめとして、様々な機関や酒蔵で研究や工夫が行われてきたこと、新潟清酒学校などで技術が継承されてきたことが味の維持・向上につながっています。高度成長期には、社会のニーズを捉えて県業界全体で取り組んだ淡麗辛口により、新潟のお酒が全国的に知られるようになりました。

長野県では、大正時代から県による杜氏の技術指導で評価が高まり、近年では若い経営者らが自ら杜氏となり独自の酒づくりを探求、高い評価を得てきています。全国的な開発競争が激化する中、世界に通用する地酒を目標に据え、産学官で新しい県産酒米づくりにも取り組んでいます。

日本酒は、伝統的な行事に欠かせないものであり、「花見酒」や「月見酒」などの楽しみ、様々な酒の肴など、日本文化を形作る重要な要素となっています。古い酒蔵のたたずまいは、地域の観光資源ともなります。また、各酒蔵では、食文化や歴史文化のＰＲなど地域に貢献する取組もみられます。

酒まつりなどは、観光客や地域のファンが増加するきっかけともなっています。

地域資源としての捉え方

日本酒は、もともと風土を活かした生産品ですが、技術開発などにより全国各地に美味しい日本酒が増えています。この地域に多数ある小規模な酒蔵は全国的に見ても減少傾向にあり、地域経済や経営の視点から見れば厳しいものがありますが、小規模でもブランド化を図るなどの方法で成立可能な産業です。消費者の嗜好も変化する中で、生産技術の向上や研究への努力を怠らず、酒どころとしてのブランドを守り育てていこうとする姿勢は、これからも求められるものであり、地域づくりの参考にもなると考えます。

日本酒を取り巻く環境には、人々とのコミュニケーションを含めた多様な酒文化があります。酒文化の視点でこの地域をさらに深堀りしていくことが、地域のシビックプライド醸成につながっていくものと考えます。

【テーマに関する参考文献など】

※　特に参考とした文献には●を付しました。

（日本酒全般）
・農林水産省：日本酒をめぐる状況、日本酒原料米の安定取引に向けた情報交換会（平成 28 年 3 月 22 日）資料　http://www.maff.go.jp/j/seisaku_tokatu/kikaku/160322.html
●国税庁：平成 28 年度全国市販酒類調査
・国税庁ホームページ（お酒に関する情報）　http://www.nta.go.jp/taxes/sake/index.htm
・日本酒造組合中央会編：日本酒と日本文化
●秋山祐一（1994）：日本酒、岩波書店
・江原絢子・石川尚子（2009）：日本の食文化－その伝承と食の教育－、アイ・ケイ　コーポレーション
・山口昭三（2009）：日本の酒造、九州大学出版会、
・池谷和信（2013）：生き物文化の地理学、ネイチャー・アンド・ソサエティ研究第 2 巻、海青社
・鈴木芳行（2015）：日本酒の近現代史　酒造地の誕生、吉川弘文館
・尾崎恭彦ほか（2014）：ＳＡＫＥ　ＳＡＬＯＮ　ＪＡＰＡＮ、Design　Farm＋Resort.Lcc
・たばこ総合研究センター（2010）：酒（談別冊）

（新潟県）
・新潟日報事業者（2003）：新・にいがた地酒大国、新潟日報事業所
・日本醸造協会、日本酒サービス研究会・酒匠研究会連合会（2016）：日本酒学、洋泉社
・新潟県酒造組合小史編さん委員会（2003）：新潟淡麗の創造へ、新潟県酒造組合
●松本春雄（1961）：新潟県酒造史、新潟県酒造組合
●中村豊次郎（1999）：越後杜氏と酒蔵生活、とき選書
・企画集団ぷりずむ（1993）：特集　新潟の酒、ゆきのまち通信 9 号
・新潟淡麗倶楽部（新潟県酒造組合）ホームページ　http://niigata-sake.or.jp/
・佐々木ゆみ子、恒文社編集部（2009）：八海山、恒文社
・渡井卓生（1983）：越後の吟醸酒－「八海山」の蔵を訪ねて－、紳由の会
・八海山　恒文社編集部／編 -- 恒文社 -- ２００９．７ --（新潟発ブランド物語　２）
・八海山ホームページ（季刊誌「魚沼へ」）
・嶋悌司（2007）：酒を語る、朝日酒造
●新潟市歴史博物館（2008）：平成 20 年度企画展　酒蔵～近代新潟の酒造り～
●新潟清酒達人検定協会監修･新潟清酒達人検定公式テキストブック編集委員会編（2007）：新潟清酒達人検定、新潟日報社

（長野県）
●田中武夫（1970）：信州の酒の歴史、長野県酒造組合
●朝日新聞長野総局 編（2018）：信州の日本酒と人、川辺書林
・信濃毎日新聞社（2008）：酒蔵で訪ねる信州
・長野県酒造組合ホームページ　https://www.nagano-sake.or.jp/
・中部経済連合会（2017.10）：特集 中部だより
・信州いいやま観光局ホームページ（いいやま日本酒ものがたり）
https://www.iiyama-ouendan.net/special/nihonshu/

12　ワイン　（対照的なワイン産地の存在）

1　はじめに

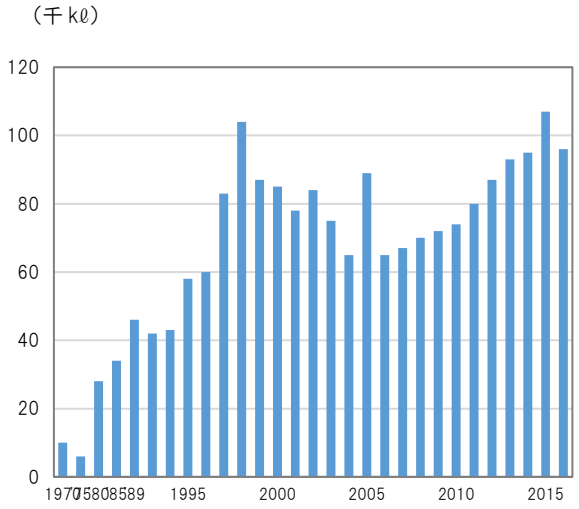
酒類全体の出荷量が減少から横ばい傾向にある中で、ワインを含む果実酒は増加傾向にあります。ワインの中でも、日本国内で栽培されたぶどうを 100%使用して国内で醸造されたものは「日本ワイン」とされます。

日本のワイン造りは、今から約 140 年前の明治時代に、生食用ぶどう栽培が盛んであった山梨県で設立されたワイン会社から始まります。当時は米不足もあり、明治政府も殖産興業政策の一環として、ぶどう栽培・ワイン醸造を振興しました。その後、1927 年には、川上善兵衛がマスカットベーリーＡを交配し、日本のぶどう栽培とワイン造りに大きく貢献しました。

ワインの消費自体が拡大したのは東京オリンピックの頃からで、その後いくつかのワインブームを経て今日に至っています。2003 年からは国産ワインコンクール（現：日本ワインコンクール）が開催され、近年では世界のワインコンクールでも評価を受けるなど品質が向上しています。

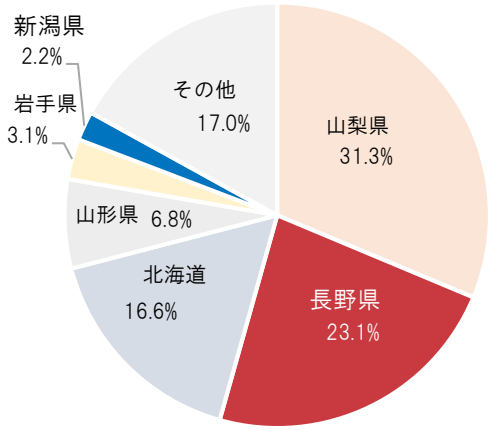
長野県は、ワイン用ぶどう生産量日本一、日本ワイン生産量では、長野県 2 位、新潟県 6 位、ワイナリーの数は長野県 2 位（34 か所）、新潟県 5 位（10 か所）となっています。

■　果実酒の出荷量の推移（全国）



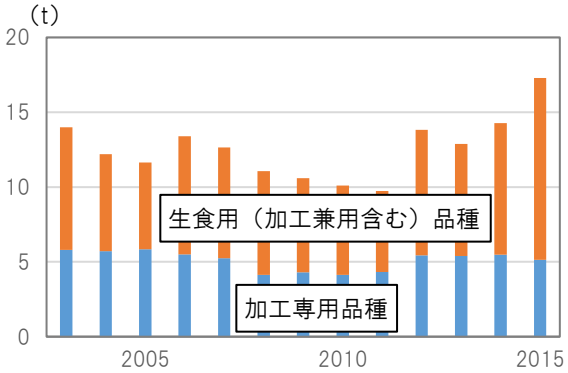
出所）国税庁「国内製造ワインの概況」をもとに作成

■　日本ワインの生産割合（都道府県別・2017 年）



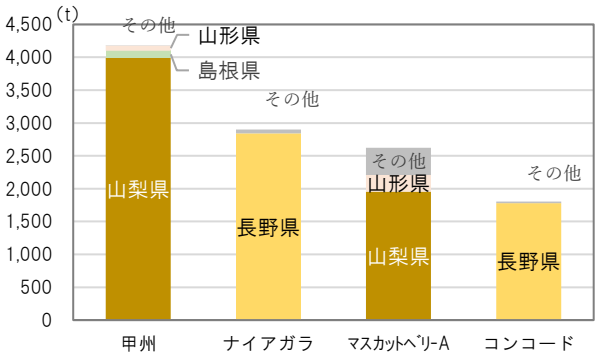
出所）国税庁「国内製造ワインの概況」をもとに作成

■　ワインブドウ生産量の推移（全国）



出所）農林水産省「特産果樹生産動態等調査」をもとに作成

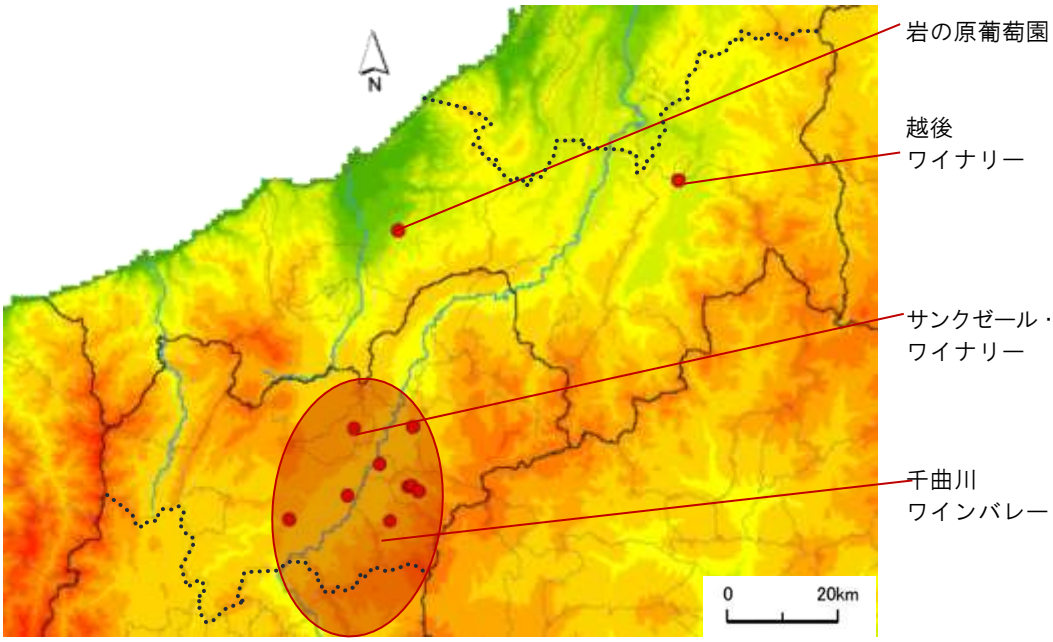
■　主なワインブドウの仕向量（2015 年）



出所）農林水産省「特産果樹生産動態等調査」をもとに作成

2　特　徴

【ワイナリーの分布】



備考）信越県境付近にある市町村（破線で挟まれた地域）のワイナリーのみ掲載
出所）国土地理院数値地図および関東信越国税局「酒蔵ＭＡＰ（平成 29 年 12 月現在）」をもとに作成

● 新潟県

市町村名	数	名称
上越市	1	岩の原葡萄園
南魚沼市	1	アグリコア越後ワイナリー

● 長野県

市町村名	数	名称
高山村	3	カンティーナ・リエゾー、信州たかやまワイナリー、ドメーヌ長谷
長野市	2	西飯田酒造店、今井酒造店
中野市	1	たかやしろファーム＆ワイナリー
須坂市	1	楠わいなりー
小布施町	1	小布施ワイナリー
飯綱町	1	サンクゼール・ワイナリー

■ 豪雪地帯のワイナリー

● 岩の原葡萄園は、日本のワインぶどうの父ともいわれる川上善兵衛が 1890 年に設立した老舗。サントリー創業者との深い縁があり、現在はサントリーの傘下にある。

冷却設備のない時代に、ワイン熟成庫である雪室を併設し冷却を実現。2015 年には日本ワインコンクールで最高賞受賞。

川上善兵衛は、民間人として初めて「日本農学賞」を受賞した人物であり、彼が開発したマスカットベーリーＡは日本を代表する赤ワインぶどう品種として国内の多くのワイナリーで栽培されている。

川上善兵衛は研究に没頭するあまり、会社の経営は危機に陥るが、地元出身の坂口謹一郎博士がワイン製造を考えていた寿屋（現サントリー株式会社）の創始者・鳥井信治郎と引き合わせ、昭和 9 年、共同出資・共同経営の株式会社「寿葡萄園」を創設、同 11 年に株式会社「岩の原葡萄園」と改称して事業を継続した。

川上善兵衛は良質なワインを造るため、発酵温度コントロールや夏場のワイン熟成庫の温度管理に雪を利用した。

【参考文献など】

・山本博（2013）：新・日本のワイン、早川書房、228 頁
・山本博（2010）：東日本のワイン
・上越市立総合博物館・サントリーワイン博物館、中村幸一監修（1976）：日本のワインづくりの先駆者　川上善兵衛、15 頁
・上越市史普及編、368 頁
・岩の原葡萄園ホームページ

● 越後ワイナリーは、1975 年、豪雪地帯の南魚沼市に設立。新潟県で最初に垣根仕立てのブドウ栽培に取り組んだほか、2001 年に雪中貯蔵庫を備えた。

【参考文献など】

・山本博（2010）：東日本のワイン
・越後ワイン（株）編著（2003）：雪国でワインに挑んだ男たち　越後ワイナリー、新潟日報事業社

■ ブドウ栽培の適地、千曲川ワインバレー

● 長野県はワイナリーの数が多く、長野県産の日本ワインはワインコンクールなどで高く評価されている。
● 長野・北信地方にもワイナリーが一定数集積しており、その一部は長野県内 4 か所のワイン集積地の一角を占める「千曲川ワインバレー」にも属している。

長野県の「信州ワインバレー構想」は、良質なワイン用ぶどうの産地が全国でも限られており、またワイン産業は視野が広いため地域活性化につながる可能性を持っていることから、栽培から醸造、販売、消費にわたる振興策として策定したもの。

【参考文献など】

・山本博（2007）：長野県のワイン、ワイン王国 10 頁
・長野県：信州ワインバレー構想　概要版

■ 加工品も手掛けるワイナリー

● サンクゼール・ワイナリーは、1975 年斑尾高原でペンション経営を始めた創業者が、ジャムづくりや農場経営を手掛け、その多角化の中で設立した。

長野の美しい丘の上で、田舎の豊かな恵みと上質な時間の提供をコンセプトとしている。フランスで誇りを持って暮らす人々に感銘を受けたこと、当時の村が掲げた農業立村の将来像と合致したことなども背景にある。

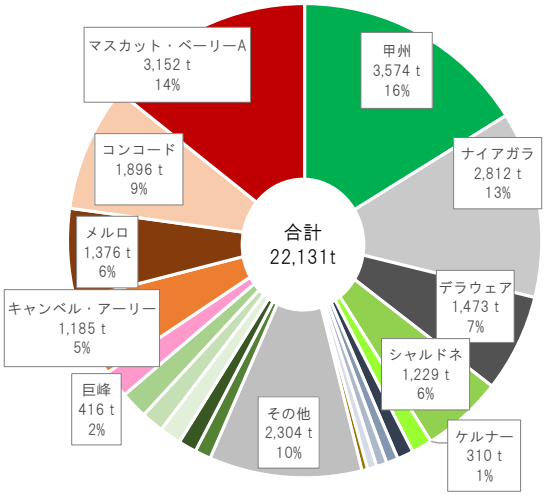
【参考文献など】

・サンクゼールワイナリーホームページ
http://www.stcousair.co.jp/wine/

■ ワイン用ぶどうの生産

● マスカットベーリーAは、岩の原葡萄園の創業者である川上善兵衛が交配した赤ワイン用の品種。現在、国産赤ワイン用品種の中では最も多く受け入れられており、日本のワインブドウの父とされる所以となっている。

【ワイン用ぶどうの品種別受入数量】
（全国・平成 28 年度）



備考）ワインの原料とするために受け入れた国産生ぶどうの品種別数量の集計値であり、実際にワイン原料に使用した数量とは符合しない。
出所）国税庁：国内製造ワインの概況（平成 28 年度調査分）

● 長野県はワイン用ぶどう生産量が日本一である。その中で、長野・北信地方を含む千曲川ワインバレーは、欧州系品種の栽培に適しているとされる。

メルロー、シャルドネのほか、カベルネ・ソーヴィニヨン、ピノ・ノワールなどが栽培されている。

【参考文献など】

・山本博（2007）：長野県のワイン、ワイン王国 16 頁
・NAGANO　WINEオフィシャルサイト

3　因果関係

※　番号は他のテーマ(01～20)との関係性、アルファベットは次の頁に補足説明があることを示す。

水はけがよい土地　01　10

・ワインの質は、原料であるぶどうの質で決まる面が大きいとされる。
・**長野市周辺**の扇状地では、水はけが良く、ワインの原料であるぶどう栽培に適している。欧州と比べても、雨は多いものの、水はけは優れているとのこと。

☞ a

盆地特有の気候（降水量・日照・温度差）　02　10

・**長野市周辺**の特徴である、降水量が少ない、日照時間が長い、昼夜の温度差が大きいなどが、ぶどう栽培に適している。
（長野県は、南北に長く、各地で気候条件が少しずつ異なるため、多様な品種のぶどう栽培が可能）

☞ b

ぶどうの栽培環境の変化　02　10

・近年は、温暖化による気温の上昇により、**長野県**内の比較的標高の高い地域でも、フランス原産のワイン用ぶどう（メルローやシャルドネなど）の栽培が可能となった。

☞ c

新たな産業の必要性　06　14

・**長野県側**では、昭和初期まで基幹産業の一つであった蚕糸業が衰退し、桑畑等の一部がぶどう畑に転換した歴史がある。
・**新潟県側**では、豪雪地帯における農家の生活向上を目指し、米栽培だけでなく、山林などを活用できるぶどう栽培とワインづくりを選択した。

☞ d

風土にあう栽培技術の開発

・**新潟県側**の豪雪地帯は、ぶどう栽培の適地とはいえないが、川上善兵衛の膨大な文献調査や交配実験等により、ぶどう栽培とワイン造りの技術を開発。
・越後ワイナリーにおいても、10年にわたる試行錯誤の末に栽培技術を確立。

☞ e

技術向上のための支援制度

・味と品質が優れたワインなどを認定する日本初の制度「長野県原産地呼称管理制度」が創設されており、長野県産ワインの品質向上に成果をあげているとされる。

☞ f

他の産業への波及

・歴史の古いワイナリーは、その生産施設自体が観光資源に。
・ワイナリー周辺にレストランやショップ、ミュージアム等が集まることで、交流人口増加や地域経済等への貢献も期待。
・りんごを用いたシードル開発を行うワイナリーも誕生。

ライフスタイルの提案

・その土地で育ったぶどうを使い、その土地で作ったワインを地元の食材と風景と共に楽しむことのできるワイナリーは、そこで行われる人の会話も含めて、新たな時間（スローフード、スローライフ）の楽しみ方を提案する。

【補足説明】

a　水はけがよい土地

長野県内には、傾斜地が多いうえ、河川が運んだ小石や砂混じりの土壌や火山灰の土壌など、水はけのよい土地が多いとされている。

【参考文献など】

・NAGANO WINEオフィシャルサイト

b　盆地特有の気候

収穫期を迎える夏から秋に雨が多い場合、良いぶどうはつくれないことから、雨量の少ない長野県は、ワイン用ぶどう栽培に適している。

ぶどうの糖度や酸度を高めるためには、日照時間が長いことも大切であり、雨の少ない長野県は日照時間も長めであり有利である。

さらに、内陸性気候のため、昼夜の温度差が大きいことから、糖度が高まり、ぶどうの着色が良くなるといわれている。

【参考文献など】

・NAGANO WINEオフィシャルサイト
・山本博（2013）：新・日本のワイン、早川書房、136 頁

c　ぶどうの栽培環境の変化

標高 700mはブドウ栽培の限界地であったが、ここ 10 年来の温暖化によりフランス原産のメルローやシャルドネなどの栽培が可能になったといわれている。

【参考文献など】

・市川健夫ほか(2007)：信州学ダイジェスト　日本の屋根の風土学、ブックデザインゆにーく
・玉村豊男「千曲川ワインバレー　新しい農業への視点」集英社新書、2013、19-24 頁

d　新たな産業の必要性

（長野県）

【参考文献など】

・青野嘉郎（1972）：日本地誌第 11 巻長野県・山梨県・静岡県、二宮書店、85 頁

（新潟県）

岩の原葡萄園の川上善兵衛は、故郷の地域振興を通して殖産興業を実現するため、米一辺倒でなく果樹も含めた幅広い農業経営を考え、不毛の山林荒廃の地を活用できるぶどう栽培をはじめたとされる。

越後ワイナリーは、時代の流れをにらんだ農業振興が発端で、農村の環境をこれ以上破壊する工場誘致と大企業の介入ではなく、豪雪地で農家が生き延びられる農業のひとつとしてぶどう栽培とワイン造りを選択したとされる。

【参考文献など】

・山本博（2013）：新・日本のワイン、早川書房、230 頁
・山本博（2010）：東日本のワイン
・(株) アグリコア越後ワイナリーホームページ

e　風土にあう栽培技術の開発

【参考文献など】

・越後ワイン（株）編著（2003）：雪国でワインに挑んだ男たち　越後ワイナリー、新潟日報事業社

f　技術向上への支援制度

同様の制度は、北海度、佐賀県などでも創設されている。

【参考文献など】

・山本博（2013）：新・日本のワイン、早川書房、140 頁
・山本博（2007）：長野県のワイン、ワイン王国、217 頁

4　解　説

要　約

信越県境地域には、豪雪地帯の地域活性化の思いから設立された「岩の原葡萄園」や「越後ワイナリー」があり、ぶどう造りに適した環境を活かした千曲川ワインバレーの地域が隣り合っています。その中には、日本ワインの育ての親などともいわれる川上善兵衛が創設した「岩の原葡萄園」や、ワインだけでなくジャムなどの加工品生産なども行う「サンクゼール・ワイナリー」など、個性的なワイナリーもあります。近年では、長野県産のワインの評価は全国的にも高まっています。

また、ワイン用ぶどう生産では、国産赤ワインの主要品種「マスカットベーリーＡ」を交配した川上善兵衛の出身地と、生産量が国内有数の長野市周辺が隣り合い、日本ワインの生産を

下支えする地域ともいえます。

長野市周辺は、降水量が少なく日照時間が長い、温度差が大きい、水はけが良いなど、ワイン用ぶどうの栽培に適した地域です。

また、環境に必ずしも恵まれていない地域においても、豪雪地帯の農家の生活向上や雪国の特徴を活かした地域活性化を目指す人材の強い思い、自地域への愛着や誇りも原動力となっています。

その他、近年の気温上昇により、長野県内での栽培に適する品種が出てきたこと、ぶどう栽培が盛んであることから良質なワインぶどうの生産が可能であったことや、長野県独自の優れたワインを認定する制度の創設などにより、品質向上への努力がなされていることも、評価が高まる背景となっています。

かつて、長野県は養蚕が盛んでしたが、それに適していた地域は、ぶどうも含めた果樹栽培にも適しており、産業の転換が図られてきたともいえます。ワイナリーの集積などが進めば、周辺に様々な産業（レストラン、カフェ、ショップ、宿泊施設など）が誕生する可能性もあります。

また、歴史の古いワイナリーは、その生産施設自体が観光資源となり、レストランやショップ、ミュージアムを併設するワイナリーは、観光客や人が集まる場となっています。

その土地で育ったぶどうを使い、その土地で作ったワインを地元の食材と風景と共に楽しむことのできるワイナリーは、そこで行われる人の会話も含めて、新たな時間の楽しみ方を提案する場所ともなります。

地域資源としての捉え方

ワインづくりの創業は、多分に個人のその土地に対する思い、あるいはワインづくりやスローライフなどに対する思いが強く出る面があります。特に、逆境ともいえる環境からの挑戦は、人の知恵と努力の力を実感できる分野でもあります。

一方、ぶどうの品種改良から栽培、ワインの製造、マーケティングとすべてがつながるチームプレーが重要であることを再認識することは、農産物の付加価値を高めるため注目される６次産業の本質を学ぶ上でも重要です。

【テーマに関する参考文献など】

※　特に参考とした文献には●を付しました。

●国税庁（2018）：国内製造ワインの状況（平成 28 年度調査分）
http://www.nta.go.jp/taxes/sake/shiori-gaikyo/seizogaikyo/kajitsu/kajitsuh28.htm
・日本ワイナリー協会（日本ワインの基礎知識）　https://www.winery.or.jp/basic/knowledge/
・酒類総合研究所（2013）：お酒のはなし　特集 ワインⅠ
●山本博（2007）：長野県のワイン、ワイン王国
・山本博（2010）：東日本のワイン、ワイン王国
●山本博（2013）：新・日本のワイン、早川書房
・高野豊（2009）：風と土のソムリエ、オフィスエム
・福田育弘（2015）：新・ワイン学入門、集英社インターナショナル
・ＮＡＧＡＮＯ　ＷＩＮＥ　オフィシャルサイト　http://www.nagano-wine.jp/
・一般社団法人ワインツーリズム監修（2015）：甲州・信州のちいさなワイナリーめぐり、ＧＢ
●上越市立総合博物館・サントリーワイン博物館（1976）：日本のワインづくりの先駆者　川上善兵衛
・木島章（1991）：川上善兵衛伝、サントリー博物館文庫
●越後ワイン㈱（2003）：雪国でワインに挑んだ男たち　越後ワイナリー、新潟日報事業社（種村芳正著）
・落希一郎（2009）：僕がワイナリーをつくった理由、ダイヤモンド社
・玉村豊男（2013）：千曲川ワインバレー　新しい農業への視点、集英社新書

13　味　噌　（生産量と質を誇る味噌の生産地）

1　はじめに

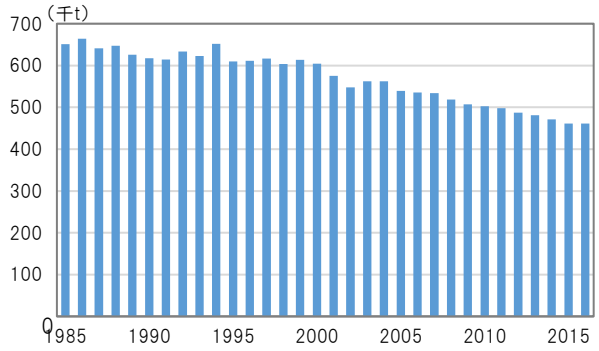
味噌の起源ははっきりとはしていませんが、古くは大宝令（701 年）に「未醤」という言葉が登場し、これが味噌の前身ではないかと考えられています。平安時代にはぜいたく品であり、鎌倉時代から武士や僧侶へ、室町時代から一般に普及したといわれています。

地方の味噌の起源には、戦国武将にまつわる様々な話が伝わっています。例えば、越後味噌のはじまりは、上杉謙信が小田原から味噌造り技術を持ち帰り農民に伝えたことによるもの、信濃国に味噌づくりが普及したのは、武田信玄が行軍用につくらせた「川中島溜まり」以来などといわれています。これらは、当時、米と味噌が絶対に必要な兵糧（戦陣食）であったためと考えられます。

かつて、味噌は家庭でつくられ、その土地の原料事情や気候風土、食習慣などの条件により、それぞれの地域特有の味噌ができていきました。現在はほとんどが工場でつくられ流通も発達していますが、それでも地域性がある程度残っている食品でもあります。一般的に、味噌は、麹の原料、味、色により分類されています。

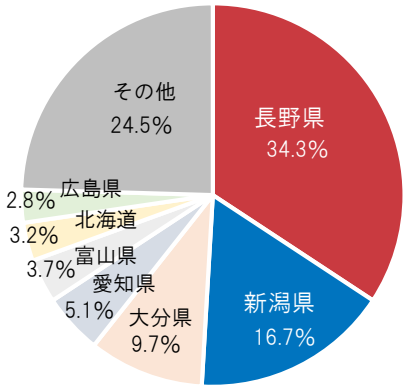
近年は、生活様式の変化とともに味噌の消費量は減少傾向にあり、新たな商品開発や栄養食品としての PR などの取組も見られる一方、海外での日本食ブームにより輸出量は伸びています。

■　味噌の出荷量の推移（全国）



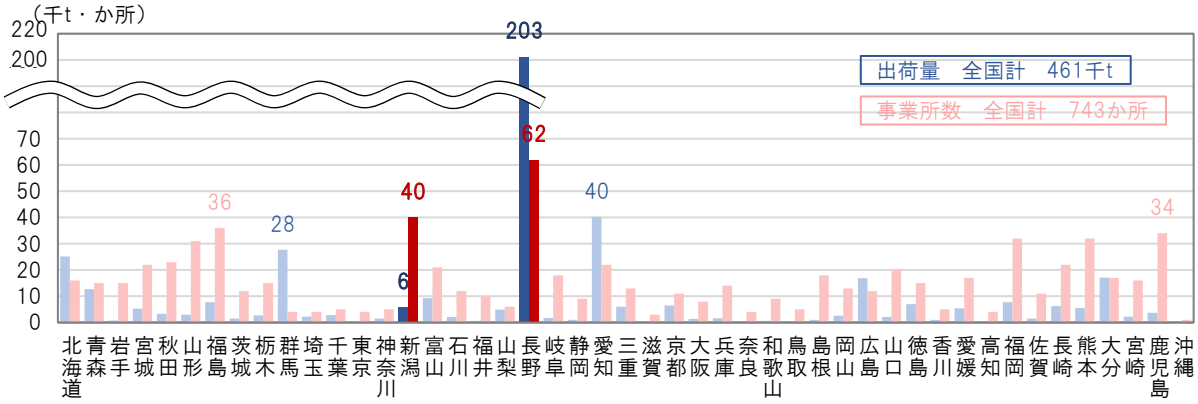
出所）経済産業省「工業統計調査」をもとに作成

■　全国味噌鑑評会の受賞数（2009-2018）



出所）みそ健康づくり委員会ホームページをもとに作成

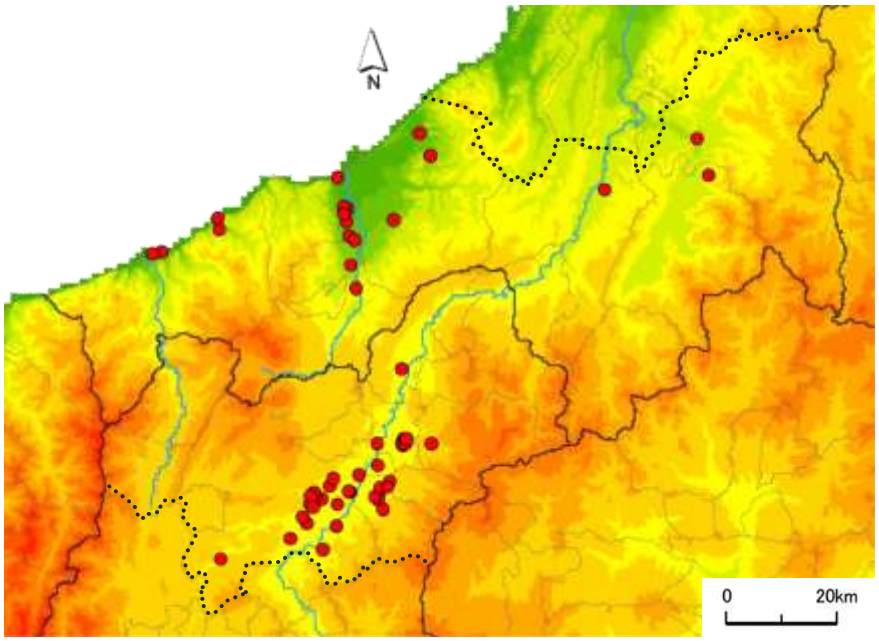
■　味噌の出荷量（都道府県別・2017 年）



出所）経済産業省「工業統計調査」をもとに作成

2　特　徴

【味噌醸造所の分布】



備考）信越県境付近にある市町村（破線で挟まれた地域）の醸造所のみ掲載
出所）国土地理院数値地図およびｉタウンページ（平成 31 年 3 月現在）をもとに作成

● 上越地方

市町村名	数	名称
上越市	11	新部味噌糀製造販売店、江村味噌醸造所、山本醤油味噌店、あおき味噌、横田酒味噌店、松木農場、町田醤油味噌醸造場、丸久味噌、高野味噌醤油醸造店、小林味噌糀店、杉田味噌醸造場
糸魚川市	4	大瀬糀屋、マルエス醤油味噌醸造店、田中味噌店、石田糀味噌店
妙高市	2	太田醸造、池田糀・味噌店

● 魚沼地方

市町村名	数	名称
十日町市	1	高長醸造場
南魚沼市	1	木津醸造所
魚沼市	1	キンペイ味噌糀店

● 北信地方

市町村名	数	名称
中野市	8	マルヰ醤油、芋川糀店、高水味噌醤油工業協同組合、丸世醸造場、中野醤油、小林醤油店、越中屋酒味噌醤油店、ふくろや
飯山市	1	加賀屋
山ノ内町	1	関谷醸造

● 長野地方

市町村名	数	名称
長野市	19	マルミ、かくおか醸造、酒井糀屋、宮入醸造、伊藤味噌醤油醸造場、成田屋醸造、信州新町味噌製造加工グループ、すや亀、藤原味噌醤油店、マルコメ、桜井醸造、三原屋、西之門よしのや、小川醸造場、井上醸造、マルモ青木味噌醤油醸造場、酒井醸造、西麹屋本舗、信州長野醸造
須坂市	6	千日みそ、塩屋醸造、土屋味噌醤油醸造場、新崎味噌醤油店、中村醸造場、糀屋本藤醸造舗
小布施町	1	穀平味噌醸造場
高山村	1	マルコメ高山工場

■ 味噌の品質

● 全国味噌鑑評会では、過去 10 年間の入賞者の約 2 割が信越県境付近の地域にある味噌蔵で占めるなど、毎年受賞者がある。

・ 例えば 2017 年(第 60 回)は 436 品が出品されているが、農林水産大臣賞 6 品中で長野市、上越市の蔵が各 1 品受賞し、食料産業局長賞 15 品中で中野市の蔵が 1 品受賞している。

全国味噌鑑評会は、日本一の味噌（最高ランクは農林水産大臣賞）を決定する鑑評会であり、一般社団法人中央味噌研究所が毎年実施している。

【全国味噌鑑評会における入賞蔵数】

① 都道府県別ランキング（過去 10 年間）

順位	製造地（都道府県名）	蔵数
1	長野県	74
2	新潟県	36
3	大分県	21
4	愛知県	11
5	富山県	8
6	北海道	7
7	広島県	6
8	群馬県 京都府 大阪府	各 5
	全　国	216

② 過去１０年間の受賞者数

年	全国	うち信越県境地域	
2009	21	5	上越 2、長野 2、中野 1
2010	21	3	長野 3
2011	21	3	上越 1、長野 2
2012	21	6	上越 1、長野 4、須坂 1
2013	21	5	上越 2、長野 1、中野 2
2014	21	7	上越 2、長野 3、中野 1、小布施 1
2015	21	4	上越 2、長野 1、中野 1
2016	27	5	上越 2、長野 1、中野 1、須坂 1
2017	21	3	上越 1、長野 1、中野 1
2018	21	4	上越 2、長野 1、須坂 1
計	216	45	上越 15、長野 19、中野 7、須坂 3、小布施 1

出所）一般社団法人中央味噌研究所ホームページをもとに作成

● 越後味噌は浮き麹味噌という別名があるように、よい米を使い、米麹の粒が白く浮いて見える。中でも上越地方のものは麹割合が多く、大豆とほぼ同量の麹を加えるとされる。

【参考文献など】

・本間伸夫（2010）：食は新潟にあり、新潟日報事業社、89 頁
・全国味噌工業協同組合連合会・中央味噌研究所（2001）：みそ文化誌、226、227 頁
・今井誠一（2011）：知っているようで知らなかった新潟味噌のうまさの秘密、特集　新潟の味噌大全、CARREL、新潟日報事業社

■ 味噌の生産量

● 都道府県別の出荷量をみると、長野県が第 1 位で、全国シェアの約 4 割を占める。

長野市には、業界上位のマルコメ味噌本社がある。長野県内には、その他にも業界上位のハナマルキ、ひかり味噌がある。

【参考文献など】

・長野経済研究所（2017 年 6 月 26 日）長野県内産業動向分析
http://www.neri.or.jp/www/genre/1000100000013/index.html
・北原広子・中沢定幸（2015）：ぶらり信州味噌蔵めぐり、信濃毎日新聞社、256 頁

■ 味噌など発酵食品を核とした取組

● 長野県では、発酵食品で健康長寿を目指す決意表明として、2018 年度に「発酵・長寿県」を宣言した。

● 上越市では、「発酵のまち上越」をキーワードに、2015 年度から研究会を立ち上げ、発酵食品による地域ブランドづくりに取り組む。

3　因果関係

※　番号は他のテーマ(01～20)との関係性、アルファベットは次の頁に補足説明があることを示す。

雪国・山国のくらし（保存食の必要性）　01　02

・かつては、漁村を除いて日常的に動物性食品を摂取することは少なく、タンパク源ともなり保存食としての役割が大きかった。
・中山間地域など海から遠い地域では、塩を長持ちさせる保存食としての役割が大きかった。

☞ a

気候に合わせた味噌づくり　02

・**新潟県**では、湿潤で気温が低くなりすぎないという雪国気候にあった味噌づくりが行われた。
・**長野市周辺**では、湿気による有害バクテリアが少ない気候を活かした味噌づくりが行われた。

☞ b

製糸業などの存在　14

・**長野県**では、製糸工業や繊維工場、松本に陸軍の進出により、そこで働く人を賄うための味噌が必要となった。
・岡谷の製糸業者は従業員のために自社で製造していたノウハウを活かし、味噌製造に進出した。

☞ c

原料となる米や大豆の栽培　06

・**新潟県**の場合、古くから米どころであり、原料となる米が手に入りやすかったことも、麹割合が高いことに影響しているといわれている。
・**長野県**では、川沿いの斜面が大豆の適作地であり畑作に発展させたこと、山国であるため貴重な米を経済的に運用する必要があったことなどがいわれている。

☞ d

日本の東西の結節点・大消費地からの近さ　05

・**上越地方**は、地形的な制約から交通の結節点となり、西からの文化の影響も受けやすかったことが麹割合に影響したともいわれる。
・関東大震災の後、**長野県**から東京に救援の味噌を送り、東京で味が評判になり全国での知名度が上がった。

☞ e

品質管理の徹底

・**長野県**では、「信州味噌」を団体商標登録し、品質の徹底管理が行われた。

☞ f

健康面への影響

・近年では、健康食品として味噌が持つ栄養についての研究も進められている。

地域ブランドづくりの素材

・味噌を使った漬物や煮物、おやきや多様な味噌汁は、この地域の郷土料理を特徴づけるものの一つとなっている。
・味噌は、もともと各家庭でつくられていたものであり、気候や味の好み、食生活の影響を反映している。地域の風土を表わす食品として、地域ブランドづくりにおいても、重要な要素の一つ。

【補足説明】

a 保存食の必要性

【参考文献など】

・農文協（2006）：日本の食文化⑤甲信越、31-32 頁
・「信州味噌の歴史」編集委員会（1966）：信州味噌の歴史、長野県味噌工業協同組合連合会、88 頁

b 気候に合わせた味噌づくり

【参考文献など】

・全国味噌工業協同組合連合会・中央味噌研究所（2001）：みそ文化誌、234 頁
・「信州味噌の歴史」編集委員会（1966）：信州味噌の歴史、長野県味噌工業協同組合連合会、155 頁

c 製糸業などの存在

明治時代後半から大正時代にかけて、長野県下では幹線道路や鉄道の整備が一気に進んだ。これに伴い、製糸工場や繊維工場が発展、松本に陸軍の連隊が置かれ、西条に炭鉱が開かれるなどで、県内のみそ需要は飛躍的に伸びたとされる。

その後、第一次世界大戦後の不況により製糸業は衰退するが、岡谷では製糸工場の建物を活用し、工員向けのみそづくりの経験をもとに、みそ醸造業に乗り出す企業家もあらわれた。

【参考文献など】

・全国味噌工業協同組合連合会・中央味噌研究所（2001）：みそ文化誌、237-239 頁

d 原料としての米や大豆の栽培

（新潟県）

地主出身の創業者が多いことから、年貢米の有効利用のためだったとの見方もある。また、上越地方の麹割合が高いことは、米どころとの関係も推測できる。

【参考文献など】

・本間伸夫（2010）：食は新潟にあり、新潟日報事業社、88 頁
・あおき味噌ホームページ（上越特産浮き麹味噌について）

（長野県）

善光寺平では、かつて西山大豆が良質とされ、木島平の米糀と合わせて仕込んだ味噌が最良といわれていたとの記述もある。

【参考文献など】

・全国味噌工業協同組合連合会・中央味噌研究所（2001）：みそ文化誌、234 頁
・「信州味噌の歴史」編集委員会（1966）：信州味噌の歴史、長野県味噌工業協同組合連合会、149 頁

e 東西の結節点・大消費地からの近さ

（城下町）

上越市高田では、徳川家康の六男・松平忠輝が高田城を開城して以来、参勤交代の要所となり東西文化の接点の地として、食文化においても加賀（関西）の影響を受けたとの見方がある。

【参考文献など】

・あおき味噌ホームページ（上越特産浮き麹味噌について）

（関東大震災の影響）

長野県では、明治時代後半から大正時代にかけて、特に製糸工場や繊維工場が発展し、そこで働く労働者が急速に増加する。また松本に陸軍の連隊が置かれ、西条に炭鉱が開かれるなどで、県内のみそ需要は飛躍的に伸長した。

さらに 1923（大正 12）年の関東大震災で救援物資として信州みそを送り込んだことを機に、評判が高まり移出量も増加した。

【参考文献など】

・全国味噌工業協同組合連合会・中央味噌研究所（2001）：みそ文化誌、237-238 頁

f 品質管理の徹底

信州みその県外移出が増えると、信州みその名前で長野県以外の生産品が売り出されるなどして品質が落ちてしまう。その対策として、信州みその品質を保つために、団体商標「信州味噌」を登録した。

【参考文献など】

・全国味噌工業協同組合連合会・中央味噌研究所（2001）：みそ文化誌、241 頁

4　解　説

要　約

信越県境地域には、雪国気候と内陸性気候の両方の地域が隣り合っていますが、いずれも全国的に味の評価が高い味噌が製造されています。

また、生産体制では、規模は小さくとも原料や技術にこだわる味噌製造と、全国トップシェアの生産量を誇る味噌製造が行われる企業が共存している地域でもあります。

味噌は全国的につくられていたものではありますが、豪雪地帯や山間部ではタンパク源や塩を得るための保存食として役割は大きいものがありました。また、雪国独自の気候が発酵によい影響を与え、湿気の少ない気候が有害バクテリアを少なくするなど、各地域で気候の特性を活かした味噌づくりが進められてきたともいえます。

上越地域の味噌は、米麹の割合が多く、良質の米を使った浮き麹味噌が特徴ですが、これは西の文化の影響を受けやすい交通の結節点であり、米がたくさんとれたことも影響しているといわれることもあります。

また、長野市周辺を含む長野県から味噌が全国展開する背景には、善光寺中心の大消費地からはじまり、製糸工業や繊維工場、松本の陸軍による味噌需要、岡谷の製糸業者の味噌製造進出があり、さらに関東大震災で信州から東京に救援の味噌が送られ、その味が評判になったなどの経緯があります。

味噌を使った漬物や、おやき、多様な味噌汁は、この地域の郷土料理を特徴づけるものの一つとなっています。近年では、味噌が健康にとってもよい影響を与えるとの研究も行われています。

また、味噌は地域の風土を表わす食品として、各地の地域ブランドづくりにおいても、重要な要素の一つとなっています。

地域資源としての捉え方

味噌はもともと多くの家庭で作られていたものですが、規模の小さな家内制工業が出現することで味噌は商品となり、さらにその中から全国展開する規模を持つ企業も現れました。これらが同居する状態は、食品の製造や流通過程の変遷を学び、今後を考える上でも好材料といえます。

また、健康食品としても注目される味噌を通じて、地域の食文化の良さを再発見できる機会になるとも考えます。

【テーマに関する参考文献など】

※　特に参考とした文献には●を付しました。

（味噌関係　－　全国）
・中央味噌研究所 監修（1999）：みそを知る、みそ健康づくり委員会
●全国味噌工業協同組合連合会・中央味噌研究所（2001）：みそ文化誌、みそ健康づくり委員会
●小泉武夫（1989）：発酵、中央公論社
●小泉武夫（2016）：醤油・味噌・酢はすごい、中公新書
●農山漁村文化協会（2006）：日本の食文化⑤甲信越
・渡邊敦光（2018）：味噌大全、東京出版
・KIRIN 食生活文化研究所
https://www.kirin.co.jp/csv/food-life/know/activity/ferment/miso/column_01.html

（味噌関係　－　新潟県）
・創業 100 周年事業記念誌編集室、新潟日報事業社（2001）：マルゴ百年物語、マルゴ味噌株式会　社
・新潟日報事業社（2001）：特集 新潟の味噌大全、ＣＡＲＲＥＬ第 18 巻 4 号
●本間伸夫（2010）：食は新潟にあり、新潟日報事業社

（味噌関係　－　長野県）
●「信州味噌の歴史」編集委員会（1966）：信州味噌の歴史、長野県味噌工業協同組合連合会
・青木佐太郎（1999）：私のアルバム、マルコメ（株）
・北原広子・中沢定幸（2015）：ぶらり　信州味噌　蔵めぐり、信濃毎日新聞社
・株式会社マルダイ（1999）：マルダイ味噌百壱年史、三盛館

【食全般に関する参考文献など】

（全国　－　地誌・民俗）
・日本地誌研究所　青野壽郎・尾留川正平編（1972）：日本地誌 9 中部地方総論・新潟県、二宮書店
・日本地誌研究所　青野壽郎・尾留川正平編（1972）：日本地誌 11 長野県・山梨県・静岡県、二宮書店
・山本正三ほか（2006）：日本の地誌 2 日本総論、朝倉書店
・斎藤功ほか（2009）：日本の地誌 6 首都圏Ⅱ、朝倉書店
・磯貝勇（1973）：日本の民俗 23　新潟、第一法規出版
・堀田吉雄（1972）：日本の民俗 24　長野、第一法規出版
・地方史研究協議会（1961）：日本産業史大系１　総論篇
・地方史研究協議会（1960）：日本産業史大系５　中部地方篇
・市川健夫（2010）：日本農業と食文化、第一企画
・市川健夫（2010）：ブナ帯文化と風土、第一企画

（全国　－　食文化）
・宮本常一（1977）：宮本常一著作集第 24 巻　食生活雑考、未来社
・芳賀登，石川寛子監修（1998）：食文化の領域と展開、全集　日本の食文化第一巻、雄山閣出版
・芳賀登，石川寛子監修（1998）：郷土と行事の食、全集　日本の食文化第十二巻、雄山閣出版
・石川寛子（1999）：地域と食文化、放送大学教育振興会
・江原絢子・石川尚子・東四柳祥子（2009）：日本食物史、吉川弘文館
・成瀬宇平（2012）：47 都道府県　伝統食百科、丸善出版
・成瀬宇平（2013）：47 都道府県　伝統調味料百科、丸善出版

・成瀬宇平（2015）：47 都道府県　汁物百科、丸善出版
・農山漁村文化協会（1993）：日本の食生活全集 49　日本の食事事典Ⅰ　素材編
・農林水産省（2007）：農山漁村の郷土料理百選
・吉川誠次ほか（1995）：食文化論、建帛社
・江後迪子（2004）：南蛮から来た食文化、弦書房
・武光真（2009）：食の進化から日本の歴史を読む方法、河出書房新社
・岸朝子監修（2011）：日本各地の味を楽しむ　食の地図、帝国書院
・石毛直道（2015）：日本の食文化史　－旧石器時代から現代まで、岩波書店
・尾形希莉子・長谷川直子（2018）：地理女子が教える　ご当地グルメの地理学、ベレ出版

（新潟県）
・山口賢俊（1972）：日本の民俗　新潟、第一法規出版
・桜井　薫（1972）：ふるさとの味　新潟料理、第一法規出版
・新潟県地誌研究会、本間信夫（1976）：新潟県の雪－その科学と生活－、野島出版
・新潟県農業改良協会（1981）：にいがたの味　行事食・郷土食編、第一印刷所
・朝日新聞社編（1985）：郷土料理とおいしい旅 10　新潟・富山・石川・福井、凸印刷
・田中一郎（1999）：みごとな味　美味百景、新潟日報事業社
・佐藤国雄（2000）：食は越後にあり　新潟のおいしい風景、恒文社
・小林瑠美子（2001）：ふるさと季節の味、新潟日報事業社
・新潟日報ＯＢペンクラブ（2001）：新・にいがた味 100 選、新潟日報事業社
・板垣俊一（2006）：新潟県の地域と文化　－地域を学ぶために－、雑草出版（あかつき印刷出版部）
・向笠千恵子（2010）：まるごとわかる　ふるさとおもしろ食べ物百科　第 2 巻南関東・甲信越・北陸、日本図書センター
・本間伸夫（2010）：増補改訂版　食は新潟にあり　－新潟の風土・食・食文化、新潟日報事業者
・新潟県食品研究所（1992）：新潟県食品研究所 50 年の歩み
・新潟県農業総合研究所食品研究センター（2002）：食品研究センター創立 60 周年記念誌―最近 10 年の歩み－
・新潟県農業総合研究所食品研究センター（2012）：食品研究センター創立 70 周年記念誌―創立 80 周年に向けて－
・新潟市教育委員会（2002）：新潟の食文化　－過去から現在そして未来へ－、第 8 期にいがた市民大学ゼミナール修了レポート集

（上越地方）
・越後田舎体験推進協議会（2010）：雪国の食文化　食ものがたり
・新潟県安塚町スローフード講座＋谷川俊太郎ほか（2004）：風土が料理人、梨の木舎

（魚沼地方）
・渡辺行一（1971）：越後南魚沼民族誌、慶友社
・十日町商工会議所（2011）、十日町雪ものがたり 120－雪とともに生きる－
・十日町市（2017）：ふるさと教材　ふるさと十日町
・つな GO プロジェクト（2016）：雪国つなんだより　おいしいお米と津南のくらし
・笛木孝雄、雪国文化研究ワーキンググループ（2016）：雪国の風土とフード、雪国観光圏
・スノーカントリーフリークプラス
　http://www.scfplus.com/?p=315（山菜）
　http://www.scfplus.com/?p=617（日本酒）
・八海醸造株式会社（2015-12）：特集　魚沼の冬を味わう、魚沼へｖｏｌ.49

（長野県）
・市川健夫・倉島日露子監修、長野県商工会連合会婦人部編（1985）：信州の郷土食～“ふるさとの味”と食文化、銀河書房
・市川健夫（2012）：信州学テキスト、第一企画
・「日本食生活全集　長野」編集委員会（1986）：聞き書　長野の食事、農山漁村文化協会
・今村龍夫（1986）：信濃の食文化　ナウマン象狩りから長寿県まで、共立プラニング
・今村龍夫（1992）：イロリ端の食文化　信州の伝統の味・その源流を訪ねて、郷土出版社
・信州大学農学部　食を考えるグループ編（1992）：長寿県・信州の食を考える、郷土出版社、
・第一企画編（2015）：日本の健康を支える信州の食企業、ダイヤモンド社、
・小泉武夫・横山タカ子（2016）：信州の発酵食、しなのき書房
・長野県立歴史館（2001）：信濃の風土と歴史⑦　食　－とる・つくる・たべる－
・長野県立歴史館（2018）：日常生活からひもとく信州、信濃毎日新聞社
・もっと味せます長野アソビマワルナガノ　公式観光ポータルサイト
http://www.motto-nagano.net/modules/contents/content0026.html（そば）
http://www.motto-nagano.net/modules/contents/content0025.html（おやき）
http://www.motto-nagano.net/modules/contents/content0027.html（郷土料理）
・長野県魅力発見ブログ
https://blog.nagano-ken.jp/nihonichi/page/8
・長野県ホームページ（意外と頑張ってます長野県）
https://www.pref.nagano.lg.jp/kikaku/kensei/gaiyo/chiji/igaito.html
・中日新聞　＞　長寿しなの　彩食記
http://www.chunichi.co.jp/article/feature/saisyokuki/list/
・長野県農業関係試験場　https://www.agries-nagano.jp/
・東京工業大学　ぐるなび食の価値創成共同研究講座「長野県の食文化」
http://comp.bio.titech.ac.jp/gnavi/food_culture_survey/results/nagano/

（長野地方）
・田中磐（1980）：しなの食物誌，信濃毎日新聞社
・高野悦子（1982）：信州の郷土料理、信濃毎日新聞社
・八十二文化財団（1997）：長野県の郷土と文化
・中田敬三（2002）：なんでも食べるゾ信州人　長寿県の知られざる食文化考、郷土出版社
・武田徹監修　長野県商工会女性部連合会編集（2005）：信州　ふるさとの食材、ほおずき書籍
・信州スローフード協会（2008）：信州旬食　食のツボ、信越放送
・長野県農村文化協会（2013）：信州ながの　食の風土記－未来に伝えた昭和の食―、農山漁村文化協会

（北信地方）
・八十二文化財団（1990）：信州の雪国　雪国人の心を探る
・笹本正治（2003）：飯山風土記、飯山市振興公社
・飯山市「食の風土記」編纂委員会（2005）：信州いいやま食の風土記、飯山市
・飯山市社会福祉協議会（2010）：信州いいやま暮らし、農文協
・まちなみカントリープレス（2015）：別冊 KURA 信州中野　故郷の大地が育む農の恵み
・信越９市町村広域観光連携会議：信越自然郷（パンフレット）

14　繊　維　（国内有数の蚕糸や織物生産の歴史）

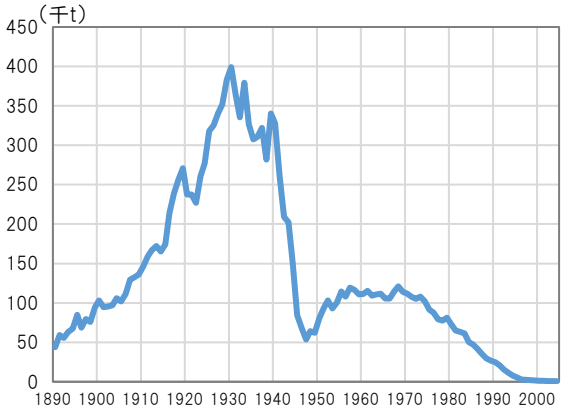
1　はじめに

衣服は人間生活に必要不可欠なものであり、古くから麻、藁、絹、綿などの植物が用いられてきました。麻や絹は主に東日本、綿は西日本で中心につくられており、特に絹の輸出は日本の近代化を支えた時期もありました。

中でも、新潟県は織物、長野県は絹について国内トップクラスの生産を誇った時期もあります。その後、合成繊維や外国産の安価な製品が主流になる中で、生産量は減少してきていますが、重要文化財や伝統的工芸品などに指定されたものもあります。

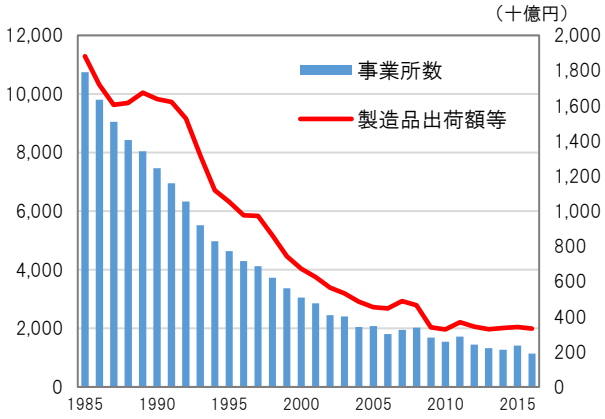
国内繊維業全体では、近年、衣料向けが減少し、自動車や航空機等の産業資材、おむつやカーペット等の衛生・生活資材向けの割合が増加しています。

■　繭の収穫量の推移（全国）



出所）農林水産省「繭生産統計」をもとに作成

■　織物業の事業所数と出荷額の推移（全国）

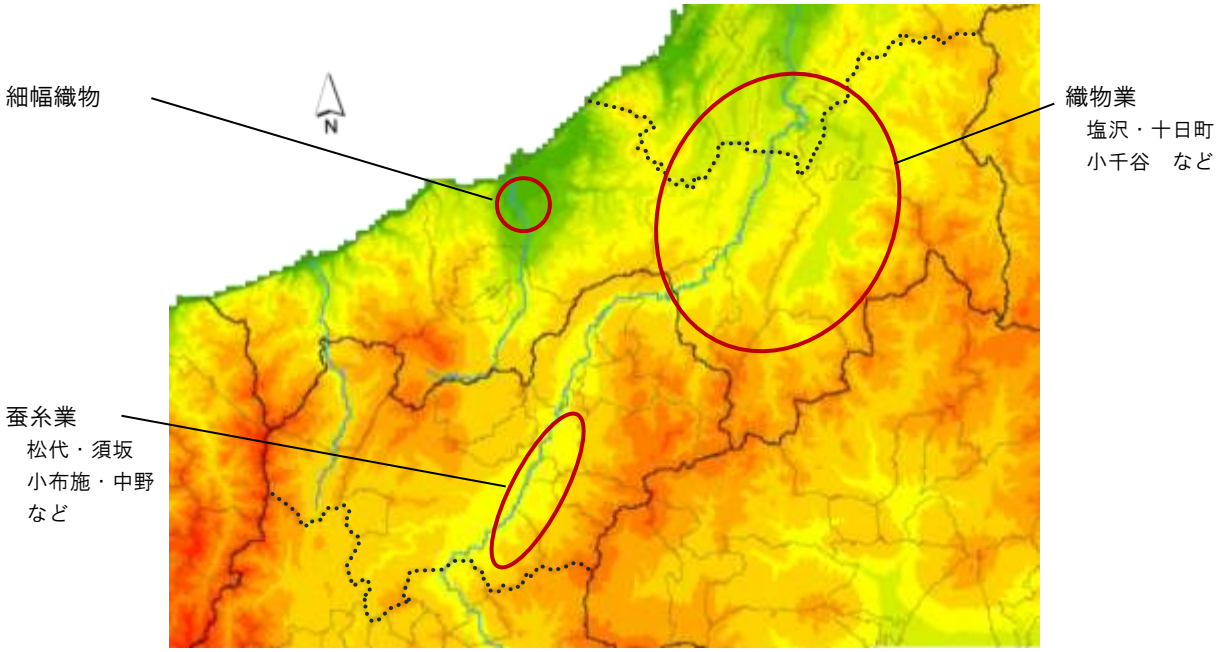


備考）事業所数は従業員４人以上
出所）経済産業省「工業統計調査」をもとに作成

■　国指定伝統的工芸品（織物）の分布

出所）経済産業省「伝統的工芸品の指定品目一覧」をもとに作成

2　特　徴



備考）信越県境付近にある市町村（破線で挟まれた地域）の取組のみ掲載
出所）国土地理院数値地図および経済産業省「伝統的工芸品の指定品目一覧」をもとに作成

■　織物生産の発達（新潟県）

● 縄文時代の衣料の主流であり、カラムシ（苧麻）の繊維を原料とするアンギンの製作方法が現在まで伝承されているのは、国内で十日町・津南を中心とする魚沼地方のみといわれる。

アンギンは、カラムシなどの植物の繊維を素材にして編まれた布のことで、縄文人の衣料の主流であったことが明らかになっている。古い技法を現代に伝えるアンギン製品や製作工具、製作技法が保存伝承されているのは、全国的に見ても十日町市、津南町を中心とする魚沼地方だけである。

【参考文献など】

・十日町市（2017）：ふるさと教材　ふるさと十日町

● 正倉院に上越市または妙高市の庸布が収蔵。中世には越後の生産量が日本一の時期もあり。

正倉院には「越後国美守」との記載がある庸布があるとのこと。ただし、これが三和区美守を指すのか、妙高市美守を指すのかは再検討の余地があるとの指摘もある。

【参考文献など】

・児玉彰三郎（1971）：越後縮布史の研究、東京大学出版会
・赤澤計眞（1998）：越後織物史の研究、高志書院

● 中世・近世に発達した越後上布は、ユネスコの無形文化遺産に選定。
● カラムシを素材とし近世を中心に生産された越後縮は、薩摩上布に次ぐ高級夏織物。その用具や関連資料は国指定重要有形民俗文化財。

越後縮は、カラムシの茎の繊維を原料とした麻織物であり、近世に入り、越後布に技術的な改良を加えたもの。絹織物の普及などによって、明治時代にはほとんど生産されなくなった。越後縮の紡績用具及び関連資料は、1986 年に重要有形民俗文化財に指定された。

【参考文献など】

・ゆきのまち通信 49 号（1997）：特集　雪の系譜　新潟県――十日町のきもの
・十日町市（2017）ふるさと教材　ふるさと十日町

■ 織物業の発達（新潟県魚沼地方など）

● 塩沢紬、本塩沢、小千谷縮、小千谷紬、十日町絣、十日町明石ちぢみは、国指定の伝統的工芸品に指定（全国の指定織物は 38 品）。

経済産業大臣指定の伝統的工芸品は全国に 232 品（H30.11 現在）あるが、このうち織物は 38 品指定されている。これによれば、信越県境付近は、沖縄県の 12 品目に次いで伝統的工芸品の織物が集中する地域ということができる。

【国指定伝統的工芸品（織物）の指定品目】

地方	名称
北海道・東北	二風谷アツトウシ、奥会津昭和からむし織、置賜紬、羽越しな布
関東甲信	結城紬、伊勢崎絣、桐生織、秩父銘仙、村山大島紬、本場黄八丈、多摩織、塩沢紬、小千谷縮、小千谷紬、本塩沢、十日町絣、十日町明石ちぢみ
中部	牛首紬、信州紬
近畿	近江上布、西陣織
中四国	弓浜絣、阿波正藍しじら織
九州	博多織、久留米絣、本場大島紬
沖縄	南風原花織、久米島紬、宮古上布、読谷山花織、読谷山ミンサー、琉球絣、首里織、与那国織、喜如嘉の芭蕉布、八重山ミンサー、八重山上布、知花花織

出所）経済産業省（日用品・伝統的工芸品）ホームページをもとに作成

● 十日町市の絹織物生産高は、ピーク時に比べて大幅に減少はしたが、西陣・丹後に次ぐ日本有数の歴史的機織地といわれる。

昭和 59 年の生産高として、3,200 億円の京都西陣、1,500 億円の丹波に次いで、351 億円の十日町との記載がある。

現在は、昭和 51 年のピーク時（581 億円）から 10 分の 1 以下に減少しているが、国内外を対象に積極的な生産・販売活動が行われている。

【参考文献など】

・佐野良吉（1985）：きもの十日町　五十年のあゆみ、十日町織物工業協同組合
・池田庄治編著（1978）、新潟県の地場産業、野島出版

■ 蚕糸業の発達（長野県）

● 蚕糸業とは、蚕種製造・養蚕・製糸で構成される産業の総称である。明治時代に長野県は「蚕糸王国」と称される。県内では岡谷や上田などでの生産が際立つものの、小布施、須坂、松代などでも生産していた。

● 当時の中野器械製糸場は、富岡、二本松とならんで日本三大製糸場と称された。ただし、岡谷や上田に比べると早期に衰退した。

● 須坂市では 1887 年頃に 100 を超える製糸場を抱え、「製糸王」と評される越寿三郎を輩出した。

魚沼等の中山間地域でも、古くから養蚕業は営まれていた。上越市では、明治時代に長野県から桑苗を購入し、砂丘地帯や一部中山間地域で生産した時期もある。

【参考文献など】

・阿部勇（2016）蚕糸王国信州ものがたり、信濃毎日新聞社
・大潟町史
・柿崎町史

■ 細幅織物の生産（上越市）

● 上越市高田はバテンレース*の国内唯一の産地。（福井、静岡などの産地は戦前に消滅）

● バテンレースの原料である細幅織物は、かつて全国生産の 65%を占めていたといわれている。

【参考文献など】

・上越市史
・上越市史現代史部会（1997）：バテンレースと細幅織物、上越市史叢書 1

3　因果関係

※　番号は他のテーマ(01～20)との関係性、アルファベットは次の頁に補足説明があることを示す。

生産に有利な雪国の気候　02

（新潟県の場合）
- 麻織物の原料である苧麻は、生育期に多量の雨を必要とし、湿度が高く強風の少ない寒冷地を好む。
- 雪国の冬期間は高い湿度が安定的に続くことから、糸の紡ぎや織りなどの工程において、糸を切れるのを防いだ。
- 雪に晒すことで漂白効果も得られた。

稲作以外の仕事の必要性　06

- 長野県側は河川敷や傾斜地など、稲作等に向かない地域が多く、稲作に代わる産業が求められた。そのような土地であっても、養蚕に必要な桑の葉は栽培可能であった。
- 新潟県をはじめとする豪雪地帯では、農閑期の仕事が求められた。

為政者の動向

- 戦国時代の上杉家は、麻栽培と越後上布の生産を奨励。京都への輸出を行うなど、貴重な収入の一つに。
- 江戸時代には上杉家の会津移封に伴い麻栽培は衰退、その後生産が盛んになった同地からの仕入れにより対応するが、その後の新たな織物の開発の契機に。
- 江戸時代の信州各藩は、養蚕を奨励した。

伝統と革新の連続性

- 麻栽培や麻織物の衰退後も、絹織物への転換、家内工業から工場制、手工業から機械化、季節生産から通年生産、織りから染めへの転換など、これまで培ってきた技術を活かしながら、技術の高度化や生産物の転換などを行い、今日に至る。

生産を支えた人材の気質

- 織物づくりは根気のいる作業ではあり、雪国ならではの人々の根気強さが支えたといわれる。
- 須坂市の製糸工場で生産に携わった女工の多くは、越後（新潟県）からの出稼ぎによるものだったといわれる。

他の工業への転換・発展

（以下例示）
- 上越市の有沢製作所（東証一部上場企業）は、バテンレースの原材料である細幅織物の生産技術を活かし、フィルム生産などへと転換して発展。
- 須坂市の蚕糸業からの投資により水力発電所が建設され、その電力によって上越市に肥料製造会社が立地し、現在の信越化学工業の起源に。

果樹園や工場地としての利用　10

- 基幹産業ともいえる養蚕業が昭和の世界恐慌などにより衰退した後、桑畑はりんご、もも、ぶどう、栗などの果樹園に転換した。
- 同じく製糸工場の広大な跡地には、大手精密機械工業の工場や大型ショッピングセンターなどが誘致されている。

特徴的な街並みの形成

- 須坂市には、製糸業などで栄えた時代の蔵が数多く残されている。明治初期で 3,000 人の人口が、昭和初期には 2 万人超となり、急速に都市化が進んだため、巨大迷路の街ともいわれる。

※その他、昭和初期の満州開拓団や満蒙開拓青少年義勇軍に対し、長野県は国内で最も多い人数を送り出しているが、この一因には蚕糸業衰退もあったとされる。

4　解　説

要　約

信越県境地域の織物は、魚沼地方を中心とした豪雪地帯における縄文時代のアンギンにさかのぼり、現在は、伝統的工芸品や産業として継続する織物の歴史は国内有数といえます。

北信地方では、須坂や松代を中心に蚕糸業が盛んであった時代もあり、そのことが現在のまちの基盤づくりに県を越えて影響しています。また、上越市のバテンレースは、国内唯一の産地です。

雪国ならでは、あるいは活用せざるを得ない制約条件を逆手に取って地場産業が形成されています。

魚沼地域では、雪国ならではの気候の特徴により、苧麻の生育に適していたり、織り作業に有利であったり、雪さらしによる漂白効果なども得ることができました。雪国ならではの人々の根気強さが織物産業を支えたともいわれています。

また、伝統と革新を繰り返してきたことにより継続したという要因もあります。例えば、上杉家の麻栽培奨励にはじまり、麻栽培衰退後は絹織物への転換、家内工業から工場制、手工業から機械化、季節生産から通年生産、織りから染めなど、時代とともに変化し生き残り続けてきました。

養蚕については、他の作物が育ちにくい河川敷を活用して桑の生産が行われ、信州各藩もそれを奨励しました。

かつての繊維産業の発展は、今につながる他の産業へも波及しました。例えば、現在バテンレースの生産量は少ないものの、原材料の細幅織物の生産技術を活かしフィルム生産などへと転換した一部上場企業が存在します。
また、養蚕業からの投資により水力発電が行われ、そこから信越化学など企業の立地につながるなど、産業転換の原動力にもなっています。

そのほか、織物の産地で蕎麦のつなぎにフノリを使うことは、織物作成過程でフノリを使うことと関係しているともいわれています。

地域資源としての捉え方

農閑期の仕事をいかに確保するかという思いの中から、風土を活かして生み出された産業である点は共通しています。

時代は変わり、海外を含めた経済情勢の変動や輸入品等の影響を大きく受ける中で、規模は縮小しつつもその価値を高めていく方向、あるいは工程にアレンジを加える方向、さらにはその技術や風土を活かして別の産業へ転換してきた方向など、隣接する魚沼、北信、上越地方それぞれの繊維業発展の経過は異なりますが、この継承と革新を繰り返してきた伝統の歴史は、地域づくりに共通する点が大きいと考えます。

【テーマに関する参考文献など】

※　特に参考とした文献には●を付しました

（新潟県）
・児玉彰三郎（1971）：越後縮布史の研究、東京大学出版会
●池田庄治編著（1978）：新潟県の地場産業、野島出版
・土田邦彦（1980）：越後の伝統織物、野島出版
・土田邦彦（1990）：新潟県織物史、野島出版
・赤澤計眞（1998）：越後織物史の研究、高志書院
●犬丸直・吉田光邦編、伝統的工芸品産業振興協会監修（1992）：日本の伝統工芸品産業全集・第１巻 染織、ダイヤモンド社
・十日町商工会議所（2011）：十日町雪ものがたり 120－雪とともに生きる－
●企画集団ぷりずむ（1997）：特集 雪の系譜　新潟県　――十日町のきもの、ゆきのまち通信 49 号
・八海醸造株式会社（2010）：魚沼へ vol.28
・一般社団法人雪国観光圏（2016）：SNOW COUNTRY FREAK Vol.18　雪国と織物、滝澤印刷
・十日町市（2017）：ふるさと教材　ふるさと十日町

（長野県）
●企画集団ぷりずむ（1993）：特集 雪の系譜　紡・織・裂　――信州・長野、ゆきのまち通信 30 号
●阿部勇（2016）：蚕糸王国信州ものがたり、信濃毎日新聞社
・新津新生（2008）：「蚕糸王国長野県」はこうしてつくられた　信州自治研（202）7-16、長野県地方自治研究センター
・新津新生（2017）：蚕糸王国長野県　―日本の近代化を支えた養蚕・蚕種・製糸－、川辺書林

15　温　泉　（国内有数の温泉集積地）

1　はじめに

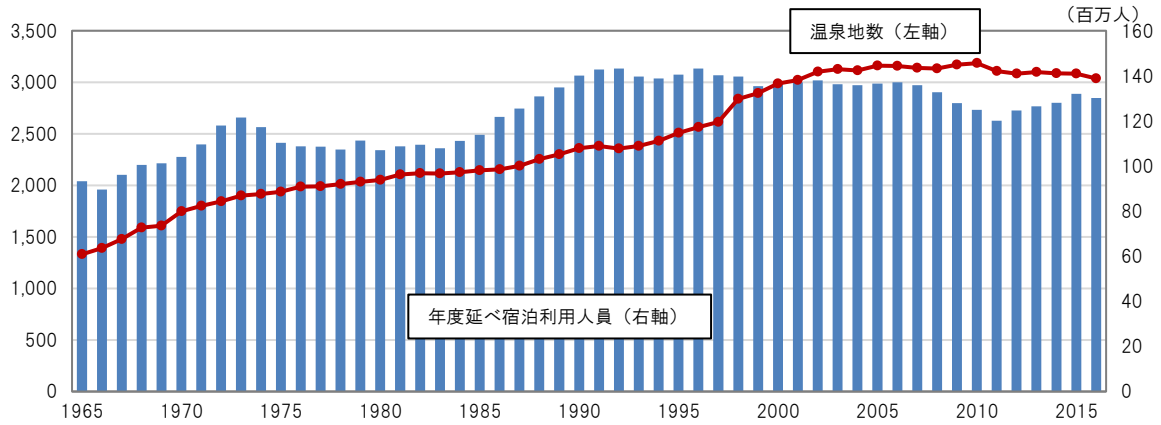
温泉は世界各地に存在しますが、日本国内には 3,000 か所以上の泉質の多様な温泉地が密集し、療養、保養、観光などに積極的に活用されていることから、温泉大国ともいわれています。

温泉の歴史は古く、日本三古湯といわれる道後、有馬、白浜温泉は古事記などにも記載されるほか、箱根、熱海、別府などのように古代から現在まで多くの利用客を集める温泉地もあります。

一般に温泉は火山帯に多く存在しますが、掘削技術の進歩などから非火山帯での温泉地も少なくありません。このことから、温泉地は全国的に分布していますが、その数を都道府県別にみると、第 1 位は北海道、第 2 位は長野県、第 3 位は新潟県となっています。

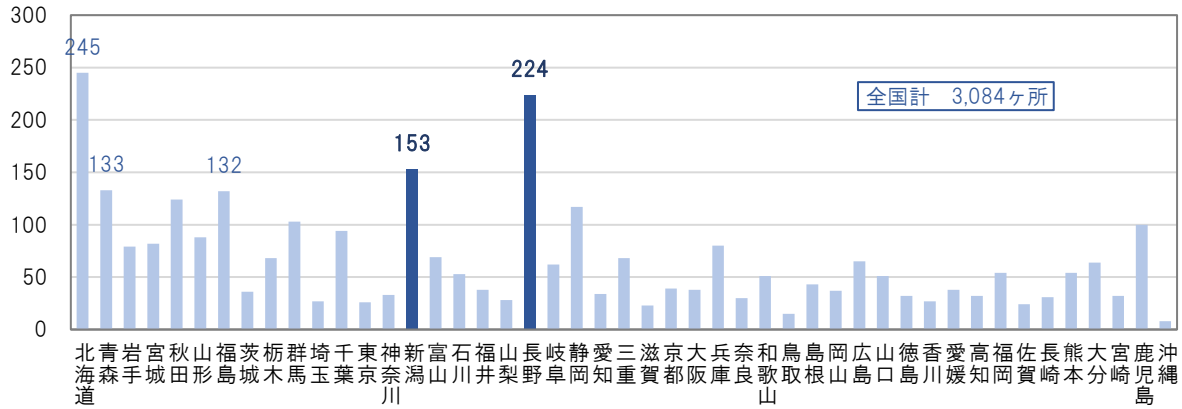
温泉地の宿泊施設や宿泊客の数は、バブル経済の崩壊後、日帰り温泉施設の増加とも相まって長らく減少傾向にありましたが、ここ数年は外国人旅行客（インバウンド）の増加などから宿泊客数が回復傾向にある地域もあります。

■　温泉利用客数と温泉地数の推移（全国）



出所）環境省「温泉利用状況」をもとに作成

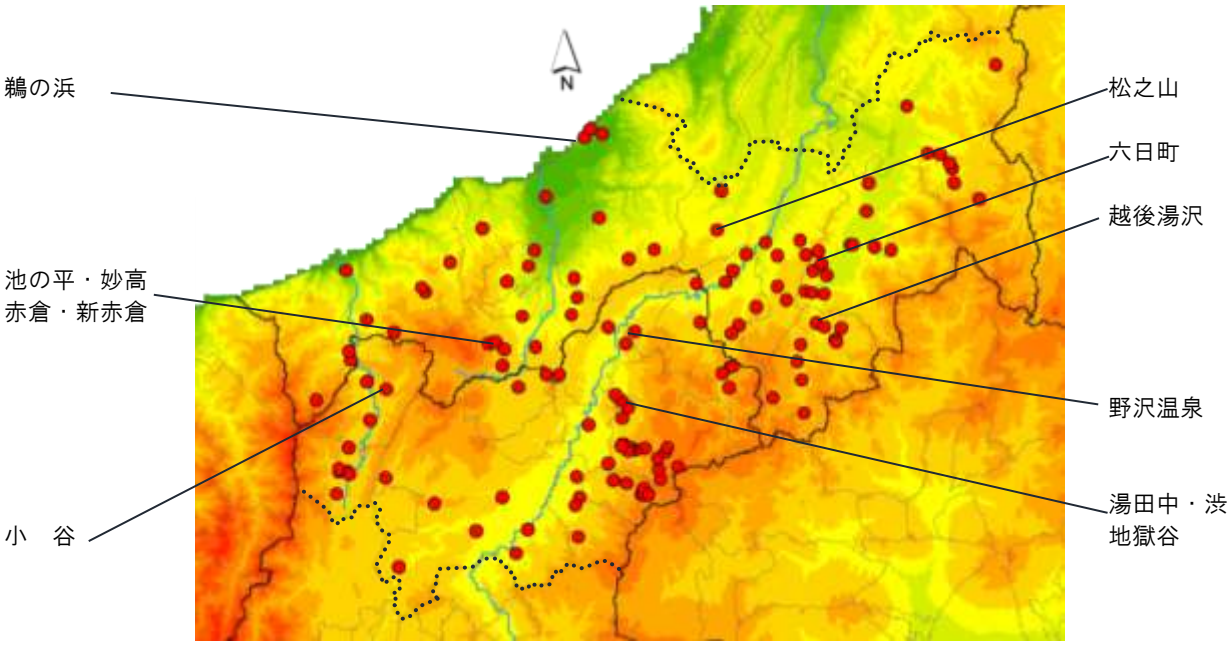
■　温泉地数（都道府県別・2015 年度）



出所）環境省「温泉利用状況」をもとに作成

2　特　徴

【温泉地の分布】



備考）信越県境付近にある市町村（破線で挟まれた地域）の温泉地のみ掲載（平成 28 年度現在）
出所）国土地理院数値地図および新潟県「温泉利用状況報告書」および長野県薬事管理課資料をもとに作成

●　魚沼地方

市町村名	数	名称
湯沢町	10	湯沢、貝掛、赤湯、苗場、岩原、三俣、小坂、神立、中里、二居
南魚沼市	13	上野鉱泉、石打丸山、大沢山、栃窪高原、舞子、樺野沢、五郎丸、六日町、五十沢、河原沢、浦佐、坂戸、畔地
魚沼市	8	清本、浅草岳、駒の湯、栃尾又、大湯、折立、芋川、銀山平
十日町市	8	二ツ屋、当間高原、塩ノ又、瀬戸口、清津峡、宮中島、芝峠、松之山
津南町	6	逆巻、田中、辰の口、グリンピア、結東、津南駅前

●　上越地方

市町村名	数	名称
妙高市	10	燕、関、赤倉・新赤倉、池の平・妙高、寸分道、矢代、樽川、大滝の湯、神の宮、アパリゾート上越妙高　金泉の湯
上越市	10	鵜の浜、松が峰、宇津俣、上下浜、須川、大峰、桑取、長峰、上越の湯、ひなた鉱泉
糸魚川市	8	柵口、笹倉、焼山、梶山、白馬、蓮華、糸魚川、塩の道

●　北信地方

市町村名	数	名称
山ノ内町	20	熊の湯・ほたる、木戸池・石の湯、丸池・幕岩、志賀山、発哺、高天ヶ原、地獄谷、上林、沓野、安代、渋、湯田中、新湯田中、星川、上条、角間、穂波、よませ、高井富士、一ノ瀬
栄村	6	切明、和山、屋敷、小赤沢、北野、中条
野沢温泉村	1	野沢
飯山市	3	斑尾高原、瑞穂、戸狩
木島平村	2	池ノ平、鬼島
中野市	2	長嶺、間山

●　長野地方

市町村名	数	名称
高山村	6	山田、松川渓谷、五色、奥山田、七味、蕨
小布施町	1	小布施
須坂市	3	須坂、仙仁、福寿の湯
信濃町	2	黒姫鉱泉、タングラム斑尾
長野市	7	松代、奥裾花、日原、梅木鉱泉、裾花峡、中尾山、大室

●　大北地方

市町村名	数	名称
小谷村	6	来馬、小谷、若栗、下里瀬、姫川大網共有、奥白馬
白馬村	6	白馬みずばしょう、しろうま、白馬鑓、白馬かたくり、白馬姫川、白馬八方

■ 温泉地の規模

○ 温泉地の数

● 都道府県別の温泉地数は、北海道に次いで長野県が第 2 位、新潟県が第 3 位。この両県境付近の温泉も同様に多く、国内有数の温泉密集地ということもできる。

湧出量でみると、北海度や大分、鹿児島、熊本といった九州が多い。

【温泉地数・温泉湧出量ランキング】
（都道府県別・平成 27 年度）

	温泉地数		湧出量	
順位	都道府県名	温泉地数	都道府県名	湧出量（ﾘｯﾄﾙ/分）
1	北海道	245	大分県	279,462
2	長野県	224	北海道	235,346
3	新潟県	153	鹿児島県	156,324
4	青森県	133	青森県	136,404
5	福島県	132	熊本県	134,447
・・・				
7			長野県	116,734
13			新潟県	64,193
	全　国	3,084	全　国	2,567,823

出所）環境省「平成 27 年度温泉利用状況」をもとに作成

○ のべ宿泊客数

● 全国 3,000 を超える温泉地の中で、宿泊客数が多いベスト 3 は箱根、熱海、別府。この地域で宿泊客数ベスト 100 に入る温泉地には、赤倉・新赤倉、池の平・妙高（妙高市）、越後湯沢（湯沢町）、湯田中・渋（山ノ内町）がある。

都道府県別にみると、温泉地自体が多い北海道や長野県に加え、静岡県、神奈川県、群馬県など首都圏近郊の県が上位に入ってくる。

温泉地ごとの宿泊客数については、上記出所から確認できないが、山村（2015）は、環境省の平成 22 年度温泉利用状況をもとにベスト 100 を選定したとしており、本誌ではそれをもとに記載した。

【宿泊客数ランキング】
（都道府県別・平成 27 年度）

順位	都道府県名	宿泊客数（千人）	主な温泉地
1	北海道	13,708	層雲峡(8)，湯川(11)，登別(14)
2	静岡県	11,585	熱海(2)，伊東(4)，東伊豆(13)
3	長野県	7,918	諏訪(42)蓼科(55)戸倉・上山田(56)湯田中・渋(65)
4	群馬県	5,716	箱根(1)，湯河原(31)
5	大分県	5,494	草津(5)，伊香保(12)，水上(37)
・・・			
14	新潟県	3,545	赤倉・新赤倉(28)池の平・妙高(36)越後湯沢(49)
	全　国	132,064	

備考）主な温泉地の（　）内は平成 22 年度における宿泊客数の順位
出所）環境省「平成 27 年度温泉利用状況」、山村順次（2015）をもとに作成

■ 温泉地の評価

○ 温泉番付

● 江戸期のいわゆる温泉番付の評価によれば、常に最高位の大関は草津、有馬。その中で、渋（山ノ内町）、松之山（十日町市）、関*1（妙高市）、塩沢*2（南魚沼市）の各温泉は前頭として評価される。

＊1　当時は「関の山」と表記。
＊2　具体的な場所は不明とするもの、あるいは大沢山温泉、上野鉱泉とするものなどがある。

江戸期の温泉番付とは、諸国温泉効能鑑（かがみ）のことを指す。作成地域等によって若干記載内容が異なる場合もあるとのことである。

現在は様々な機関による様々な評価が行われているが、山村（2015）で紹介される評価によると、信越県境付近でも複数の温泉地が 100 位以内に挙がっている。

【国内温泉地の評価の一例】

温泉地＼出所	A	B	C	D	E
■　国内の主な温泉地					
登別　（北海道）	5	5	7		関脇
乳頭　（秋田県）	6	2		1	小結
八幡平（　〃　）	9	7			
玉川　（　〃　）					小結
銀山　（山形県）				9	
草津　（群馬県）	1	1	1	2	横綱
四万　（　〃　）	8			5	
箱根　（神奈川県）	2				関脇
白骨　（長野県）				6	大関
和倉　（石川県）			9		
下呂　（岐阜県）	3		3		
新穂高（　〃　）				9	
奥飛騨（　〃　）					小結
有馬　（兵庫県）		10	6		
城崎　（　〃　）			10	4	小結
道後　（愛媛県）		9	5		
別府　（大分県）	4	3	2		大関
由布院（　〃　）		8	9	3	横綱
黒川　（　〃　）	7	6		7	関脇
指宿　（鹿児島県）			4		関脇
■　信越県境付近の温泉地					
野沢	9	12	61	8	前頭
湯田中・渋	20	37	38		
信州高山	54				
越後湯沢	54		86		

備考）下記 A～E のいずれかで 10 位以内の評価を受けた国内の温泉地、及び同 100 位以内の評価を受けた信越県境付近の温泉地を掲載。

出所）

A　最も印象の良かった温泉地（日本温泉協会 2009）

B　最も行ってみたい温泉地（日本温泉協会 2010）

C　第 32 回にっぽんの温泉 100 選（観光経済新聞社 2018）～　国内旅行会社による投票

D　有識者が選んだ魅力の 66 温泉地（日本経済新聞社 2003）

E　新世紀日本温泉地番付（2000）～　筆者アンケート調査や湧出量、温泉情緒などを基に総合評価）

【参考文献など】

・山村順次（2015）：47 都道府県・温泉百科、丸善出版

○　国民温泉保養地

●　全国 80 か所が指定される国民保養温泉地には、六日町（南魚沼市）、小谷（小谷村）、関・燕（妙高市）が認定されている。

国民保養温泉地とは、温泉の公共的利用増進のため、温泉利用の効果が十分期待され、かつ健全な保養地として活用される温泉地を「温泉法」に基づき指定するもの。

（観光型、慰安型ではない）療養・保養型の優れた温泉地が減少することを受けて、1954（昭和 29）年から指定が始まったとされる。平成 30 年 12 月現在では全国 80 箇所が指定されている。

【参考文献など】

・環境省ホームページ（国民保養温泉地）
https://www.env.go.jp/nature/onsen/area/
・山村順次（2015）：47 都道府県・温泉百科、丸善出版

■　温泉地ごとの特徴と成り立ち

○　湯田中・渋温泉

渋温泉は、8 世紀に僧行基が発見したなどの説が残る古い歴史を有し、木造建築の旅館が立ち並ぶ。

地獄谷温泉の「スノーモンキー」は、露店風呂近くに生息する野生の猿が入浴する様子がアメリカの雑誌「タイム」の表紙を飾ってからブームとなった。冬季は外国人を含むスキー客でにぎわう。

【参考文献など】

・山村順次（2015）：47 都道府県・温泉百科、丸善出版

○　野沢温泉

・　野沢温泉の運営を担う野沢組は、地域コミュニティによる自治運営組織の老舗的存在として注目される。

8 世紀に僧の行基が発見したなどの説が残る。13 の外場や、当地発祥の「野沢菜」などを洗う高温源泉地（麻釜）、岡本太郎との縁などが特徴的である。近年は、外国人を中心とするスキー客でにぎわう。

【参考文献など】

・山村順次（2015）：47 都道府県・温泉百科、丸善出版
・野沢温泉観光協会ホームページ
https://nozawakanko.jp/

○　越後湯沢温泉

●　越後湯沢温泉の高半ホテルは、1075 年創業の県内最古、全国でも 9 番目に古い老舗企業。川端康成が小説「雪国」の執筆で滞在。

・　湯沢町は、1982 年の上越新幹線開業によって首都圏からの利便性が大幅に向上したことと相まって、温泉付きリゾートマンションの建設が進み、「東京都湯沢町」とも形容された。

川端康成が小説「雪国」の執筆で滞在した温泉旅館「高半ホテル」は、1075 年創業である。東京商工リサーチ（2016）によると、新潟・長野両県の中で最古の老舗企業であり、全国でも 9 番目に古い企業としてランクされる。

越後湯沢は、1931 年の上越線開通後に首都圏の保養地となり、温泉街が誕生した。その後、スキー場の整備、上越新幹線の開通、バブル期のマンション開発などが進み、近年は外国人を中心とするスキー客でもにぎわう。

【参考文献など】

・東京商工リサーチ（2016）：全国老舗企業調査ほか

○　妙高高原（赤倉温泉・池の平温泉など）

・　妙高高原（赤倉）と志賀高原は、スキー場の存在と相まって大正期の「国際リゾート地」に選定された。

関温泉は、同 900m の高さに位置し、弘法大師による発見、上杉謙信の隠し湯などの言い伝えが残る歴史のある温泉地である（当時は関山温泉の名称）。1918 年にはスキー場も整備される。

燕温泉は関温泉により高地（標高 1,100m）にある秘湯であり、江戸時代に発見された。

赤倉温泉は、1816 年（江戸時代後期）、財政難を契機とした高田藩の事業により整備。明治期には、信越本線を整備した鹿島組により近代的な温泉地づくりが始まり、財界人や文化人の別荘地として知られるようになる。志賀高原とともに「国際リゾート地」に指定され、赤倉観光ホテルが整備された歴史を持つ。近年はオーストラリア人を中心としたスキー客でにぎわう。

池の平温泉は、妙高温泉を整備するために南地獄谷から温泉を引く過程で別荘地として整備された。

【参考文献など】

・渡邊慶一（1955）：赤倉温泉沿革史、赤倉温泉組合
・山村順次（2015）：47 都道府県・温泉百科、丸善出版

○　松之山温泉

●　松之山温泉は、草津、有馬とならんで日本三大薬湯と称されることもある。

・　松之山温泉のように、1,000 万年前の地層中に閉じ込められた海水が圧力を受けて温泉となったものもある。

南北朝時代に発見されたという言い伝えが残る。日本三大薬湯の明確な根拠は明らかではないが、松之山温泉の各旅館をはじめ国内の様々なホームページでも紹介されており、一般的に認知されているとみてよい。

【参考文献など】

・山村順次（2015）：47 都道府県・温泉百科、丸善出版

○　鵜の浜温泉（上越市）・六日町温泉（南魚沼市）

●　鵜の浜温泉や六日町温泉は、石油や天然ガスの採掘中に発見された温泉。

鵜の浜温泉（上越市）は 1956 年、六日町温泉（南魚沼市）は 1957 年、それぞれ天然ガス試掘中に湧出した比較的新しい温泉地である。

【参考文献など】

・山村順次（2015）：47 都道府県・温泉百科、丸善出版
・鵜の浜温泉開湯 50 周年ホームページ
http://mermaid-legend.sakura.ne.jp/unohama50.com/history/index.html

○　小谷温泉

上杉謙信と高田信玄の合戦で、武田方の落ち武者が発見したとの言い伝えが残る。1971 年に国民温泉保養地に指定された。

【参考文献など】

・山村順次（2015）：47 都道府県・温泉百科、丸善出版

3　因果関係

※　番号は他のテーマ(01～20)との関係性、アルファベットは次の頁に補足説明があることを示す。

火山の多い地形など　01

・火山の多さから、温泉資源には比較的恵まれた。
・**松之山温泉**のように、1,000 万年前の地層中に閉じ込められた海水が圧力を受けて温泉となったものもある。

首都圏からの近さと鉄道の整備　05

・首都圏から比較的近い位置にあり、比較的早期に鉄道が開通したことから、古くから多くの宿泊客を集めてきた。

自治体や民間企業による温泉開発

・歴史ある温泉地に加え、地域活性化や住民福祉向上などの一環として各市町村により整備された温泉施設や、民間企業による日帰り温泉施設（一部宿泊施設あり）も増加した。

スキー場の整備　16

・豪雪地帯にある温泉旅館は冬季が閑散期となるため、旅館経営者などが中心となってスキー場を整備し、誘客に努めた。
・その結果、温泉のあるスキー場、あるいはスキー場のある温泉という相乗効果を生み出し、誘客に貢献した。

特産品の販売促進　07　10

・温泉を訪れる人の多さは、土産物の販売促進にもつながった。一例として、りんごなどの果物やその加工品、野沢菜、蕎麦などが挙げられる。
・温泉旅館での料理に地元の農産物が利用されることによって、地産地消にも貢献している。

リゾート地の発達

・**妙高高原**（赤倉）と**志賀高原**は、スキー場の存在と相まって大正期の「国際リゾート地」に選定された。
・**湯沢町**は、1982 年の上越新幹線開業によって首都圏からの利便性が大幅に向上したことと相まって、リゾートマンションの建設が進み、「東京都湯沢町」とも形容された。温泉付きのものも多い。

魅力的な景観の創出

・**渋温泉**のように歴史的風情ある温泉街や、**野沢温泉**のように多くの外湯を持つ情緒ある温泉街など、個性的で魅力的な景観や空間を生み出した。
・それらの空間自体が魅力となって観光客をひきつける側面もある。
・近年では**地獄谷温泉**に入浴する猿（いわゆるスノーモンキー）を目当てに外国人が訪れるなど、見栄えする写真で注目を集める温泉地もある。

文化人の訪問とその足跡

・温泉の存在と高原地帯にあることが相まって、明治期から避暑地・温泉地として注目され、多くの文化人が訪れた。
一例として、**赤倉温泉**を訪れた岡倉天心、**野沢温泉**を訪れた岡本太郎、**越後湯沢温泉**を舞台に「雪国」を執筆した川端康成などが挙げられる。現在も彼らが訪れた足跡とともに語り継がれている。

4　解　説

要　約

日本国内の温泉地は 3,000 を超えており、近くに温泉のない地域はないといえるほどの数がありますが、この地域には比較的火山地形が多いことや、首都圏などの大都市から比較的近い場所にあることから、古い歴史を有する温泉地が数多くあります。

また、現代に入り市町村などが数多くの日帰り温泉施設を整備したことにより、様々な形態の温泉施設・温泉地が集積する国内でも有数の地ということもできます。

豪雪地帯や高原地帯の温泉ならではの展開として、スキー場やリゾート地開発の起点ともなりました。

地域資源としての捉え方

日本人にとってはもちろん外国人旅行客にとっても温泉人気は根強いものがありますが、全国どこにでも温泉、日帰り温泉施設も数多く登場する中で、産業として順風満帆な地域ばかりではありません。

宿泊施設自体の魅力だけでなく温泉地全体の魅力を高め、地域の回遊性を高め、ファンを生み出していくといったことに、数十年も前から取り組み、町おこしに成功したといわれる地域も数多くあります。そのような中で地域独自の地域づくりに取り組む際に、その核の一つとなる力が温泉にはあります。

旅館業など温泉に関わる産業は多くの人出を必要とする産業であり、高齢化・過疎化の影響を大きく受けつつあります。このピンチをチャンスに変えていくためには、地方回帰や働き方改革などの動向を捉えつつ、地域を挙げて新たな働き方やライフスタイルを提案することによって、従業員の確保につなげる面もあるのではないでしょうか。

温泉や温泉地への訪問がもたらす健康、癒し、あるいはコミュニケーション促進などといった効果は、現代社会で人々が暮らす上で普遍的に必要なものといえます。このことも含めた温泉文化の視点から、この地域を深堀することによって、地域内外の人々のシビックプライド醸成にもつながるものと考えます。

参考文献等

●山村順次（2015）：47 都道府県・温泉百科、丸善出版
●西川有司（2017）：おもしろサイエンス　温泉の科学、日刊工業新聞社
・島津光夫（2001）：新潟温泉風土記、野島出版
・温泉・入浴施設のあるスキー場
https://www.popsnow-net.com/special/special.php?special_detail=13

16　スキー　（国内有数の歴史と規模を誇るスキー場群）

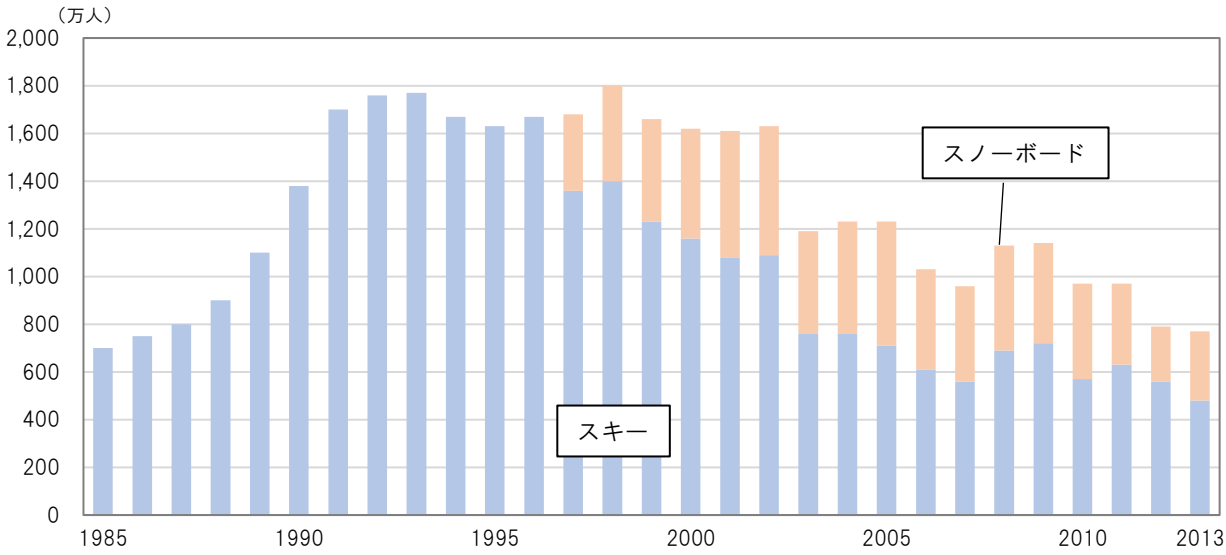
1　はじめに

日本国内での近代スキーは、1911 年にオーストリアのレルヒ少佐が上越市高田で行った演習が発祥とされ、その後全国に広まりました。

戦後は高度経済成長期の観光開発ブームやその後のリゾート開発ブームによって開発が進んだものの、1990 年代前半のバブル崩壊やレジャーの多様化などに伴い、スキー場利用者数は大きく減少傾向が続いています。ただし近年は、野沢温泉や妙高高原などインバウンド（訪日外国人客）によって活況を呈している地域もあります。

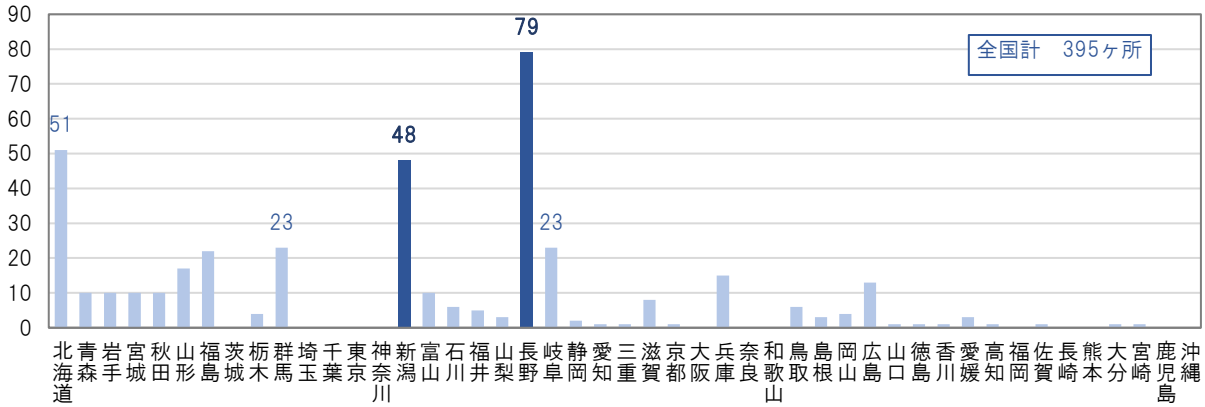
スキー場の数を都道府県別にみると、長野県、北海道、新潟県の順に多く立地しています。

■　スキー人口の推移（全国）



出所）日本生産性本部「レジャー白書 2014」をもとに作成

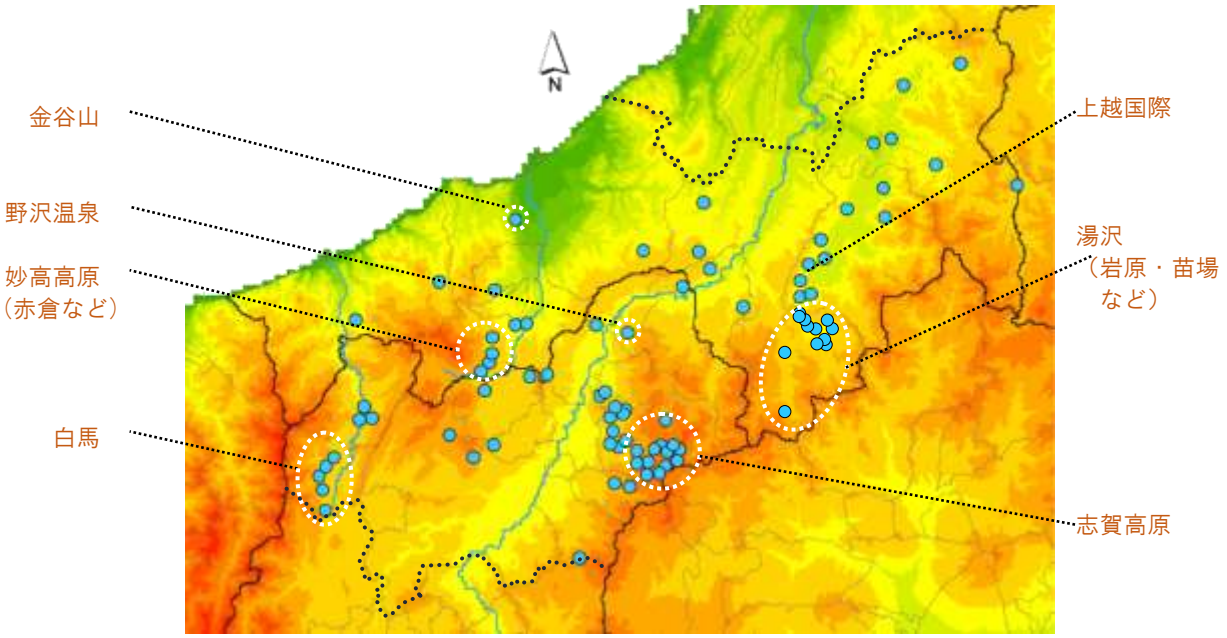
■　スキー場の数（都道府県別・2015 年）



出所）観光庁「スノーリゾート地域の現状」2015 をもとに作成

2　特　徴

【スキー場の分布】



備考）信越県境付近にある市町村（破線で挟まれた地域）のスキー場のみ掲載
（新潟県は平成 29 年度、長野県は平成 30 年度現在）
出所）国土地理院数値地図および新潟県観光企画課・長野県山岳高原観光課資料をもとに作成

● 魚沼地方

市町村名	数	名称
湯沢町	10	湯沢中里スノーリゾート、中里スノーウッド、ルーデンス湯沢、湯沢パーク、岩原、神立高原、ナスパスキーガーデン、湯沢一本杉、湯沢高原、GALA 湯沢
南魚沼市	9	六日町八海山、石打丸山、舞子スノーリゾート、Mt グランビュー、上越国際、シャトー塩沢、ムイカスノーリゾート、五日町、八海山麓
魚沼市	6	小出、薬師、大湯温泉、須原、大原、奥只見丸山
十日町市	2	十日町市松代ファミリー、松之山温泉
津南町	2	ニュー・グリーンピア津南、マウンテンパーク津南

● 上越地方

妙高市	8	池の平温泉、赤倉観光リゾート、赤倉温泉、関温泉、休暇村妙高、妙高スキーパーク、妙高杉ノ原、ロッテアライリゾート
上越市	2	金谷山、キューピットバレイ
糸魚川市	2	シャルマン火打、糸魚川シーサイドバレー

● 北信地方

市町村名	数	名称
山ノ内町	21	焼額山、小丸山、夜間瀬温泉、奥志賀高原、サンバレー、丸池、蓮池、一の瀬ダイヤモンド、一の瀬山の神、西館山、ジャイアント、発哺ブナ平、東舘山、寺小屋、高天ヶ原マンモス、一の瀬ファミリー、タンネの森オコジョ、熊の湯、横手山・渋峠、竜王スキーパーク、X-JAM 高井富士
飯山市	2	斑尾高原、戸狩温泉
木島平村	2	牧の入高原スノーパーク、北信州木島平
栄村	1	さかえ倶楽部
野沢温泉村	1	野沢温泉

● 長野地方

長野市	2	飯綱高原、戸隠
須坂市	1	峰の原高原
高山村	2	山田温泉キッズスノーパーク、ヤマボクワイルドスノーパーク
信濃町	2	黒姫高原スノーパーク、タングラムスキーサーカス

● 大北地方

白馬村	5	白馬五竜、白馬さのさか、Hakuba47、白馬八方尾根、岩岳
小谷村	3	白馬コルチナ、栂池高原、白馬乗鞍温泉

● 金谷山（上越市）

● 国内のスキー発祥の地は、上越市の金谷山スキー場。

国内スキーの発祥は、1911（明治 44）年、上越市高田にあった陸軍 13 師団の視察に訪れていたオーストリアのレルヒ少佐により、スキーの技術講習会が行われたことによるものである。

なお、国内に初めてスキーが持ち込まれたのは、1895（明治 28）年に松川敏胤が海外より持ち帰ったものであるとされている（持ち帰った経緯には諸説あり）。その後も、東北帝国大学農科大学（現北海道大学）ではドイツ語講師のハンス・コラーがスキーを輸入したり、横浜ジーメンス社の駐在員クラッツアーが富士山スキー登山を行うなどしている。

しかし、いずれの場合もスキー技術の体系的伝授・習得というプロセスが含まれておらず、上越市の金谷山では、組織的にスキー指導が行われたことをもって、国内のスキー発祥の地とされている。

【参考文献など】

・長岡忠一（1996）：スキーの原点を探る　－レルヒに始まるスキー歴史紀行、スキージャーナル
・呉羽正昭（2017）：スキーリゾートの発展プロセス　日本とオーストリアの比較研究、二宮書店
・ＳＫＩスキーのいろいろページ+X
http://skis-hijikata.o.oo7.jp/

● 妙高高原

● 赤倉（妙高市）と志賀高原（山ノ内町）は、国際スキー場の誘致合戦の末、両方認定。1937 年に国際リゾートホテルが建設される。

1911（明治 44）年、高田師団によるスキーやレルヒによる妙高登山などに刺激され、関温泉の笹谷旅館主が高田でスキー講習を受けて持ち帰ったのは、妙高における開拓にきっかけとなる。

はじめに妙高温泉・池の平温泉・赤倉温泉のそれぞれの旅館街の近くの短いスロープを利用したスキー場が形成された。

その後、1935 年には鉄道省観光局により、赤倉が国際スキー場に指定された。

戦後も、運輸省の認可第 1 号となるスキーリフトが池の平スキー場と赤倉中央スキー場に建設されるなど開発が進み、現在でも赤倉温泉・赤倉観光リゾート・妙高杉ノ原・池の平温泉など、規模の大きなスキー場が集まっている。

【参考文献など】

・瓜生卓造（1978）：スキー風土記、日貿出版社
・砂本文彦（2000）：赤倉観光ホテルとリゾート地開発、日本建築学会計画系論文集　第 535 号、日本建築学会
・砂本文彦（2008）：近代日本の国際リゾート 1930 年代の国際観光ホテルを中心に、青弓社
・妙高高原町史編集委員会（1986）：妙高高原町史、妙高高原町

● 飯山

● 飯山市の市川氏、湯沢町の本間氏は金谷山でスキー講習会に参加し、白馬村の丸山先生は高田からスキーを購入。それぞれ地元で実施したのがはじまり。飯山市は、この経過から長野県のスキー発祥の地に。

● 1912 年に創立した小賀坂スキー（飯山市）は、高田から製造方法を教わり、現存するスキーメーカー第 1 号に。

高田で講習会を受けた市川達譲氏（飯山中学教師）により、飯山は長野県のスキー発祥の地となる。その後飯山中学の校長が、小賀坂氏にスキーを注文。

スキー場は当初、自然の山肌をそのまま利用していた。1955 年、農家の冬期の収入減に対し、豪雪と農家の大きな家屋を利用したスキー場と民宿が提案され、1960 年に戸狩地区にリフトが建設。この動きを受け、同様に農家経済が低迷していた他地区でもスキー場の開発がはじまった。

【参考文献など】

・瓜生卓造（1978）：スキー風土記、日貿出版社
・白坂蕃（1986）：スキーと山地集落、民玄書房
・飯山市スキー史編纂委員会（1993）：飯山市スキー史、飯山市
・飯山市（2012）：飯山スキー100 年誌

● 野沢温泉

● 野沢温泉スキー場は、最長滑走距離10,000mであり日本最長とされる。

野沢温泉へは、1912年に飯山中学の生徒によりスキーが伝わる。

温泉街の冬期の集客のため、当初から地元旅館経営者が中心となった「野沢温泉スキークラブ」がスキー場開発を主導した。外部資本を入れず、スキー場の開発は地元資本という原則が取り続けられた。

スキー場の開発は、冬季の副業としてのあけび蔓細工や内山紙の製造、出稼ぎに従事していた住民にとっても大きな関心事となった。

1955年頃からスキー客が急増した際は、スキーリフトの架設地点を上昇させることで対応し、現在では、最長滑走距離10,000mと日本最長となっている。

【参考文献など】

・白坂蕃（1976）：野沢温泉村におけるスキー場の立地と発展-日本におけるスキー場の地理学的研究　第1報、地理学評論49巻6号、日本地理学会

・白坂蕃（1986）：スキーと山地集落、民玄書房

・野沢温泉村（1993）：村から世界へ　野沢温泉のスキー、野沢温泉村役場企業課

● 白馬

● 飯山市の市川氏、湯沢町の本間氏は金谷山でスキー講習会に参加し、白馬村の丸山氏は高田からスキーを購入。それぞれ地元で実施したのがはじまり。　【再掲】

1913年、神城小学校の丸山先生が高田からスキーを購入し、学校の裏庭で生徒に滑ってみせたのが、白馬地区でのスキーの発祥とされる。

【参考文献など】

・信州の旅.comホームページ

・八方の歴史

http://www.happo-one.jp/history

● 湯沢、南魚沼

● 飯山市の市川氏、湯沢町の本間氏は金谷山でスキー講習会に参加し、白馬村の丸山先生は高田からスキーを購入。それぞれ地元で実施したのがはじまり。【再掲】

● 岩原スキー場（湯沢町）は、1931年の上越線開通により、当時「東洋一のスキー場」と宣伝されるまでになった。

● 湯沢町は、苗場をはじめ全国一のゲレンデスキー場群と称される。

● スキー場の面積では、上越国際、志賀高原スキー場が北海道のニセコとならんで三大スキー場と称される。　【再掲】

本間栄太郎氏と時を同じくして、湯沢小学校長の田村定次氏も講習会を受けており、どちらが先かははっきりしないとの見方もある。

1920（大正 9）年に本格的なスキー講習会を布場で開き、これがゲレンデとして使われた最初となる。1923（大正12）年に上越沿線で最初のスキー場である岩原スキー場が建設された。

【参考文献など】

・瓜生卓造（1978）：スキー風土記、日貿出版社

・読売新聞新潟・松本支局（1969）、信越百年の秘話、野島出版

・柴田高（2014）：ポストバブル期のスキー場経営の成功要因、東京経大学会誌284号、東京経済大学経営学会

・スキー・スノボ研究所

https://snow.tabiris.com/

● 志賀高原

● 赤倉（妙高市）と志賀高原（山ノ内町）は、国際スキー場の誘致合戦の末、両方認定。1937年に国際リゾートホテルが建設される。【再掲】

● 1947年、志賀高原スキー場に本州で初めてのスキー用リフトがつくられる。

● スキー場の面積では、上越国際、志賀高原スキー場が北海道のニセコとならんで三大スキー場と称される。

1927 年に長野電鉄（信州中野～湯田中間）が開業、1929（昭和 4）年には長野電鉄がスキー場開発に乗り出す。国際スキー場に認定されるのは、その 7 年後のことである。

志賀高原では、土地の管理のため、土地所有者らによる財団法人和合会が設立され、1929 年頃からは和合会から土地を借り受けた長野電鉄の手によってスキー場が開発された。

戦後は志賀高原の丸池一帯がアメリカ進駐軍に接収され、日本で初めてリフトが整備される（北海道藻岩山が初との説もあり）など、スキー場の整備が進んだ。1955 年以降は和合会の出資によって設立された会社がスキー場の開発を行い、外部資本の進出は阻止された。

現在では、数多くのスキー場が集まる一帯のエリアは全国一の広さとされる。

【参考文献など】

・瓜生卓造（1978）：スキー風土記、日貿出版社
・白坂蕃（1986）：スキーと山地集落、民玄書房
・志賀高原スキークラブ（1991）：志賀高原スキー史、志賀高原スキークラブ
・スキー・スノボ研究所
https://snow.tabiris.com/

3　因果関係

※　番号は他のテーマ(01～20)との関係性、アルファベットは次の頁に補足説明があることを示す。

国内有数の豪雪地帯 なだらかで高い山々　01　02

・国内トップクラスの豪雪地帯は、数多くのスキー場を生み出す。平野部は湿った雪が多いものの、高地にあるスキー場は、冷涼な北海道と同様にパウダースノーが多く、近年は海外からのスキーヤーも数多く訪れる。
・野沢温泉、妙高高原などは、斜面のなだらかな火山地形が多く、ゲレンデとして適地。

陸軍（師団）の立地

・国内スキーの発祥は、1911 年、上越市高田にあった陸軍 13 師団の視察に訪れていたオーストリアのレルヒ少佐により、スキーの技術講習会が行われたことによるもの。

大都市圏からの近さ（鉄道の発達・大手資本の参入）　05

・信越本線全線(1893 年)、上越線(1931 年)、長野電鉄湯田中線(1927 年)などの開通により、首都圏をはじめ三大都市圏と鉄道でつながったことで発展。
※その後、モータリゼーションの進展等に伴い、斑尾など鉄道のない地域も開発が進む。
・1960 年代には、西武グループや藤田観光などの大手資本による大規模スキー場が整備。
※野沢温泉のように、町が会社を設置して開発した地域もある。

豪雪地帯にある温泉地　15

・豪雪地帯にある温泉旅館は冬季が閑散期となるため、旅館経営者などが中心となってスキー場を整備し、誘客に努めた。
・その結果、温泉のあるスキー場、あるいはスキー場のある温泉という相乗効果を生み出し、誘客に貢献した。

スキー板製造などの地場産業の発達

・スキー発祥当初は、スキー（板製造）産業が発展。
・1965 年頃は、カザマ・ハセガワなどを中心に上越地方のスキー生産が全国の約 45%を占めた。
・飯山市のオガサカやニシザワ(後に長野へ移転）のスキー生産量は 1970 年頃にはカザマ・ヤマハと並んで日本の上位 4 社に名を連ねた。
※現在、上越地方のスキー産業はない。　☞ a

民宿の整備とスポーツ合宿などの受入れ　17

・地元の農家が農閑期の仕事としてスキー客受入れのための民宿を整備。特に白馬は、民宿発祥の地とされる。
・その後、民宿業を専業とするため、グリーンシーズンの受入れとしてスポーツ合宿やグリーンツーリズムなどを積極的に行う。
・これらの動きに伴い、出稼ぎ労働者も減少する。　☞ b

冬期間の交流人口創出 特産品の販売促進　07　08

・1990 年頃のピーク時に比べると半数程度と思われるが、それでも数多くの交流人口創出に貢献している。
・1998 年の冬季オリンピック長野開催時には、世界各国から選手や関係者、観戦客等が訪れる。
・そば、野沢菜、おやきなどの特産品の販売にも貢献。

一流スポーツ選手の輩出

・オリンピック出場選手をはじめ数多くの選手を輩出。特にクロスカントリー選手の半数以上は、このエリアの出身者。
・中でも北信地域は、アルペン、ノルディック複合、ジャンプなど万遍なく輩出。
・引退後もこの地にとどまり新たな仕事を営む選手も多い。

【補足説明】

a　スキー産業への展開

日本におけるスキー生産の始まりは、第 13 師団が高田の三間博にスキーの製作を依頼したことと言われている（高田のどの業者が始まりかは諸説あり）。スキーが一般にも普及してくると、大工や家具職人といった職人が冬期の副業として、次第にスキー生産に従事するようになった。第二次大戦中は民間需要が減少したことから一時衰えたものの、戦後はスキー生産の工業化が進み、スキー人口の急増もあって、カザマスキー・ハセガワスキーなどを中心に 1965 年頃には上越地方のスキー生産が全国の約 45%を占めていた。しかし、1972 年以降の輸入スキーの増加やスキー人口の減少が影響し、現在では上越地方にスキー生産を行う企業は残っていないが、上越市の打江製作所が日本で唯一スキーのエッジを製作している。

長野県のスキー発祥の地である飯山市でも、飯山にスキーを伝えた市川達譲が家具職人へスキー製作を依頼したのを始まりに、スキーの生産が広まった。特に、オガサカスキーやニシザワスキー（後に長野へ移転）などのスキー生産量は 1970 年頃にはカザマ・ヤマハと並んで、日本の上位 4 社に名を連ねていた。しかし、飯山市においても、オイルショック・ドルショックなどのあおりを受け、1985 年からは 4 社を残すのみである（※　現存する企業数は未調査）。

【参考文献など】

・赤羽孝之（1989）：新潟県上越地方におけるスキー工業-ある地場産業の崩壊-9、歴史地理学会『歴史地理学 146 号』

・小賀坂スキーの歴史 https://www.ogasaka-ski.co.jp/about/history/

・ＳＫＩスキーのいろいろページ+X http://skis-hijikata.o.oo7.jp/

b　民宿やグリーンツーリズムへの展開

スキーが広まると、スキー場周辺での宿泊客も増加し、既存の宿泊施設だけでは対応できなくなり、農家へ宿泊させるようになった。日本での民宿の発祥は白馬八方でスキー客や登山客を警察の許可を得て宿泊させたこととされている。

このほか、飯山では元々農村地域だったこともあり、スキー場と民宿が併せて開発され、野沢温泉では既存の旅館で収容しきれなかった宿泊客を農家へ収容させたことで民宿が広まった。これ以外の地域でも同様の現象は発生しており、民宿の発展が農業従事者へ労働を提供し、冬期の出稼ぎを減少させた。

こうした民宿は当初、夏期に農業を行い、冬期の農閑期になると宿泊客を受け入れるといった兼業での経営が多かったが、スキー客が増えるにつれて専業化し、施設を改良・拡張するものも増加した。

専業化した民宿では、夏期の労働と施設拡張に投下した資本の回収が求められた。このため、各民宿は体育館やグラウンド等の施設を建設して学生合宿の誘致に努めるなど、スキーシーズンだけでなく、夏期の誘客にも努めた。こんにちでは、こうした取組みはグリーン・ツーリズムとして継承されている。

➡　詳細は　15 ニューツーリズムを参照

4　解　説

要　約

信越県境地域は、国内のスキー発祥の地を擁し、そこから周辺地域にスキー技術やスキー生産技術が広まった、全国有数の歴史を持つ地域です。

また、この地域におけるスキー場の集積度も、国内トップクラスといえます。地元のファミリー層向けの小規模なスキー場から、国際大会が開かれるほど大規模なスキー場まで、バラエティに富んだスキー場があります。

国内スキー発祥の地となった背景には、八甲田山遭難事件を踏まえ、陸軍第 13 師団がスキー技術を習得すべく、オーストリアからレルヒ少佐を招いたことがあります。

国内トップクラスの豪雪地帯では、スノーパウダーを楽しめる志賀高原から、斜面がなだらかな野沢温泉や妙高高原など、ゲレンデとしての適地もありました。また、三大都市圏と鉄道でつながったことにより、スキー場へのアクセスが向上し、より多くの集客や大きな大会の開催にもつながりました。

他方、地元温泉旅館の閑散期や農家の冬の仕事としても、スキー客の受入れは好都合なものでした。1960 年代にはスキーブームも相まって大手資本による大規模なスキー場も整備されました。

スキー発祥当初は、スキー（板製造）産業が発展し、1965 年頃には上越地方のスキー生産が全国の約 45%になったほか、隣接する飯山市でも 1970 年頃には全国有数の生産量を誇る企業がありました。

また、冬期間の交流人口創出にも貢献し、これらに付随して、そば、野沢菜、おやきなどの特産品の知名度も向上しました。

その他、オリンピック出場選手をはじめ数多くの選手を輩出し、引退後もこの地にとどまり新たな仕事を営む選手も多いなど、人材の確保にも貢献しています。

地域資源としての捉え方

スキー産業が衰退する中で、スキー場同士の競争から連携の動き、スキー＋αの取組、あるいはスキーシーズンとグリーンシーズンの連携など、様々な取組がなされています。

現在スキー場がある地域は、山間部に限られていますが、歴史的なつながり、人の流れを作り出す波及効果を考えると、この地域全体の資源とみるべきであり、広域的に物事を考える視点を得られる分野であると思います。

インバウンドによる盛況も一過性のものと懸念される中、さらには地球温暖化の進行が不可避とされる中、その先をどのように見据えて今を取り組んでいくか、重要なテーマです。

雪国をポジティブに感じる人々が集まる貴重な地域資源であり、この地が有するスキーの歴史は間違いなく財産であると考えます。

【テーマに関する参考文献など】

※　特に参考とした文献には●を付しました

（全国）
・山崎紫峰（1936）：日本スキー発達史、朋文堂
●瓜生卓造（1978）：スキー風土記、日貿出版社
・白坂蕃（1980）：日本におけるスキー場の分布、学芸地理（34）、東京学芸大学地理学会
・Shigeru　SHIRASAKA（1984）：Skiing Grounds and Ski Settlements in Japan(日本におけるスキー場とスキー集落)、Geographical Review of Japan Vol.57(Ser.B),No.1
●白坂蕃（1986）：スキーと山地集落、民玄書房
・呉羽正昭(2002)：日本におけるスキー人口の地理的特徴、筑波大学地球科学系、人文地理学研究 26 号
●呉羽正昭（2017）：スキーリゾートの発展プロセス　日本とオーストリアの比較研究、二宮書店
・山本千雅子・大島淳一（2007）：アメダスデータを用いた雪質推定モデルによるスキー場雪質評価、グラデュウス・マルチリンガルサービス
・ＳＫＩスキーのいろいろページ+Ｘ　http://skis-hijikata.o.oo7.jp/
・スキーのあけぼの　http://nsa.jpn.com/rekisi/rekisi/akebono.htm
・意外と知らない？スキー場が多い都道府県はここ！
https://skiski.jp/snowcomi/2017001.html
・スキー場情報局　http://skimt.s93.xrea.com/
・スキー・スノボ研究所　https://snow.tabiris.com/

（長野県・新潟県）
・信州の旅.com　ホームページ（長野県スキー発祥 100 年の歴史）
http://www.shinshu-tabi.com/ski100/rekisi.html
・新潟県社会科教育研究会（1980）：雪国の風土　信越国境の地理的研究、古今書院
・鈴木健夫・青木宏一郎（1988）：スキーリゾートの計画、地域社
・臼田明（2013）：日本のスキー・スケート-明治・大正期の長野県-、信毎書籍出版センター

17　ニューツーリズム　（自然環境を活かしたツーリズムの草分け的地域）

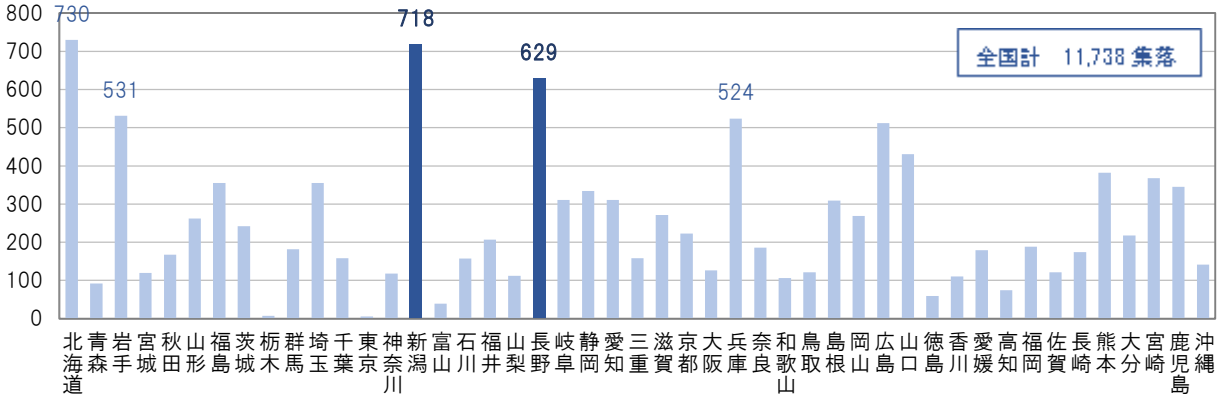
1　はじめに

戦後の高度経済成長期には旅行客数が急増し、全国各地でレジャー施設の整備やリゾート開発などが進みましたが、その後環境問題への懸念、バブル経済の崩壊、旅行ニーズや旅行形態の多様化などから、観光の在り様も変わりつつあります。2000 年に入ってからは、産業観光やエコツーリズム、グリーンツーリズム、ヘルスツーリズムなどのニューツーリズムの振興も行われてきました。

このうちグリーンツーリズムは、国内では 1990 年代から農林水産省の呼びかけではじまり、その後全国的に波及、当初の宿泊場所はスキー民宿が中心でしたが、その後一般農家にも波及しました。

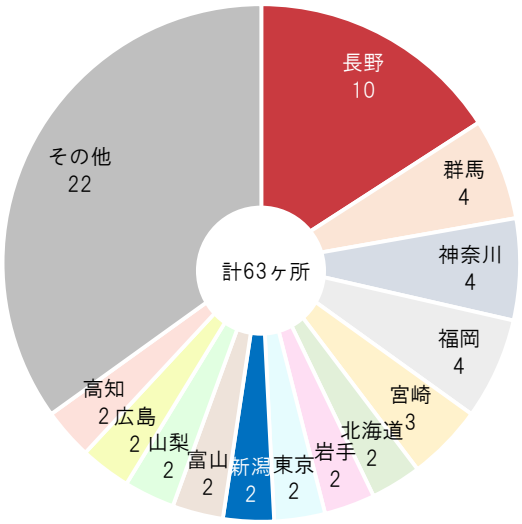
＊　スポーツ合宿は、比較的伝統のある交流形態であり、ニューツーリズムに含めるケースは少ないものの、本報告書では地域の自然や文化を活用し、教育や学習の要素を含んだツーリズムという観点からここに含めて説明します。

■　グリーンツーリズムの取組実施集落数（都道府県別・2017 年）



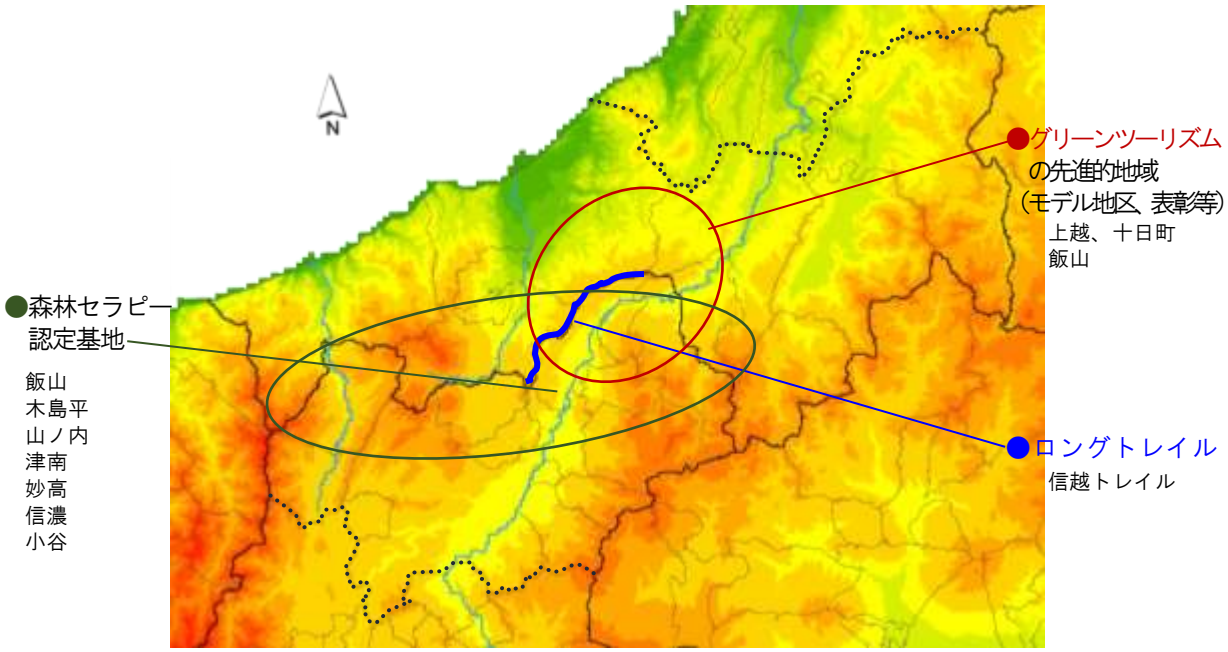
出所）農林水産省「農林業センサス」をもとに作成

■　森林セラピー基地数（都道府県別・2018 年）



出所）森林セラピーソサエティホームページをもとに作成

2　特　徴



備考）信越県境付近にある市町村（破線で挟まれた地域）の取組のみ掲載
出所）国土地理院数値地図などをもとに作成

■　スポーツ合宿の地

- 飯山市戸狩地区などでは、学生合宿地として民宿の隣接地にテニスコートや体育館などを整備。須坂市の峰の原高原も盛ん。
- 信濃町や妙高市は、高地トレーニングの環境が充実（クロスカントリーコース、競技場、急坂、宿泊施設などあり）。箱根駅伝の名門校や実業団チームが訪れており、合宿の町（郷）と称する。

■　森林セラピー基地・ロングトレイルの整備

- 森林セラピー基地の認定箇所は、信濃、飯山、木島平、山ノ内、小谷、津南、妙高の 7 か所（全国では 63 か所）。うち信濃町と飯山市は、2006 年に第 1 期認定を受けた全国 6 自治体に含まれる。

森林セラピーは、科学的な証拠に裏付けされた森林浴のことであり、森を楽しみながらこころと身体の健康維持・増進、病気の予防を行うことを目指す。

「森林セラピー基地」と「セラピーロード」は、癒しの効果・病気の予防効果が科学的に認められたお墨付きの森であり、2006 年から認定が始まり、現在では全国に 63 か所誕生している。

【参考文献など】

・森林セラピーソサエティホームページ
https://www.fo-society.jp/

- 信越トレイルは、総延長 80km、2008 年に全線開通。国内ロングトレイルの先駆けといわれる。信越トレイルクラブは、エコツーリズム大賞第 4 回優秀賞（2008）第 7 回大賞（2011）、地域づくり総務大臣表彰（2013）等受賞。

ロングトレイルは、「歩く旅」を楽しむために造られた道のことである。日本ロングトレイル協会のホームページで紹介されているトレイルは、2019 年 3 月現在で 25 だが、このうち信越トレイルは、第 1 回フォーラム（2011 年）においてすでに活動報告を行っている。

信越トレイルは、日本人バックパッカーでは伝説的な存在ともいえる故・加藤則芳氏が、「日本人にもロングトレイルの素晴らしさを体験してほしい」という思いを実現した場所でもある。

国内ロングトレイルの中での位置付けについて、客観的で明確に語れるものは確認できていないが、ホームページ上では、国内ロングトレイルの中で「モデル」、「先輩格」、「先駆け」、「屈指」、「日本初ともいえる」などの記載が多々存在する。事実上「国内初の本格的ロングトレイル」といってよく、控えめに言っても「先駆け」などの表現は間違いないと思われる。

2020 年に予定される苗場山までの延伸に向けて、現在準備が進められている。

このほか、糸魚川市・小谷村・白馬村などの「塩の道トレイル」や魚沼地方の雪国観光圏を中心とした「スノーカントリートレイル」が整備されているほか、妙高戸隠連山国立公園エリアでも整備に向けた調査が進められるなど、様々なロングトレイル構想の実践あるいは計画がある。

【参考文献など】

・日本ロングトレイル協会ホームページ
http://longtrail.jp/index.html
・信越トレイルクラブホームページ
http://www.s-trail.net/interview/index.html
・上越市創造行政研究所（2018）：第 5 回信越県境地域づくり交流会開催報告　ロングトレイルと地域づくり、ニュースレター創造行政 No.41

■ グリーンツーリズムへの積極的取組

- 白馬村は、民宿の発祥の地とされる。
- 飯山市では、農村休暇法が制定された 1994 年に受入れ開始。数々の表彰を受ける。
- 十日町市と上越市で推進する越後田舎体験は、1998 年に受入れ開始。地域自立活性化優良事例「総務大臣賞」、グリーン・ツーリズム大賞「優秀賞」、 オーライ！ニッポン大賞、 エコ・ツーリズム大賞「優秀賞」など数々の表彰を受ける。
- 子ども農山漁村交流プロジェクト（2008-09）の全国の先導型モデル地域 16 地区のうち、上越市、飯山市が選定される。全国の体制整備型地域 74 地区には、長野市、妙高市、魚沼市が選定される。

3　因果関係

※　番号は他のテーマ(01～20)との関係性、アルファベットは次の頁に補足説明があることを示す。

スキー産業の盛衰　16

・スキー場の発展とともに増加した民宿が、スキー人口の減少やグリーンシーズンの低稼働率といった課題を克服するため、スポーツ合宿の受入れやグリーンツーリズムの推進に取り組んだ。

傾斜のきつい地形　01

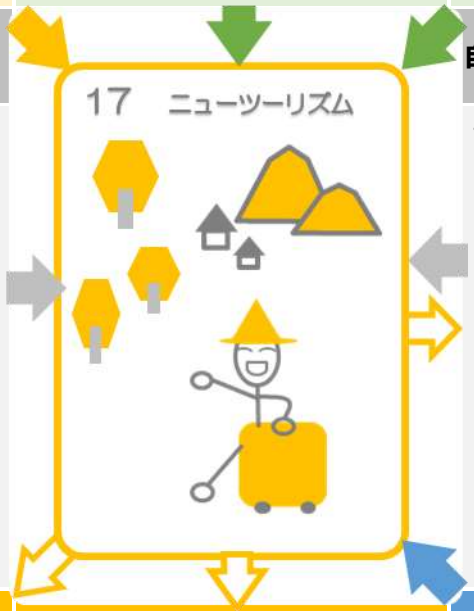
・**信濃町**や**妙高市**など、傾斜がきつく一定の標高を持つ山間部は、駅伝などの高地トレーニングに適していると考え、スポーツ合宿の受入れを推進した。

雪国特有の自然環境　03

・雪に強いとされるブナ林、米づくりを中心とした農業、雪国のくらしや文化などを、グリーンツーリズムの素材として活用することができた。

コーディネート組織の存在

・**上越市（旧安塚町）**が設置した雪だるま財団や、**飯山市**が設置した信州いいやま観光局などの組織が、事務局・コーディネート機能を担った。



自然保護運動の取組

・スキー場開発やゴルフ場などの開発計画が進む中、1990 年前後からブナ林帯を有する地域の一部などで自然保護運動が起こる。
バブル崩壊も相まって計画中止に追い込んだ地域では、その後自然環境の保全と地域活性化の両輪を実現すべく、トレッキングコースや NPO 法人の設立などが進む。(飯山市鍋倉山、上越市桑取など)

出稼ぎ労働者の減少

・**飯山市**ではグリーンシーズンの宿泊者数がスキーシーズンのそれを逆転し、出稼ぎ労働者の減少などに貢献した。

都市と農村の関係人口の増加

・農山村を第二のふるさととするファンやＩターン人材の増加、最近ではインバウンド（外国人来訪者数）の増加にもつながっている。

首都圏からの距離感　05

・首都圏からアクセスが良いため、学生等を受入れやすい環境がある。

4　解　説

要　約

信越県境地域では、高地トレーニングの合宿の町と称する自治体や森林セラピー基地の集積地があるほか、国内ロングトレイルの先駆けである信越トレイルがあり、運営団体の信越トレイルクラブは、エコツーリズム大賞など数々の受賞をしています。

また、グリーン・ツーリズム大賞「優秀賞」などを受賞した越後田舎体験をはじめとして、グリーンツーリズムへの積極的な取組が行われている地域でもあり、農家民宿の数も国内有数といわれています。このように、ニューツーリズムといわれる取組が先駆けて行われてきた地域ともいえます。

豪雪地帯であり、身近にブナ林があることや、農業が盛んであることは、グリーンツーリズムをはじめとしたニューツーリズムが発展する基盤となりました。首都圏からのアクセスも比較的よく、学生の受入れがしやすいことも要因の一つとしてあげられます。

また、スキー場の発展とともに増加した民宿においては、スキー衰退やグリーンシーズンの低稼働率を克服する解決策ともなりました。

こうしたことのほか、ゴルフ場建設などが盛んに行われるようになり、環境保全運動が活発となる中で、自然環境の保全と地域活性化を実現する手段としても有効でした。

実際の取組では、各自治体バックアップの下設立された組織がコーディネート機能を担ったことも発展につながりました。

民宿の増加などは、雪国における出稼ぎの抑制に貢献しました。飯山市ではグリーンシーズンの宿泊者数がスキーシーズンのそれを逆転するほどとなりました。

また、農山村を第二のふるさととする首都圏のファンの増加や、Ｉターン人材の増加、インバウンドの受入れ増加など、さまざまな視点で交流人口の拡大が現れつつあります。

地域資源としての捉え方

ニューツーリズムは、今まで魅力ととらえていなかった部分に価値を見いだす視点を与えてくれるものでもあり、地域づくりにとって重要な分野であると思います。それは、生活における新しい価値観を考えることにもつながるかもしれません。また、地域の良さを地域外の人にどう発信するかを考える上でも重要なテーマと考えます。

この地域は、ある意味でグリーンツーリズムの老舗的存在であったともいえますが、いまや全国各地で取り組まれる中で、改めてその質や継続性が問われる時代になっています。都市の人口は多く潜在需要はありますが、一朝一夕に需要が増加するものでもないように思います。人数や経済効果などの指標も大切ですが、人間関係の継続性から得られる力や自然災害等の非常時を念頭に置いた交流も大切であり、都市と農村の交流のあり方を考える中では今後も変化･深化を遂げるテーマであると考えられます。

【テーマに関する参考文献など】

※　特に参考とした文献には●を付しました

（レジャー全般）

・日本地誌研究所　青野壽郎・尾留川正平編（1972）：日本地誌　第 9 巻　中部地方総論・新潟県、二宮書店
・斎藤功・石井英也・岩田修二（2009）：日本の地誌 6　首都圏Ⅱ、朝倉書店
・小野坂庄一監修（1998）：図説　十日町小千谷魚沼の歴史、郷土出版社
・須田直之（1996）：雪国の冬季イベント観光 － 地域のイメージと観光振興、雪国環境研究第 2 号、青森大学雪国環境研究所

（ニューツーリズム）

・吉田春生（2003）：エコツーリズムとマス・ツーリズム　－現代観光の実像と課題－、大明堂
・農林水産省ホームページ
・環境省ホームページ
・森林セラピーホームページ
・日本エコツーリズム協会ホームページ
・都市農山漁村交流活性化機構ホームページ
・毎日新聞ホームページ

18　寺　社　（浄土真宗や山神信仰などの集積がみられる地域）

1　はじめに

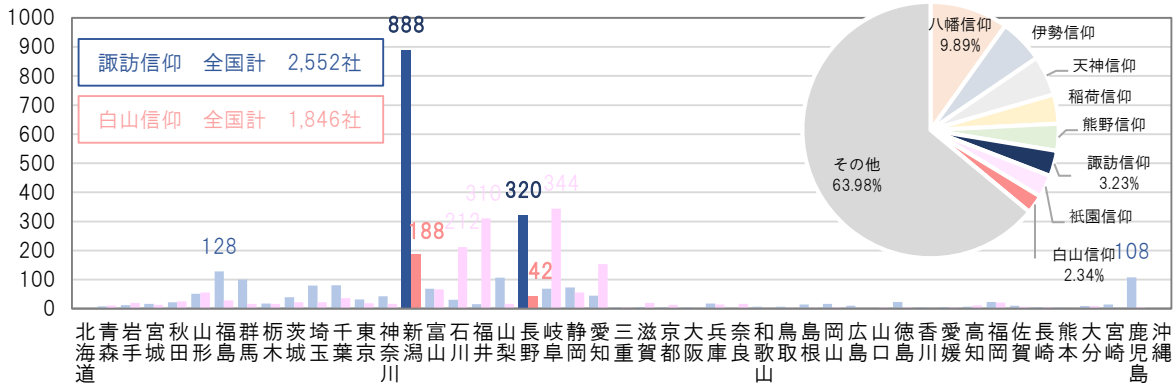
日本には、神道、仏教、キリスト教、諸教など多種多様な宗教が混在しますが、宗教団体の数では、神道系と仏教系が全体の約 9 割を占めています。

神道とは、「日本の民族に固有の神・神霊についての信念に基づいて発生し、展開してきた宗教の総称」とされています。全国に 8 万を超える神道系宗教団体のうち、最も多い信仰は八幡で、次いで伊勢、天神、稲荷、熊野などがありますが、八幡でも全体の 1 割に満たず、多種多様な神社が存在しています。ちなみに神社の数が最も多い都道府県は、新潟県（4,729 社）です。

仏教は 6 世紀半ばに日本に伝わり、平安時代には天台宗や真言宗が、鎌倉時代には浄土系の仏教（浄土宗、浄土真宗、時宗）や日蓮宗、禅宗（臨済宗、曹洞宗）などが成立しました。現在、全国に 8 万弱ある仏教系宗教団体のうち、最も多い宗派は浄土系が 4 割強、次いで禅宗が 3 割弱、天台・真言宗で 2 割強となっています。

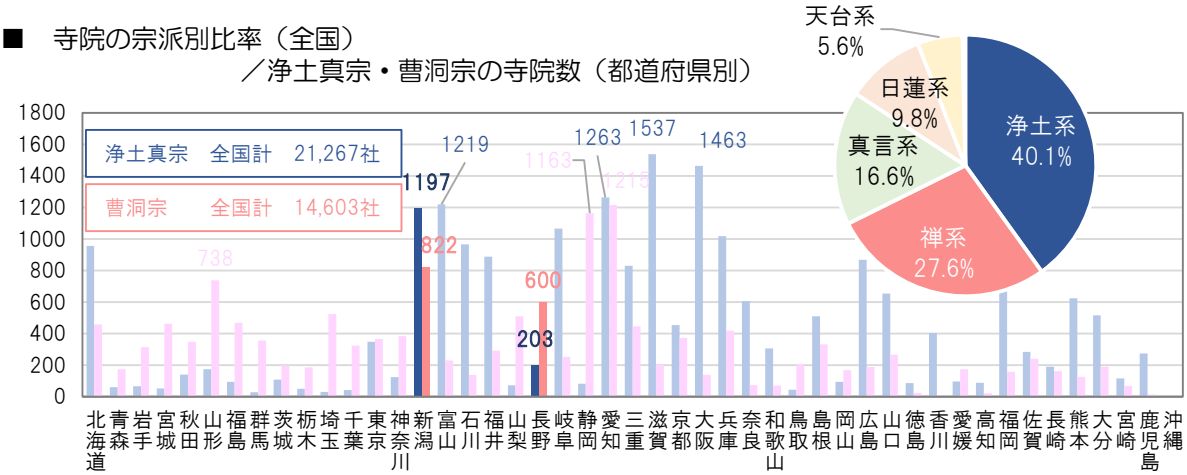
また、平安末からは日本古来の山岳信仰が仏教や神道などと習合した、修験道という宗教体系も作られていきました。

■　神社の信仰別比率（全国）／諏訪信仰・白山信仰の神社数（都道府県別）



出所）神社本庁「平成「祭」データ」をもとに集計・作成

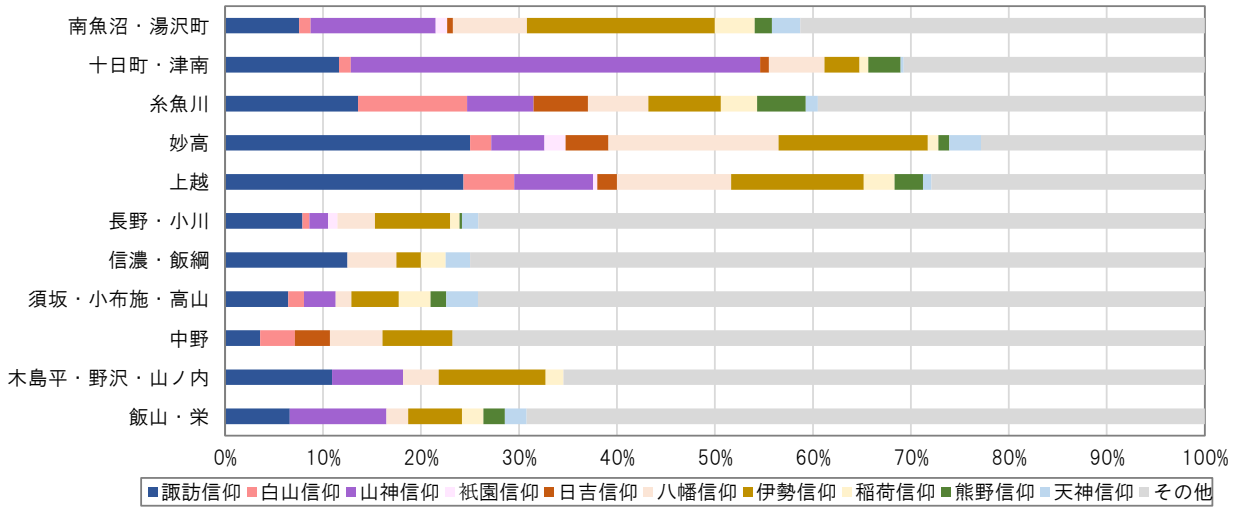
■　寺院の宗派別比率（全国）
／浄土真宗・曹洞宗の寺院数（都道府県別）



出所）「全国寺院大鑑」をもとに集計・作成

2　特　徴

■　神社（信仰別）



備考）上記データは、全国で 20 社以上ある神社名称を抽出して信仰を判断し、集計している。そのため、全国的に珍しい名称の神社であれば「その他」に含まれる。これらがどの信仰に属するか解明されれば、各信仰の比率が高まることも十分想定されるため、データの解釈には注意が必要である。

出所）神社本庁「平成「祭」データ」をもとに集計・作成

●　諏訪信仰（諏訪神社・諏訪社）

- 古くから風と水を祭る竜神の信仰、農業の守護神、海の守り神などがあり、武家の守護神ともなった。
- 新潟県は 888 社で全国 1 位、長野県は 320 社で全国 2 位であり、両県が突出している。
- 上越市や妙高市で特に多く、市内の 4 分の 1 を占める。魚沼・北信地方も全国平均よりは多い。

諏訪社（諏訪大社）は『古事記』国譲り神話において、建御雷神に降伏し諏訪に地に鎮まった建御名方神と、その后神である八坂刀売神を祀っている。神格には、狩猟神、軍神、風神・水神、漁業・舟運の神などがある。

諏訪神社の分布は全国に広がっているが、愛知県より以東の東日本に集中して見られる。

信濃国の一宮とされる諏訪社(諏訪大社)は、古代、七道諸国の神社のなかで朝廷において非常に高い位置づけであり、神社分布も長野県に多い。

しかし、数は新潟県の方が多く、新潟県内でも最も多い信仰となっている。新潟県内においては、新潟市から長岡市にかけてと上越市周辺に多い。

諏訪信仰の特徴とその広まりの関係については、水を掌る神として、信濃川の川筋に信仰を拡大したほか、主祭神・健御名方命の母が越後国にゆかりのある奴奈川姫命であることや、山間では狩猟の神としての霊験が浸透していたことなどの影響が指摘されている。

また武神として特徴から、信濃国に縁の深い武将たちにより広められたとも考えられている。

さらには、開拓・開田に信州の農民が多く越後へ移住してきたことや、上杉・武田両氏の争覇の影響を受けて信州の多くの人が頸城に流入し、その人たちの守り神として諏訪の神を分霊奉体して各地にその社を創建したとも考えられている。

【参考文献など】

- 神社本庁（1995）：平成『祭』データ　全国神社祭祀祭礼総合調査
- 岡田荘司・加瀬直弥（2007）：現代・神社の信仰分布―その歴史的経緯を考えるために、國學院大學「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」、14 頁
- 岡田荘司（2010）：日本神道史、吉川弘文館、298 頁
- 小田匡保（2011）：新潟県における寺社の分布と地域区分、駒澤地理№47、13～33 頁

・諏訪神社ホームページ
https://www.osuwasan.jp/
・石田耕吾（1987）：頸城の祭りと民間信仰、62頁
・島田裕己（2013）：なぜ八幡神社が日本でいちばん多いのか、幻冬舎新書、250頁

● 白山信仰（白山神社など）

・　北陸・甲信越や東海道に集中的に分布する中、新潟県内の数は188社で全国4位。
・　糸魚川市では市内の1割を超える。

白山信仰は、加賀・越前・飛騨・美濃の境にある白山を対象とする山岳信仰であるが、伝承によれば、元来自然崇拝の対象となっていた神体山に越前の僧泰源が登拝し開山したことに始まる。白山比咩神社は、白山修験道の拠点であり、全国の白山神社の根本社に位置付けられている。

白山神社の分布は、岐阜県、福井県・石川県と禅定道の拠点である馬場をもつ3県で全国の半数近くを占める。次いで近隣の新潟県・愛知県で、上位5県が中部と北陸地方にある。

新潟県内の白山信仰の分布は、下越より中越、中越よりは上越、特に西頸城郡や糸魚川市が古くて濃厚であるといわれている。

白山信仰は、沿岸と佐渡への海流ルート、姫川、名立川、鯖石川、阿賀野川の河川ルート、能生白山神社-関山権現-戸隠神社などの尾根ルートで越後に向かって浸透したなどと考えられている。

【参考文献など】

・神社本庁（1995）：平成『祭』データ　全国神社祭祀祭礼総合調査
・岡田荘司・加瀬直弥（2007）：現代・神社の信仰分布―その歴史的経緯を考えるために、國學院大學「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」、14頁
・島田裕己（2013）：なぜ八幡神社が日本でいちばん多いのか
・鈴木昭英（1978）：富士・御嶽と中部霊山、名著出版、530頁
・田上善夫（2008）：地方における霊山の配置とその影響、人間発達科学部紀要2-2、106頁

● 伊勢信仰（神明社など）

・　新潟県は725社で全国1位。南魚沼では約2割、上越、妙高でも1割5分を占める。

● 山神信仰（十二社・山神神社など）

・　全国に1,493社ある中で、新潟県が424社と飛び抜けて多く、次いで長野県が71社。
・　上越、魚沼、長野県北部に集中し、特に十日町・津南では4割強を占める。

山神信仰は、山仕事や農業になどに関連して、民間で信仰されてきた様々な山の神が基盤となっているもの。

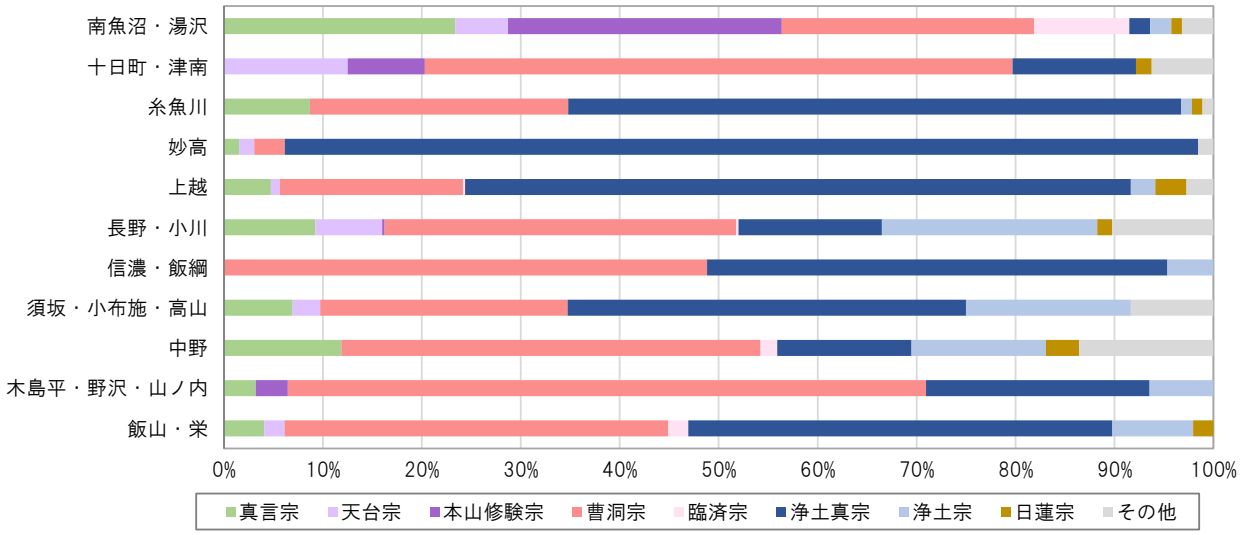
新潟県に多い十二神社は、名称からは熊野信仰を連想するが、約6割5分が大山祇命を祭神としており、山の神としての信仰が主流と見なされる。また、新潟県の上越地方と旧魚沼群域に集中する十二神社の分布は山神信仰の分布と重ならない。このため、十二神社には山神への信仰の要素があると見なしている。

山神を祀った神社の分布では、地域ごとの社数に極端な偏りが見られる。これについては、特定の地域で信仰が盛んであったという条件だけでなく、山仕事や農業といった信仰者の生業そのものの縮小や利益が流布された神の勧請などの条件にも着目すべきとの指摘がある。

【参考文献など】

・神社本庁（1995）：平成『祭』データ　全国神社祭祀祭礼総合調査
・岡田荘司・加瀬直弥（2007）：現代・神社の信仰分布―その歴史的経緯を考えるために、國學院大學「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」、20-21頁
・小田匡保（2011）：新潟県における寺社の分布と地域区分、駒澤地理№47、26頁
・石田耕吾（1987）：頸城の祭りと民間信仰、73頁

■ 寺院（宗派別）



出所）「全国寺院大鑑」をもとに作成

● 本山修験宗

- もともとは天台系の本山派修験である。
- 全国でも新潟県に最も多く、特に魚沼に集中的に分布、南魚沼・湯沢では約 3 割を占める。

本山修験宗とは、聖護院を総本山とする修験教団である。室町時代、聖護院は天台宗寺門派に属し、本山派と呼ばれる修験教団を成立し、近世期には、聖護院門跡とその直属の修験者・大先達・一般地方修験などからなる教団として本山派修験が栄える。明治以降は、修験道廃止により分裂と合併を繰り返しながら、現在の形に一本化された。

宮家（1986）は、「南魚沼郡は地域社会における修験者の活動実態やその機能を知るためにはうってつけの場所」、「南魚沼こそ近世以来の伝統的な修験の形態を持ち続けている地域」などと評している。

その他詳細は、19　霊山　を参照のこと

【参考文献など】

・全国寺院大鑑編集委員会（1991）：全国寺院大鑑、法蔵館
・宮家準（1986）：修験道辞典、東京堂出版、349 頁
・宮家準（1986）：修験者と地域社会　－新潟県南魚沼の修験道、慶応義塾大学宮家研究室報告Ⅱ、名著出版、ⅱ頁、258 頁
・小田匡保（2011）：新潟県における寺社の分布と地域区分、駒澤地理№47、17 頁
・鈴木昭英（1978）：富士・御嶽と中部霊山、名著出版

● 曹洞宗

- 天台・真言などの密教系が衰退後に広まる。長野県内では最も多い宗派で県内の 4 割弱を占める。下高井郡では過半数、上水内郡、中野市、飯山市でも約 4 割を占める。
- 新潟県内では 2 番目に多い宗派で県内の約 3 割を占める。十日町・津南では過半数を占める。

禅宗のひとつである曹洞宗は、座禅をすることで悟りの境地に達すると説いたもの。宗祖は道元であり、永平寺（福井県）を創建した。

上越地域には禅宗として、最初に守護上杉氏の庇護を受けた「臨済宗」が浸透したが、官寺的な性格が強く、守護の没落とともに衰退。これに対し、守護代長尾氏をはじめ武士層の庇護を受けた「曹洞宗」は長尾氏の台頭とともに上越地域に定着したとされる。

また、曹洞宗の修行僧は、常に肌身離さず白山妙理大権現の護符をつけているといわれており、道元開創の地の地元神に対し、曹洞宗は特別な尊崇の念を抱きつづけていたといわれている。このことから白山信仰が浸透していた地域

は曹洞宗が浸透する地盤があったともいえる。

さらには、曹洞宗の伝播は、密教的民間信仰の宗教、または宗教的情操に支えられ、その宗教的心情の基盤の流れの上に可能となったものとの見方もある。

【参考文献など】

・全国寺院大鑑編集委員会（1991）：全国寺院大鑑、法蔵館
・鈴木泰山（1993）：曹洞宗の地域的展開、20 頁
・小田匡保（2011）：新潟県における寺社の分布と地域区分、駒澤地理№47、17 頁
・竹内道雄（1998）：越後禅宗史の研究、高志書院、48,231,233 頁
・信州郷土史研究会（1981）：信州の文化シリーズ寺と神社、信濃毎日新聞社
・石田耕吾（1987）：頸城の祭りと民俗信仰、北越出版、133-134 頁
・上越市史編さん委員会（2004）：上越市史通史編 2 中世、上越市、602 頁

● 浄土真宗

・ 新潟県では最も多い宗派で県内の 4 割強を占める。特に妙高市では 9 割以上、上越・糸魚川市も約 3 分の 2 を占める。
・ 長野県内では 4 番目に多い宗派で県内全体、中野市、長野市では 1 割強。長野県内では水内・高井郡に集中し、各地域では約 4 割を占める。

浄土真宗は、誰もが救われる存在であると信じることによってのみ救われると説いた、他力本願が特徴。教祖は親鸞。

新潟県内では、新田開発が進んだ近世を中心に広まり、頸城平野と長岡からはじまる信濃川デルタ地帯に真宗寺院が多いとされている。

伝播の要因としては、宗祖親鸞の配流や子弟蓮如の布教、その後の上杉謙信の好遇など様々な要素による広まりが指摘されている。

【参考文献など】

・全国寺院大鑑編集委員会（1991）：全国寺院大鑑、法蔵館
・小田匡保（2011）：新潟県における寺社の分布と地域区分、駒澤地理№47、17 頁
・信州郷土史研究会（1981）：信州の文化シリーズ　寺と神社、信濃毎日新聞社
・田子了祐（2013）：越後における真宗の展開と蒲原平野、考古堂書店
・新潟県立歴史博物館（2006）：中世人の生活と信仰　越後・佐渡の神と仏
・石田耕吾（1987）：頸城の祭りと民俗信仰、北越出版、109-117 頁
・上越市史編さん委員会（2004）：上越市史通史編 2 中世、上越市、618 頁

●善光寺

・ 日本最古といわれる仏像を祀り、いずれの宗派にも属さず、男女平等の救済を説く寺院。
・ 江戸時代後期には、伊勢神宮や西国三十三所札所などとともに、遠隔地から参詣者が訪れる全国有数の神社仏閣の一つとされる。

【参考文献など】

・牛山佳幸（2016）：善光寺の歴史と信仰、法蔵館、237 頁
・笹本正治（2007）：善光寺の不思議と伝説　－信仰の歴史とその魅力－、一草舎出版

3　因果関係

※　番号は他のテーマ(01～20)との関係性、アルファベットは次の頁に補足説明があることを示す。

各信仰の拠点との近さ　05

・**諏訪信仰**は、長野県内を拠点とするほか、主祭神・健御名方命の母は、糸魚川を拠点とした奴奈川姫命である。
・**浄土真宗**は、開祖である親鸞が上越市に配流された縁を持つ。後に布教を広めたのは、北陸を拠点とする子弟の蓮如である。
・**曹洞宗**は、本拠地の福井・永平寺からの伝播に加え室町時代の一大拠点・耕雲寺（村上市）からも魚沼地方に入り、その後長野県へ広まったとの見方もある。

統治者の影響力

・**諏訪信仰**は、上杉・武田両氏の争覇の影響を受け信州から多くの人が頸城に流入してきたことなどから、広まったとされる。
・**浄土真宗**は、一向一揆を恐れて一旦禁止された後、上杉謙信には好遇され、北陸や長野県からも門徒が移ってきたとされる。
・一方、上杉謙信が信仰する**真言宗**は、謙信亡きあとに弾圧され、浄土真宗などに改宗した。

農業や山仕事を中心とする暮らし　06

・**諏訪信仰**は農業の守護神であり新潟県の平野部を開墾・開田するため長野県の農民が多く移住したことで広まったとされる。
・**山神信仰**は、かつて全国的にみられたが、中山間地域などの山仕事や農業が維持され、他の信仰も流布されにくかった地域に残ったとの見方もある。

信仰同士の関係性　19

・**白山信仰**は、糸魚川市能生から南進し、霊山である妙高山、戸隠山へと尾根沿いに伝わった。
・**白山信仰**は、曹洞宗の開祖道元開創地の地元神でもあり、**曹洞宗**発展の一因となったとの見方もある。
・熊野や白山に地方の旦那衆を案内した先達は、その多くが本山派修験であり、魚沼中心に**本山修験宗**が集中分布することとの関連もうかがえる。

受け入れやすい信仰の性質

・**曹洞宗**は、質素な宗風で僧自ら耕作をするのが特徴であり、これが農民層や武士の気質に合ったともいわれる。
・**浄土真宗**は、念仏を唱えれば極楽浄土に行けるという教えや僧侶の肉食妻帯を許容するなど、当時画期的な宗派であった。
・**善光寺**は、宗派性がなく、前近代の社会では例外ともいえる女人救済を行うなど、すべての信仰者を受入れた。

自治組織のはじまり

・**浄土真宗**の蓮如などによる信仰集団づくりは、村々の統合を図る組織づくり、自治集団づくり、農民結集に大きな役割を果たしていたと考えられている。

お祭りや各種行事の発達　20

・神社や寺院を中心とする数多くのお祭りや各種行事が各地域で行われている。
・一例としては、**浄土真宗**に由来する報恩講、**善光寺**の御開帳や灯明まつり、**祇園信仰**に由来する祇園祭などが挙げられる。

様々な産業の発達　7　8　10

・**善光寺**などに全国から信仰者が集まることで一大観光地となった。りんご、そば、おやき、唐辛子など様々な特産品の販売にも貢献した。
・全国的にみても仏壇造りが盛んになった地域は、基本的に**浄土真宗**の信仰が盛んな地域。飯山仏壇もその所以と考えられる。

☞ a

【補足説明】

a　仏壇製造業の発達

経済産業大臣指定の伝統的工芸品は全国で232件（H30.11現在）あるが、このうち仏壇仏具は17件であり、新潟、北陸、東海、近畿が中心と見てとれる。

信越県境付近の市町村には「飯山仏壇」と「長岡仏壇」がある。

【伝統的工芸品の指定品目（仏壇）】

地方	指定品目名
北海道東北	山形仏壇
関東・甲信越	新潟・白根仏壇、長岡仏壇、三条仏壇、飯山仏壇
東海・北陸	名古屋仏壇、三河仏壇、尾張仏具、金沢仏壇、七尾仏壇
近畿	彦根仏壇、京仏壇、京仏具、大阪仏壇
中四国	広島仏壇
九州・沖縄	八女福島仏壇、川辺仏壇（鹿児島）

出所）経済産業省ホームページ（伝統的工芸品）をもとに作成

「飯山仏壇」は越後や京都の流れをくむ絢爛豪華な金仏壇であり、金箔や胡粉盛りによる蒔絵や金具がふんだんに用いられるのが特徴とされる。生産量の 50%は京都の浄土真宗様式だが、曹洞宗、浄土宗、天台宗、日蓮宗、真言宗向けのものも製作している。

また「長岡仏壇」のエリアには、長岡、小千谷に加え、十日町も含まれている。

参考　仏壇と浄土真宗との関係性

浄土真宗の勢力が強い土地には仏壇産業が発達しやすいといわれる。その理由として、「東西本願寺の分立以降はその傾向を強める。なぜなら浄土真宗の教団は、つねに宗教共同体、同朋集団を強く志向し、それは農村共同体と重なり合う。農村共同体のヒエラルキーと同朋集団の持つ平等性の重なり合いの表現記号として、仏壇が位置付けられる。」

また、長岡仏壇の説明の中で、「真宗の仏壇は宗派の本尊である仏像をまつるもの（ほかの宗派は先祖をまつるものへ変化）であるから、粗末であってはならない」などの記載がある。

【参考文献など】

・文化庁国指定文化財等データベース
・経済産業省ホームページ（伝統的工芸品）
https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/mono/nichiyo-densan/index.html
・伝統的工芸品産業振興協会ホームページ
https://kyokai.kougeihin.jp/
・犬丸直・吉田光邦編、伝統的工芸品産業振興協会監修（1992）：日本の伝統工芸品産業全集・第8巻　筆・墨・硯・仏壇ほか、ダイヤモンド社

4　解　説

要　約

この地域の神社の分布に関する特徴は、新潟・長野両県では「諏訪信仰」系の神社数が全国的にみても圧倒的であること、魚沼地方では「山神信仰」系の神社数が同様に圧倒的であること、糸魚川市付近では「白山信仰」系の神社が比較的多いことなどが挙げられます。

諏訪信仰は、長野県諏訪地方を拠点とすることや、主祭神の母が糸魚川市を拠点とした奴奈川姫であるという地縁に加え、あるときは武神であり農業の守護神でもある性質から、長野県から新潟県に移住した武士や開墾・開田をした農民が広めたとされ、特に平野部を中心に多くみられます。

山神信仰は、古くから全国的に様々な形態で存在していましたので、はっきりしたことは言えませんが、農業や山仕事が盛んであり地形的にも奥深く雪深い魚沼地方では数多く残ったと考えられ、結果的に全国的にも突出した数になっています。

白山信仰は、北陸地方の白山を拠点として新潟県に伝播したことから、糸魚川市に若干ながら多くの神社がみられます。また、山岳信仰としての性質から、妙高山や戸隠山などを経由した後、日本海側や長野県側に伝播していきました。

この地域の寺院の分布に関する特徴は、南魚沼市や湯沢町周辺を中心とする「本山修験派」の寺院数が全国的にみても多いこと、北信地方や十日町市、津南町などには「曹洞宗」の寺院が比較的多いこと、上越地方を中心とする平野部や北信地方には「浄土真宗」の寺院が多いこと、そして特定の宗派を持たない「善光寺」の存在が大きな影響力を持ってきたことなどが挙げられます。

本山修験派の寺院は、霊山との関係が強く伺えますし、別の言い方をすれば、その後全国に様々な宗派が伝播した中でも、その影響をあまり受けることなく残ってきたということができるでしょう。

曹洞宗は、総本山である福井県の永平寺から伝播してきたことや、その際に白山信仰の分布が基盤となったこと、比較的質素な性質を持つことから農民層や武士の気質にあったことなどの説があります。

浄土真宗は、広く民衆に受入れられる性質を持ち、開祖である親鸞が上越市に配流された縁や、その後北陸を拠点とした蓮如の布教などと相まって広まったものと考えられます。

善光寺は、日本最古の仏像を祀る寺院とされるほか、特定の宗派によらないことや諏訪信仰、山岳信仰なども取り入れたこと、古くは例外的ともいえる女人救済を行うなど、全国から様々な信仰者を惹きつける影響力を持ち、一大観光地としての長野市の地位確立にも大きく貢献しています。

地域資源としての捉え方

宗派ごとの分布は時代やそれぞれの地域特性によっても変わりますし、複数の要因が絡み合ってはいますが、全体としては様々な信仰を取り入れてきた地域ということができます。

神社に対しては、厄除けや冠婚葬祭、観光地などのイメージを持つ人もいると思いますが、原点に立ち返れば古代日本人の自然への恐れや感謝の念の表れと捉えられます。この歴史を知ることは、自然と人との関係性についてこれまでを振り返り、今後のあり方を考えるきっかけになると思います。

また宗教という言葉に対して少し距離を置く人もあるとは思いますが、かつては生活と密接に関わり、人間の道徳心や地域コミュニティの形成などに大きな役割を果たしてきたものでもあります。歴史的に宗教が地域に果たしてきた役割をあらためて再認識するとともに、今後の自治やコミュニティのあり方を考えることは重要と考えます。

【テーマに関する参考文献など】

※　特に参考とした文献には●を付しました

（宗教全般　－　全国）
・文化庁（2017）：宗教年鑑平成 29 年版
・文化庁（2017）：平成 29 年度宗教統計調査結果
●長野県（2018）：長野県所管宗教法人名簿
●新潟県（2018）：新潟県宗教法人名簿
・村上重良（1988）：日本宗教辞典、講談社学術文庫
●山折哲雄・川村邦光（2000）：すぐわかる日本の宗教、東京美術
・末木文美士（2006）：日本宗教史、岩波新書
・堀一郎（2004）：日本の宗教、原書房
・松前健（2016）：日本の神々、講談社学術文庫
・高埜利彦・安田二郎（2012）：宗教社会史、山川出版社
・佐藤裕治（2007）：地理から見えてくる「日本」のすがた

（宗教全般　－　特定地域）
・地方史研究協議会編（2017）：信越国境の歴史像―『間』と『境』の地方史―、雄山閣
・信州郷土史研究会（1981）：信州の文化シリーズ　寺と神社、信濃毎日新聞社
・宮栄二編（1986）：雪国の宗教風土、名著刊行会
・松井圭介（1993）：新潟県の宗教空間 ： 寺院・神社・教会の分布を通して
●新潟県立歴史博物館（2006）：中世人の生活と信仰　越後・佐渡の神と仏
・金田文男（2013）：越後の民俗－信仰の受容変容にみる人の動き－、三協社
●石田耕吾（1987）：頸城の祭りと民俗信仰、北越出版
・上越市史編さん委員会（2004）：上越市史　通史編２中世、上越市

（仏教全般）
●全国寺院大鑑編纂委員会（1991）：全国寺院大鑑、法蔵館
●全国寺院大鑑編纂委員会（1991）：市町村区分 全国寺院大鑑別巻、法蔵館
・山折哲雄（1993）：仏教民族学、講談社学術文庫
・竹村牧男（2015）：日本仏教の思想のあゆみ、講談社学術文庫
●小田匡保（2003）：日本における仏教諸宗派の分布、駒澤地理№39、pp.37-58
●小田匡保（2011）：新潟県における寺社の分布と地域区分、駒澤地理№47、pp13-33

（浄土真宗関係）
・山折哲雄（2007）：親鸞をよむ、岩波新書
・笠原一男（1977）：親鸞、講談社学術文庫
・島田裕己（2012）：浄土真宗はなぜ日本でいちばん多いのか、幻冬舎新書
・末木文美士（2014）：日本仏教入門、各川選書
・田子了祐（2013）：越後における真宗の展開と蒲原平野、考古堂書店
・菊池裕次郎（2014）：浄土信仰の展開、勉誠出版
・浄土真宗本願寺派 http://www.kireinaobutudan.jp/info/knowledge/bunpu-tiiki.html
・犬丸直・吉田光邦編、伝統的工芸品産業振興協会監修（1992）：日本の伝統工芸品産業全集・第８巻　筆・墨・硯・仏壇ほか、ダイヤモンド社

（禅宗関係）
・鈴木泰山（1983）：禅宗の地方発展、吉川弘文館
・鈴木泰山（1993）：曹洞宗の地域的展開、思文閣出版
・竹内道雄（1998）：越後禅宗史の研究、高志書院

（善光寺関係）
・信濃毎日新聞社（1999）：信仰の「ふるさと」への旅　善光寺さん
・小林計一郎（2000）：善光寺史研究、信濃毎日新聞社
●笹本正治（2007）：善光寺の不思議と伝説　ー信仰の歴史とその魅力ー、一草舎出版
・牛山佳幸（2016）：善光寺の歴史と信仰、法蔵館
・善光寺ホームページ https://www.zenkoji.jp/about/
・善光寺御開帳 http://www.gokaicho.com/about/about.php

（神道全般）
・神社本庁ホームページ　https://www.jinjahoncho.or.jp/shinto/shinto_izanai
・新潟県神社庁ホームページ　http://niigata-jinjacho.jp/column/
●神社本庁（1995）：平成「祭」データ　全国神社祭祀祭礼総合調査
●岡田荘司・加瀬直弥（2007）：現代・神社の信仰分布―その歴史的経緯を考えるために、國學院大學「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」
・岡田荘司（2010）：日本神道史、吉川弘文館

（神道信仰別）
・島田裕己（2013）：なぜ八幡神社が日本でいちばん多いのか、幻冬舎新書
・諏訪神社ホームページ　https://www.osuwasan.jp/
・金井典美（1982）：諏訪信仰史、名著出版
・学研（2003）：諏訪大社、週刊 神社紀行通巻 11 号
・武光誠（2012）：諏訪神社と武田信玄、青春出版社
・デアゴスティーニ・ジャパン（2016）：諏訪大社、週刊日本の神社№120

19　霊　山　（様々な信仰を取り入れた霊山の集積地）

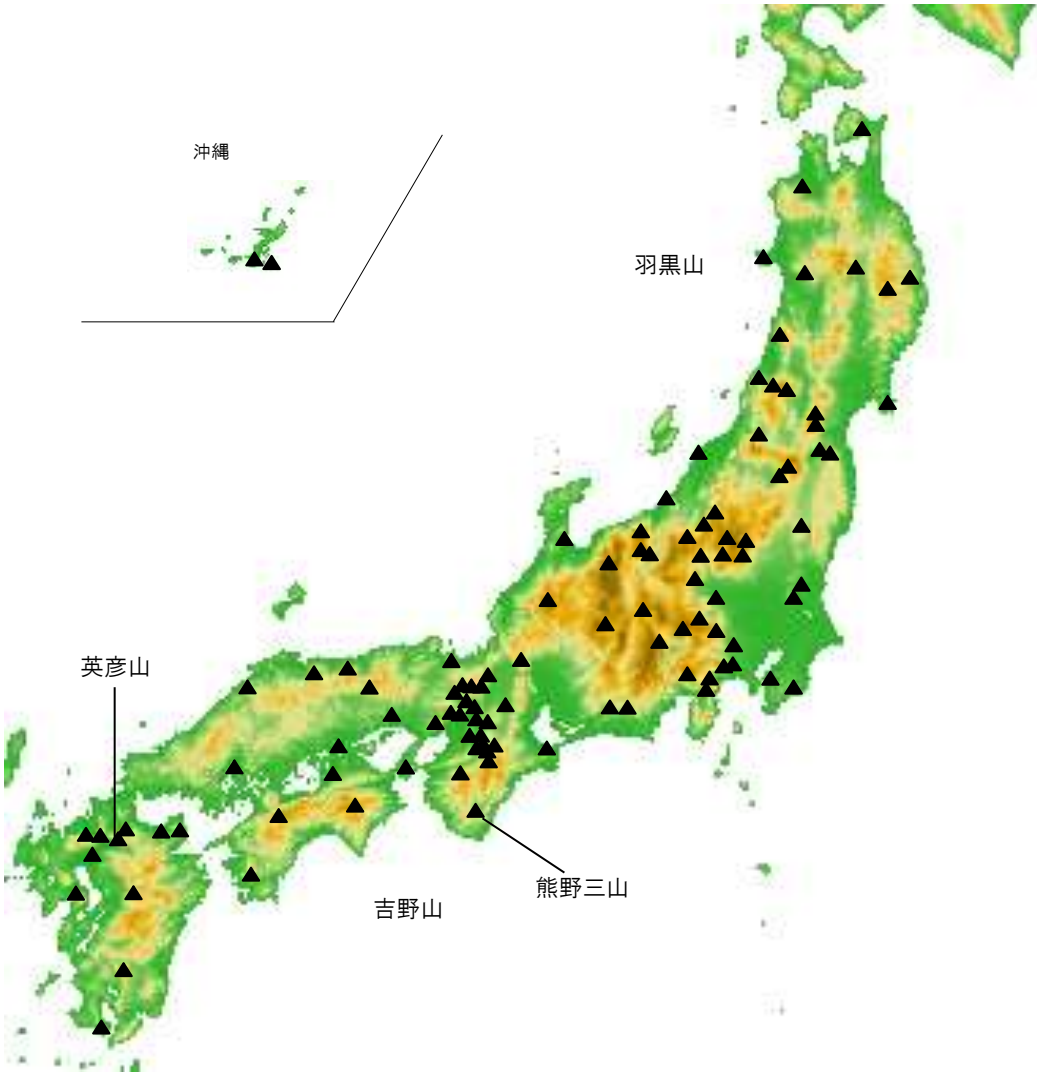
1　はじめに

日本では、原始時代から山岳が信仰の対象となっており、仏教や神道などの中にもその要素をみることができます。山の形や山への畏れから神秘感が生まれたり、水をもたらし農耕を守るものとして崇められたり、祖霊の住む他界、邪心邪霊が住む霊地などと恐れられてもいました。

こうした山岳で修業し霊力を持つとされた修験者により、山の神霊の宗教概念と仏教・神道などが習合し、修験道という一つの宗教体系を作り上げていきました。平安時代末期から、吉野の金峯山や熊野が修行の拠点となり、室町時代には、熊野側では聖護院を本山とする本山派、吉野側では大和を中心に当山派の二大修験集団が形成されていきます。そのほか、羽黒山（出羽三山）、英彦山、北陸地方の白山など、地方の霊山でも山林修行が行われました。

近世になると、修行の場とされていた山岳に庶民も登るようになり、従来の修験の山以外にも木曽の御嶽や富士山などへ信仰登山が盛んに行われるようになりました。

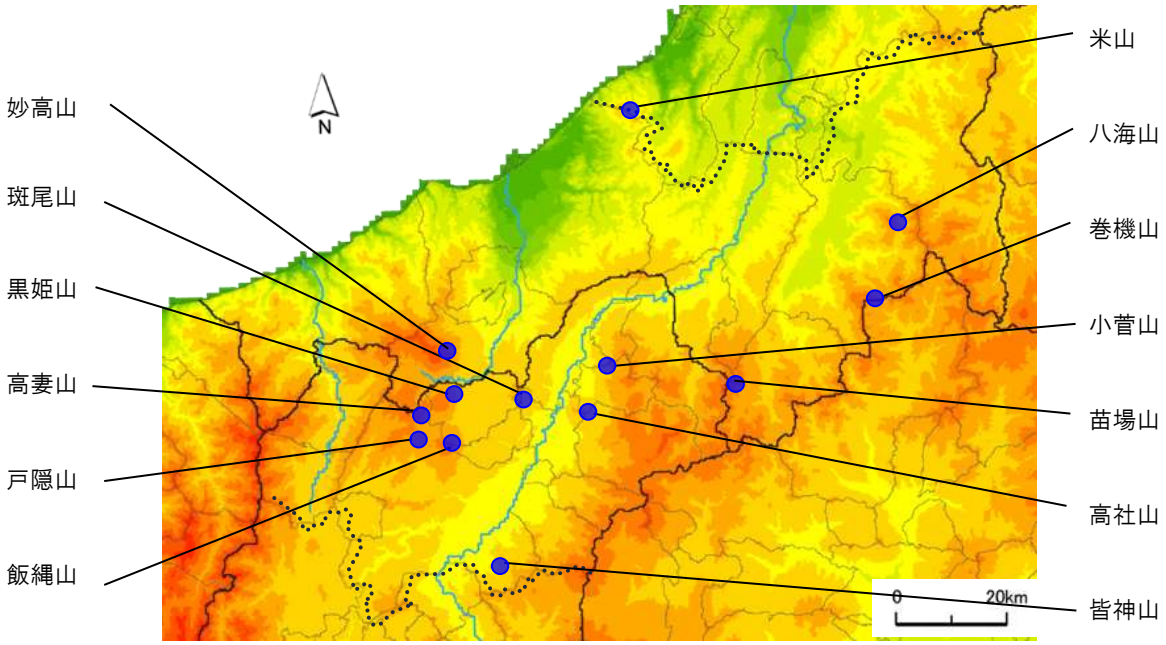
■　主な霊山の分布



出所）国土地理院数値地図および宮家準「霊山と日本人」をもとに作成

2　特　徴

【主な霊山の分布】



備考）信越県境付近にある市町村（破線で挟まれた地域）の霊山のみ掲載
出所）国土地理院数値地図、宮家準「修験道辞典」「霊山と日本人」、地方史研究協議会編「信越国境の歴史像」をもとに作成

■　古くから中央に知られた霊山

●　戸隠

・　平安末期に地方の霊山として、富士山と並び全国的に知られる。鎌倉時代には、高野山、比叡山に匹敵する一大霊場であったといわれる。
・　近隣の飯縄山との関係も深く、妙高山修験への影響も見られる。

戸隠山は、平安末期「梁塵秘抄」の歌に「四方の霊験所」として挙げられ、近世には修験道界の一センターであった。

戸隠開山についての説話では、戸隠の開山学問行者が飯縄山で７日間祈念したのちに戸隠を開いたとされており、戸隠において飯縄が修行の場の一つであったと考えられている。

妙高の関山神社は、祭神の一つに戸隠権現に関係のある新羅大明神を祭るなど戸隠山信仰の流入が見られる。これは平安時代以来隆盛であった戸隠修験が、峯を行じて伝播させたものと考えられている。

【参考文献など】

・鈴木昭英（1978）：富士・御嶽と中部霊山、名著出版、6、358-359、385 頁
・和歌森太郎　編（1975）：山岳宗教史研究業書１山岳宗教の成立と展開、名著出版、196 頁
・戸隠神社ホームページ

●　その他の霊山

・　県境の苗場山や巻機山なども、修験霊山として知られる存在である。

■　主要な信仰の影響

●　熊野・金峯山信仰

・　熊野と金峯山を結ぶ大峰連山は、平安中期に中央の修験道場に発展。
・　平安末期ごろ北陸から西頸城地方へ伝播して妙高山に達し、さらに上越市板倉区から東部山麓を通り北上したと考えられている。

【参考文献など】

・鈴木昭英（1978）：富士・御嶽と中部霊山、名著出版、7、381 頁

● 白山信仰

・　白山は、役小角とならび修験道の祖とされる泰澄が開山し、地方霊山としては最も早期に開発。日本海側に北上、一部が越後から信濃、関東に入り、一部が美濃から東海道沿いに進出。
・　平安末期に能生白山社（糸魚川市）が造られ、この信仰が鎌倉末期ごろ妙高山に定着、その後戸隠山にも定着したとされる。
・　能生白山権現を「竜の尾」、関山三社権現を「竜の胴」、戸隠を「竜の頭」とする九頭竜権現は、一連の白山信仰と考えられている。
・　米山や斑尾山にも白山信仰の伝播がうかがえる。

米山は、伝説によれば泰澄が開いたといわれる。泰澄は、白山を開山し、役小角とならび修験道の祖である。彼は二体の薬師如来のうち、一体を五輪山（米山）、もう一体を斑尾山に安置したと言い伝えられる。

【参考文献など】

・鈴木昭英（1978）：富士・御嶽と中部霊山、名著出版、14-15 頁
・地方史研究協議会編「信越国境の歴史像―『間』と『境』の地方史―」、雄山閣、26-27 頁
・石田耕吾（1987）：頸城の祭りと民俗信仰、160 頁

● 羽黒・湯殿修験（出羽三山）

・　出羽三山から江戸までの羽州・奥州道沿いのほか、越後・佐渡にも一定程度広まる。

【参考文献など】

・鈴木昭英（1978）：富士・御嶽と中部霊山、名著出版、18-19 頁
・戸川安章（1975）：出羽三山と東北修験の研究、名著出版、169 頁

● 木喰行者などによる復興

・　戦国時代の戦乱で山岳信仰が衰退する中、中部地方の霊山の特徴は、木喰行者により山岳宗教が復興し、霊山を広く民衆に開放したこととされる。その後の富士講、御嶽講といった庶民が霊山へ登拝する動きへもつながる。
（木喰行者が作成した木喰仏は、全国に 630 体ある中で、柏崎市の 83 体が全国最多、中越や佐渡でも数が多いとされる）

【参考文献など】

・鈴木昭英（1978）：富士・御嶽と中部霊山、名著出版、21-23 頁
・柏崎市立博物館ホームページ http://www.city.kashiwazaki.lg.jp/kyoiku/bunka/hakubutsukan/tenjikan/1806041557.html
・柏崎を「微笑仏」のまちに　木喰上人生誕 300 年、新潟日報（2018 年 5 月 25 日）

● 木曽御嶽講の普及

・　御嶽講は、濃尾平野を中心に、関西や中山道沿いにも多いが、上越付近にも若干広まる。
・　八海山（南魚沼市）も古来は大日如来や作神を祀り、修験道所として知られていたが、その後は御嶽講系統の霊山として栄える。

【参考文献など】

・田上善夫（2008）：地方における霊山の配置とその影響、富山大学人間発達科学部紀要 2-2、103 頁
・宮家準（2016）：霊山と日本人、講談社学術文庫、145-146 頁
・鈴木昭英（1978）：富士・御嶽と中部霊山、名著出版、22・434-453 頁
・鈴木昭英（2004）：越後・佐渡の山岳修験、法蔵館、96 頁

3　因果関係

※　番号は他のテーマ(01～20)との関係性、アルファベットは次の頁に補足説明があることを示す。

険しい地形　01

・フォッサマグナの地に形成された険しい山岳地帯があり、山岳地帯が全体に占める割合も大きい。また、中央部には高い山脈が幾重にも連なっている。こうしたことから、修験道をはじめとした修行の場となる地形があった。
・険しい高山でありすぎるが故に、開発の時期は近畿地方より遅れたとの見方もある。

☞ d

主要な交通網の存在　05

・かつての中央である西からみると東との端である地域であり、霊山の開発時期は近畿地方より遅れたとの見方もある。
・**白山信仰**は交通の便がよい日本海沿いルートのほか、能生から火打・妙高、戸隠へと尾根沿いルートの形跡もある。
・また、東西方面から様々な信仰が伝播してきたが、それらの極限付近となっており、結果として様々な信仰が複雑に混入する。

☞ b

統治者の影響

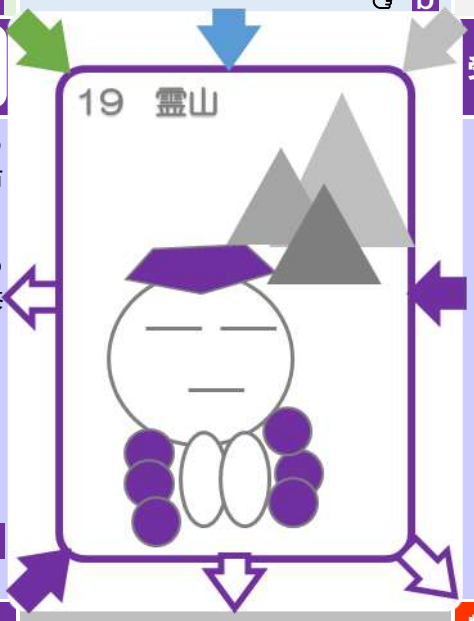
・統治者の意向により継続した面もある。例えば、**飯縄**の法は兵法との関連が深く、信玄・謙信などの武将の信仰が篤かったといわれる。
・**戸隠神社**は、川中島の合戦により破壊・移転を余儀なくされたが、その後上杉景勝により再興される。江戸時代には将軍家から手厚い保護を受ける。

☞ c

他の宗教との関係性　18

・**白山信仰**は、糸魚川市能生から南進し、霊山である妙高山、戸隠山へと尾根沿いに伝わった。
・**八海山**などの山岳信仰の存在もあり、魚沼地方には本山派の修験社寺が数多く残る。

☞ d



受入れやすい信仰の性質

・**白山信仰**は、地元神と異質ではなく、神仏が混ざり合った高度な信仰であったことから、白山信仰は受容されやすく広まったとされる。一方、それが故に主体的な特色は失われていたとされる。

☞ e

周辺霊場との組み合わせ

・**戸隠信仰**は、**善光寺信仰**や**飯縄信仰**とともに流布されることによって、信仰者の増加には相乗効果を発揮したともいえる。

☞ f

交流人口の拡大

・現代は信仰対象としての参拝客のみならず、パワースポットや登山などを好む人々が訪れる。

特産品（戸隠そばなど）の発達　07

・全国からの信者により、**戸隠蕎麦**などの特産品は全国に知られるようになった。

【補足説明】

a 険しい地形

日本アルプスをはじめとした中部霊山の多くは、岸壁が行く手を遮って登頂困難な高山で、容易に修験道の霊山になり得なかったとの指摘もある。

【参考文献など】

・鈴木昭英（1978）：富士・御嶽と中部霊山、名著出版、4 頁

b 位置・交通

中部山岳宗教は、近畿や北陸の名山の影響を受け、また出羽三山修験道の信仰圏でもあり、東西両方から成立基盤を異にする山岳信仰が入り込む複合的な多様性がうかがわれるとされる。

中部地方は、文化的に東西日本の接触地帯であったことから、総体的に見て中央近畿地帯の霊山発展よりもかなり遅れたとの指摘もある。

【参考文献など】

・鈴木昭英（1978）：富士・御嶽と中部霊山、名著出版、4-5・18 頁
・宮家準（2012）：修験道の地域的発展、春秋社、538 頁
・鈴木昭英（1978）：富士・御嶽と中部霊山、名著出版、14-15 頁

c 統治者の影響

【参考文献など】

・宮家準（2012）：修験道の地域的展開、春秋社、143 頁
・鈴木昭英（1978）：富士・御嶽と中部霊山、名著出版、365-366 頁
・戸隠神社（1997）：戸隠信仰の歴史、53-60 頁

d 他宗教との関係性

【参考文献など】

・田上善夫（2008）：地方における霊山の配置とその影響、富山大学人間発達科学部紀要 2-2、110 頁
・宮家準（2012）：修験道の地域的展開、春秋社、537・538-540 頁
・鈴木昭英（2004）：越後・佐渡の山岳修験、8 頁

e 受け入れやすい信仰の性質

【参考文献など】

・田上善夫（2008）：地方における霊山の配置とその影響、富山大学人間発達科学部紀要 2-2、110 頁

f 周辺霊地との組み合わせ

【参考文献など】

・戸隠神社（1997）：戸隠信仰の歴史、48 頁

4 解 説

要 約

全国的にみて最も霊山の多い地域は近畿地方ですが、一定の集積を持つ地域は全国各地にあり、この地域にも全国的に一定の知名度を持った「戸隠」をはじめ、一定数の霊山がみられます。かつてはフォッサマグナの海の底にあり、その後隆起や褶曲、火山活動などが盛んであったこの地域は、険しく存在感のある山々の多い地域ではありますが、むしろ険しすぎる地形や主要霊山からのやや離れた位置にある関係などから、霊山としての開発はやや遅れたとされます。

この地域の特徴としては、近畿の熊野、北陸の白山、東北の出羽などの成立基盤を異にする山岳信仰が次々に入り込んだことが挙げられます。また、山岳信仰が衰退した戦国時代以降は、木喰行者や御嶽講の普及による復興なども行われました。

さらには、善光寺をはじめとする寺社との様々な関わりもありました。複合的で多様な状況を生み出した象徴の一つとして妙高山が挙げられます。複数の信仰が重なり合ったり混ざり合うことは、様々な参拝客を受入れ、長野市などの一大観光地が発達した一因ともなっているといえます。

地域資源としての捉え方

日々の暮らしの中で自然の恵みと災いを実感でき、険しく存在感のある山々が多いこの地域では、自ずと山が信仰の対象とされてきたものと思われます。自然への畏れという精神性は、当時に比べれば薄れているものと思いますが、堂々とした存在感を持つ山の風景は日々の暮ら

しの中で自ずと目に入ってきます。妙高山を例にとると、東西南北に妙高山を眺めることのできる集落が広がる中、それぞれの集落において「自分たちの住む場所から眺める妙高山が一番いい」などと誇らしげに語る人は少なくありません。今後の環境問題や自然災害への対応、地域の結束力などを考えるに当たっては、改めて重要性が増す存在と思われます。

かつてはこれらの山が持つ霊力を得るために、修験の山伏たちがこの地を訪れたとされます。現代社会においても、修行ではないにせよ登山やロングトレイルなどを楽しむハイカーが数多く訪れています。この背景には、運動機会としての魅力のほかに、山に接することで精神の安定や自己を見直す機会を得られるなどの多様な魅力があり、昔も今も変わらない地域の価値を考えさせられます。

【テーマに関する参考文献など】

※　特に参考とした文献には●を付しました

（全国的な傾向）

●和歌森太郎（1975）：山岳宗教の成立と展開、名著出版

・桜井徳太郎（1976）：山岳宗教と民間信仰の研究、名著出版

・五来重（1980）：修験道入門、角川書店

●宮家準（1986）：修験道事典、東京堂出版

●宮家準（2012）：修験道の地域的展開、春秋社

●宮家準（2012）：修験道　その伝播と定着、法蔵館

・宮家準（2016）：霊山と日本人、講談社学術文庫

・佐々木高明（2005）：山の神と日本人　――　山の神信仰から探る日本の基層文化、洋泉社

・久保田展弘（2004）：日本の聖地、講談社学術文庫

・本山修験宗総本山　聖護院ホームページ　http://shogoin.or.jp/ascetie.html

・菅豊（2000）：修験がつくる民俗史、吉川弘文館

（新潟・長野）

・宮家準（1986）：修験者と地域社会 －新潟県南魚沼の修験道、慶応義塾大学宮家研究室報告Ⅱ、名著出版

・戸川安章（1975）：出羽三山と東北修験の研究、名著出版

●鈴木昭英（1978）：富士・御嶽と中部霊山、名著出版

●鈴木昭英（2004）：越後・佐渡の山岳修験、法蔵館

・高瀬重雄（2002）：白山・立山と北陸修験、名著出版

・長野市立博物館（1994）：第 35 回特別展　信濃の山岳信仰

●田上善夫（2008）：地方における霊山の配置とその影響、富山大学人間発達科学部紀要 2-2、pp.95-114

・田上善夫（2004）：日本海側中北部の地方霊場の開創と寺社分布のかかわり、富山大学教育学部研究論集 7　pp.35-48

・八十二文化財団（2016）：紀行　戸隠・関山・能生、地域文化№119

・戸隠神社（1997）：戸隠信仰の歴史

・戸隠神社（2015）：戸隠信仰の諸相

・戸隠神社パンフレット

・上越市ホームページ（米山）

・山村民俗の会編（1990）：山の神とヲコゼ　シリーズ山と民俗 7

・池田弥三郎（1982）：山の神　里の神　東海甲信越、小学館

・亀井千歩子（1977）：奴奈川姫とヒスイの古代史、国書刊行会

・土田孝雄（1984）：神遊びの里、奴奈川郷土文化研究会

・土田孝雄（1990）：奴奈川姫、奴奈川郷土文化研究会

・寺村光晴（1995）：日本の翡翠、吉川弘文館

20　冬のまつり　（多彩な小正月行事と現代の雪まつり）

1　はじめに

お祭りは全国津々浦々、多種多様に存在しますが、ここでは雪国らしさを醸し出す冬のお祭りを中心に紹介します。

冬の風物詩の一つに小正月行事があります。一般的には、どんど焼き・サイの神などと呼ばれ、しめ縄や門松、書初めなどを神社の境内や田んぼなどで燃やし、五穀豊穣や無病息災等を祈るものが知られていますが、このほかにも新郎新婦を祝うものなど行事の内容は多種多様です。ちなみに、2018 年ユネスコ無形文化遺産の一つに認定された秋田のなまはげも、元々はこの小正月行事の一種です。

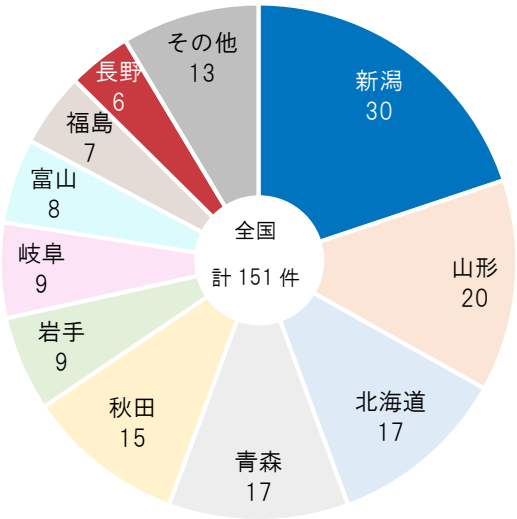
また、戦後に生まれた現代的な雪まつりには、全国的には北海道・札幌の雪まつりや秋田・横手のかまくらまつりなどが知られていますが、当地域でも歴史を有する多種多様なイベントが行われています。

■　どんど焼きの呼び名の分布

備考）上記は概ねの傾向であり、細部においてはその他の呼び名を含めて複雑に分布する地域もある。

出所）糸魚川ジオパーク協議会ホームページ（さいの紙）
https://sainokami.geo-itoigawa.com/

■　雪まつりの数（都道府県別・2016 年）



出所）（公財）雪センター「雪まつり・雪関係のイベント」（2016）をもとに作成

備考）豪雪地帯を中心とする 200 以上の会員自治体に照会をして取りまとめたもの。中には複数の雪まつりを一つにまとめて表記しているもの、あるいはここには含まれないお祭り（たとえば豪雪地帯ではない地域での雪まつり）など、多種多様に存在するものと思われるが、一定の信憑性がある情報として掲載した。

2　特　徴

■　道祖神祭り（サイの神など）

● 国内ではどんど焼きやドウソジンと呼ぶ地域の多い小正月の集落行事は、例えば上越地域ではサイの神、北信地域ではドウロクジンが多いなど、その呼び名は様々である。
（さらに周辺地域では、サギチョウ、オンベヤキ、サンクローなどと呼ぶ地域もある）

○　火祭りの呼び名について

どんど焼きは小正月の火祭り行事であるが、その名称や由来は多様である。【下表】

これら呼び名の地域分布については、複数の文献で説明があり、一定の傾向は見受けられるものの、詳細な分布は複雑であり、若干の違いも見受けられる。

【参考文献など】

・糸魚川市ジオパーク協議会ホームページ（さいの神のご案内）
https://sainokami.geo-itoigawa.com/
・地域資料デジタル化研究会（2019）：小正月行事「どんど焼き」の全国・国際調査集計（平成 31 年版）
http://www.digi-ken.org/~archive/koshogatu.html
・倉石忠彦（1990）：道祖神信仰論、名著出版
・横山旭三郎（1980）：新潟県の道祖神をたずねて、野島出版
・石田耕吾（1987）：頸城の祭りと民間信仰

○　火祭りと道祖神の関係について

道祖神は民俗信仰の一種であり、名称はドウソジン、ドウロクジン、サイノカミなど様々であるが、日本古来のさいの神と中国の祖道からみた道祖神はもともと別物であり、他の信仰との習合があったともされる。

その形態は石像、藁人形、木彫人形など、そこに示される姿は自然石のままであったり、夫婦、草鞋、性器など、効用は悪霊・疫病払い、防災、交通安全、縁結び、子孫繁栄など、いずれも多種多様である。

【小正月の火祭りの呼び名について（一例）】

呼び名	由来	分布（信越を中心に）
どんど焼き	語源は、燃える際に「尊（とうと）や尊」とはやし立てるのがなまった説、唐土（とうど：中国）から伝来行事であるとの説、どんどん燃える様子や青竹の燃える音を表現した説など諸説あり。	全国的に最も一般的な呼び名とされる。
ドウソジン（道祖神） ドウロクジン（道陸神） サイノカミ（塞の神）	道祖神をサイノカミと読ませる場合もある。直接的な関係というよりも、正月の松やしめ縄を焼く場所が人の集まる場所で道祖神を祀る場所と合致することが多く、両者が結びついたという説がある。	長野県北信地方や新潟県魚沼地方の一部ではドウロクジン、新潟県上越地方や魚沼地方の一部、長野県の県境付近ではサイノカミと呼ばれることが多い。
オンベヤキ	行事に使用する長い竹のことを「おんべ」という。	長野県では姫川流域に多いとされる。
サンクロー（三九郎）	松本藩主・石川数正の息子・石川康長の幼名が「三九郎」であったことにちなむとされる。	長野県松本市などの中信地方に多い。
サギチョウ（左義長）	平安時代の宮中行事の名称であり、現在の火祭りがこれにちなんだか由来するとされることから。	長野県、新潟県ではあまり聞かれない呼び名。

出所）横山旭三郎（1980）、石田哲弥（2001）、地域資料デジタル化研究会（2019）などをもとに作成

小正月の火祭りと道祖神信仰が結びついているのは新潟県、長野県、山梨県、静岡県の東半分といわれているが、この分布は、男女二体の双体道祖神が多い地域とほぼ一致する。

この道祖神は神奈川、静岡、山梨、長野、群馬県で、新潟県にも存在するなど、中部日本を横断する形で密集している（このほか富山、奥三河、鳥取大山にもあるとされる）。中でも、長野県安曇野市は道祖神の宝庫として観光分野などでも積極的にＰＲしている。

これらの製作の多くは、長野県の高遠石工によるものとされるが、全国的に見てもなぜこの地域に集中しているのか、明確に示された文献は見当たらなかった。

【参考文献など】

・横山旭三郎（1980）：新潟県の道祖神をたずねて、野島出版
・山内軍平（1986）：愛の神々ー越後の道祖神、中央出版
・森田拾史郎（1998）：道祖神―道辺の男女神、京都書院
・石田哲弥（2001）：道祖神信仰史の研究、名著出版
・松本市教育委員会（1993）：松本の道祖神
・安曇野市ホームページ（道祖神めぐり）
https://www.city.azumino.nagano.jp/soshiki/32/10239.html

○　その他

● 野沢温泉村の道祖神祭りは、京都鞍馬や和歌山那智の火祭りとならんで日本三大火祭りの一つと称される場合もある（国指定無形民俗文化財）

日本の三大火祭りは、長野県ホームページでも「捉え方はいくつかある」と断り書きした上で、この祭りをその一つとして紹介している。このフレーズは様々なホームページなどである程度使用されている一方、4 か所以上確認できることから、あくまでも一説として取り上げた。

国重要無形民俗文化財（平成 30 年度末現在 312 件）のうち、小正月の火祭り行事は 8 件と推定され、野沢温泉の道祖神祭りはこの 1 つに含まれる。

【参考文献など】

・文化庁国指定文化財等データベース
・地域資料デジタル化研究会（2019）：小正月行事「どんど焼き」の全国・国際調査集計（平成 31 年版）
・しあわせ信州ホームページ（長野県魅力発信ブログ ＞ 日本三大火祭り　野沢温泉道祖神祭り）
https://blog.nagano-ken.jp/nihonichi/big3/126.html

● 飯山市では、107 の集落のうち 91 集落で行われているなど、その数の多さも特徴である。

【参考文献など】

・飯山市伝統文化保存活用実行委員会（2012）：奥信濃飯山の道祖神火祭り、飯山市教育委員会

■　その他の珍しい小正月行事

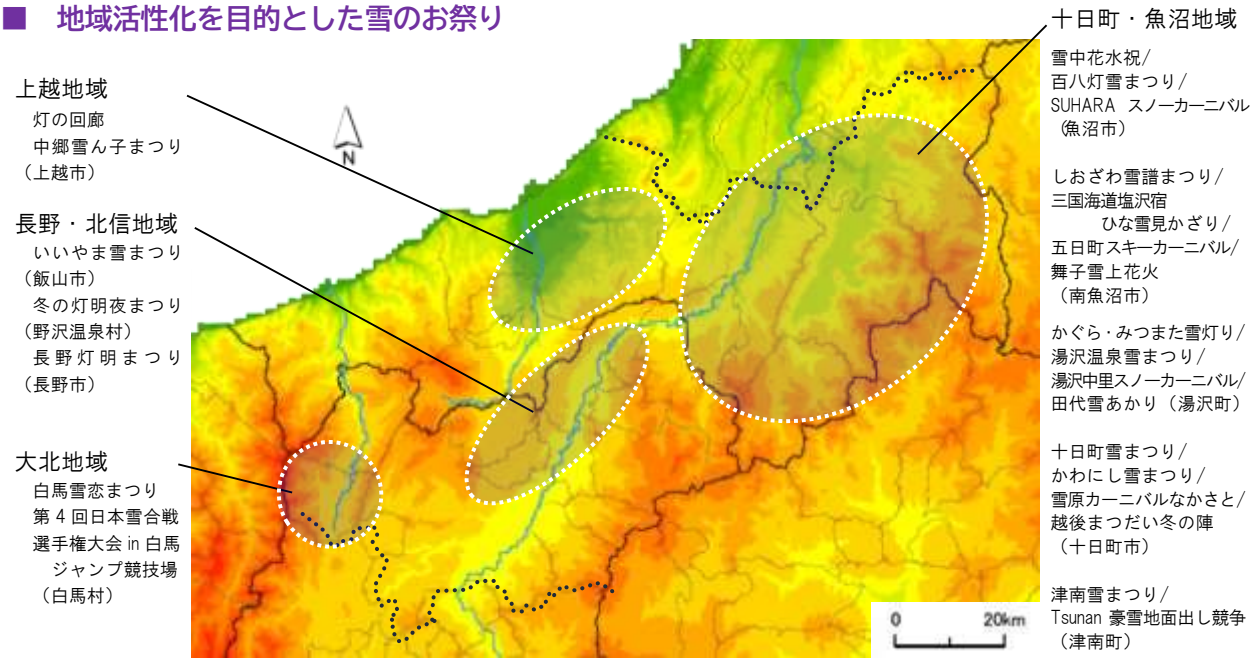
● 糸魚川市青海地区の竹のからかい（国指定無形民俗文化財）
● 十日町市松之山地区や栄村箕作地区の婿投げ（新婚男性を崖下の雪原へ放り投げるなど）
● 十日町市大白倉地区のバイトウ（30m以上の火柱が上がる奇祭）
● 上越市西横山地区の小正月行事（かつて世界的な写真家集団にも所属した濱谷浩が写真集「雪国」（1956 年）で世界に発信。現在も一連の行事が比較的多く残る。）

どんど焼きでは、小屋を作って酒食や遊びを行う地域がある。地域資料デジタル化研究会（2019）によれば、奇祭とされる十日町市大白倉のバイトウで作る小屋（直径 8m、高さ 10m）は日本一大きいとの説明がある。

【参考文献など】

・地域資料デジタル化研究会（2019）：小正月行事「どんど焼き」の全国・国際調査集計（平成 31 年版）

■ 地域活性化を目的とした雪のお祭り



備考）信越県境付近にある市町村（破線で挟まれた地域）のまつりのみ掲載
出所）国土地理院数値地図および雪センター「雪まつり・雪関係イベント」（2016）をもとに作成

● 十日町市の雪まつりは、1950年から行われており<u>現代雪まつりの発祥</u>とされる。（札幌雪まつりより2週間早い）

十日町市雪まつりの提唱者とされる高橋喜平氏は、当時、農林省林業試験場十日町試験地の主任。著書（1979）によれば、雪国の冬の生活を明るくするために、特に大人たちを雪に親しませたいとの思いから、長野県旧新野村の雪祭、十日町のほんやら洞、横手市のかまくらなどを参考にしつつ、最終的には雪の彫刻を選んだとのことであり、当時十日町文化協会の会長でもあり、会議で提案したところ賛同いただいた、などの説明が詳細にある。市内には、「現代雪まつり発祥の地」の記念碑もある。

【参考文献など】

・高橋喜平（1979）：雪国の人びと、創樹社
・十日町市（2017）：ふるさと教材　ふるさと十日町

● 翌年には、六日町雪まつり（現・南魚沼市雪まつり）が始まっている。

十日町市の翌年に始まった六日町雪まつりは、南魚沼市ホームページによれば「終戦後の混乱期に復興を願い、雪像作りを始めたことが発端」とある。また、六日町温泉ホームページによれば、「昭和20年代頃から、町内住民が除雪の為に道路へうず高く積もった雪を色々な造形にして楽しむようになり、やがて雪国の風俗を象徴する雪の芸術コンクールとして町内各所で雪像の製作が盛んに行われるように。しかし、道路の無雪化など生活環境の変遷に伴い製作場所が無くなる等の不便が発生し、個別の開催が難しくなる。・・＜中略＞・・昭和26年より会場を１ヵ所に定め大神宮祭礼・春まつり（2/14）に日を合わせて、雪の一大祭典「六日町雪まつり」を開催するようになった」などの記載がある。

なお、十日町市と南魚沼市の雪まつりにさっぽろ雪まつりを加えて、「日本三大雪まつり」と称するホームページもあったが、あまり地元自治体などで積極的に使われているようには見受けられず、その浸透度は不明である。

【参考文献など】

・南魚沼市ホームページ
・六日町温泉ホームページ（南魚沼市雪まつりのご案内）

● 各地域では、かまくらや雪の彫刻、雪道のローソク、気球やスカイランタン、雪合戦に力を入れるなど、雪にまつわる多彩なイベントがある。

■ その他特徴的な冬のお祭り

● 十日町市の節季市は、1月に開催。

● 南魚沼市の毘沙門堂の裸押合は、3 月に開催。諏訪の御柱祭や秋田のなまはげとならび日本三大奇祭の一つと称されることもある。国指定無形民俗文化財。

日本三大奇祭については、たとえば長野の「諏訪大社御柱祭」、秋田の「なまはげ柴灯祭」をはじめ、様々なホームページや新聞記事などで 10 か所以上が確認されていることから、あくまでも一説として取り上げた。

平成 30 年 3 月、国重要無形民俗文化財に指定。

【参考文献など】

・南魚沼市ホームページ（越後浦佐毘沙門堂裸押合大祭）　など

3　因果関係

※　番号は他のテーマ(01～20)との関係性、アルファベットは次の頁に補足説明があることを示す。

国内有数の豪雪地帯　02

・豪雪地帯であるため、雪を豊富に用いたり雪景色を背景に行う新旧の行事が数多くある。特に、寒く白い雪景色の中で火や灯の使用や裸行などが行われる様は、風景としても際立つ側面がある。
・これらの行事には、長期間雪に閉ざされる地域であるからこその春を待つ切なる気持ちや、日々の暮らしの中で辛い雪を前向きに捉えようとする思いも含まれている。

典型的な農村地帯　06

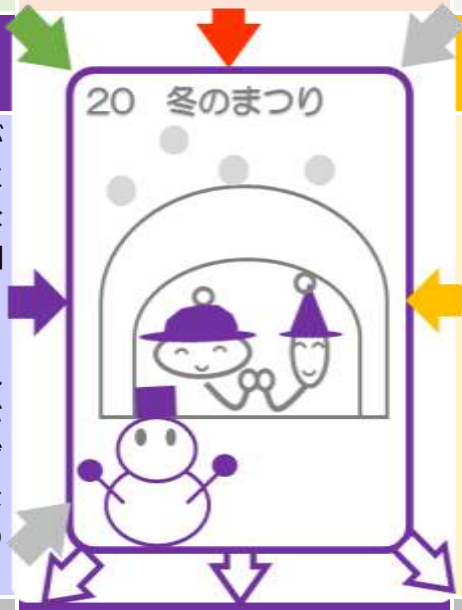
・稲作を中心とする典型的な農村地帯であり、自然の豊かさと厳しさを兼ね備えた地域であるが故に、五穀豊穣を願う思いは強いものがあったと考えられる。

きっかけとなる外部人材の存在

・十日町雪まつりは、当時林業試験場に勤務していた高橋喜平氏が、長野県新野の雪祭や十日町のほんやら洞などを参考に、雪国の冬の生活を明るくするために、特に大人たちを雪に親しんでほしいとの思いから、雪の彫刻をつくる祭りとして発案したもの。(高橋氏は、高床式住宅などの発案者でもある)
・その後、周辺地域でも様々な雪まつりが誕生する。

道祖神石像との関係性

・石像としての道祖神は、神奈川が発祥とされ、山梨、群馬、長野に集中し、新潟にも一定数あるなど、中部日本を横断する地帯は国内随一の集積地とされる。
・道祖神祭りやサイの神のお祭りは、道祖神のある場所で行われることが多いため双方の名前が結びついたとの説があり、必ずしも信仰との直接的な関係はないものの、ある意味では一定の因果関係があるといえる。



温泉地やスキー場での開催・特産品の販売　15　16 ほか

・地元住民を中心に盛り上がるお祭りも数多くあるが、温泉地やスキー場などで実施されるお祭りには来訪者へのおもてなしを意識したものが多い。
・日本酒や織物など、この地域にある特産品を宣伝・販売する機会としても用いられる。

心身の健康増進

・冬の暮らしの中では、雪にまつわる労苦や危険性などマイナス面を感じやすいが、雪が本来有するプラス面を思い出させてくれる貴重な機会ともいえる。
・冬期間、家の中に引きこもりがちな高齢者等に対して外出機会を創出することを目的とする地域もある。

コミュニティとしての地域力の強化

・冬期間に限った話ではないが、お祭りは、その準備段階も含めて地域コミュニティを一つにまとめる訓練となっている。

交流人口の増加

・数十万人の入込客数がある十日町雪まつりをはじめ、それぞれのお祭りには地域内外から多くの来訪客がある。

4　解　説

要　約

昔からある冬のお祭りでは、日本三大火祭りの一つと称される場合もある野沢温泉村の道祖神祭、マスコミに数多く取り上げられる旧松之山町の婿投げ・墨塗り、世界的な写真家といわれた濵谷浩が写真集で世界に発信した上越市西横山地区の小正月行事など、個性的なものが数多く見られます。

米を中心とした農村地帯が多いことから五穀豊穣を祈願することや長い冬の間に春を待ちわびる人々の気持ちなどが祭りの背景となっています。

また、現代雪まつりの発祥とされる十日町雪まつりをはじめ、戦後にはじまった数多くの雪まつりもあります。これらは、地域活性化を目的として、雪をポジティブに捉えた地域振興策の面も強く作用しています。

特に、豪雪地帯で冬の白く寒い雪の中で、火を用いた行事や裸形を行うことは、より意味合いが際立つようにも思います。また、雪国ではありながらも外で祭りを行おうとする機運は、東北地方の寒さとは異なる雪国ならではとの見方もあります。

冬期間の外出や交流を促進する機会となる一方、地域外からの交流人口の増加にも貢献しています。

地域資源としての捉え方

豪雪地帯に住むことの困難さは、昔も今もあるとは思いますが、雪まつりを通して昔の人は雪の恩恵もしっかり認識していたのではないかということも感じます。冬のまつりを知ることで雪への認識を考え直すことも、地域の価値を見直す上で重要と考えます。

お祭りは、その準備段階も含めて地域コミュニティを一つにまとめる訓練になる側面も持っています。コミュニティの過疎化やライフスタイルの多様化などからこうしたお祭りが減っていく中、お祭りが果たしてきた役割を再確認する中で、機能としてどのように維持発展させていくか、数ある地域づくりの課題の中でも大きなものと考えます。

【テーマに関する参考文献など】

※　特に参考とした文献には●を付しました

（民俗全般　－　全国的な傾向）
・谷川健一ほか（1986）：日本民俗文化大系１　風土と文化、小学館
・桜井徳太郎（1968）：民間信仰、塙書房
・桜井徳太郎（1970）：日本民間信仰論増訂版、弘文堂
・桜井徳太郎（1970）：祭りと信仰、新人物往来社
・桜井徳太郎（1971）：民間信仰と現代社会、評論社
・藤本良致、横山旭三郎ほか（1973）：北中部の民間信仰、明玄書房

（民俗全般　－　新潟・長野）
・地方史研究協議会編（2017）：信越国境の歴史像－「間」と「境」の地方史－、雄山閣
・新潟県教育委員会ほか編（2001）：中部地方の民俗地図１長野、東洋書林
・新潟県教育委員会ほか編（2001）：中部地方の民俗地図２新潟、東洋書林
・新潟県民俗学会編（1989）：図説日本民俗誌　新潟、岩崎美術社
・真野俊和（1986）：越後のくらしとまつり－上・中越の民俗－、東京法令出版
・山口賢俊ほか（1982）：生きている民俗探訪　新潟、第一法規
・市川健夫（1980）：雪国文化誌、日本放送出版協会
・市川健夫（2012）：信州学テキスト－「日本の屋根」の風土と文化、第一企画
・市川健夫（2010）日本列島の風土と文化 第２巻 ブナ帯文化と風土、第一企画
・長野県立歴史館（2018）：日常生活からひもとく信州、信濃毎日新聞社
・笹本正治（2003）：飯山風土記－信濃の宝石「いいやま」、飯山市振興公社
・石田耕吾（1982）：頸城新風土記、国書刊行会
●石田耕吾（1987）：頸城の祭りと民俗信仰、北越出版
・石田耕吾（1989）：頸城の人びとのくらし、北越出版
・十日町市史編さん委員会（1989）：市史リポート　とおかまち、十日町市

（道祖神関係）
・森田拾史郎（1998）：道祖神―道辺の男女神、京都書院
・横山旭三郎（1980）：新潟県の道祖神をたずねて、野島出版
●倉石忠彦（1990）：道祖神信仰論、名著出版
・倉石忠彦（2005）：道祖神信仰の形成と展開、大河書房
●石田哲弥（2001）：道祖神信仰史の研究、名著出版
・山内軍平（1986）：愛の神々－越後の道祖神、中央出版
・酒井幸男（1969）：安曇野の道祖神、柳沢書苑
・佐久町教育委員会（2000）：佐久町の道祖神
・松本市教育委員会（1993）：松本の道祖神
・塩尻市教育委員会（1977）：塩尻の道祖神
・信州郷土史研究会（1981）：石仏と道祖神、信濃毎日新聞社
・長野県民俗の会（2018）：長野県　道祖神碑一覧

（お祭り関係）
●高橋喜平（1979）：雪国の人びと、創樹社
・市川健夫（2003）：雪国の自然と暮らし、小峰書店
・十日町商工会議所（2011）：十日町雪ものがたり１２０－雪とともに生きる－
・十日町市（2017）：ふるさと教材　ふるさと十日町、
・飯山市教育委員会（2015）：飯山の祭り、飯山市

信越県境地域の地域資源情報
２０１９　資料編

2020（令和 2）年 3 月発行

作成：上越市創造行政研究所
〒943-8601　新潟県上越市木田 1-1-3
TEL（025）526－5111（代）　FAX（025）526－6184
E-mail: souzou@city.joetsu.lg.jp
URL: https://www.city.joetsu.niigata.jp/site/souzou-gyosei/